上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第21集

大明神原遺跡 III

―― 土地改良総合整備事業大明神地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

1990.3

長野県下伊那郡上郷町役場産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第21集

大明神原遺跡Ⅲ

－土地改良総合整備事業大明神地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1990. 3

長野県下伊那郡上郷町役場産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

序

昭和58年度から着手した大明神地区の土地改良総合整備事業も、７年の歳月を経て平成元年度をもって事業が完了することになりました。

当該地域は町内で最大級の遺跡であり、過去においてその南縁部から縄文時代の土偶が出土しており、地形的にも古くからの生活の場として適していることがうかがえる土地であります。それを証明するように、この地域が開墾され畑地として耕作されだした時代から、狩猟用と思われる黒曜石の石鏃が多く拾われていたり、土器の破片や石器などが出土してまいりました。また、当地域の北西部には社宮司の地名があり、現在も飯沼諏訪神社との関係が深い祠が祭られているなど、原始・古代からの歴史を秘めた場所であります。そこで、事業を着手するにあたり、県の教育委員会を始め、町の教育委員会や文化財保護委員会の皆様の他、関係各方面の方々からのご意見やご指導をいただく中で、準備を進めてまいりました。

初年度は、遺跡の範囲から外れた地域の道路改良工事であったので、町の教育委員会の立会の元に工事を実施しました。昭和59年度は遺跡範囲内の工事を進めるため、第Ⅰ次の発掘調査をお願いしました。さらに、昭和60年度においても、第Ⅱ次発掘調査をお願いし、いずれも発掘調査報告書が刊行されております。昭和61年度から63年度にかけて、第Ⅲ～Ⅴ次発掘調査をしたものについては、平成元年度に３ヵ年分を纏めて報告いただくことになりました。

幸、多くのロマンを埋蔵しているこの地帯の土地改良事業は、畑地帯であっつたために、水田造成のように多くの土を動かすことなく区画整理ができました。よって、道路敷となる箇所の部分調査であり、多くの部分はそのまま埋蔵されています。ここに報告されるものは部分的なものでありますが、縄文時代の住居址や弥生時代の方形周溝墓が出土するなど、第Ⅰ・Ⅱ次を含めた今回までの調査により、原始・古代人の生活・文化に夢の広がる思いがいたします。

この度、３ヵ年にわたる発掘調査を御指導下さいました今村善興発掘調査団長を始め関係各位の御尽力により、本工事が予定どおり完了できましたことにつきまして厚くお礼申し上げますとともに、発掘作業に従事された多くの方々に深く感謝申し上げ、第Ⅰ・Ⅱ次の記録を含め、末ながく保存されますことを祈念申し上げます。

平成２年２月２０日

上郷町長　山　田　隆　士

例　言

1．本書は、土地改良総合整備事業大明神地区工事に伴う上郷町黒田「大明神原遺跡」の緊急発掘調査報告書である。併せて、昭和62年度町道上中線新設工事に伴う「大明神原遺跡」の緊急発掘調査報告を収録した。

2．上郷町教育委員会が組織する上郷町遺跡発掘調査団が、昭和61・62・63年度に発掘調査を、平成元年度に整理作業及び報告書の作成を行なった。

3．発掘調査・整理作業等はＤＩＭの記号によって実施した。

4．本書は平成元年度中にまとめることが要求されており、できる限り資料提示することを編集方針とした。

5．本書を作成するに当たっての作業分担は以下のとおりである。
遺構実測－米山義盛、伊藤　泉　　図面修正－山下誠一、吉川金利、市瀬禎子、久保田祐子
遺構製図－上沼文代、小林百合子、篠田せい子、村沢千代江　　遺構写真－山下誠一
遺物拓影－中原友江、古林登志子　　遺物実測－山下誠一、吉川金利
遺物製図－市瀬禎子、久保田祐子　　遺物写真－吉川金利

6．本書の執筆と編集は調査員の協議により山下誠一が行なった。

7．本書に関連した遺物及び記録・図面類は、上郷町教育委員会が管理し、上郷町歴史民俗資料館で保管している。

本 文 目 次

序

例 言

Ⅰ 経 過

1.調査に至るまで……1

2.調査の経過……1

3.調査の概要……2

4.調査組織……3

1）上郷町埋蔵文化財調査委員会……3

①規約 ②役職員

2）上郷町遺跡発掘調査団……4

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1.自然的環境……5

2.歴史的環境……9

3.層 序……10

Ⅲ 調査結果……19

1.第Ⅰ地区……19

1）遺 構……19

①溝址1 ②土坑7 ③土坑8 ④土坑9 ⑤土坑10 ⑥土坑11 ⑦ピット

2）遺 物……21

2.第Ⅱ地区……26

1）竪穴住居址……26

①12号住居址 ②13号住居址 ③29号住居址

2）溝 址……30

①溝址2・6 ②溝址3 ③溝址4・5 ④溝址7

3）土 坑……34

①土坑12 ②土坑13 ③土坑14 ④土坑15 ⑤土坑16 ⑥土坑17 ⑦土坑18 ⑧土坑19 ⑨土坑20 ⑩土坑21 ⑪土坑22 ⑫土坑23 ⑬土坑24 ⑮土坑25 ⑯土坑25 ⑰土坑26 ⑱土坑27 ⑲土坑28

3.第Ⅲ地区……45

1）竪穴住居址……45
①14号住居址　②15号住居址　③16号住居址　④17号住居址　⑤18号住居址
⑥19号住居址　⑦20号住居址　⑧21号住居址　⑨22号住居址
2）方形周溝墓……54
①方形周溝墓1　②方形周溝墓2
3）溝　址……57
①溝址8
4）土　坑……57
①土坑29　②土坑30　③土坑31　④土坑32　⑤土坑33　⑥土坑34　⑦土坑35　⑧土坑36
⑨土坑37　⑩土坑38　⑪土坑39　⑫土坑40　⑬土坑41　⑭土坑42　⑮土坑43　⑯土坑44
⑰土坑45　⑱土坑46　⑲土坑47　⑳土坑48　㉑土坑49　㉒土坑50　㉓土坑51
㉔土坑52・53　㉕土坑54　㉖土坑55　㉗土坑56　㉘土坑57　㉙土坑58　㉚土坑59
㉛土坑60　㉜土坑61
4．第Ⅳ地区……70
1）竪穴住居址……70
①23号住居址　②24号・28号住居址　③25号住居址　④26号住居址　⑤27号住居址
2）方形周溝墓……77
①方形周溝墓1
3）溝址・溝状遺構……77
①溝址9　②溝状遺構1
4）土　坑……78
①土坑62　②土坑63　③土坑64　④土坑65　⑤土坑66　⑥土坑67　⑦土坑68　⑧土坑69
⑨土坑70　⑩土坑71　⑪土坑72　⑫土坑73　⑬土坑74　⑭土坑75　⑮土坑76　⑯土坑77
⑰土坑78　⑱土坑79
5．第Ⅴ地区……87
6．第Ⅵ地区……87
1）土　坑……87
①土坑80　②土坑81　③土坑82　④土坑83
7．第Ⅶ地区……89
1）小竪穴……89
①　小竪穴1
8．第Ⅷ地区……89

9．第Ⅸ地区……90
1）溝　址……90
①溝址10
10．第Ⅹ地区 ……90
1）方形周溝墓……90
①方形周溝墓４
2）土　坑……92
①土坑84
3）遺構外出土遺物……92
11．第Ⅺ地区……93
1）ピット……93
12．第Ⅻ地区……95
13．第XIII地区……95
1）ピット……95
14．第XIV地区……96
15．第XV地区……96
1）遺　構……96
Ⅳ　町道上中線新設工事……99
1．経　過……99
1）調査の経過……99
2）調査組織……99
①調査団　②事務局
2．調査結果……100
1）調査の概要……100
2）遺構と遺物……100
①11号住居址　②遺構外出土遺物
Ⅴ　まとめ……103
①集落構成について　②遺構・遺物について

挿 図 目 次

挿図１　大明神原遺跡位置図……6
挿図２　大明神原遺跡発掘位置図及び周辺図……7・8
挿図３　大明神原遺跡基本土層柱状図……11
挿図４　第Ⅰ・Ⅲ地区全体図……12
挿図５　第Ⅱ地区全体図……13
挿図６　第Ⅳ・Ⅴ地区全体図……14
挿図７　第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ地区全体図……15
挿図８　第Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ地区全体図……16
挿図９　第Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ地区全体図……17
挿図10　第ⅩⅤ地区、町道上中線調査区全体図……18
挿図11　第Ⅰ地区　溝址１……20
挿図12　第Ⅰ地区　土坑７、ピット……22
挿図13　第Ⅰ地区　土坑８・９・10、ピット……23
挿図14　第Ⅰ地区　土坑11、ピット……24
挿図15　第Ⅰ地区　ピット……25
挿図16　第Ⅱ地区　12号住居址……27
挿図17　第Ⅱ地区　13号住居址……28
挿図18　第Ⅱ地区　29号住居址……29
挿図19　第Ⅱ地区　溝址２・６……30
挿図20　第Ⅱ地区　溝址３……31
挿図21　第Ⅱ地区　溝址４・５……33
挿図22　第Ⅱ地区　溝址７……34
挿図23　第Ⅱ地区　土坑12・14・15・16、ピット……35
挿図24　第Ⅱ地区　土坑13、ピット……36
挿図25　第Ⅱ地区　土坑17、ピット……37
挿図26　第Ⅱ地区　土坑18、ピット……39
挿図27　第Ⅱ地区　土坑19・20、ピット……40
挿図28　第Ⅱ地区　土坑21・22・23、ピット……41
挿図29　第Ⅱ地区　土坑24・25・26・27・28・ピット……43

挿図30　第Ⅱ地区　ピット……44
挿図31　第Ⅲ地区　14号住居址……45
挿図32　第Ⅲ地区　15号住居址、土坑38……46
挿図33　第Ⅲ地区　16号住居址……47
挿図34　第Ⅲ地区　17号住居址……49
挿図35　第Ⅲ地区　18号住居址……50
挿図36　第Ⅲ地区　19号住居址……51
挿図37　第Ⅲ地区　20号住居址……52
挿図38　第Ⅲ地区　21号住居址……53
挿図39　第Ⅲ地区　22号住居址……54
挿図40　第Ⅲ地区　方形周溝墓１……55
挿図41　第Ⅲ地区　方形周溝墓２……56
挿図42　第Ⅲ地区　溝址８、土坑42、ロームマウンド……58
挿図43　第Ⅲ地区　土坑29・45・46・47・48・49・51・52・53、ピット……59
挿図44　第Ⅲ地区　土坑30・31・32・33・34……61
挿図45　第Ⅲ地区　土坑35・36・38・50・60、ピット……63
挿図46　第Ⅲ地区　土坑37・39・40・41・43・54・55・56・57・59、ピット……67
挿図47　第Ⅲ地区　土坑61、ピット……68
挿図48　第Ⅲ地区　ピット……69
挿図49　第Ⅳ地区　23号住居址……70
挿図50　第Ⅳ地区　24号・28号住居址……72
挿図51　第Ⅳ地区　25号住居址……73
挿図52　第Ⅳ地区　26号住居址……74
挿図53　第Ⅳ地区　27号住居址……75
挿図54　第Ⅳ地区　方形周溝墓３、ピット……76
挿図55　第Ⅳ地区　溝址９……77
挿図56　第Ⅳ地区　溝状遺構１……78
挿図57　第Ⅳ地区　土坑62・79、ピット……79
挿図58　第Ⅳ地区　土坑63・76・77・78、ピット……80
挿図59　第Ⅳ地区　土坑64A　・64B　・73・74、ピット……82
挿図60　第Ⅳ地区　土坑65・66・67・68・69・70・71・72・75、ピット……84
挿図61　第Ⅳ地区　ピット……86

挿図62　第Ⅵ地区　土坑80・81・82・83……88
挿図63　第Ⅶ地区　小竪穴1……89
挿図64　第Ⅸ地区　溝址10……90
挿図65　第Ⅹ地区　方形周溝墓4、土坑84、ピット……91
挿図66　第Ⅹ地区　ピット……92
挿図67　第Ⅺ地区　ピット(1)……93
挿図68　第Ⅺ地区　ピット(2)……94
挿図69　第Ⅻ地区　ピット……95
挿図70　第XV地区　北東側トレンチ……97
挿図71　第XV地区　南西側トレンチ……98
挿図72　11号住居址出土土器……100
挿図73　町道上中線調査区　11号住居址……101

図　版　目　次

第1図　第Ⅳ地区　溝状遺構1　第Ⅰ地区　土坑7、溝址1、遺構外出土遺物……107
第2図　第Ⅰ地区　溝址1、土坑9、遺構外出土石器……108
第3図　第Ⅰ地区　遺構外、第Ⅱ地区　12号住居址出土遺物……109
第4図　第Ⅱ地区　12号・13号住居址出土土器……110
第5図　第Ⅱ地区　13号住居址出土土器……111
第6図　第Ⅱ地区　13号・29号住居址、溝址出土土器……112
第7図　第Ⅱ地区　土坑、遺構外出土土器……113
第8図　第Ⅱ地区　12号住居址出土石器……114
第9図　第Ⅱ地区　13号住居址、溝址2・3出土石器……115
第10図　第Ⅱ地区　溝址5、土坑　第Ⅲ地区　14号住居址出土遺物……116
第11図　第Ⅲ地区　14号住居址出土土器……117
第12図　第Ⅲ地区　14号・15号・16号住居址出土土器……118
第13図　第Ⅲ地区　16号・17号出土土器……119
第14図　第Ⅲ地区　17号住居址出土土器(1)……120
第15図　第Ⅲ地区　17号住居址出土土器(2)……121
第16図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器(1)……122
第17図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器(2)……123

第18図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器(3) …… 124
第19図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器(4) …… 125
第20図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器(5) …… 126
第21図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器(6) …… 127
第22図　第Ⅲ地区　18号・19号住居址出土土器…… 128
第23図　第Ⅲ地区　19号・20号・21号住居址出土土器…… 129
第24図　第Ⅲ地区　21号・22号住居址出土土器…… 130
第25図　第Ⅲ地区　土坑出土土器(1) …… 131
第26図　第Ⅲ地区　土坑出土土器(2) …… 132
第27図　第Ⅲ地区　土坑出土土器(3) …… 133
第28図　第Ⅲ地区　土坑出土土器(4) …… 134
第29図　第Ⅲ地区　土坑、遺構外出土土器…… 135
第30図　第Ⅲ地区　14号・15号・16号住居址出土石器…… 136
第31図　第Ⅲ地区　16号・17号住居址出土石器…… 137
第32図　第Ⅲ地区　17号住居址出土石器…… 138
第33図　第Ⅲ地区　18号住居址出土石器(1) …… 139
第34図　第Ⅲ地区　18号住居址出土石器(2) …… 140
第35図　第Ⅲ地区　18号・19号住居址出土石器…… 141
第36図　第Ⅲ地区　19号・21号住居址出土石器…… 142
第37図　第Ⅲ地区　21号・29号住居址、方形周溝墓１・２、土坑出土石器…… 143
第38図　第Ⅲ地区　土坑出土石器…… 144
第39図　第Ⅳ地区　23号・24号住居址出土土器…… 145
第40図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器(1) …… 146
第41図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器(2) …… 147
第42図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器(3) …… 148
第43図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器(4) …… 149
第44図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器(5) …… 150
第45図　第Ⅳ地区　24号・25号・26号・27号・28号住居址、方形周溝墓３出土土器…… 151
第46図　第Ⅳ地区　方形周溝墓３、土坑出土土器…… 152
第47図　第Ⅳ地区　土坑79、遺構外出土土器…… 153
第48図　第Ⅳ地区　23号・24号住居址出土石器…… 154
第49図　第Ⅳ地区　24号住居址出土石器…… 155

第50図　第Ⅳ地区　24号・25号・26号・27号住居址出土石器…… 156
第51図　第Ⅳ地区　28号住居址、土坑出土石器…… 157
第52図　第Ⅳ地区　方形周溝墓３、土坑、遺構外、第Ⅸ地区　土坑、遺構外
第Ⅹ地区　方形周溝墓４、土坑、遺構外、第Ⅺ地区　遺構外出土遺物…… 158
第53図　土製品…… 159
第54図　小型石器(1) …… 160
第55図　小型石器(2) …… 161

写真図版目次

図版１　大明神原遺跡遠景（北西から望む）　大明神原遺跡遠景（南東から望む）
図版２　第Ⅰ地区近景（南から）　溝址１（南から）　溝址１（北から）
図版３　第Ⅰ地区全景（南から）　第Ⅰ地区全景（北から）
図版４　12号住居址　12号住居址（南東から）　12号住居址炉址
12号住居址深鉢出土状態　12号住居址土偶出土状態
図版５　13号住居址　13号住居址炉址　13号住居址炉址たち割り
図版６　溝址２・６　溝址３　溝址４・５
図版７　溝址４　溝址５　溝址７
図版８　第Ⅱ地区南東側全景（南東から）　第Ⅱ地区南東側全景（北西から）
図版９　第Ⅱ地区北西側全景（南東から）　第Ⅱ地区北西側全景（北西から）
図版10　第Ⅲ地区近景（西から）　第Ⅲ地区近景（東から）
図版11　14号住居址（東から）　14号住居址（北から）　14号住居址遺物出土状態
図版12　15号住居址　15号住居址埋甕石蓋　15号住居址埋甕　15号住居址埋甕たち割り
14号・15号・16号住居址
図版13　16号住居址　14号・16号住居址
図版14　17号住居址　17号住居址炉址　17号住居址遺物出土状態
図版15　18号住居址（北から）　18号住居址（西から）　18号住居址炉址
18号住居址遺物出土状態（全景）　18号住居址遺物出土状態（部分）
図版16　19号住居址　20号住居址
図版17　21号住居址・土坑　21号住居址炉址
図版18　22号住居址　22号住居址炉址上層礫　22号住居址炉址
図版19　方形周溝墓１（東から）　方形周溝墓１（西から）

図版20　方形周溝墓２（東から）　方形周溝墓２（西から）　方形周溝墓２主体部

図版21　溝址８　第Ⅲ地区西側土坑群

図版22　第Ⅲ地区西側全景（西から）　第Ⅲ地区西側全景（東から）

図版23　第Ⅲ地区東側全景（西から）　第Ⅲ地区東側全景（東から）

図版24　23号住居址　24号・28号住居址

図版25　24号住居址炉址　24号住居址遺物出土状態（全体）　24号住居址遺物出土状態（部分）
24号住居址遺物出土状態（部分）　24号住居址台付甕出土状態

図版26　25号住居址　25号住居址深鉢出土状態

図版27　26号住居址　26号住居址炉址　26号住居址副炉址？

図版28　27号住居址　27号住居址炉址

図版29　方形周溝墓３　方形周溝墓３甕出土状態

図版30　溝址９　溝状遺構１

図版31　第Ⅳ地区東側全景（東から）　第Ⅳ地区東側全景（西から）

図版32　第Ⅳ地区中央部全景（東から）　第Ⅳ地区中央部全景（西から）

図版33　第Ⅳ地区西側全景（東から）　第Ⅳ地区西側全景（西から）

図版34　第Ⅴ地区近景（西から）　第Ⅴ地区全景（西から）

図版35　第Ⅵ地区近景（北西から）　土坑82・83

図版36　土坑80・81　第Ⅵ地区全景（北西から）　第Ⅵ地区全景（南東から）

図版37　第Ⅶ地区近景（南西から）　小竪穴１

図版38　第Ⅶ地区全景（南西から）　第Ⅶ地区全景（北東から）

図版39　第Ⅷ地区近景（北西から）　第Ⅷ地区全景（北西から）　第Ⅷ地区全景（南東から）

図版40　第Ⅸ地区近景（北東から）　第Ⅸ地区全景（北東から）　第Ⅸ地区全景（南西から）

図版41　第Ⅹ地区近景（北東から）　方形周溝墓４

図版42　土坑84　第Ⅹ地区全景（北東から）　第Ⅹ地区全景（南西から）

図版43　第Ⅺ地区近景（北西から）　第Ⅺ地区全景（北西から）　第Ⅺ地区全景（南東から）

図版44　第Ⅻ地区近景（北西から）　第Ⅻ地区全景（北西から）　第Ⅻ地区全景（南東から）

図版45　第XIII地区近景（南西から）　第XIII地区全景（南西から）　第XIII地区全景（北東から）

図版46　第XIV地区近景（北西から）　第XIV地区近景（南東から）

図版47　第XIV地区北西側全景（北西から）　第XIV地区北西側全景（南東から）
第XIV地区南東側全景（南東から）

図版48　第XV地区全景（北西から）　第XV地区北西側トレンチ全景（北西から）
第XV地区南東側トレンチ全景（北西から）

図版49　町道上中線調査区遠景（南西から）　町道上中線調査区近景（北東から）

図版50　11号住居址　11号住居址カマド　11号住居址カマドたち割り

図版51　町道上中線調査区全景（南西から）　町道上中線調査区全景（北東から）

図版52　12号住居址深鉢　13号住居址深鉢　13号住居址炉址埋設土器　13号住居址深鉢
13号住居址浅鉢　14号住居址深鉢　14号住居址深鉢　14号住居址深鉢

図版53　15号住居址埋甕　15号住居址台付甕　17号住居址深鉢　18号住居址深鉢
18号住居址深鉢　18号住居址深鉢　18号住居址深鉢　18号住居址深鉢

図版54　18号住居址深鉢　19号住居址深鉢　24号住居址深鉢　24号住居址深鉢　24号住居址深鉢
24号住居址深鉢　24号住居址深鉢　24号住居址深鉢

図版55　24号住居址深鉢　19号住居址深鉢　24号住居址深鉢　24号住居址台付甕
24号住居址台付甕　土坑30深鉢　土坑61深鉢　方形周溝墓３甕

図版56　17号住居址土製円板　12号住居址土偶（正面）　同（背面）　17号住居址土偶（正面）
同（側面）

Ⅰ 経 過

1．調査に至るまで

土地改良総合整備事業大明神地区工事は、昭和58年度から順次施工されてきており、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和59・60年度の第Ⅰ・Ⅱ次調査と実施されている。その結果は、上郷町教育委員会発行の『黒田大明神原』・『黒田大明神原Ⅱ』として、公表済である。本調査報告書は昭和61年度以降を対象とした。

昭和61年度工事は範囲が限定されたために、遺跡の発掘調査も小範囲の面積を対象とした第Ⅲ次調査として、農政側の費用で対応することとなった。

昭和62年度は、工事地域が遺跡の中心部と考えられる箇所にかかるため、万全の保護措置が必要となった。そこで、昭和61年９月30日と11月４日に長野県教育委員会文化課指導主事・上郷町役場産業課担当職員・同教育委員会担当職員・地元研究者今村善興氏による保護協議を実施し、事前に第Ⅲ次の発掘調査を実施して記録保存を計ることとなった。

昭和62年度はこれ以外にも多くの調査が計画され、膨大な量になると予想された。そのため、円滑な事業実施を計るため、「上郷町埋蔵文化財調査委員会」を組織し、実際の調査は「上郷町遺跡発掘調査団」が当ることとした。

調査を実施すると、各遺跡とも予想外の範囲の広がりを示し、多量の遺構・遺物が検出され、すべての報告書を昭和62年度内に刊行すること不可能となった。そこで、昭和62年10月２日に、県教育委員会文化課指導主事・町産業課担当職員・町教育委員会担当職員・調査団長今村善興氏による保護協議を実施し、大明神原遺跡については昭和63年度に第Ⅴ次の発掘調査を行ない、平成元年度に未報告分全ての整理作業を実施して報告書刊行することとした。

2．調査の経過

時間・費用が限られるうえ農繁期のため、効率的な調査が必要であり、かつ調査対象地域は新設・改良される農道部分に限られた。よって、農道ごとにトレンチを設定して調査区とし、遺構が検出された場合は拡張することとした。当初から遺構の存在が想定できる箇所は、できる限り用地内いっぱいの調査区を設定した。年度ごとの日程は次のとおりである。

昭和61年度　昭和62年３月25日に発掘器材・テントを搬入し、重機を使用して調査区を設定して第Ⅰ地区とし、31日までにほぼ調査を済ませ、４月３・４日に測量などが終了する。

昭和62年度　昭和62年６月22日にミカド遺跡から発掘器材・テントを搬入して調査を開始する。

重機で第Ⅱ地区から調査区を設定し、第Ⅴ地区までを８月８日にかけて調査する。遺構・遺物が多く、調査面積の割に時間のかかった調査になった。また、８月から９月にかけて、一部の遺物の水洗いも実施した。

昭和63年度　４月当初に工事の都合で一部の調査を先行してほしいとの産業課からの要望があり、昭和63年４月18日から20日にかけて、第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ地区の調査を実施し、遺構・遺物がほとんどなかったために、短期間のうちに済ませることができた。６月11日に、第Ⅸ地区以降の調査を開始する。最初から重機を導入してトレンチを設定して第Ⅹ～Ⅻ地区とし、遺構などが検出された場合は拡張するように計画した。わずかな遺構・遺物が認められただけで、６月23日までの10日間で終了した。耕作の都合で第ⅩⅣ地区だけが未調査として残ったので、８月23・24日に調査を実施する。遺構・遺物がなく２日間で作業を終了して、昭和63年度の調査予定箇所をすべてを済ませ、長期間にわたった大明神原遺跡の現場における全ての作業が終了した。

平成元年度　昭和61～63年度調査分の整理作業を実施した。平成元年５月から７月にかけて、遺物復元・遺構トレースなどを行ない、並行して図面整理・遺物実測を進め、７・８月に遺物トレースなどを済ませ、９月に原稿を執筆して、本調査報告書刊行となった。

３．調査の概要

今次調査における調査面積・検出遺構は次のとおりである。

第Ⅰ地区……170 ㎡、溝址１本・土坑５基・ピット多数
第Ⅱ地区……420 ㎡、竪穴住居址２軒・溝址６本・土坑18基・ピット多数
第Ⅲ地区……520 ㎡、竪穴住居址９軒・方形周溝墓２基・溝址１本・土坑32基・ピット多数
第Ⅳ地区……420 ㎡、竪穴住居址６軒・方形周溝墓１基・溝址１本・溝状遺構１本・土坑20基
　　ピット多数
第Ⅴ地区…… 23 ㎡、検出遺構なし
第Ⅵ地区…… 65 ㎡、土坑４基
第Ⅶ地区……113 ㎡、小竪穴１基
第Ⅷ地区…… 47 ㎡、検出遺構なし
第Ⅸ地区……185 ㎡、溝址１本、ピット
第Ⅹ地区……182 ㎡、方形周溝墓１基、土坑１基、ピット
第Ⅺ地区…… 86 ㎡、ピット
第Ⅻ地区…… 94 ㎡、検出遺構なし
第ⅩⅢ地区…… 44 ㎡、検出遺構なし
第ⅩⅣ地区…… 115㎡、検出遺構なし
第ⅩⅤ地区…… 24 ㎡、ピットなど

4．調査組織

1）上郷町埋蔵文化財調査委員会

① 規　約

（設　置）

第1条　この会は、「上郷町埋蔵文化財調査委員会」（以下委員会という）と称し、事務局を上郷町教育委員会事務局に置く。

（目　的）

第2条　この委員会は、上郷町内の関係各機関・団体及び考古学関係者の相互協力により、上郷町埋蔵文化財保護事業の円滑な実施をはかることを目的とする。

（事　業）

第3条　この委員会は、前条の目的達成のため、次の各号に掲げる事業を行う。

(1)　遺跡調査の総合企画、連絡・調整に関すること。

(2)　土地所有者等の発掘承諾に関すること。

(3)　発掘調査員及び作業員の確保に関すること。

(4)　そのほか目的達成に必要なこと。

（役職員）

第4条　この委員会に次の役職員を置く。

(1)　顧問1名、会長1名、副会長2名、委員若干名、事務局員若干名

(2)　顧問は町長とし、そのほかの役員は委員会において互選する。

(3)　委員は次の通りとする。

教育委員5名、文化財保護委員5名、考古学関係者3名、産業林務常任委員長、建設常任委員長、土地改良事業等地元代表者

(4)　事務局員は関係各課局の職員を充てる。

（役員の職務）

第5条　会長は委員会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する。

（会　議）

第6条　この委員会の会議は、会長の招集により開催する。

（そのほか）

第7条　この規約に定めるもののほか、会の運営に必要な事項は委員会において決定する。

付　則

1．この規約は、昭和62年4月10日より施行する。

② 役職員

顧　　問　山田　隆士（町長）

会　　長　北原　忠夫（教育委員会委員長　～62. 9）　小室　伊作（同左　62. 10～）

副 会 長　北原　治人（産業林務常任委員長　～62. 4）　岩崎　智道（同左　62. 5～）

小木曽英寿（文化財保護委員長）

委　　員　小室　伊作（教育委員　～62. 9）　牧野　光弥（文化財保護委員）

北原　　勝（教育委員）　麦島　正吉（　同　上　）

矢崎　和子（　同上　）　菊本　正義（　同　上　）

北原政治郎（　同上　62. 10～）　稲垣　　隆（　同　上　）

吉川　昭文（教育委員会教育長）　北原　治作（大明神地区）

平栗　　弘（建設常任委員長　～62. 4）　堀口　信幸（別府小手抜地区）

篠木　俊寛（　同　上　62. 5～）　畠中　尚二（別府下河原地区）

今村　善興（日本考古学協会員）　中島　博男（下黒田中部地区）

佐藤　雅信（　同　上　）　唐沢　富雄（南条地区）

岡田　正彦（　同　上　）　松沢　郷司（　同上　）

佐々木啓治（上黒田東部地区）

事務局員　吉川　昭文（教育委員会教育長）　北原　克司（産業課課長）

菅沼　富雄（　同　上　事務局長　～1. 3）　岡田　清平（同上　課長補佐）

林　　慶一（　同　上　1. 4～）　中園　　紘（同上　耕地係長）

吉川　勝一（　同　上　局長補佐）　鈴木　幹夫（同上　主任　～63. 3）

山下　誠一（　同　上　社会教育係）　小室　勇治（同上　主事　63. 4～）

吉川　金利（　同　上　1. 4～）　今村　美和（教育委員会社会教育係）

2）上郷町遺跡発掘調査団

調査団長　今村　善興（日本考古学協会員）

調査主任　山下　誠一（　同　上　）

調 査 員　岡田　正彦（　同　上　）　吉川　金利（63. 4～）

調査補助員　米山　義盛　伊藤　泉（以上～63. 3）　林　貢　市瀬禎子（63. 4～）

作業協力員　東　定男，荒井　東，井坪芳一，池戸大八，岩崎由紀子，大坪安江，片桐正二，上沼文代，北林覚男，北原昌人，北原孝子，久保田祐子，小西広司，小林百合子，篠田せい子，島崎泰三，清水やち，下沢貞満，菅沼庄三，高橋美鈴，中原友江，中村亮平，中藤佑子，原祐三，長谷川瑞穂，樋口勇造，古林登志子，細田重，松田照江，丸山絵理子，宮脇直人，麦島孝男，村沢千代江，山岸章，吉川佐一，吉川健星，渡辺栄子

Ⅱ　遺跡の立地と環境

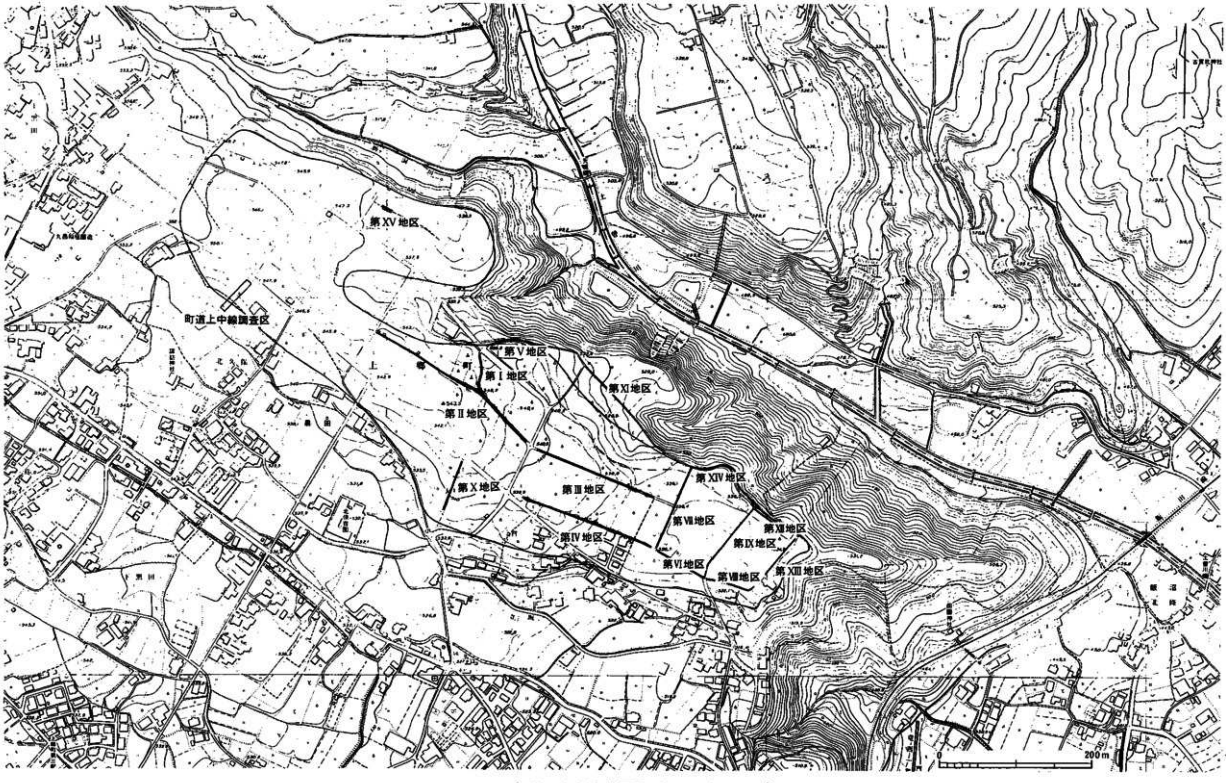
1．自然的環境

大明神原遺跡の所在する長野県上郷町は、長野県の南端を南北に走行する南・中央アルプスの谷間に広がる飯田盆地の中央に位置する。町を象徴する野底山が北西にあり、ここを源として清流野底川と土曽川が南流して飯田松川と天竜川に注いでいる。町の東側には天竜川を境として喬木村が、西は野底川を挟んで飯田市街地が、南は松川を境として飯田市松尾が、北は土曽川によって高森町と飯田市座光寺がそれぞれ隣接する。面積は約26㎢で、東西に細長い緩傾斜の地域である。一帯は諏訪湖に源を発して南流する天竜川とその支流によって形成された河岸段丘や扇状地上に、往古から現在に至る人々の生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱの五段階に編年されている。上郷町の地形の特徴として、町の中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼称される洪積土壌地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱとがみられる。その段丘崖の比高差は約50mあり、前者には黒田地籍が、後者には別府・飯沼地籍がある。中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は天竜川の現河床面海抜398 mとの比高差200 ～80mを測り、野底山山麓から南東方向に緩やかに傾斜する広大な地域を占めている。野底川と土曽川による新期扇状地が発達し、総体とすれば乾燥した台地をなしている。ちなみに、中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は三大別でき、南西側に原の城遺跡等がある中位段丘下殿岡面、北西側に大明神原遺跡がある中位段丘八幡原面があり、いずれも細長く小高い丘陵地形を呈している。この間の地域がが低位段丘Ⅰ伊久間面で2×1㎞の広い範囲となる。

大明神原遺跡は上郷町黒田字大明神原・浅間上平・清水・立坂に所在し、中位段丘八幡原面の海抜530 ～550 mに立地する。上段の北東側に長さ1100m・幅100 ～200 mの小高い丘陵があり、本遺跡はこの台地上ほぼ全域に展開している。微地形をみると、北東側は土曽川とその支流の栃ケ洞川が深い浸蝕谷を形成しており、比高差は南東側の先端部で65m、北西側で20mを測る。南東側はやや緩やかな傾斜をなして凹地帯に連続するが、先端の南東側では比高差20mの崖となっている。北西側は緩やかな傾斜をもって野底山の山麓まで続いており、南西側は前述した比高差約80mの大段丘となっている。台地上の地形も一様でなく、北側はやや低く凹地状となっており、栃ケ洞川の旧流路と考えられる。南東部ではやや急な傾斜の部分認められるが、全体とすれば南東側に緩く傾斜している。現地目は果樹園を主体とした畑作地帯となっており、耕作などで一部破壊されてはいるが、良好な保存状態を示じている。

挿図1　大明神原遺跡位置図（1：50,000）



挿図2　大明神原遺跡発掘位置図及び周辺図（1：5,000）

2．歴史的環境

上郷町の遺跡調査は、大正13年鳥居龍蔵博士が『下伊那の先史及び原始時代図版』を編纂する際、市村咸人氏と郡下一帯を調査したのを端緒とする。現在の上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査により明確にされたもので、一般遺跡69カ所・古墳32基・中世城跡３カ所の合計104遺跡が登録され、平成元年３月に古墳４基が追加された。一般遺跡を時代別に区分すると、縄文時代50、弥生時代47、古墳時代21、奈良・平安時代65、中世42を数えるが、単純遺跡は少なくその大半が複合遺跡である。

先ず上郷町の歴史的変遷を概観してみると、12000 年以前の旧石器時代の遺構・遺物は現在のところない。上郷町最古の文化は、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文式土器片と、同じく柏原Ａ遺跡出土の石器剥片とにより、縄文時代草創期からその黎明を知ることができる。次の縄文時代早期になると比較的山寄りの八王子遺跡など５遺跡から、押型文土器や繊維を含む条痕文及び撚糸文土器が出土しており、平成元年１月の西浦遺跡の町道新設に伴う調査において押型文の住居址が検出されている。約6000年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・大明神原など８遺跡があるが、いずれも上段の中位段丘と低位段丘Ⅰ地帯であり、下段の飯沼・別府地域からの発見がなく、未だ沖積地帯への進出はなかったと考えられていたが、町道改良による矢崎遺跡の発掘調査において前期後半の竪穴住居址が検出されており（今村1989）、見直しが必要となった。しかし、次の縄文時代中期になると、低位段丘Ⅱ地帯の南条面下段を除き、全町内に遺物の散布が目立ち、人々の生活の舞台の広がりを示している。特に、中期の遺跡49カ所中栗屋元・大明神原遺跡は重要遺跡である。この後に続く約4000～3000年前の縄文時代後期には遺跡は極端に減少し、上段を中心にして８遺跡が判明している。さらに、最終末の縄文時代晩期の遺跡は３カ所が知られていたが、近年矢崎遺跡より東海系の条痕文土器片が多量に発見され（今村1988）、その出土意義が注目されている。

次の弥生時代は水稲栽培を経済基盤とする新文化であり、下伊那地方へは美濃・尾張・三河地方から東漸したものと推定される。弥生時代前期の遺物は少なく、中期に至って遺跡数が増大する。特に、南条面に立地する棚田遺跡は、県下初の弥生時代の水田址が発見されたことで有名である（今村1987）。また、該期の遺跡の大半は下段の飯沼・別府地籍に集中することから、低位段丘Ⅱ地帯にみられた湿地帯を利用しての水稲耕作の展開が類推されている。約1800年前の弥生時代後期になると、その遺跡は山麓地帯から天竜川氾濫原に至る間に44カ所あり、高燥段丘上での陸耕と稲作が考えられる。その代表的なものが、住居址43軒を検出した高松原遺跡（飯田高等学校1977・佐藤1983）と木炭棺などの新知見を提供した垣外遺跡（山下1989）である。

古墳時代は集落址と墓域に区別される。上郷町の古墳は煙滅古墳を含めて36基、その大部分は別府地籍の台地端に立地するが、いずれも後期古墳であり、天神塚と番神塚の両前方後円墳以外

は全て円墳である。当時の集落は古墳の近在にみられ、現在のところ上段になく、下段の経済的基盤の豊かな地域に発見されている。代表的な集落として、古墳時代の前期及び後期の土師器を多量に出土した南条の藪越遺跡と飯沼北の的場遺跡がある。また、矢崎遺跡内には煙滅した鳥屋場古墳と久保古墳があり、当該期の土師器や須恵器が周辺一帯から発見されている。

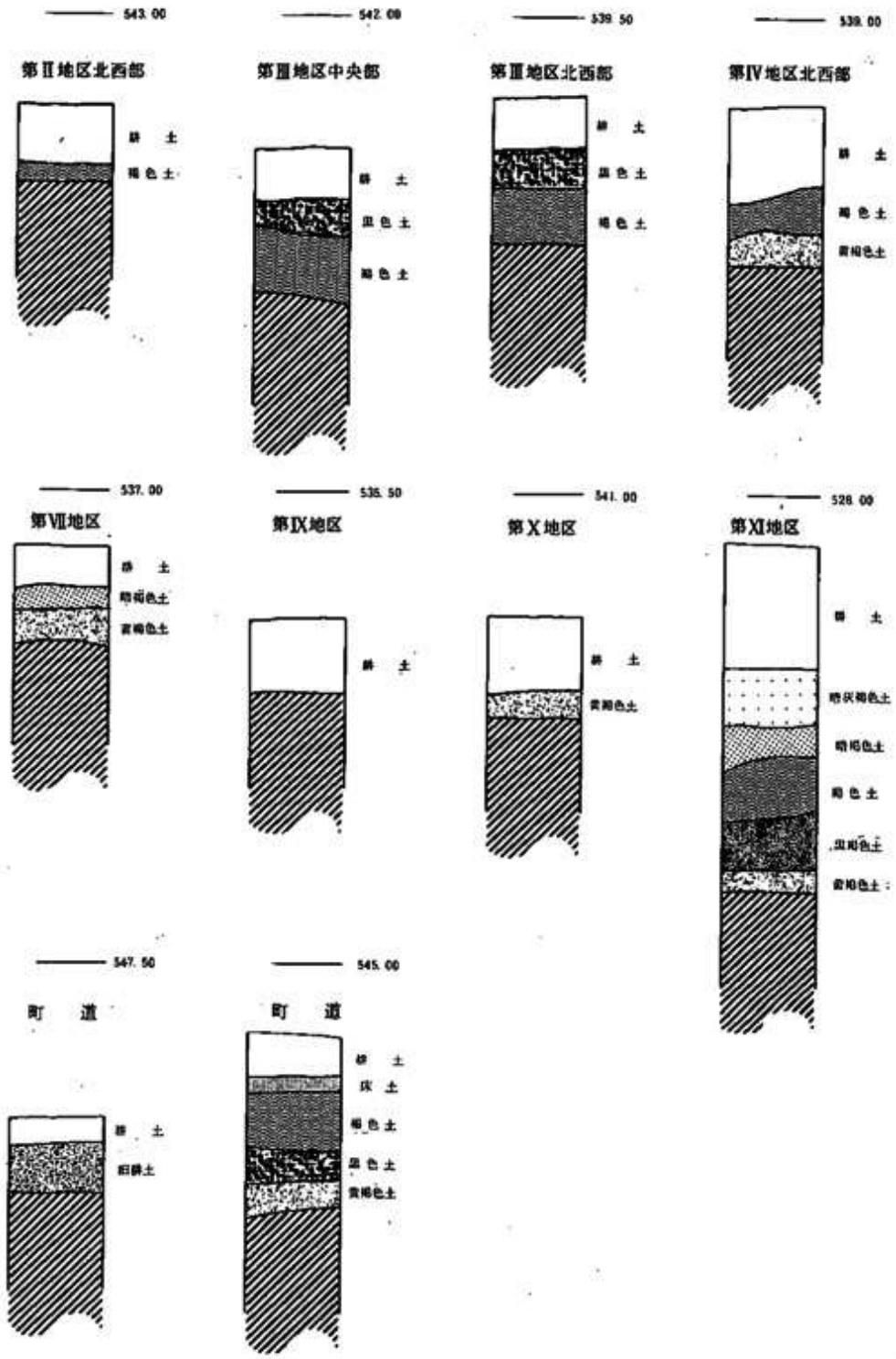
次の奈良・平安時代の遺物は全町内に散布しているが、下段地帯の栗沢川・土曽川の右岸に所在する高屋・堂垣外遺跡には多量の須恵器片がみられる。また、昭和62年度に調査した矢崎遺跡は平安時代の大集落址で、大規模な鍛冶遺構の検出とフイゴ羽口や鉄滓等の多量の出土遺物により（今村1988）、上郷町の重要遺跡となった。この低位段丘Ⅱ地帯は、伊那郡衙と言われる飯田市座光寺の恒川遺跡群と同一段丘面上にあり、しかも古代条里制遺構の存在が地割と地名から推測される地帯であり、古代史研究上注目すべき地域である。また、海抜410 mラインは都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地であり、製鉄史研究者の注目の的となっている。この地方は『和名抄』、『伊呂波字類抄』等の文献から、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末期には近衛家領の郡戸庄であった。

終わりに、大明神原遺跡のこれまでの調査について簡単に触れておく。今次調査以前に町道改良の立会調査を含めて２年次にわたり実施してきており、２冊の調査報告書として公にされている。昭和59年度の第Ⅰ次調査を収録した『黒田大明神原』（佐藤1985）と昭和60年度第Ⅱ次調査と町道３号線改良工事立会結果の『黒田大明神原Ⅱ』（佐藤1986）で、前者では縄文時代竪穴住居址５軒・弥生時代竪穴住居址２軒など、後者では竪穴住居址３軒などが報告されている。

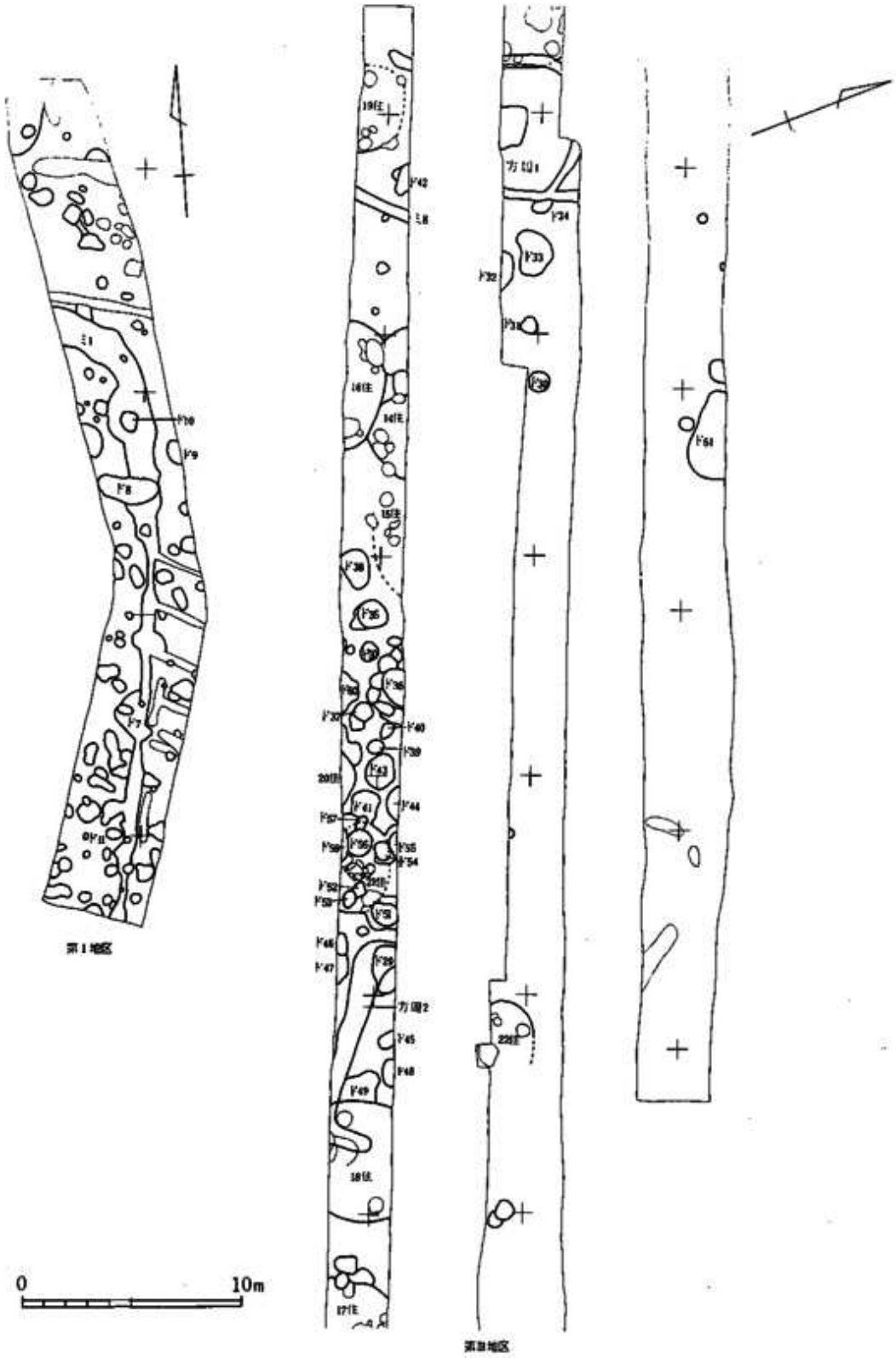
３．層　序

台地上の遺跡のため土層は単純な堆積状況を示し、各地区とも共通する点が多い。Ⅳで後述する町道58号線（通称上中線）調査を含めて、挿図３で模式的にあらわした。遺構検出面は基盤のローム層の上に堆積する褐色土下層から黄褐色土層であるが、弥生時代のものはやや上層から検出できた。

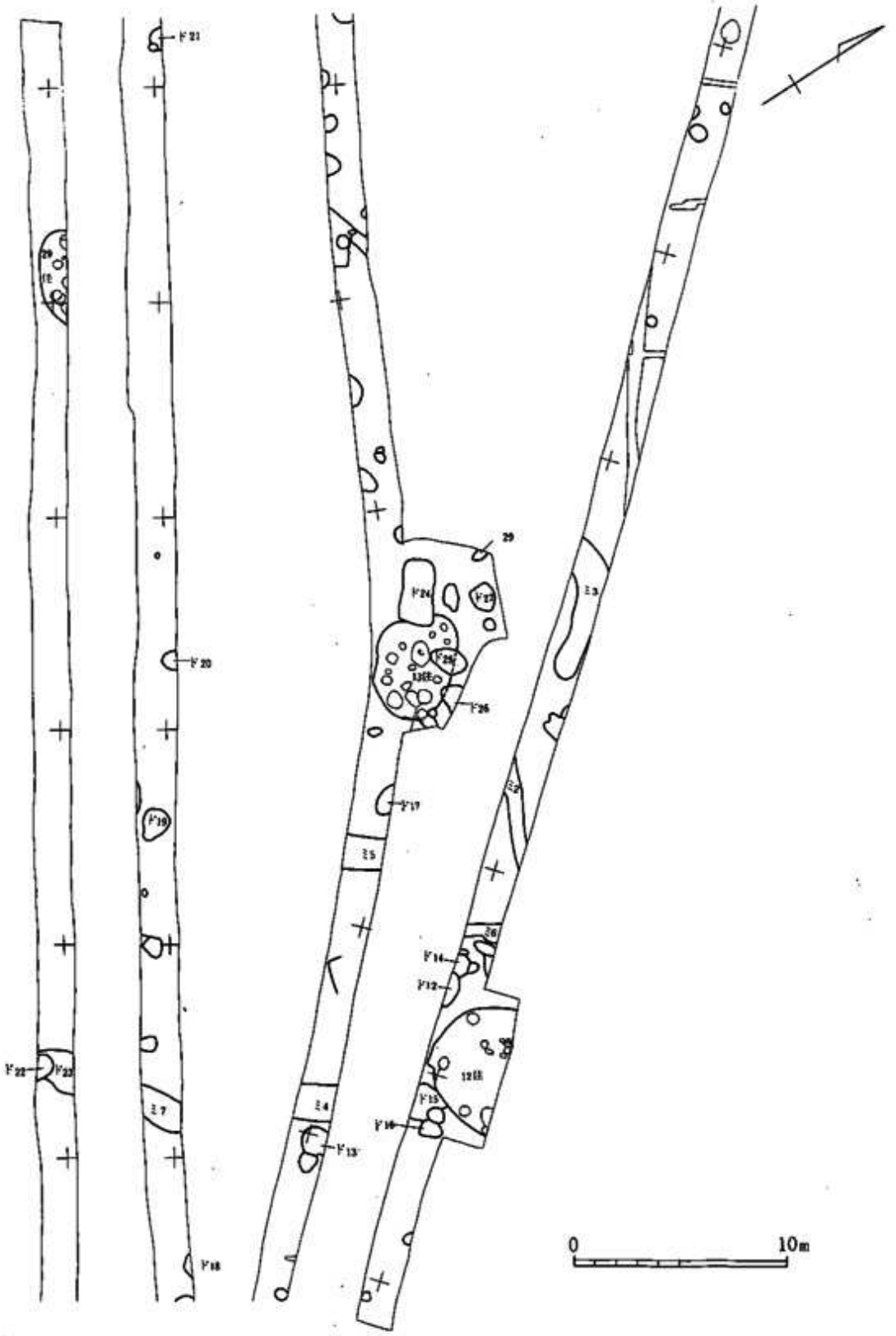
第Ⅱ地区は北西側29号住居址付近と中央部13号住居址付近、第Ⅲ地区は北西部16号住居址付近、第Ⅳ地区は25号住居址付近、第Ⅵ地区は小竪穴１付近、第Ⅸ地区は溝址10付近、第Ⅹ地区は中央部、第Ⅺ地区は南東側、町道は北西側と11号住居址付近のものである。第Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ地区は省略した。台地中央部と先端部に当たる第Ⅱ地区北西側、第Ⅸ・Ⅹ地区などがローム面まで浅く、耕土下がすぐローム層になるか、褐色土・黄褐色土が堆積する場合でも薄い傾向を示す。第Ⅴ・Ⅶ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ地区も同様で、耕土下がローム面となる。台地南東側の第Ⅱ地区中央部・第Ⅲ・Ⅳ地区はローム面まで深く、褐色土の上に黒色土が堆積するが、耕作の攪乱を受けて見られない箇所も多い。第Ⅰ地区も同様である。北東側凹地の第Ⅺ地区と南西側の凹地に続く斜面の町道11号住居址付近は、上からの押出しにより深く複数の層序を示す。



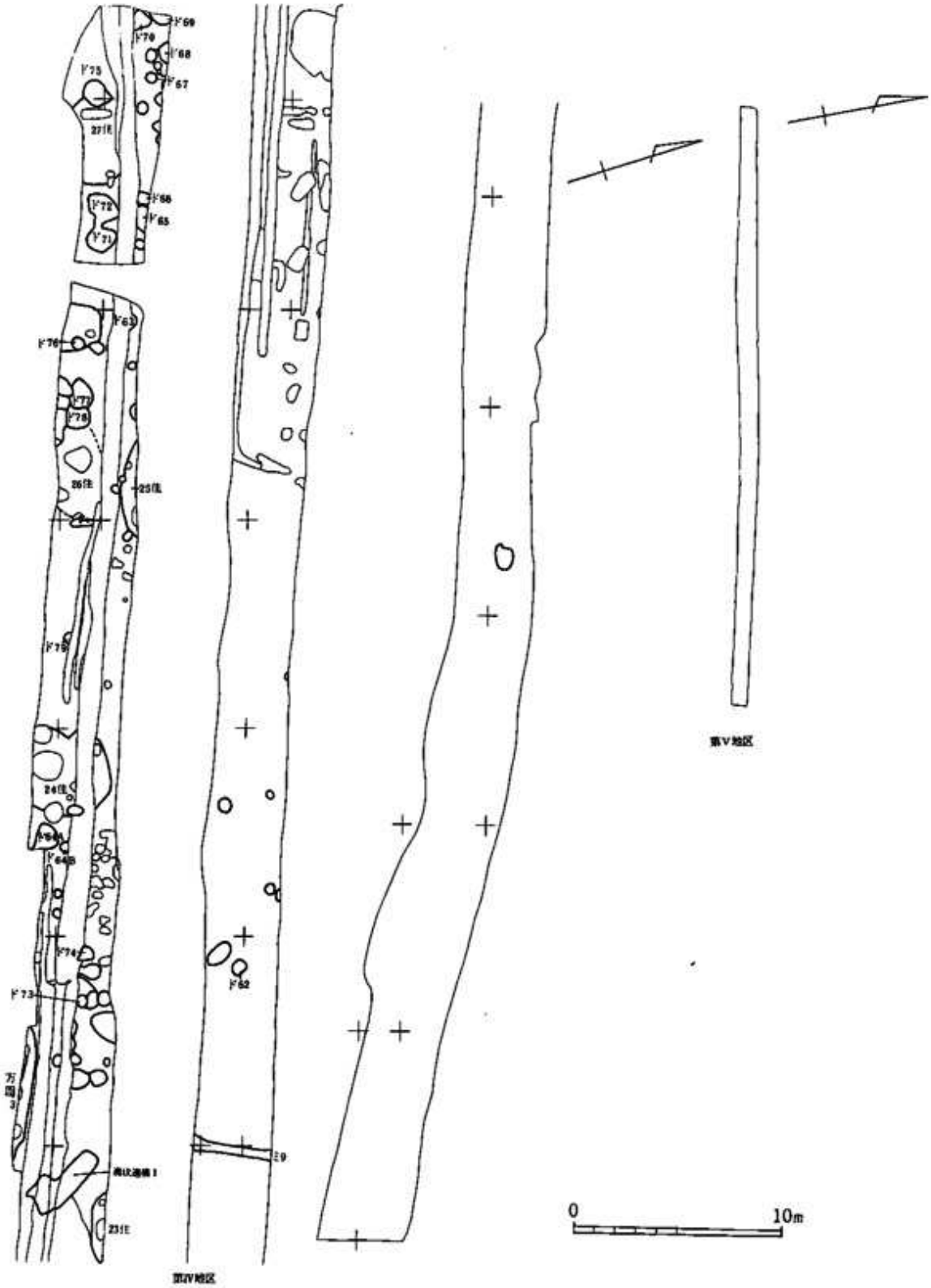
挿図3　大明神原遺跡基本土層柱状図（1：30）



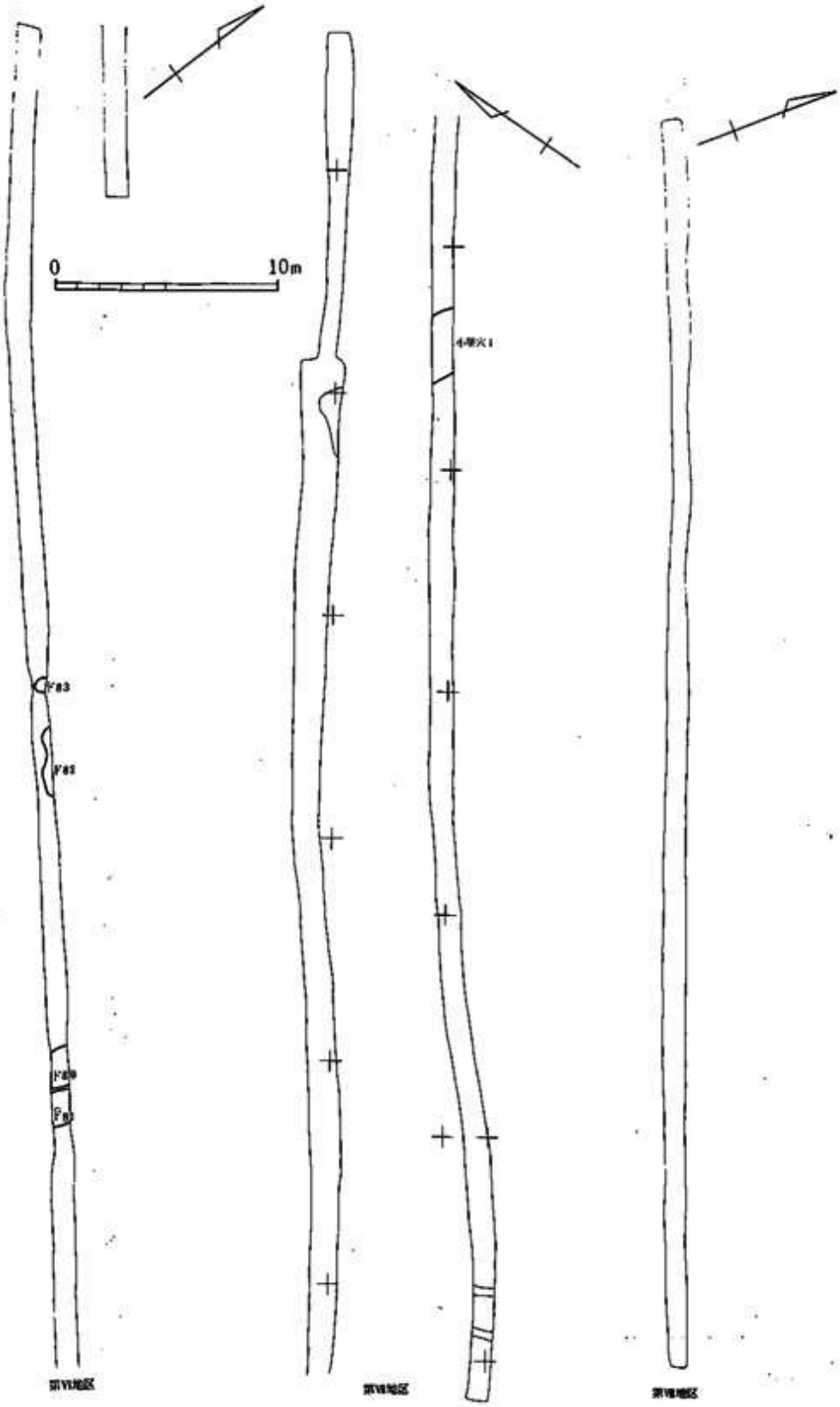
挿図4　第Ⅰ・Ⅲ地区　全体図（1：300）



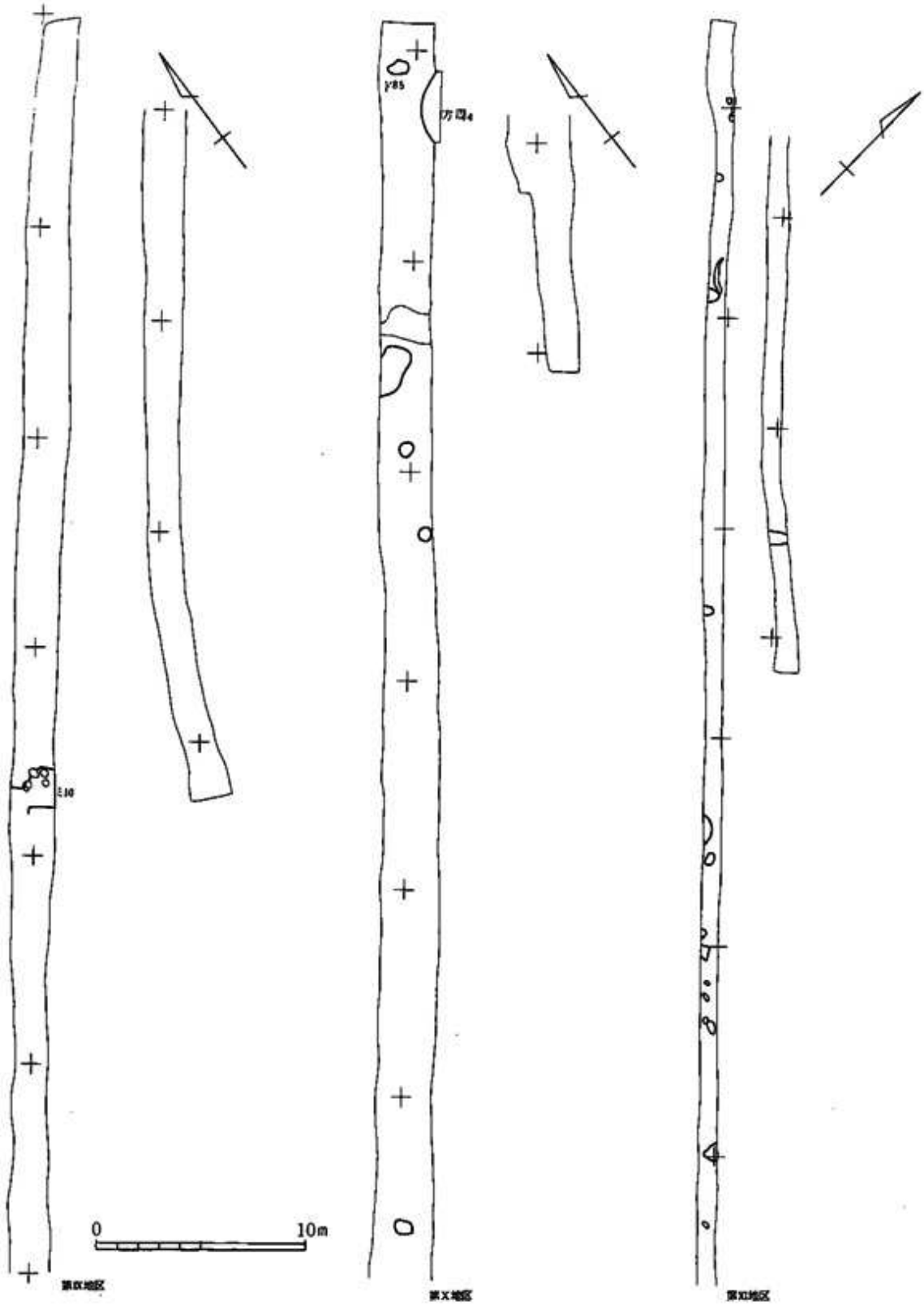
挿図5　第Ⅱ地区　全体図（1：300）



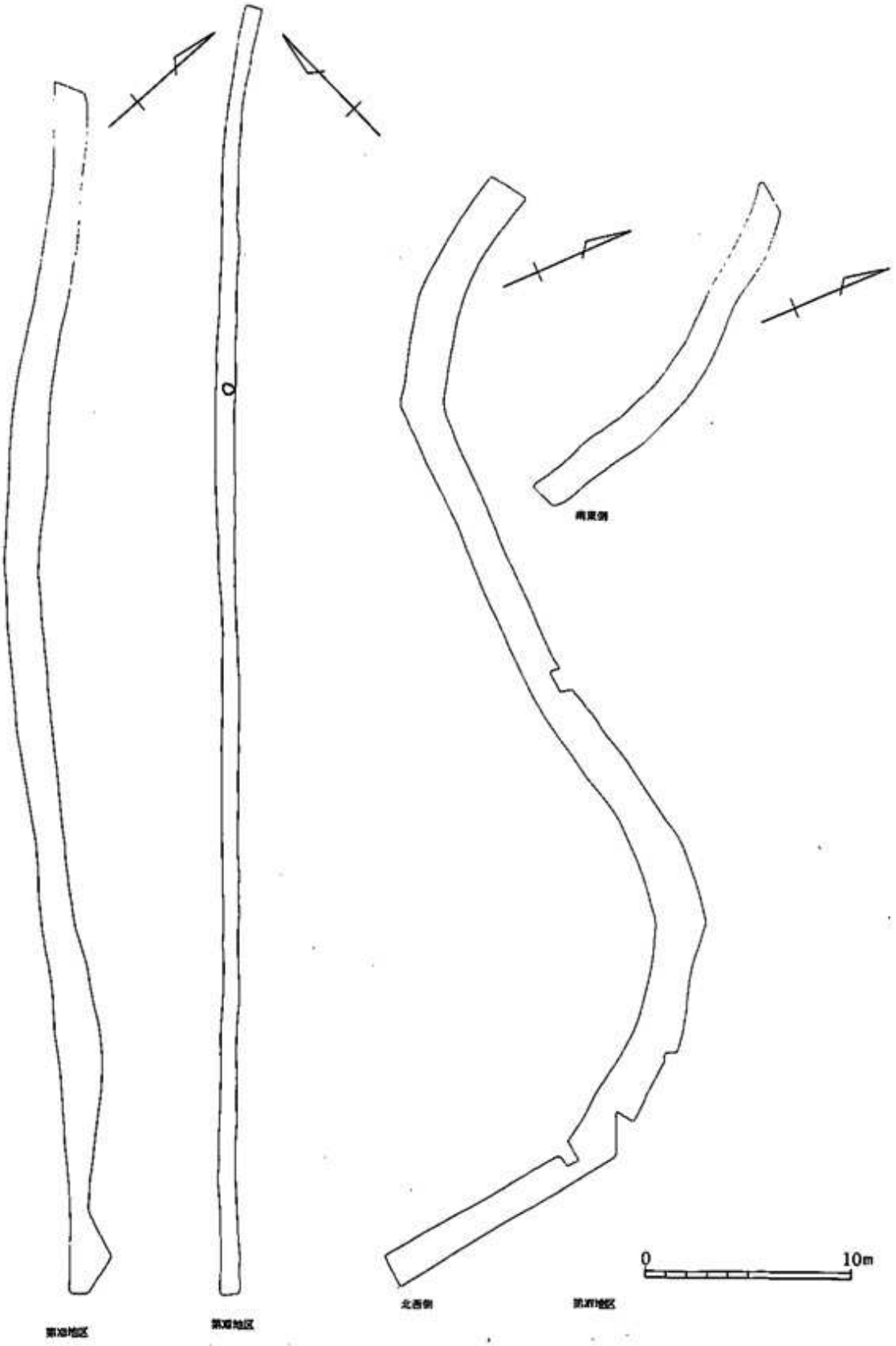
挿図6　第IV・V地区　全体図（1：300）



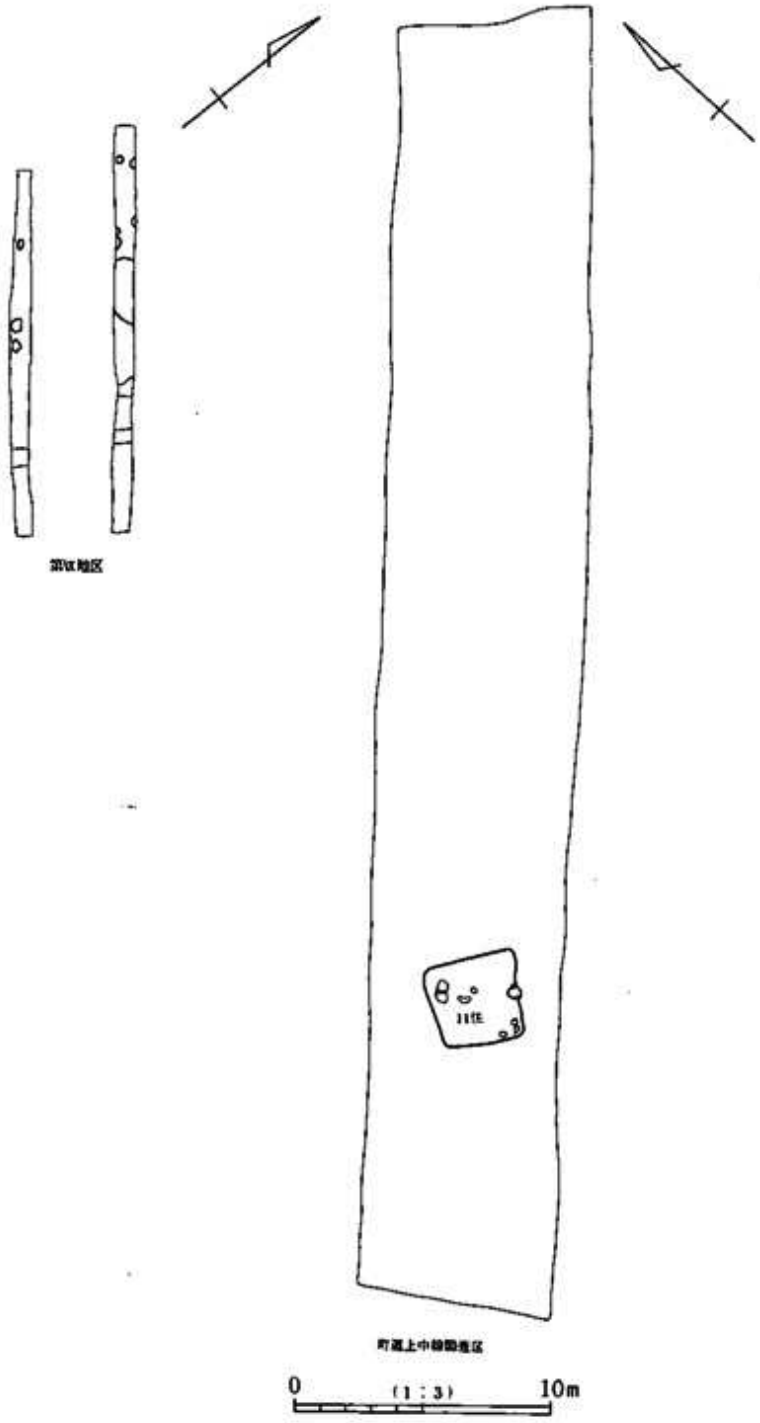
挿図7　第VI・VII・VIII地区　全体図（1：300）



挿図8　第Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ地区　全体図（1：300）



挿図9　第XII・XIII・XIV地区　全体図（1：300）



挿図10　第XV地区、町道上中道線調査区　全体図（1：300）

Ⅲ　調査結果

今次調査は、遺跡の中心部と考えられる中央から南東側部分を対象として、新設・改良される農道部分に限定された。広範囲にわたるわけであるが、最大幅は広くても4.5 mであり、面的に広げる訳にはいかなかった。遺跡全域に共通したグリットを設定して、それにそって調査・測量に当たるべきであったが、諸般の事情で実施できなかった。そこで、産業課が設定した基準杭を用いて各地区ごとにトランシットを使って２ｍグリットを設定して調査・測量に当たり、測量の一部に平板も利用した。

遺構番号は第Ⅰ・Ⅱ次調査と混乱しないように、以前に検出された数字から順番につけるようにした。よって、今次調査の最終番号が、本遺跡で調査された遺構数ということになる。

１．第Ⅰ地区

遺跡範囲の中心部中央から北側に向かう耕作道を対象とし、長さ約38m・幅4.5 mを調査した。本調査区の北側が遺跡北側に存在する凹地の肩部分に相当し、傾斜をもって落ち込んでいる。

１）遺　構

① 溝址１（挿図11、第１・２図）

第Ⅰ地区南側から中央部で検出した。土坑７・８を切る。調査延長は27.6mで、両側に延長するが、南側で調査した第Ⅱ地区では検出されなかった。調査区南側では幅24～70cm・深さ３～10cmを測り、方向はN10° Eを示す。中央部からやや北西方向に緩く曲がって用地外にかかるため、調査できなかった。この箇所では規模が大きくなり、幅130 ～150 cm・深さ13～52cmを測る。断面形は逆台形を呈し、覆土は黒色土のローム混じりの一層で、人為的に埋められていると判断できた。用途等を判断できる材料は得られなかった。

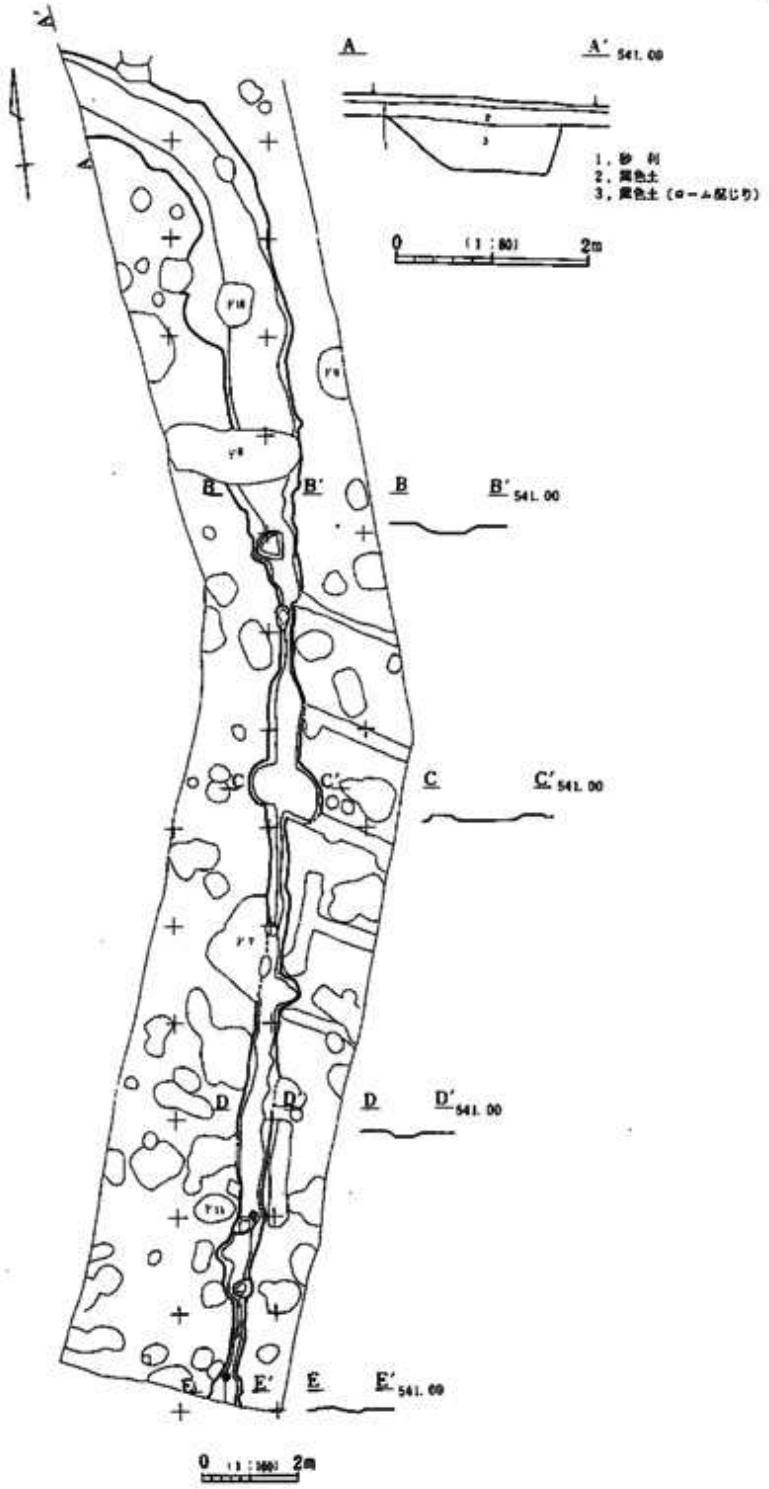
出土遺物は石器のみで、打製石斧（１－17～21、２－１～４）・横刃型石器（２－５～８）・磨製石斧未成品（２－９）・打製石錘（２－10～12）がある。

遺物は縄文時代であるが、遺構の状況から該期に位置づくとは考えられず、時期は不明である。

② 土坑７（挿図12、第１図）

第Ⅰ地区南側で検出し、溝址１に東側を切られる。長さ220 cmの不定形を呈し、深さは16cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底部３箇所に小穴があるが、直接関連するものか不明である。
出土遺物は縄文土器の底部１点（１－６）が出土した。

規格性のない遺構の状況からして人為的なものか判断できず、時期も不明である。



挿図11　第Ⅰ地区　溝址1

③ 土坑８（挿図13）

第Ⅰ地区中央部で検出し、東側の上層は溝址１に切られる。西側がわずかに用地外にかかった。280 ×110 cmの長い楕円形を呈し、深さ66cmを測る。断面形は逆台形を呈し、覆土はレンズ状の堆積をなし、自然に埋まったものと判断できた。出土遺物はなく、時期・役割など不明である。

④ 土坑９（挿図13、第２図）

第Ⅰ地区中央部で検出し、東側が用地外にかかるため、半分ほどを調査した。長軸が100 cmの楕円形を呈すると考えられ、深さは32cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は縄文時代の打製石斧が１点（２－13）ある。時期・役割など不明である。

⑤ 土坑10（挿図13）

第Ⅰ地区中央部溝址１の底部で検出した。92×72cmの丸みを帯びた五角形を呈し、深さは20cmで、断面形は逆台形を呈する。出土遺物はなく、時期・役割など不明である。

⑥ 土坑11（挿図14）

第Ⅰ地区南側で検出し、全体を調査した。88×56cmの楕円形を呈し、深さは底部が段をもち、西側の浅い箇所で14cm、東で20cmを測る。出土遺物はなく、時期・役割など不明である。

⑦ ピット（挿図12～15）

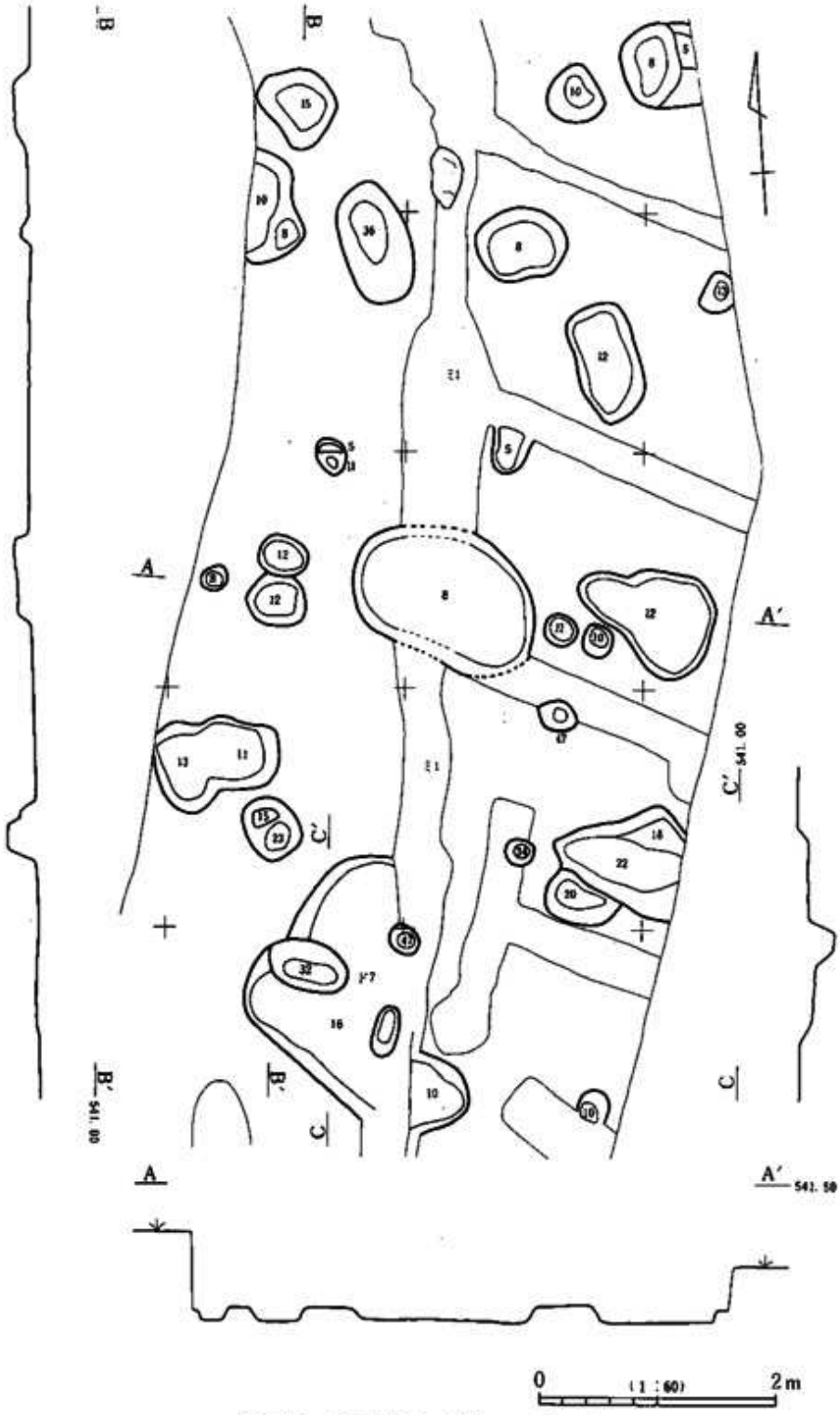
第Ⅰ地区全体に、直径20cm前後の小さいものから100 cmを越える土坑状のものまで、大小様々のピットがみられる。形態は円形や楕円形が主体をなすが、不定形のものも多く一定でない。深さは４～98cmで、20cm以下の浅いものがほとんどである。分布状況をみると、特定の集中箇所も認められず、規則的に並ぶものもなく、全域に散布している状態である。

出土遺物はなく、時期・役割など不明である。

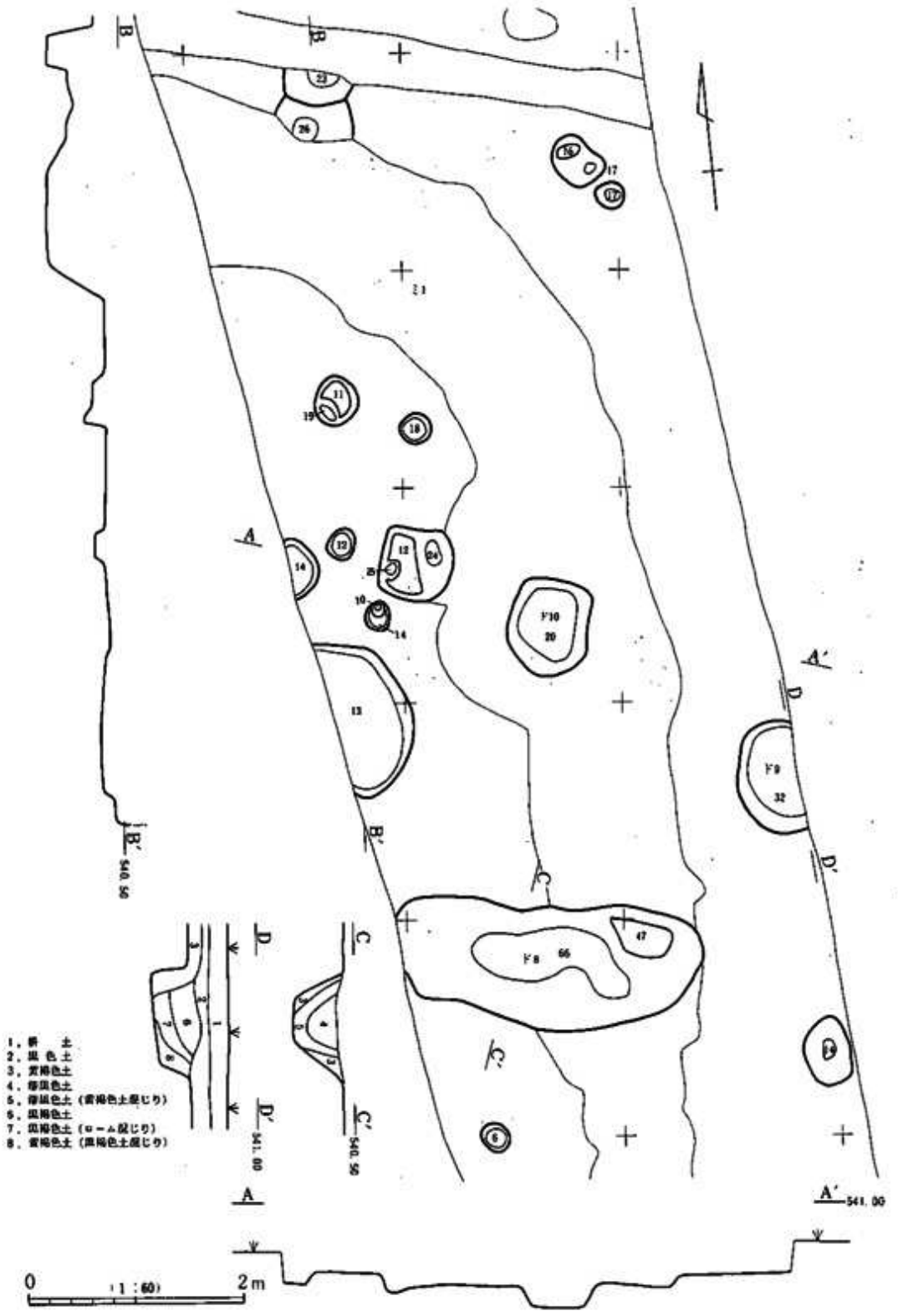
２）遺物

遺構内出土遺物は既述済なので、遺構外出土遺物について述べる。土器・石器がある。

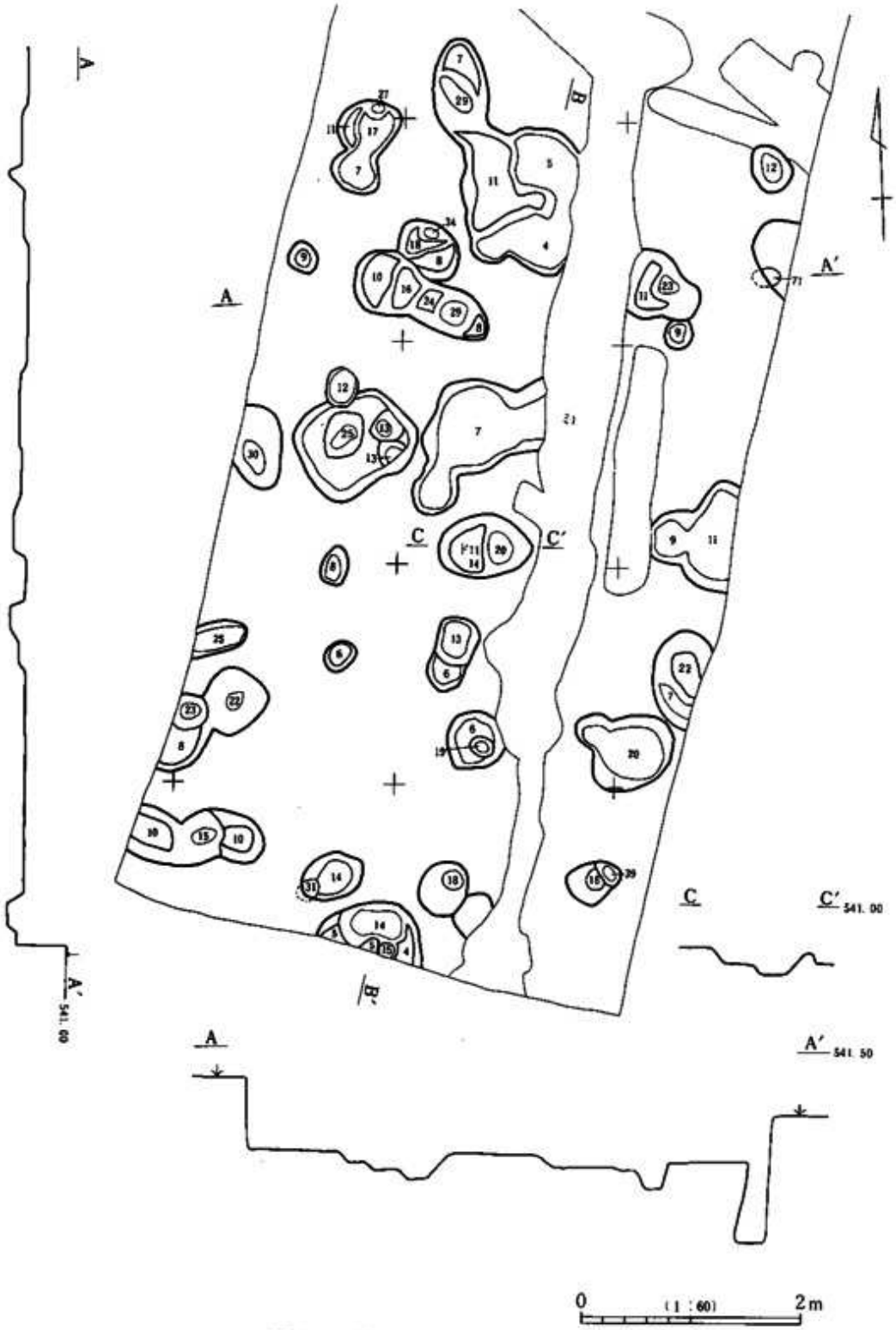
土器は縄文土器が多く、早期に位置づく繊維を含む条痕文土器の破片（１－７～９）があり、同様の個体はほかに３点出土したが小破片のため省略した。中期中葉（１－10～12）、同後半（１－13）に位置づく破片もみられる。大部分は詳細な時期判断不明の破片で38点あるが、１点（１－14）を除いて省略した。弥生土器は後期の甕片などが16点出土したが、口縁部１点（１－15）のみを掲載した。ほかに、調査区東側畑の表採品で中期後半の甕胴部片（１－16）がある。石器は打製石斧（２－14～17、３－１～３）、横刃型石器（３－４・５）、打製石錘（３－６）がある。



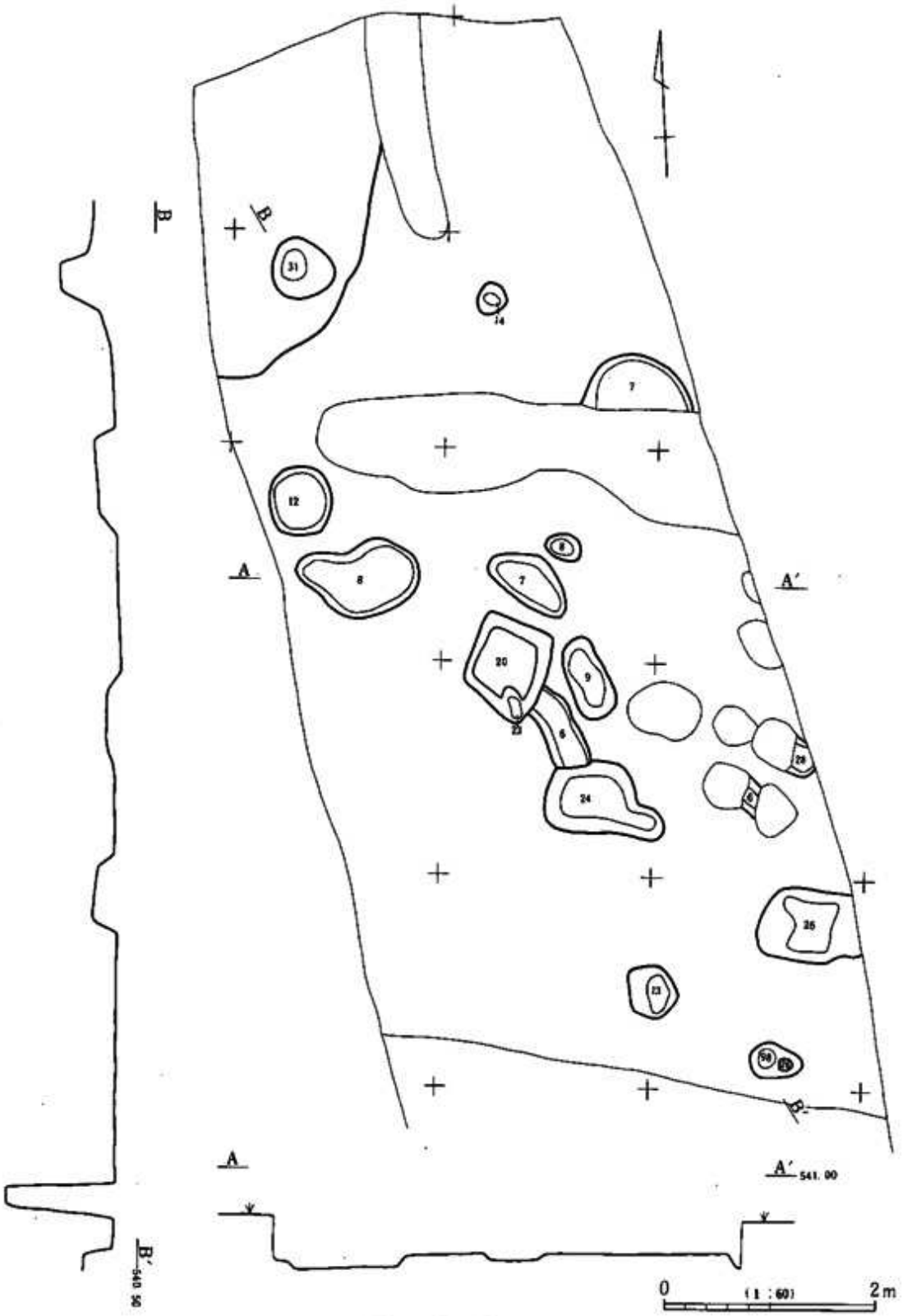
挿図12　第Ⅰ地区　土坑7、ピット



挿図13　第Ⅰ地区　土坑8・9・10、ピット



挿図14　第Ⅰ地区　土坑11、ピット



挿図15　第Ⅰ地区　ピット

2．第Ⅱ地区

遺跡範囲の中心部中央に北西・南東方向に縦断する耕作道を対象とし、長さ約245 m・幅1.7 mを調査し、竪穴住居址部分は最大限拡張した。

1）竪穴住居址

① 12号住居址（挿図16、第3・4・8・53・54図）

第Ⅱ地区南東側で検出し、北東側が用地外にかかるため、半分強を調査した。主軸方向の規模が5.8 mの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN38° Wを示す。壁高は25～9 cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。南壁中央部でわずかに張り出す箇所が認められた。周溝は壁下をほぼ全周し、幅21～5 cm・深さ21～4 cmを測る。床面はたたき状に堅く良好であるが、一部に耕作の攪乱を受けている。主柱穴はP2 ・P3 ・P4 の3本で、配置から6本主柱穴と考えられる。炉址は中央北西寄りに位置する石組炉で、40～28cmの石7個を用いて140 ×90cmの方形に組み、内部がわずかに凹んで焼土が認められた。石の一部は抜かれている可能性がある。

出土遺物は土器・石器・土製品がある。土器は深鉢で（3－7・8、4－1～16）、形態を復元できるものは1点（3－7）のみで、口縁部がやや内側に折立して胴部が膨らみ、縄文を地文として口縁部に隆帯・胴部に細い沈線文が施される。拓影図で示した破片も同様な個体が大半を占めるが、若干時期を異にする破片（4－15・16）も含まれている。

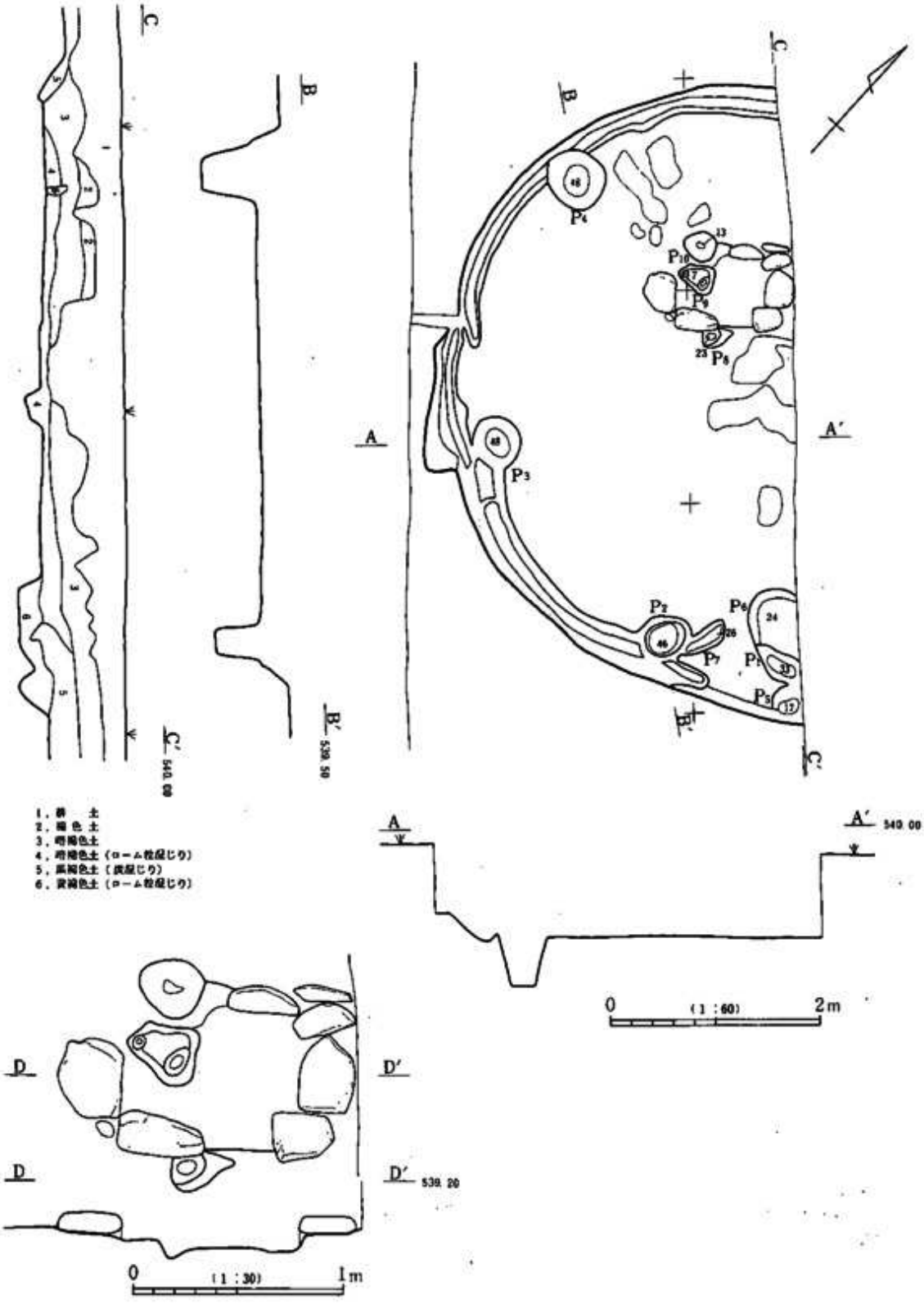
石器は、打製石斧（8－1～4）・横刃型石器（8－5～9）・磨製石斧（8－10・11）・すり石（8－12・13）・打製石錘（8－14・15）・使用痕のある剥片（54－1）があり、ほかに石器剥片6点と黒曜石剥片1点がある。

土製品は覆土中より出土した土偶の腰部片（53－1）で、尻の部分が張り出す形態をなす。

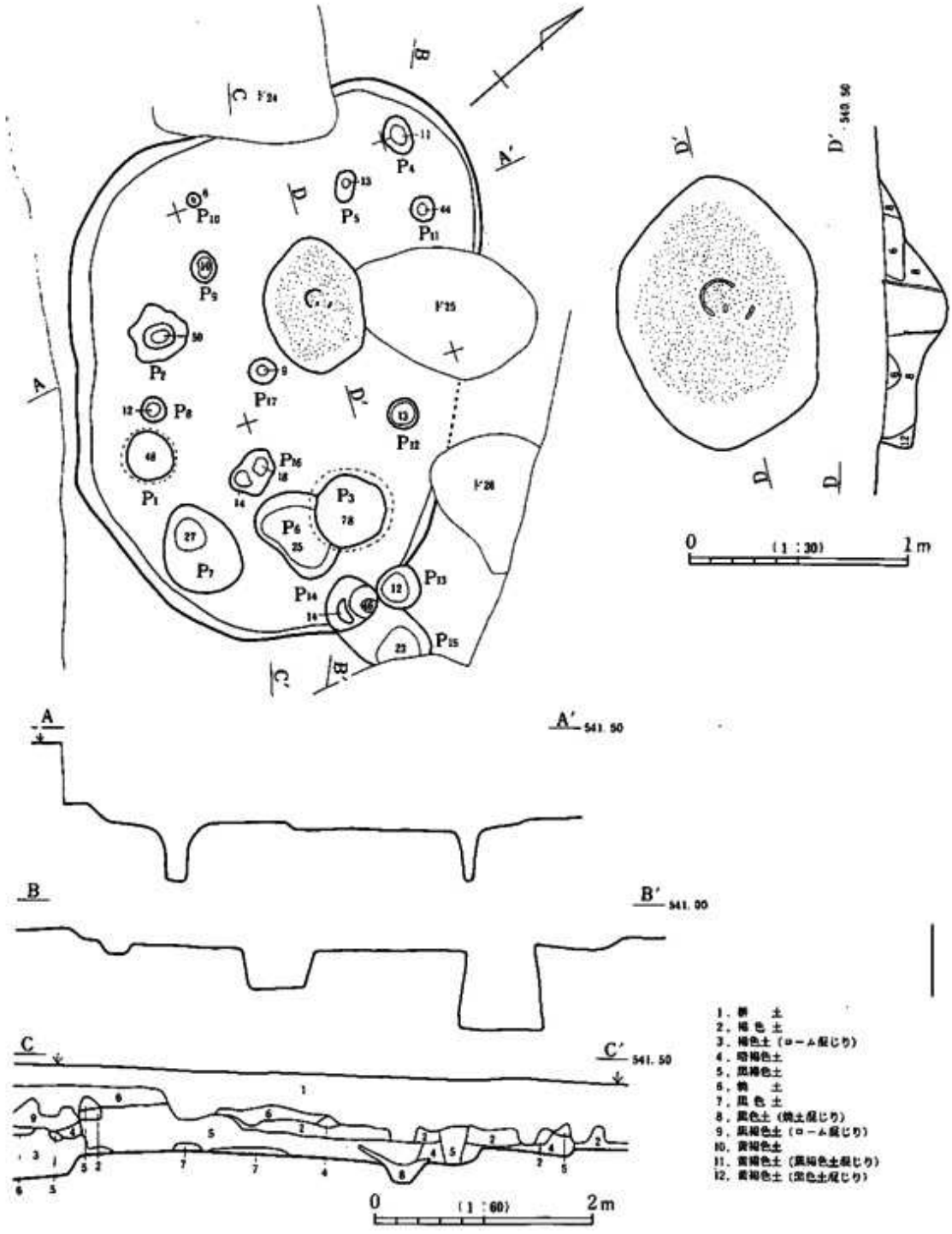
出土遺物から縄文時代中期後半の初頭に位置づけられる。

② 13号住居址（挿図17、第4～6・9・53・54図）

第Ⅱ地区中央部で検出し、全体を調査した。縄文時代の土坑24・25・26に切られる。4.9 ×3.7 mの小判形の竪穴住居址で、主軸方向はN41° Wを示す。壁高は24～6 cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は中央が低くなるナベ底状をなし、一部に堅くたたき状に良好な部分も認められたが、総体とすれば軟弱で不良である。柱穴はP1 ～P15まで確認されているが、主柱穴の特定はできなかった。全体に小さな穴が多い傾向を指摘できる。P1 ・P3 は袋状の断面形をなし、貯蔵穴と考えられる。P13・P15は本址と関係ないものと判断される。炉址は中央北西寄りに位置する土器埋設炉で、口縁部・底部を欠く深鉢を埋め、120 ×90cmの楕円形を呈し、土器の周辺には極めて多量の焼土が認められた。



挿図16　第Ⅱ地区・12号住居址



挿図17　第Ⅱ地区　13号住居址

出土遺物は土器・石器・土製品がある。

土器は押引文が施される浅鉢の1点（5－3）を除いてすべて深鉢で、炉址の埋設土器（5－1）で代表される竹管文が特徴の平出3A（5－4～22）が多く、爪形文が施されるもの（4－17）、押引文が施されるもの（4－19）、密な竹管文が施されるやや古い様相を示すもの（6－1・2）などがある。

石器は、打製石斧（9－1～5）・横刃型石器（9－6～8）・大形粗製石匙（9－9・10）・磨製石斧（9－11・12）・打製石錘（9－13～15）・ピエス・エスキーユ（54－2）がある。土製品は、右足の土偶片（53－2）がある。

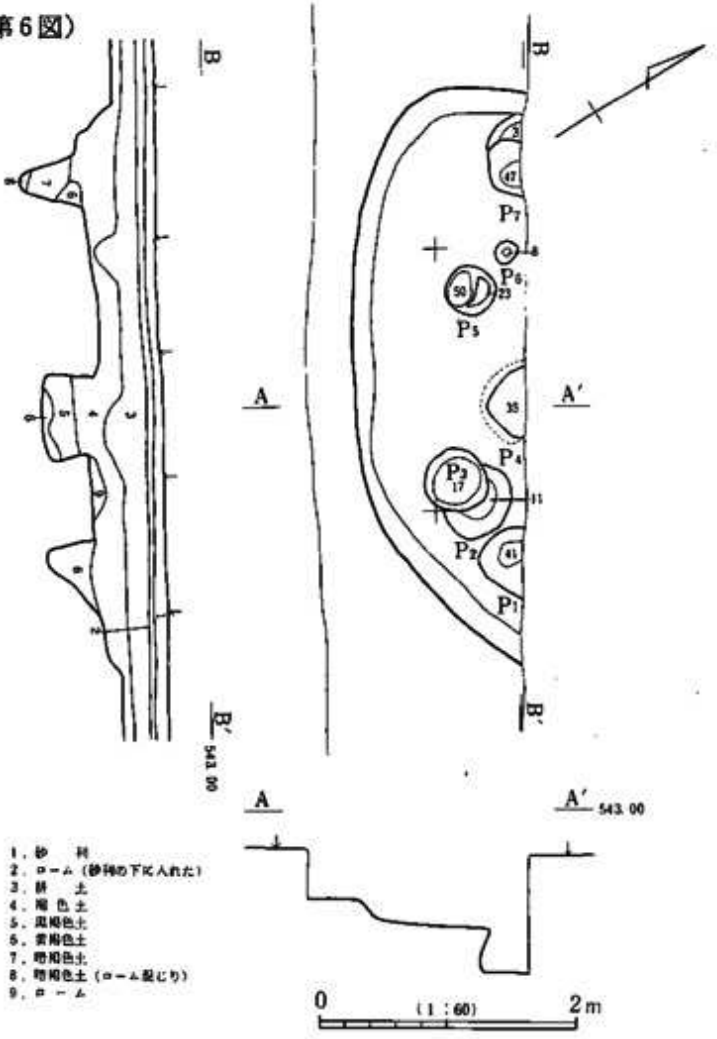
出土遺物から縄文時代中期中葉の前半に位置づけられ、当地方ではほとんど類例が認められないものであり、該期研究の上で極めて貴重な資料を提供するものといえる。

③ 29号住居址（挿図18、第6図）

第Ⅱ地区の北西端で検出し、北側が用地外のため1／3程を調査した。全体形が明らかでないので推定の部分が多いが、東西方向が4.4 mの楕円形もしくは円形を呈する竪穴住居址である。壁高は19～13cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は凹凸があり、軟弱で不良である。主柱穴はP1・P7が相当すると考えられるが、はっきり断定できない。P4は袋状の断面形をなす。

出土遺物は深鉢の破片（6－15～23）のみである。

出土遺物から縄文時代に位置づけられるが、小さな破片のみで詳細な時期は不明である。調査の段階では竪穴状遺構としたが、整理を進めるなか住居址のほうが適切と判断されたので本址とした。



挿図18　第Ⅱ地区　29号住居址

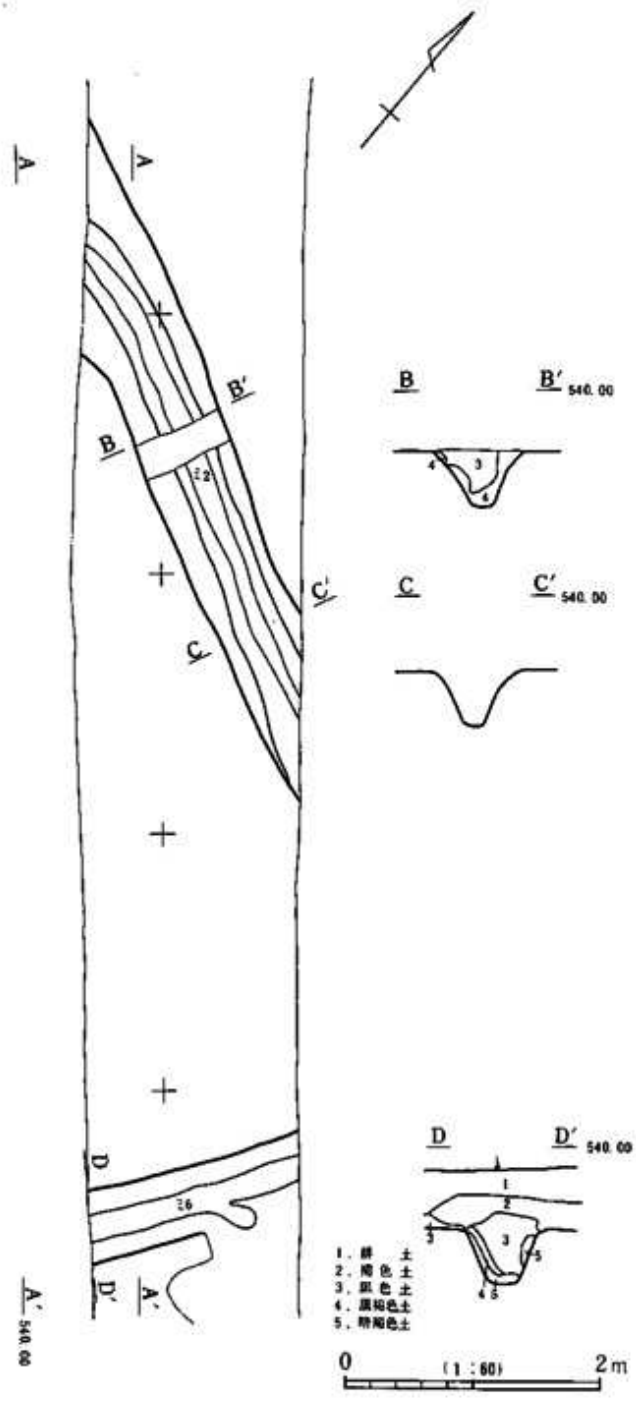
2）溝址

① 溝址２・６（挿図19、第９図）

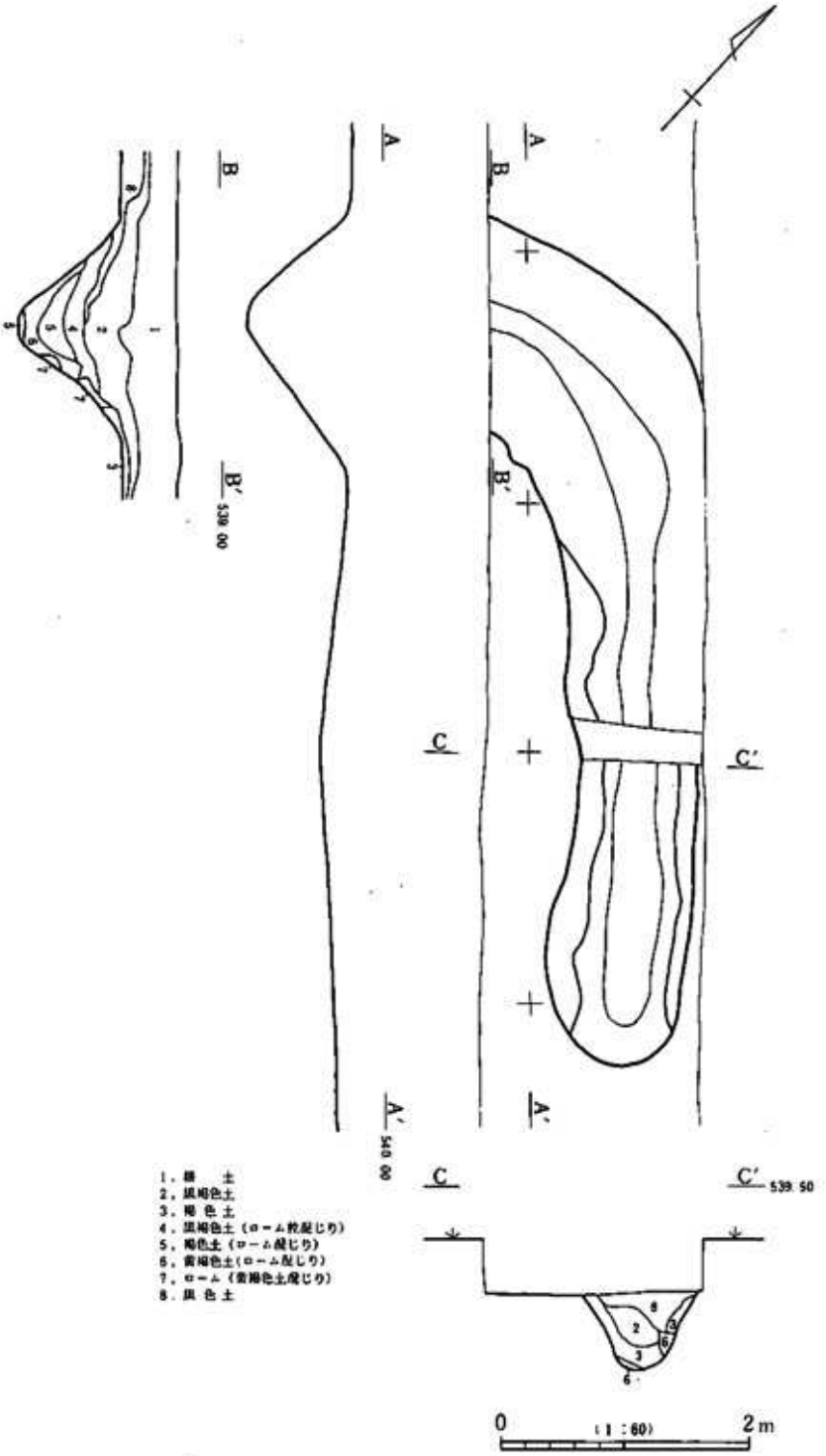
第Ⅱ地区南東部で検出した。いずれも両側に延長する。関連が考えられるので一緒に記述する。溝址２は調査延長が5.5 mで、幅64cm・深さ48～40cmを測る。方向はN66° Wを示し、断面形は稜をもつ逆台形を呈する。溝址６は調査延長が1.9 mで、幅56～52cm・深さ40～27cmを測る。方向はN30° Eを示し、断面形は逆台形を呈する。東壁の一部は耕作の攪乱を受けている。覆土は黒色土を主体としており、両者とも似かよった状態である。

出土遺物は溝址２から縄文時代中期後半の土器片と石器打製石斧（９－16～18）がある。溝址６からは何も出土しなかった。

ほぼ直角の方向を示し、覆土や遺構の状況など共通する点が認められる。東側に未調査部が存在してはっきり断定できないが、この箇所でつながり同一のものの可能性が高い。出土遺物が少なく時期を確定することは不可能であるが、縄文時代の遺構の覆土とは異なっており、弥生時代のものに共通する。以上の点を勘案すれば、弥生時代の方形周溝墓と想定するのが無理のない解釈と考える。



挿図19　第Ⅱ地区　溝址２・６



挿図20　第Ⅱ地区　溝址3

② 溝址３（挿図20、第６・９・10図）

第Ⅱ地区南東側で検出した。南東側でとぎれ、南西側に延長する。調査延長は6.8 mで、幅160 ～98cm・深さ82～42cmを測る。方向はほぼN43° Wを示し、北西側で緩やかに曲がって用地外に延長する。断面形は逆台形を呈し、南東側では途中で稜をもつ。覆土は黒色土・黒褐色土を主体としており、自然に埋まった土層の状況を示している。

出土遺物は縄文土器片が12点・弥生時代後期土器壷片１点、石器打製石錘（９－19）・スクレイパー（10－１）・黒曜石片１点あり、土器は時期を示すハケ調整の弥生土器壷胴部片（６－24）を掲載した。

全体形が明らかでないので不明確であるが、遺構の状態などから南東側でとぎれる箇所が土橋部となる方形周溝墓と判断される。

詳細な時期の位置づけは困難であるが、弥生時代後期と考えられる。

③ 溝址４・５（挿図21、第６図）

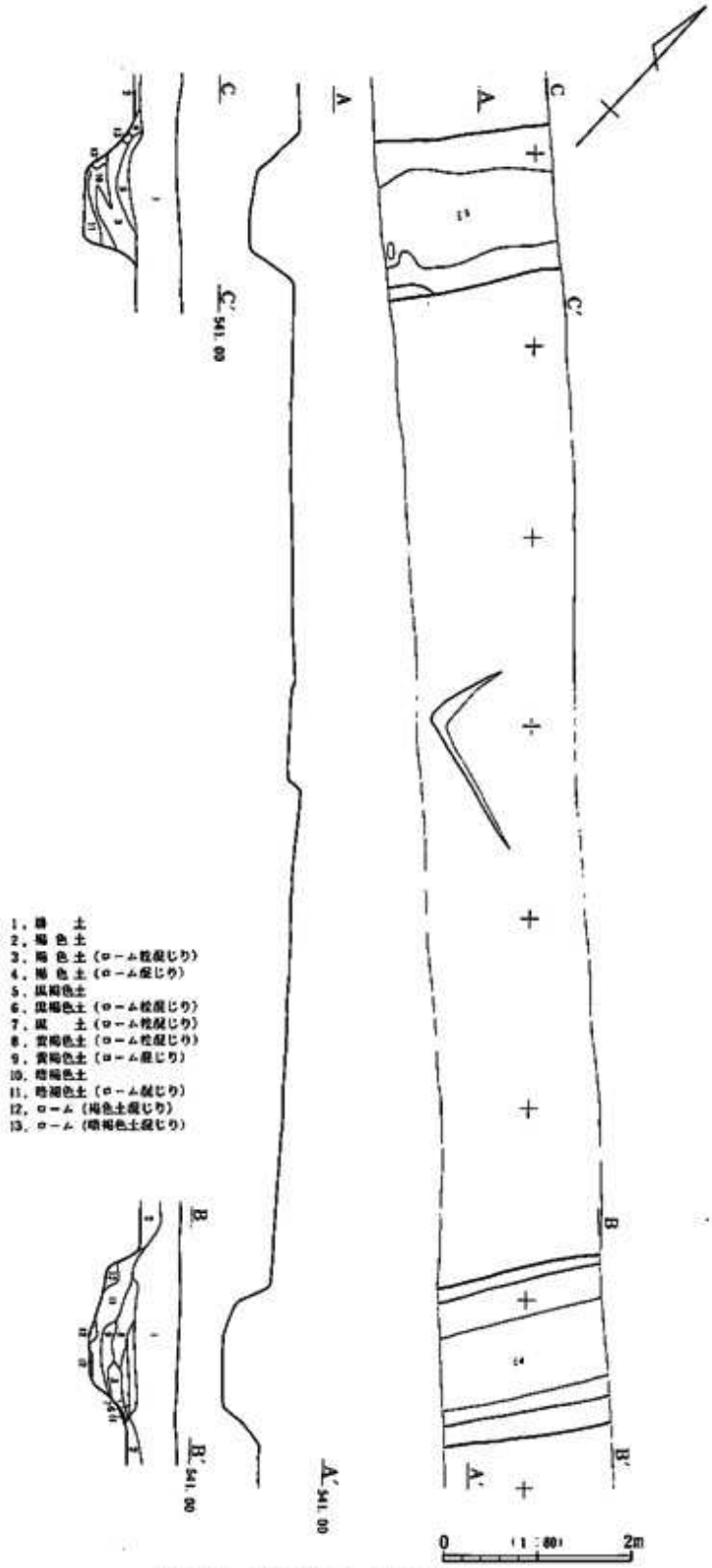
第Ⅱ地区南東部の調査区を横断する形で検出し、いずれも両側に延長する。関連が考えられるので一緒に記述する。溝址４は調査延長が1.8 mで、幅180 ～168 cm・深さ48～36cmを測る。方向はN47° Eを示し、断面形は逆台形を呈する。溝址５は調査延長が1.8 mで、幅166 ～150 cm・深さ48～36cmを測る。方向はN47° Eを示し、断面形は逆台形を呈し、北西側底部が緩やかな傾斜を持ち南東壁に稜が認められた。覆土は自然に埋まった堆積状況を示している。

出土遺物は溝址４から縄文時代中期の土器片２点、溝址５から縄文土器の平出３Ａ片と弥生時代後期の壷底部（６－25）・壷頸部片（６－26）のほか、同時期の破片２点が出土した。縄文土器は省略した。

両者は約12m離れて平行に位置しており、規模や遺構の状況など共通する点が認められる。全体形が明らかでないので不明確であるが、同じ方形周溝墓の周溝の一部と考える。北西側と南東側のほんの一部が明らかにできたものと判断される。

出土遺物や遺構の状況から弥生時代後期に位置づけられるが、詳細な時期は不明である。

溝址２～６は、当初溝址として調査したため溝址の記述に含めたが、前記したように、３基の方形周溝墓と把握できる。一部のトレンチ調査で終了したので全体形を明らかにできないし、主体部なども不明であるのが残念であるが、大部分は用地外に遺存している。時期決定も土器の小破片によるが、第Ⅱ地区の遺構外から弥生時代後期の土器片が検出されてないことを考え合わせると、弥生時代後期とするのが妥当と判断した。当地方の既調査方形周溝墓の時期も判断材料となっている。



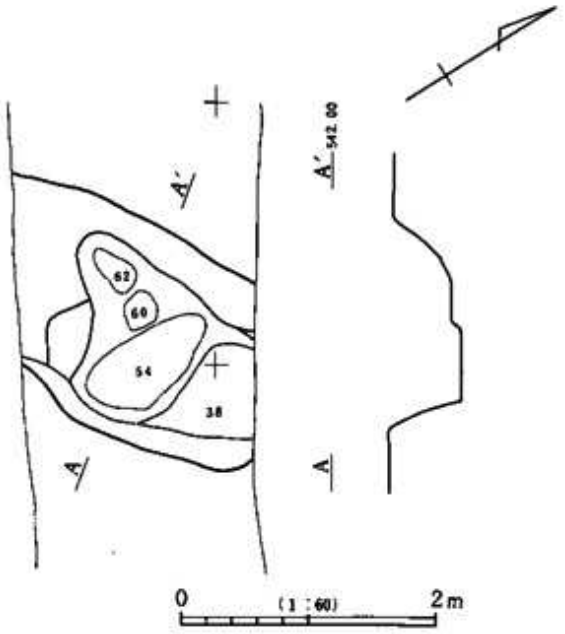
挿図21　第Ⅱ地区　溝址４・５

④ 溝址７（挿図22、第６図）

第Ⅱ地区中央部を横断する形で検出し、両側に延長する。調査延長は2.0 mで、幅156 ～140 cm・深さ62～38cmを測る。方向はN58° Eを示し、断面形は不定形で、底の形状も一定でない。

出土遺物は縄文土器片15点と黒曜石片１点で、文様の認められる６点（６－27～31）を示した。なかで、６－27は内外面に山形の押型文が施文され、縄文時代早期末に位置づけられる。

調査範囲が限られるため溝址としたが、底部の状況をみれば土坑とするのが適切かもしれない。出土遺物は縄文時代で該期に位置づけられるが、広い時期差の遺物を含んでおり、詳細は不明である。



挿図22 第Ⅱ地区 溝址７

３）土坑

① 土坑12（挿図23、第10図）

第Ⅱ地区南東部で検出し、南西側が用地外で半分弱を調査した。土坑14と重複する。形態は不明だが、北西・南東方向の長さが170 cmで、深さは82cmを測る。断面形は深い逆台形を呈する。底部に２個の小ピットをもつ。

縄文時代の無文土器片４点と石器粗製石匙（10－２）がある。

② 土坑13（挿図24、第７図）

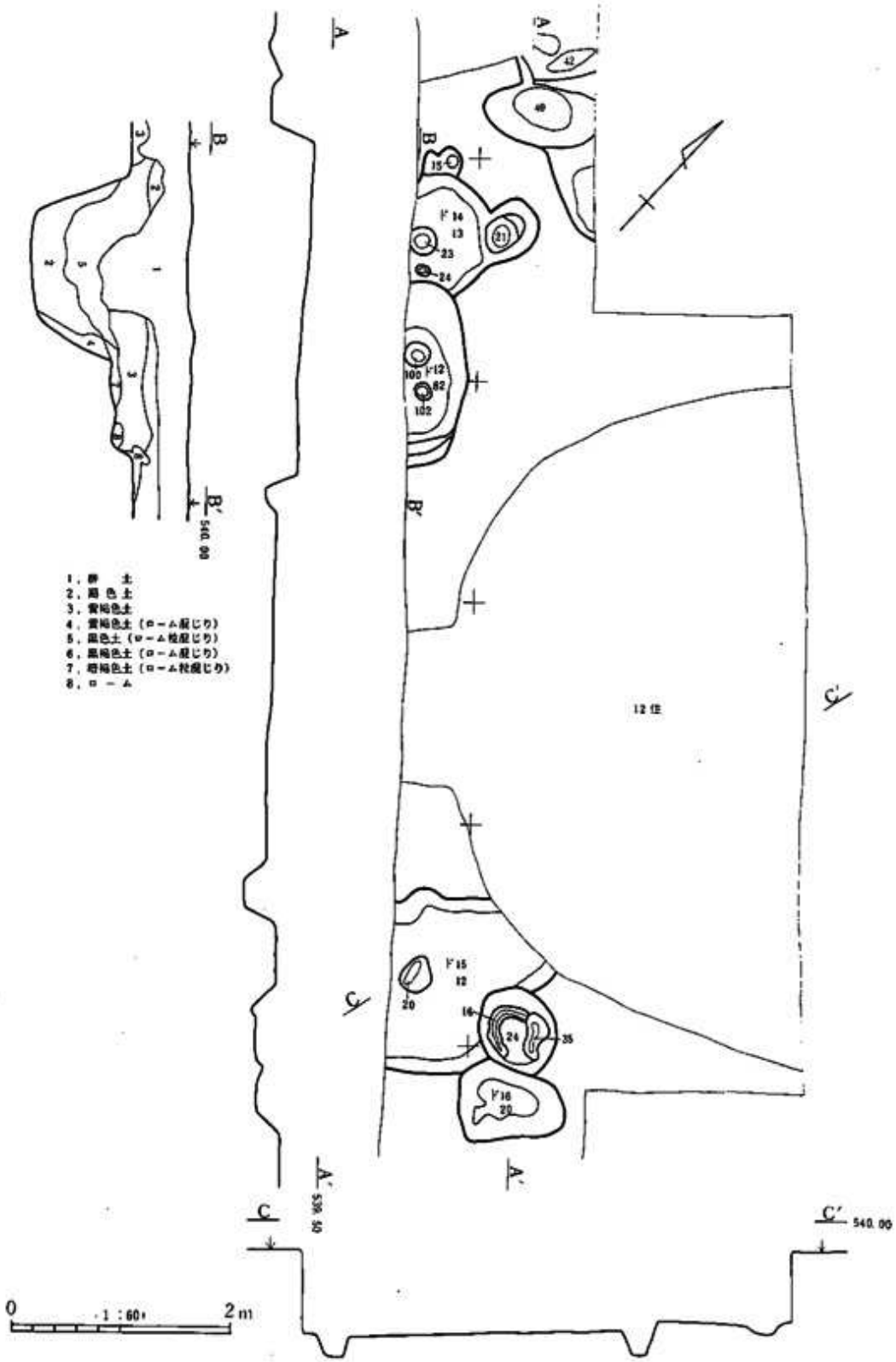
第Ⅱ地区南東部で検出し、北東側が未調査となる。ピットと重複する。形態は不明だが、北西・南東方向の長さが120 cmで、深さは82cmを測る。断面形は途中で稜をもつ逆台形を呈する。

縄文土器の平出３Ａ片２点（７－１・２）と無文土器片３点がある。

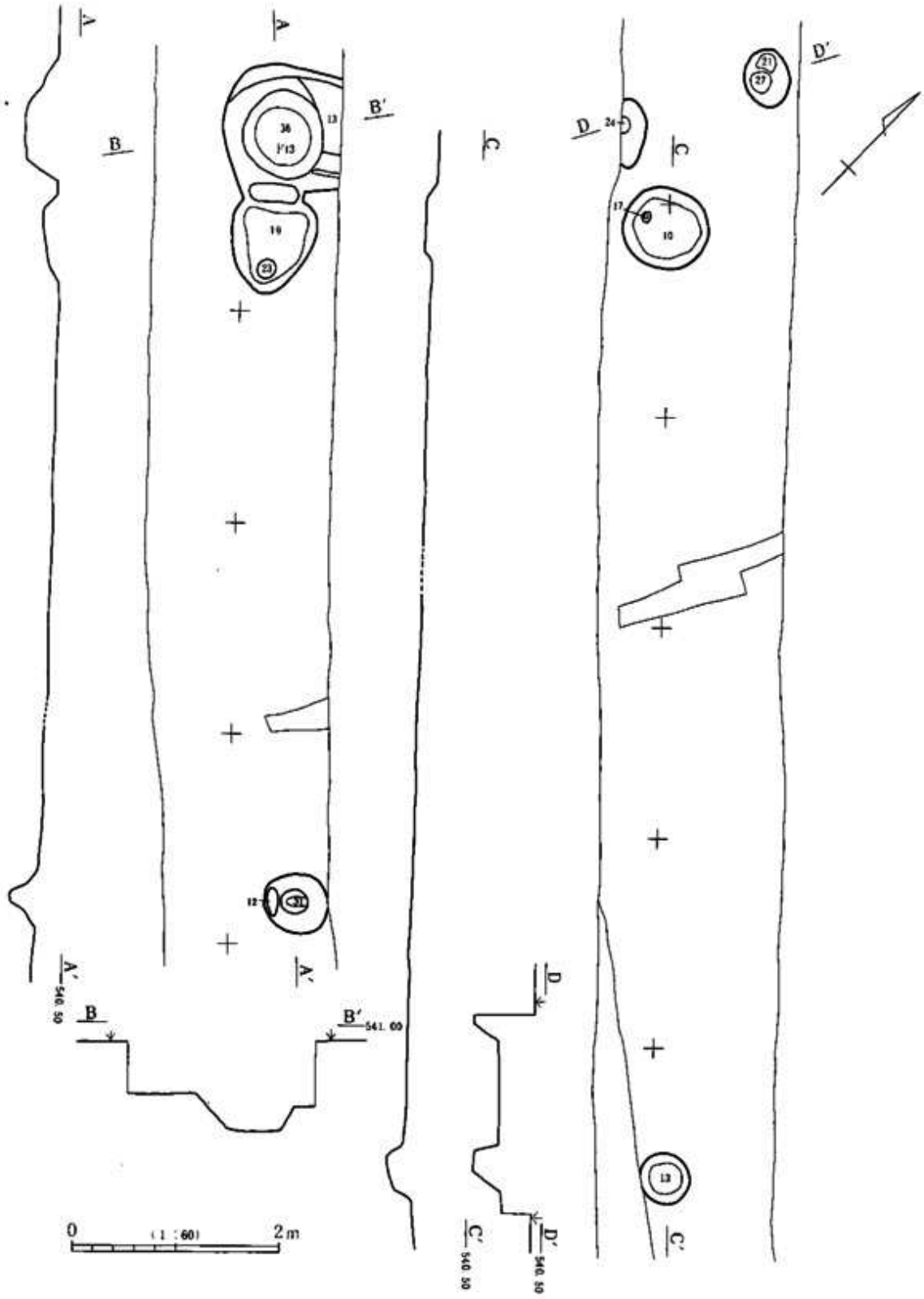
③ 土坑14（挿図23）

第Ⅱ地区南東部で検出し、南西側が用地外で半分強を調査した。土坑12と重複する。直径110cmの円形を呈すると考えられ、深さは13cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、底部に２個の小ピットをもつ。

縄文時代の無文土器片２点がある。



挿図23　第Ⅱ地区　土坑12・14・15・16、ピット



挿図24　第Ⅱ地区　土坑13、ピット

④　土坑15（挿図23）

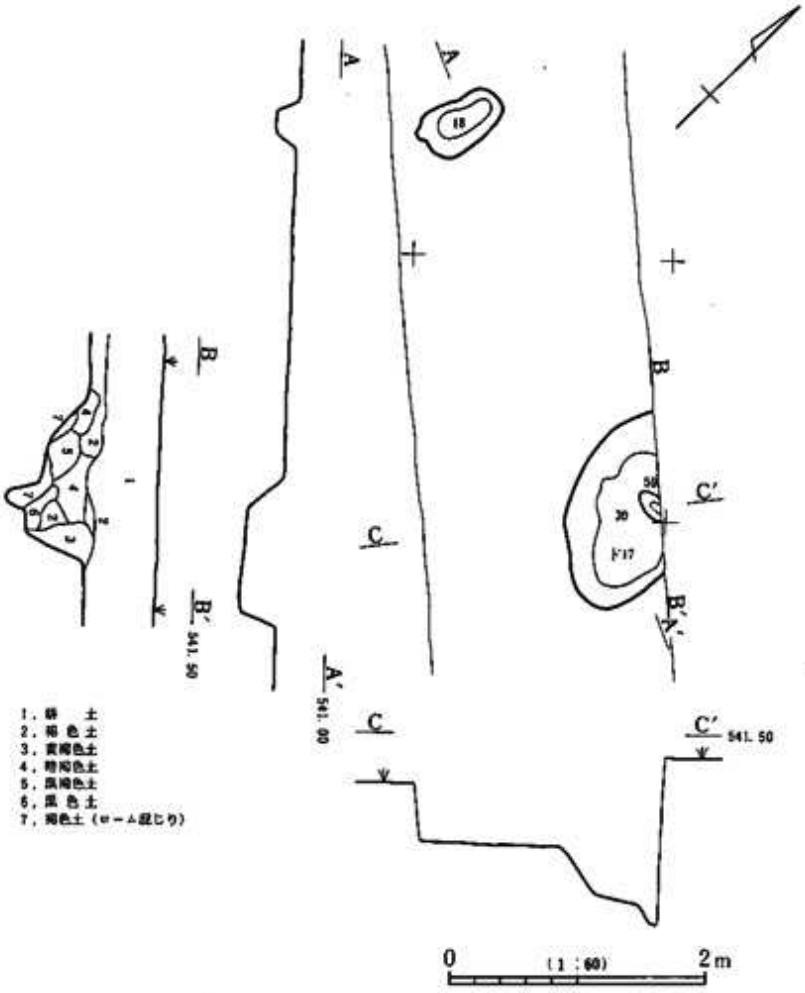
第Ⅱ地区南東部で検出し、南西側が用地外で半分強を調査した。縄文時代中期の12号住居址とピットに切られる。北西・南東方向の長さが165 cmの不定形を呈し、深さは12cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。

縄文時代の無文土器片３点がある。

⑤　土坑16（挿図23、第７図）

第Ⅱ地区南東部で検出し、ピットと重複する。96×70cmの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

縄文時代中期中葉の土器片が１点（７－３）ある。



挿図25　第Ⅱ地区　土坑17、ピット

⑥　土坑17（挿図25）

第Ⅱ地区溝址５北側で検出し、北東側が未調査で、半分強を調査した。北西・南東方向の長さが155 cmの楕円形を呈すると考えられ、深さは30cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底部に小ピットをもつ。覆土はブロック状の堆積をなす。

出土遺物はない。

⑦　土坑18（挿図26）

第Ⅱ地区中央部で検出し、大半は未調査で、南側の一部を調査したのみである。東西方向が145 cmの土坑で、深さは41cmを測る。断面形は西側で段をもち、この箇所の深さは12cmを測る。

出土遺物は縄文時代の無文土器片が14点・平出３Ａ片１点、黒曜石剥片１点がある。

⑧　土坑19（挿図27）

第Ⅱ地区中央部で検出し、全体を調査した。160 ×120 cmの楕円形を呈し、深さは42cmを測る。断面形は稜をもつ逆台形を呈する。

出土遺物はない。

本址南東側の点線で示した箇所でたたき状の床面が認められた。竪穴住居址かとも考えて調査したが、遺物も検出されず、性格などがつかめなかったので、範囲のみを示しておく。

⑨　土坑20（挿図27）

第Ⅱ地区北西側で検出し、北東側が未調査で、半分強を調査した。東西方向が76cmの円形もしくは楕円形を呈すると考えられ、深さは51cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は縄文時代の無文土器片２点がある。

⑩　土坑21（挿図28、第７図）

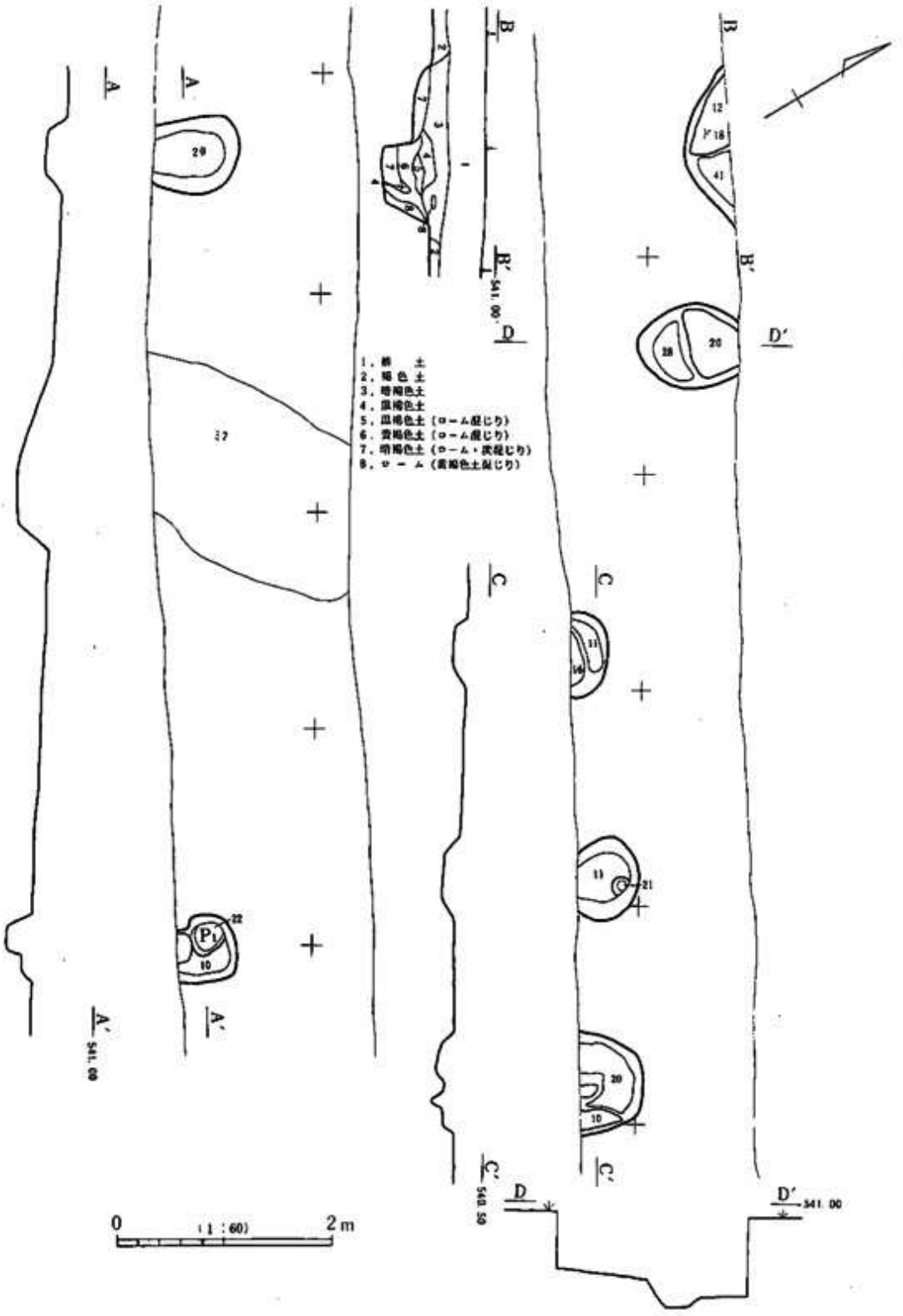
第Ⅱ地区北西側で検出し、北東側が未調査で、半分強を調査した。南側でピットと重複する。東西方向が104 cmの楕円形を呈すると考えられ、深さは10cmを測る。断面形は不定形を呈し、西側底に小ピットをもつ。

出土遺物は縄文時代中期中葉前半土器片１点（７－４）がある。

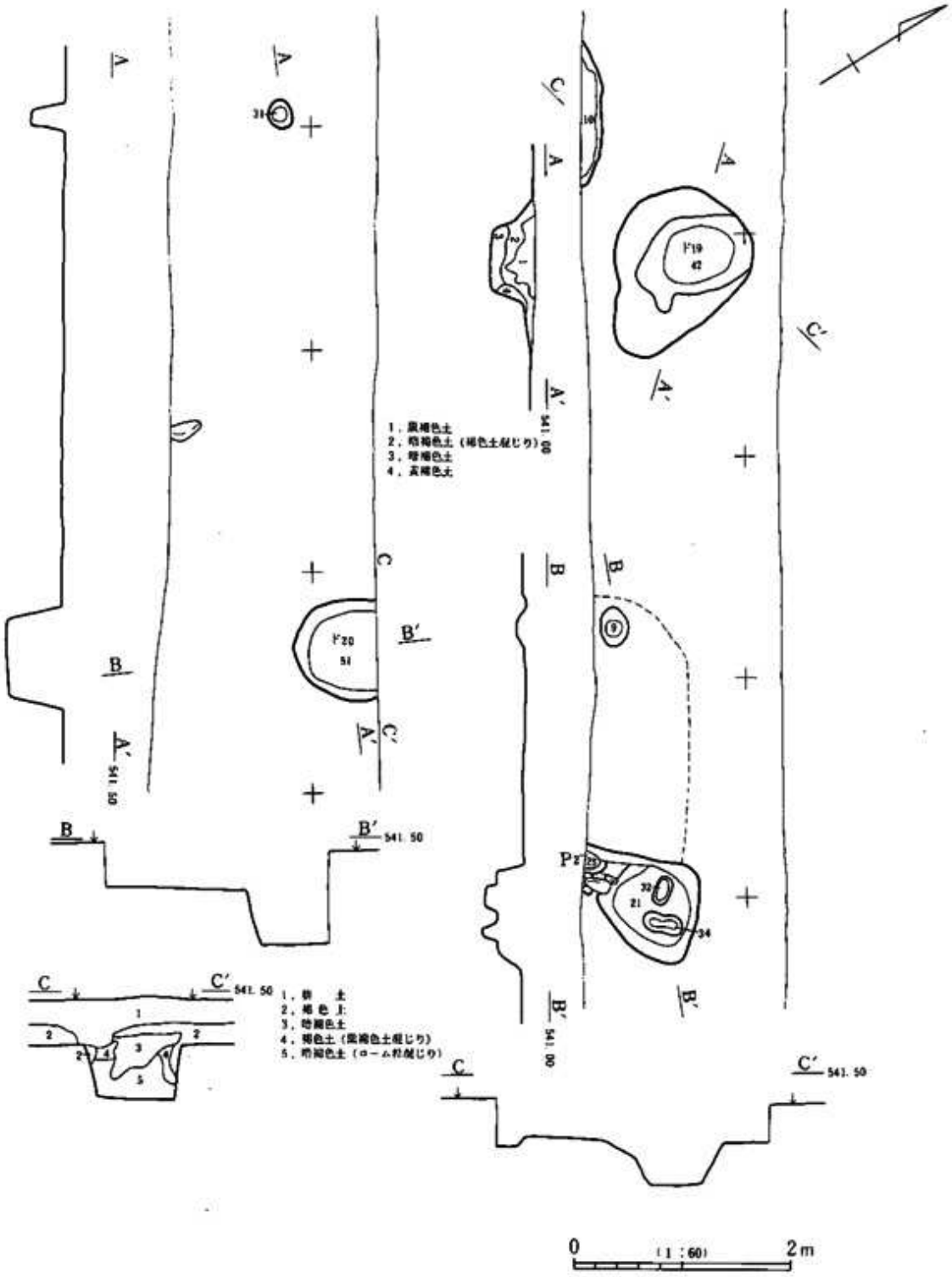
⑪　土坑22（挿図28、第７・10図）

第Ⅱ地区北西側で検出し、南東側が未調査で、半分程を調査した。土坑23と重複する。東西方向が100 cmの楕円形を呈すると考えられ、深さは68cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底部に２個の小ピットをもつ。

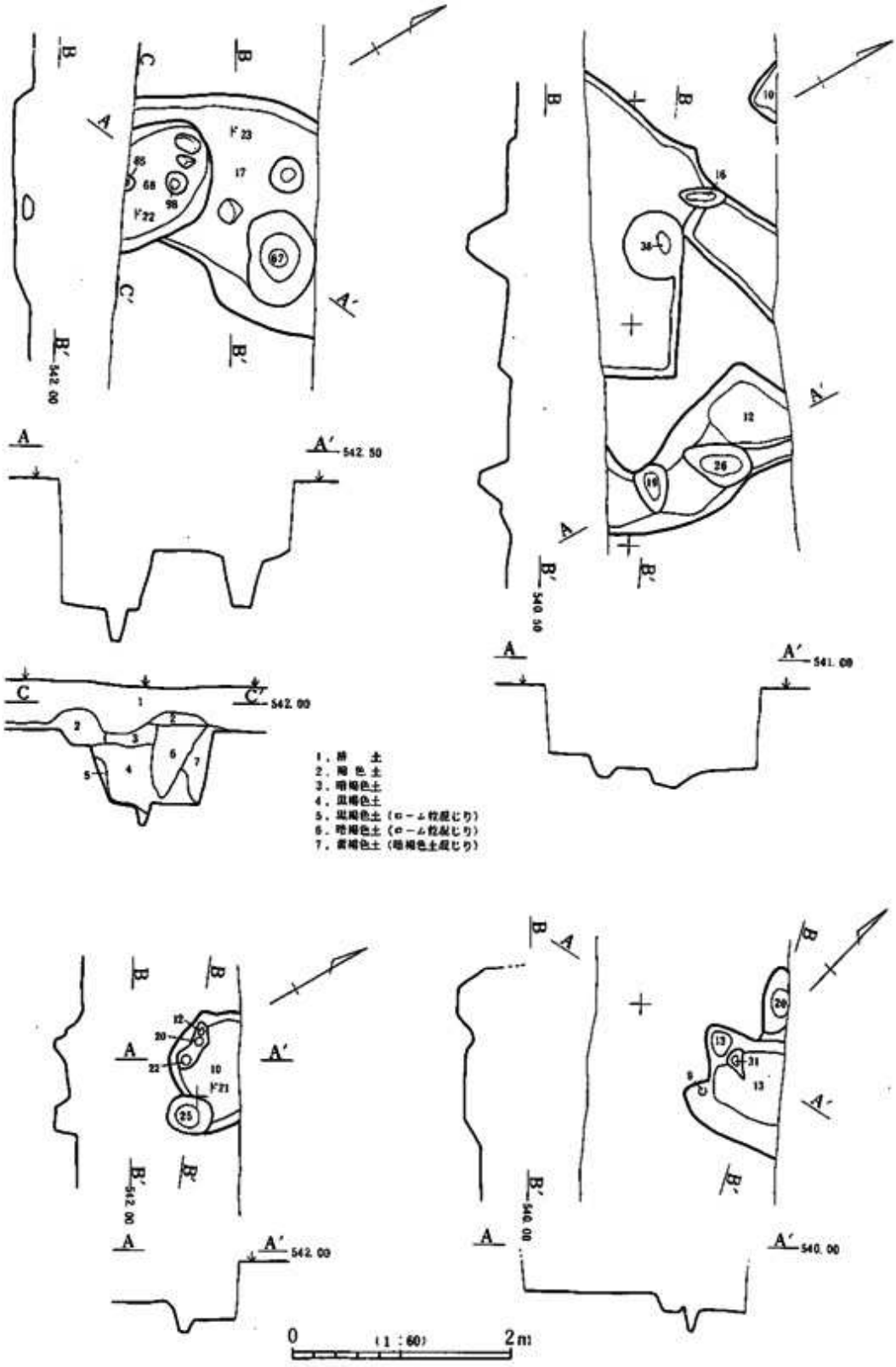
出土遺物は打製石鏃１点（10－４）のほかは土坑23と混同したので、土坑23で述べる。



挿図26　第Ⅱ地区　土坑18、ピット



挿図27　第Ⅱ地区　土坑19・20、ピット



挿図28　第Ⅱ地区　土坑21・22・23、ピット

⑫ 土坑23（挿図28、第7・10図）

第Ⅱ地区北西側で検出し、両側が未調査で、全体形は明らかでない。土坑22と重複する。北西・南東方向が190 cm呈し、深さは17cmを測る。断面形は皿状を呈し、底部に2個のピットをもつ。

出土遺物は土坑22と混同して、縄文時代中期初頭の土器片1点（7－7）・中期後半の土器片（7－5・6）・同無文土器片6点、石器打製石斧（10－5・6）・粗製石匙（10－7）がある。

⑬ 土坑24（挿図29、第7図）

第Ⅱ地区中央部で検出し、全体を調査した。縄文時代の13号住居址を切る。314 ×148 cmの長方形を呈し、深さは42～32cmを測る。断面形は箱状を呈し、東隅に袋状のピットをもつ。覆土は黒色土を主体としており、弥生時代のものに似かよっている。

出土遺物は、縄文時代中期中葉の土器片1点（7－10）・平出3A片1点（7－9）・無文土器片1点、黒曜石剥片1点がある。

⑭ 土坑25（挿図29、第7図）

第Ⅱ地区中央部で検出し、全体を調査した。縄文時代の13号住居址を切る。172 ×112 cmの楕円形を呈し、深さは37cmを測る。断面形は逆台形を呈し、東側上層に4個の礫がある。

出土遺物は、縄文時代中期中葉の土器片が2点（7－11・12）ある。

⑮ 土坑26（挿図29、第7図）

第Ⅱ中央部で検出し、東側が未調査で、全体形は明らかでない。北西・南東方向が122 cm呈し、深さは41cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は、縄文時代中期後半の土器片1点（7－13）・同無文土器片3点、石器打製石斧・剥片がある。

⑯ 土坑27（挿図29、第10図）

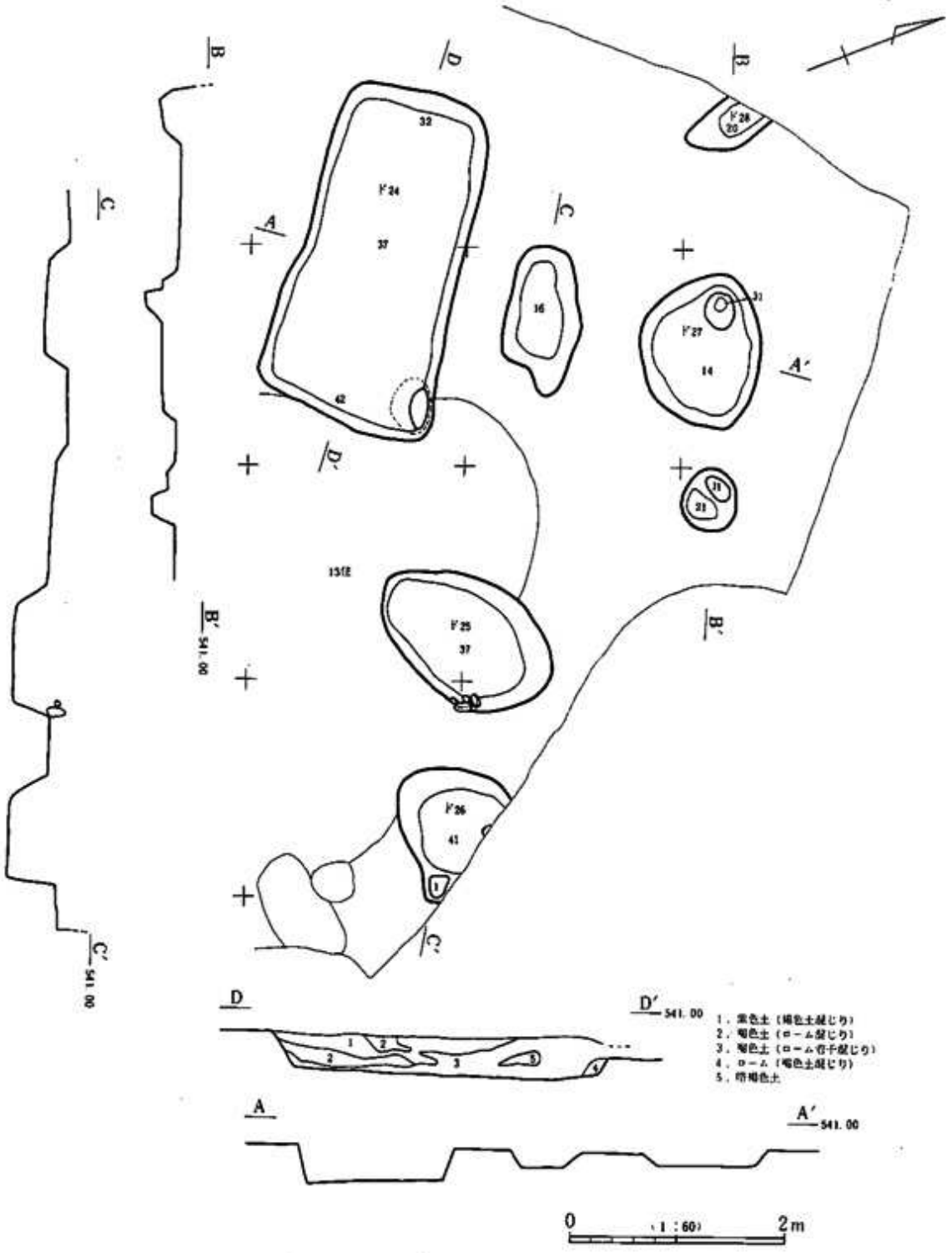
第Ⅱ地区中央部で検出し、全体を調査した。136 ×114 cmの楕円形を呈し、深さは14cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底部北西側に小ピットをもつ。

出土遺物はない。

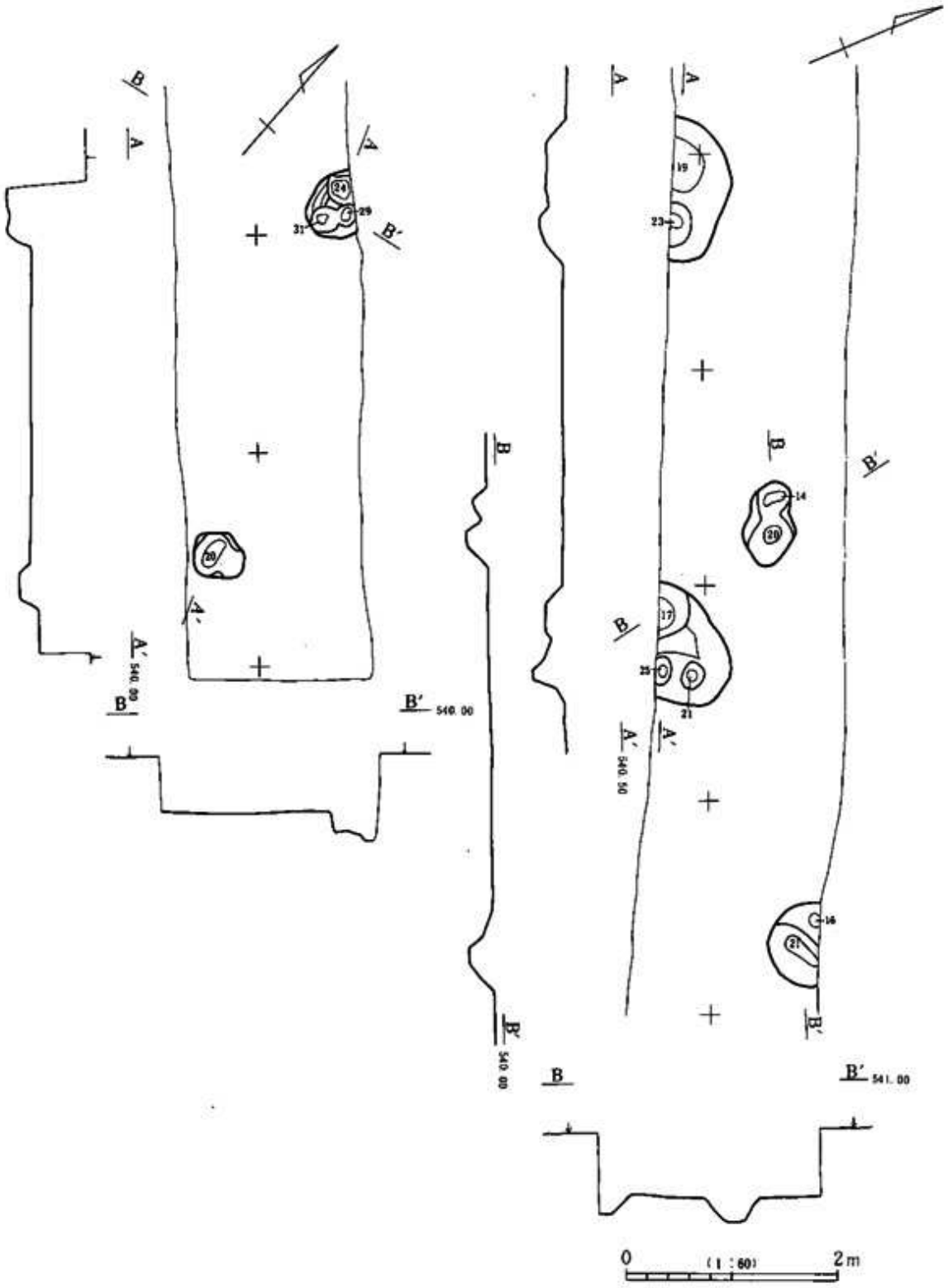
⑰ 土坑28（挿図29、第10図）

第Ⅱ中央部で検出し、北側が未調査で、全体形は明らかでない。東西方向が44cmを呈し、深さは20cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は、縄文時代の無文土器片1点、石器横刃型石器1点（10－8）・磨製石斧1点（10－9）がある。



挿図29　第Ⅱ地区　土坑24・25・26・27・28、ピット



挿図30　第Ⅱ地区　ピット

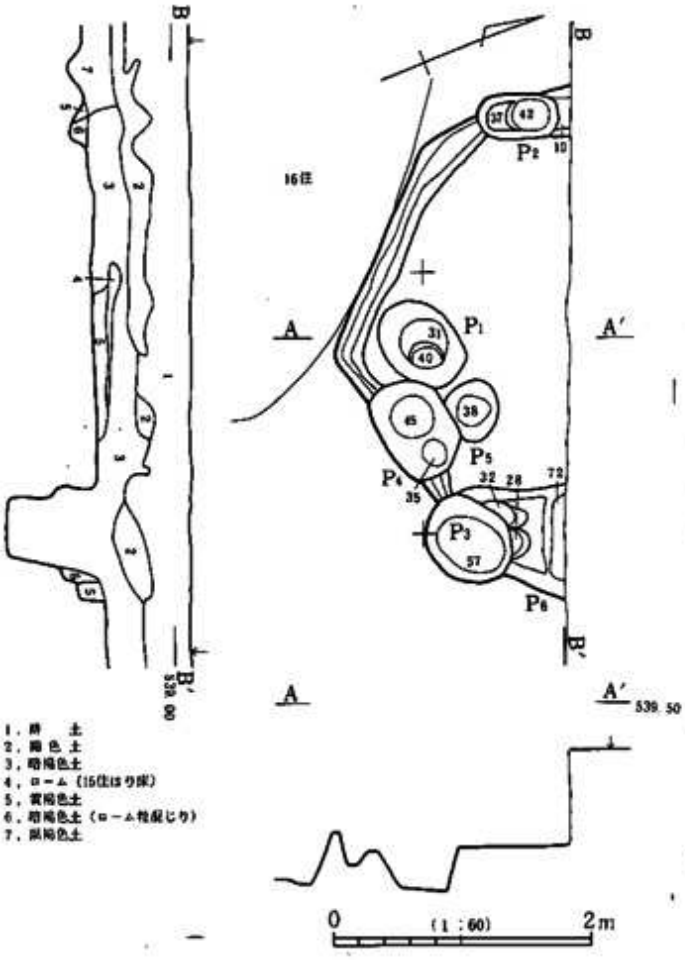
3．第Ⅲ地区

遺跡範囲の南東側中央を東西方向に縦断する耕作道を対象とし、長さ約160 m・幅4.0 ～2.6 mを調査した。本調査区の南東側は緩やかな傾斜をもち、南東先端部へ続いている。遺構は傾斜の肩の部分までで集中して検出した。

1）竪穴住居址

① 14号住居址（挿図31、第10・11・12・30図）

第Ⅲ地区西側で検出し、縄文時代の15号・16号住居址に切られる。北側が未調査で、全体の1／3 程を調査した。直径４ｍくらいの円形もしくは楕円形を呈すると考えられる竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は14～11cmで、ほぼ垂直の壁面をなす。周溝は確認箇所の壁下を全周し、幅30～14cm・深さ23～７cmを測る。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はＰ1 が相当すると考えられるが、全体形が明らかでないので明確でない。ほかの柱穴の役割も同様である。その中で、Ｐ3 は壁外にかかり、本址に付属しない可能性が高い。



挿図31　第Ⅲ地区　14号住居址

出土遺物は土器・石器があり、出土量は多くないが、床面上からの出土が主体となる。土器は深鉢で、口縁部に楕円区画文が施されるもの（11－２～４）、無文のもの（11－５・８）、隆帯に櫛描の条線文が施されるもの（11－１）などがあり、時期の新しい結節縄文のもの（12－３）もある。石器は、打製石斧（30－１～３）・横刃型石器（30－４）粗製石匙（30－５・６）・打製石錘（30－７・８）がある。

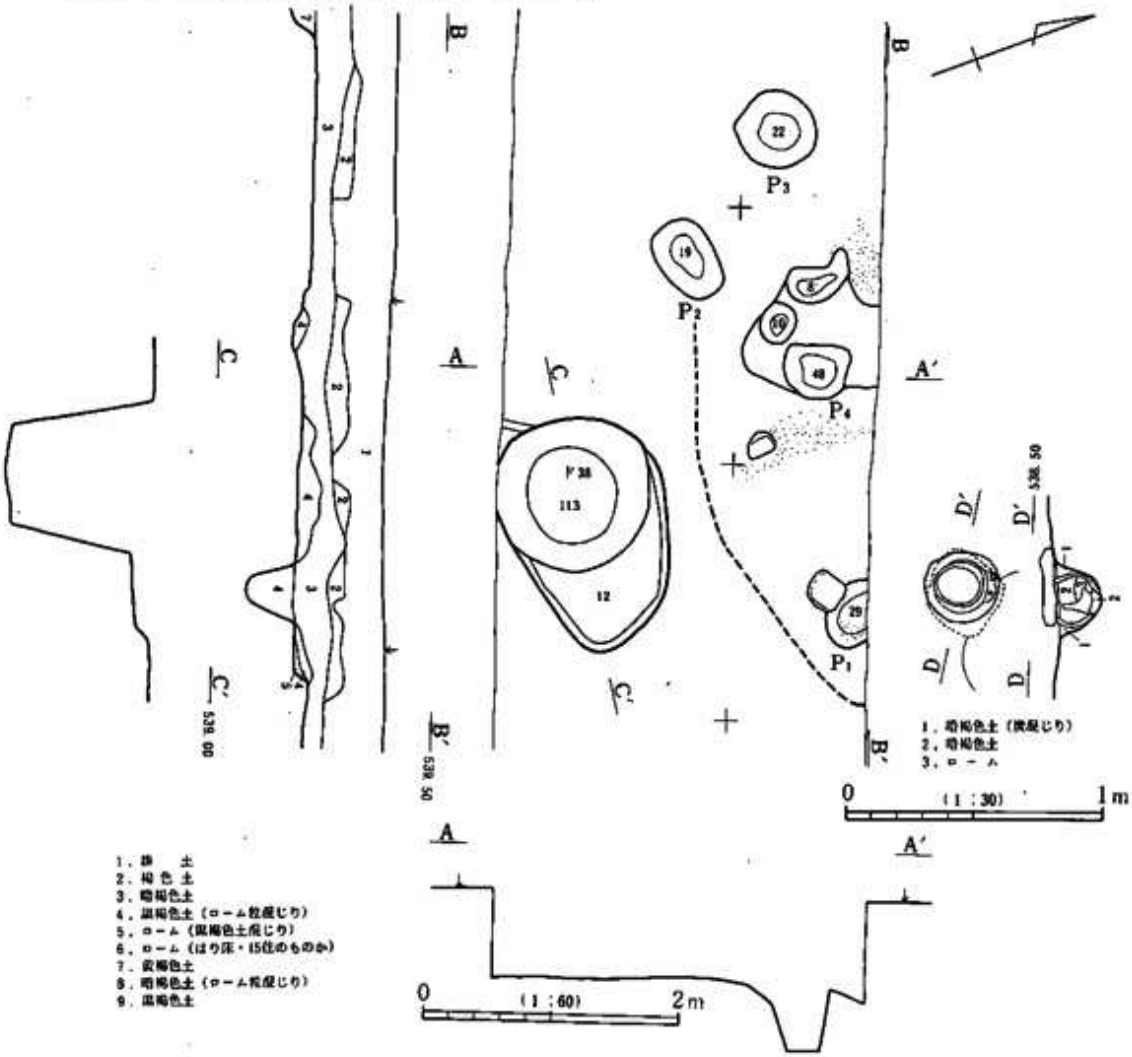
出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。

② 15号住居址（挿図32、第12・30図）

第Ⅲ地区西側で検出し、縄文時代中期の16号住居址を切る。北側が未調査で、全体の1／3 程を調査した。遺構検出面から浅いため床面の範囲のみをつかんだだけで、平面形の把握は不十分であり、規模も不明である。壁も把握できなかったが、土層の断面調査では10cmほどを確認した。床面は部分的にたたき状に堅く良好であり、16号住居址覆土上にはり床を認めた。柱穴はP1 ～P3 があるが、役割など明確でない。P1 西脇に石蓋付の埋甕があり、脚台部を欠く台付甕を埋め、中にはほかの個体の台付甕脚台部入っていた。

出土遺物は極めて少なく、唐草文が施される埋甕の台付甕（12－4）とその中に入っていた脚台部（12－5）・結節縄文の深鉢（12－6）、埋甕の石蓋に転用した石皿（30－9）がある。

出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。



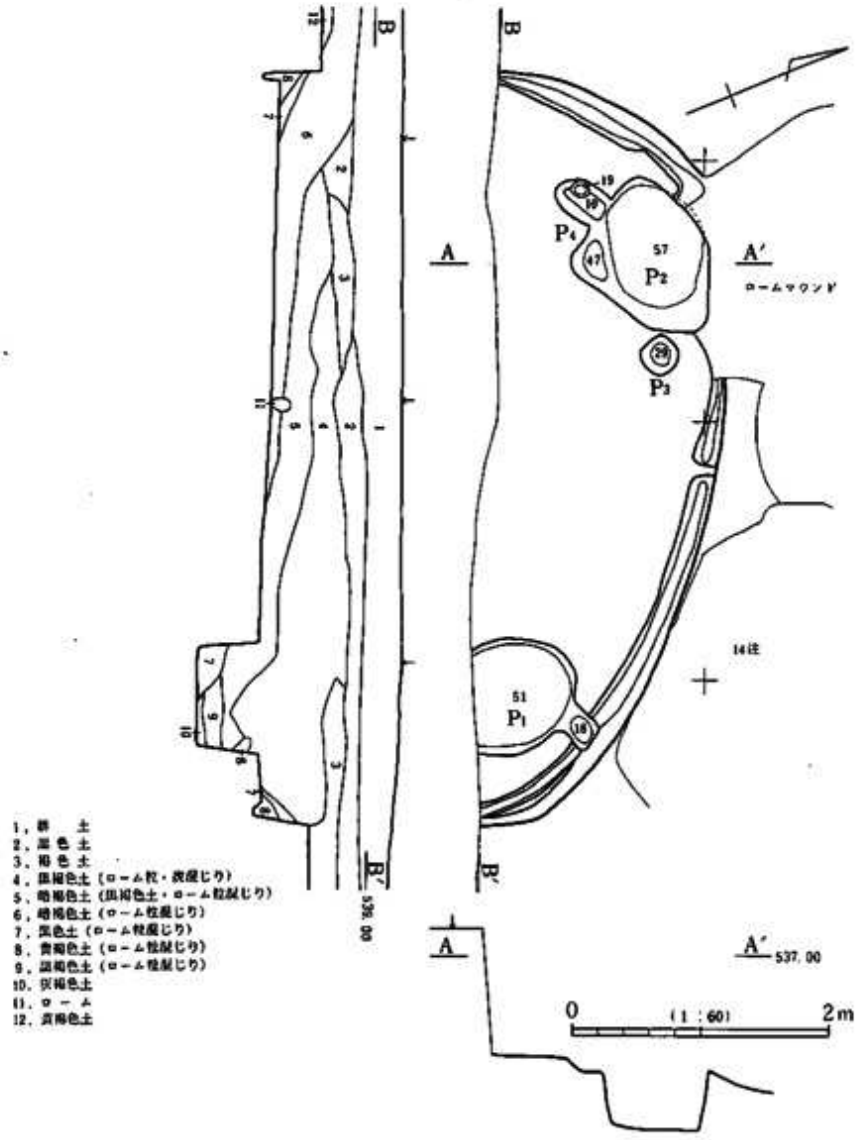
挿図32　第Ⅲ地区　15号住居址、土坑38

③ 16号住居址（挿図33、第12・13・30・31図）

第Ⅲ地区西側で検出し、縄文時代の14号住居址を切り、ロームマウンドに切られる。南側が未調査で、全体の1／3 程を調査した。円形もしくは楕円形と考えられる竪穴住居址で、規模・主軸方向とも不明である。壁高は５～25cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦でたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1 ・P2 である。

出土遺物は少なく、土器・石器がある。土器は深鉢で、口縁部に太い沈線をもち、縄文が施文されるもの（12－７・８、13－１～６）に限られ、石器は、横刃型石器（30－10・11）・粗製石匙（31－１）・磨製石斧（31－３）・同未成品（31－２）・擦痕のある礫（31－４）がある。

・出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。



挿図33　第Ⅲ地区　16号住居址

④　17号住居址（挿図34、第13～15・31・32・53・54図）

第Ⅲ地区中央部で検出し、弥生時代の方形周溝墓1に切られる。両側が未調査で、全体の1／3程を調査した。東西方向が5.2 mの円形もしくは楕円形と考えられる竪穴住居址で、主軸方向はN40° Eと推定される。壁高は25～16cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が確認でき、西壁下は幅40cm前後・深さ19～14cmを測り、やや幅広い。東壁下では二重となり、外側のものは床面より6～9cm高い位置にある。外側は幅24～10cm・深さ13～8cm、内側は幅20cm前後・深さ30～20cmを測る。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1～P3が相当すると考えられるが、全体形が明らかでないので明確でない。壁と重複するP6とその北西にある土坑状の穴は、本址に付属するものではないと考えられる。炉址は、中央北東寄りに位置する石組炉で、135×115 cmの方形を呈し、内部が凹んで焼土が認められた。炉石は抜かれて残っていないが、置かれた位置は溝状の落ち込みで確認できる。周溝の状況などから建て替えられていると推定される。

出土遺物は土器・石器・土製品があり、14－1はP2に入っていた。土器は深鉢で、口縁部が内側に曲がる器形が多く（13－7・8、14－6～10）、ほかに口縁端部が外反するもの（14－4・5・11）がある。文様は、沈線と縄文が施されるものが主体を占める。石器は、打製石斧（31－5～11）・横刃型石器（31－13～18、32－1～3）・粗製石匙（32－4・5）・磨製石斧（32－6）・敲打器（32－7）・凹石（32－8）・すり石（32－9・10）・石皿（32－11）・打製石錘（32－12・13）・打製石鏃（54－4）・ピエス・エスキーユ（54－5）がある。土製品は、土製円盤（53－3）・土玉（53－4）である。

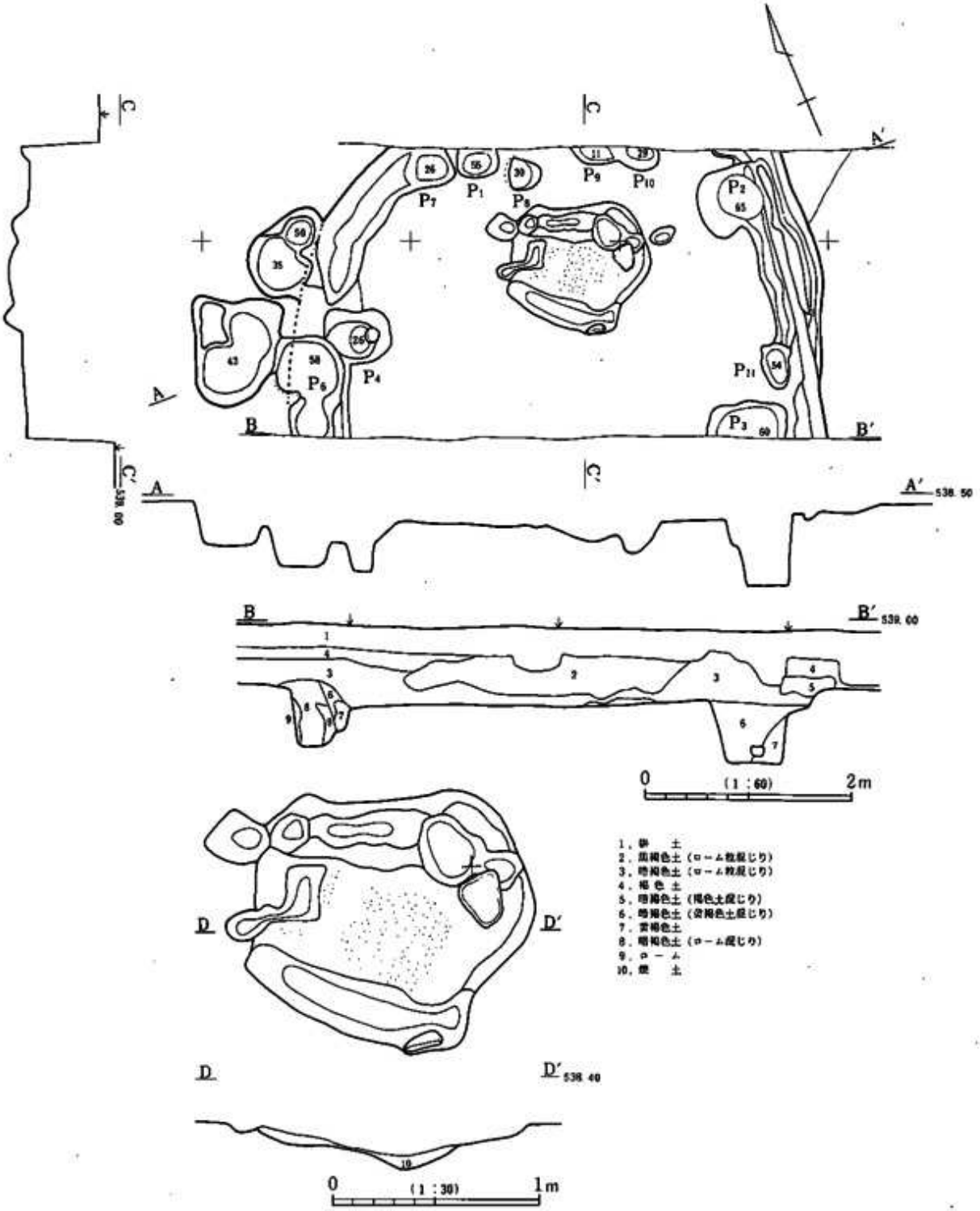
出土遺物から縄文時代中期後半の初頭に位置づけられる。

⑤　18号住居址（挿図35、第16～22・33～35・53・54図）

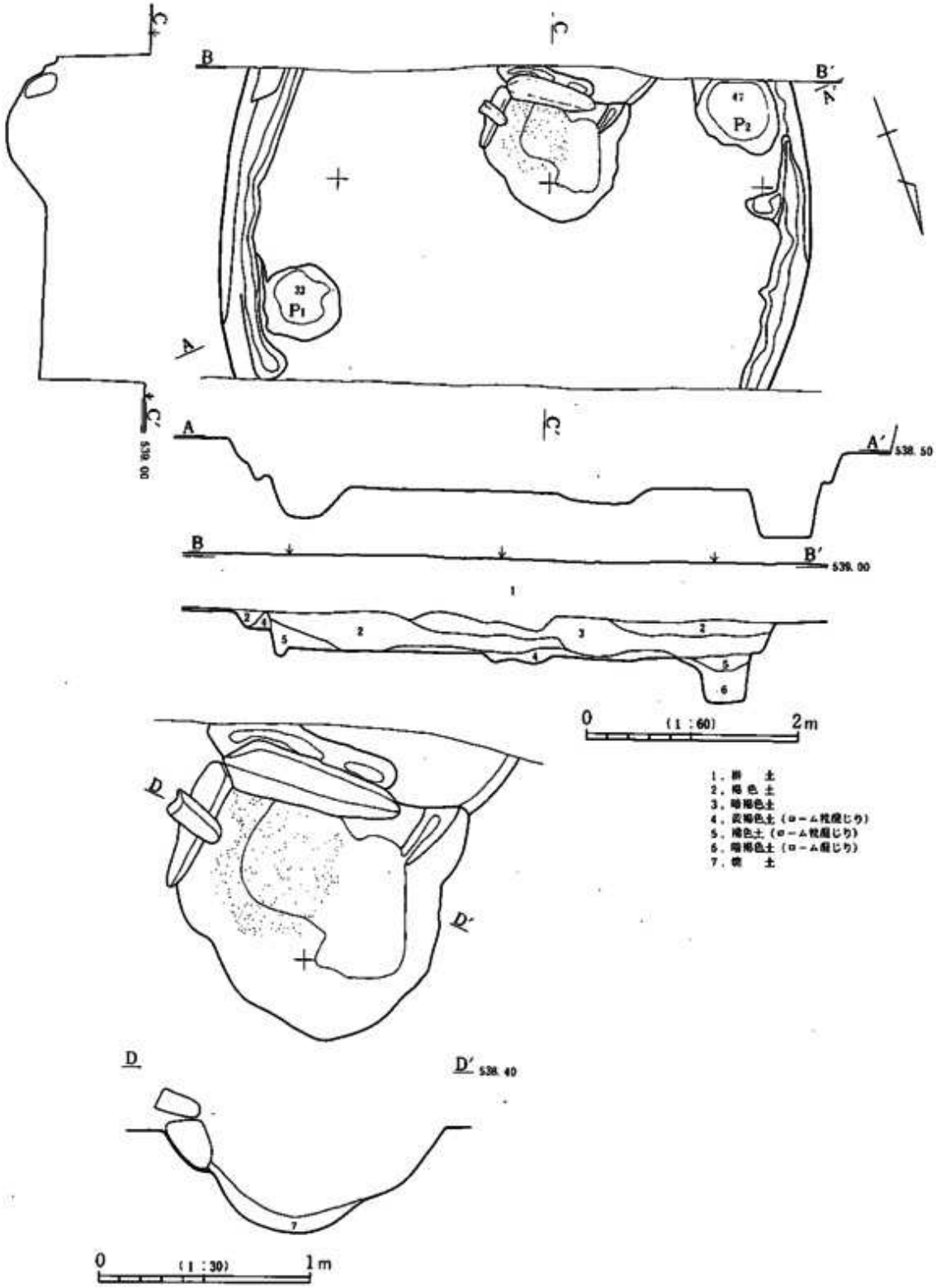
第Ⅲ地区西側で検出し、弥生時代の方形周溝墓2に切られる。両側が未調査で、全体の1／3程を調査した。東西方向が5.6 mの円形もしくは楕円形と考えられる竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は36～27cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が確認でき、西壁下は幅24～10cm・深さ9～6cm、東壁下は幅24～16cm・深さ13～4cmを測る。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1・P2である。炉址は中央南西寄りに位置する切りゴタツ状の石組炉で、135×120 cmの方形を呈し、内部が深く凹んで焼土が認められた。炉石は北東・北西側が抜かれて残っていない。南東側の炉石の上から石棒が出土した。

出土遺物は土器・石器・土製品・石製品があり、覆土中に多量に廃棄されていた。土器は、沈線と縄文で施文される深鉢がほとんどであり、台付甕（18－7～9）もみられる。石器は、打製石斧（33－1～18）・横刃型石器（33－19、34－1～21）・打製石錘（35－1・2）・使用痕のある礫（35－3～6）・使用痕のある剥片（54－6・7・9・10）・スクレイパー（54－8）がある。土製品は土製円盤（53－5・6）、石製品は石棒（35－7）である。

出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。



挿図34　第Ⅲ地区　17号住居址



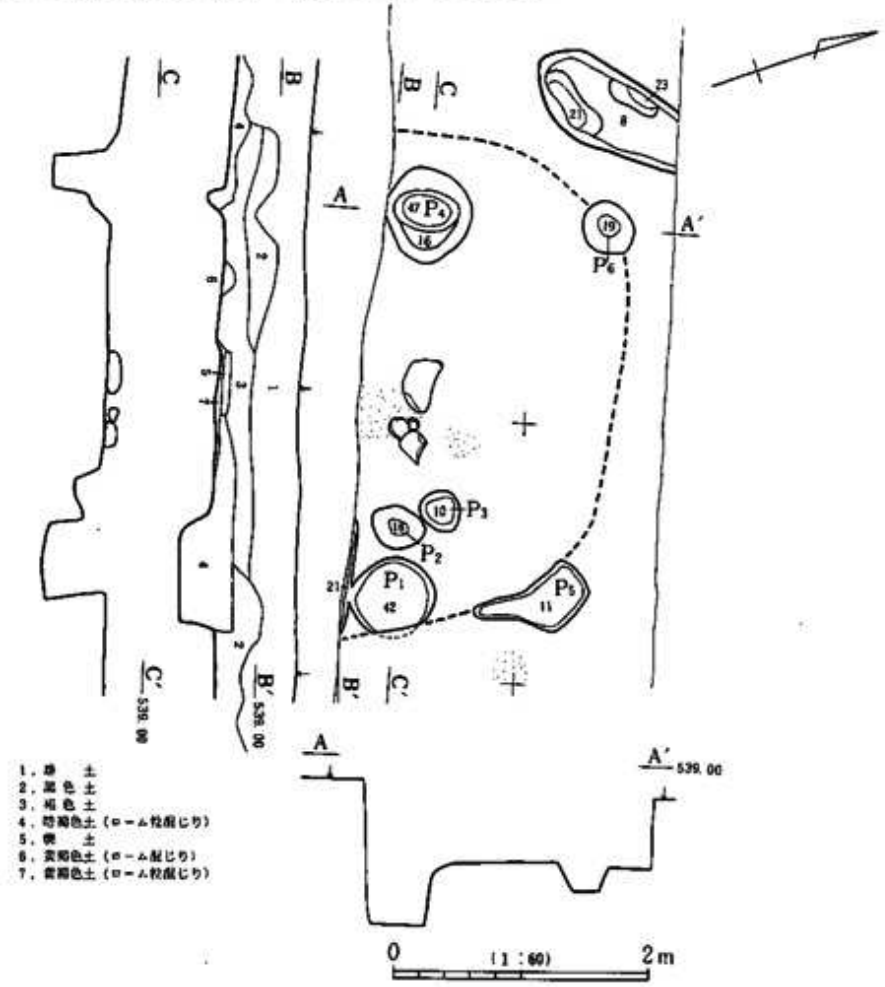
挿図35　第Ⅲ地区　18号住居址

⑥　19号住居址（挿図36、第22・23・35・36図）

第Ⅲ地区西端で検出し、南側が未調査で、全体の半分程を調査した。平面形の把握が床面による推定であるが、東西方向が4.0 mの円形もしくは楕円形の竪穴住居址である。壁は確認できなかった。床面は全体に軟弱で不良である。主柱穴はP1 ・P4 で、後者は二段の堀込みをなす。中央部に10～40cmの石４個があり、周辺に焼土が認められ、中で南側のものは厚くこの箇所が炉址の可能性が強い。

出土遺物は土器・石器があり、あまり多くない。土器は、沈線と縄文で施文される深鉢が多く（22－11・13～18）、隆帯にキザミがつけられる破片（22－10）は珍しい。ほかに、台付甕の脚台部（22－12）があり、結節縄文の破片は（23－１・２）本址より新しい。石器は、打製石斧（35－８～12・36－１）・横刃型石器（36－２～４）磨製石斧未成品（36－５）・すり石兼用の凹石（36－６）・すり石（36－７）・礫（36－８）がある。

出土遺物から縄文時代中期後半の初頭に位置づけられる。



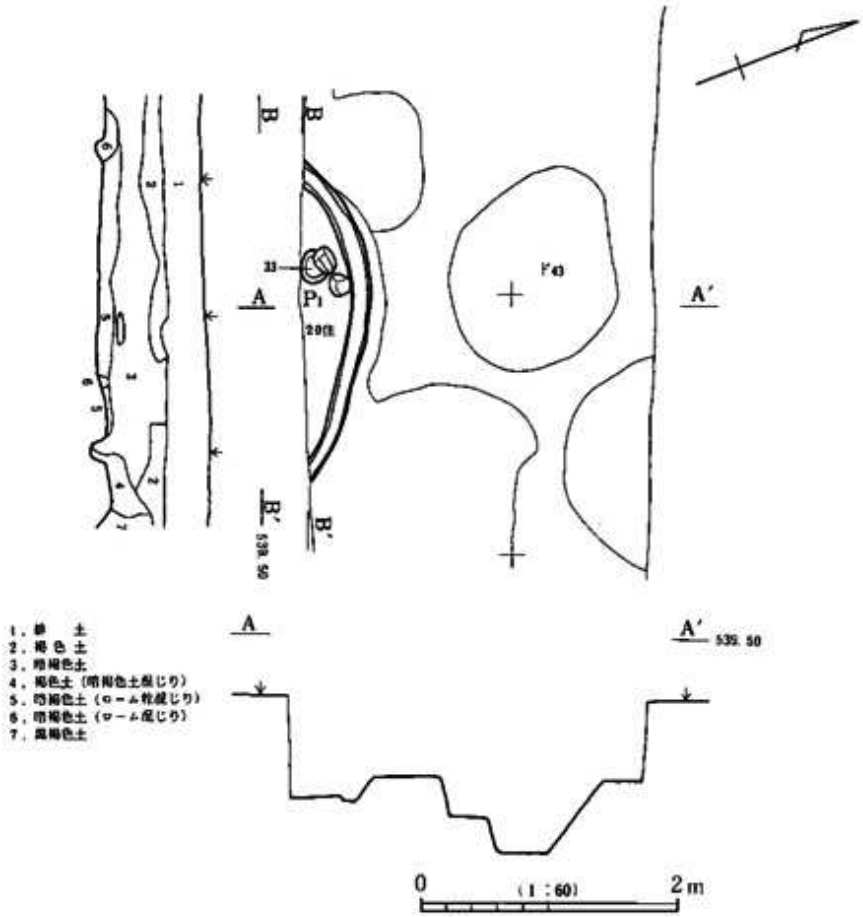
挿図36　第Ⅲ地区　19号住居址

⑦　20号住居址（挿図37、第23図）

第Ⅲ地区西側で検出した。南側大部分が用地外にかかり、北側の一部を調査した竪穴住居址で、規模・平面形・主軸方向とも不明である。壁高は15cm前後で、やや緩やかな壁面をなす。周溝が壁下に確認され、幅18～10cm・深さ８～４cmを測る。柱穴は上面に石をもつＰ1 がある。

出土遺物は、深鉢片２点（23－３・４）がある。

出土遺物が少なく詳細な位置づけは不可能であるが、縄文時代中期後半と考えられる。



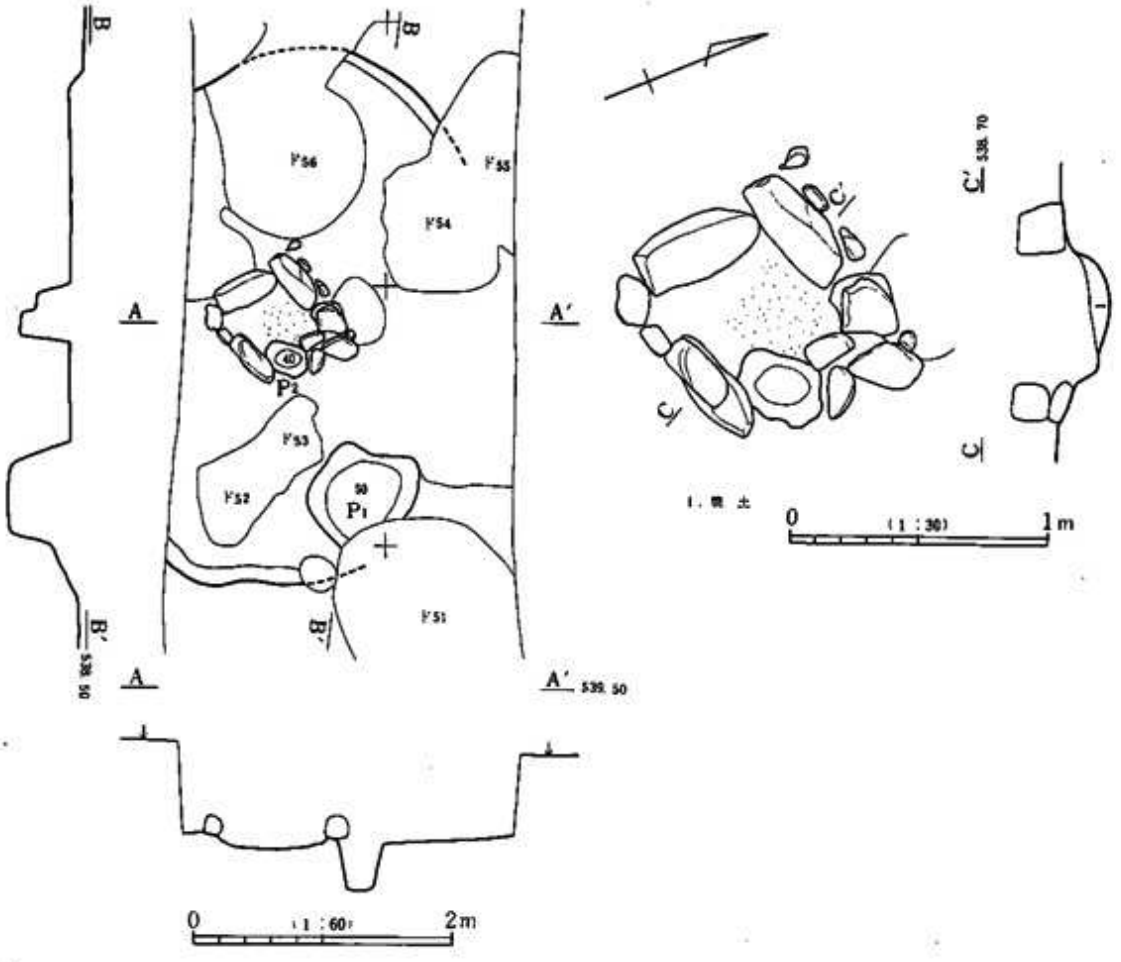
挿図37　第Ⅲ地区　20号住居址

⑧　21号住居址（挿図38、第23・36・37図）

第Ⅲ地区西側で検出し、縄文時代の土坑51～56と重複し、大半が本址を切っていると判断できた。東西方向が3.9 mの円形もしくは楕円形と考えられる竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁は北西側・南東側の一部を確認し、壁高は12～６cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は柔らかく不良である。主柱穴はＰ1 で、ほかは確認できなかった。炉址は中央位置する石組炉で、50～12cmの石12個を用いて95×90cmの方形に組み、内部がわずかに凹んで焼土が認められた。炉址東隅にあるＰ2 は本址より新しく、石を抜いていると考えられる。

出土遺物は土器・石器があり、遺構の把握が十分でなかったので、一部に混入遺物があると考えられる。土器は深鉢で、櫛状工具による施文を地文として沈線が施されるものが主体で（23－5～18）、結節縄文が施される破片（24－4～7）などがある。石器は、打製石斧（36－9～13、37－1～3）・横刃型石器（37－4～6）がある。

出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。



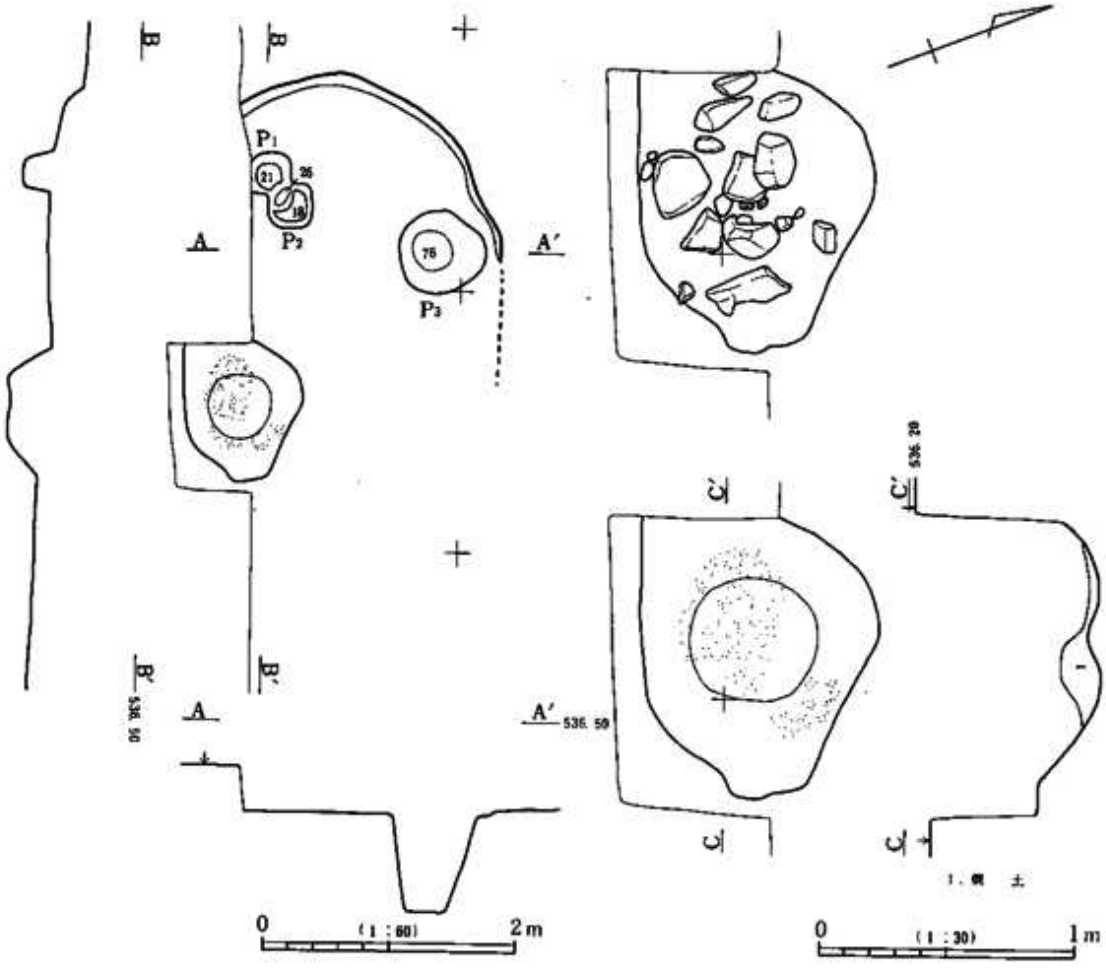
挿図38　第Ⅲ地区　21号住居址

⑨　22号住居址（挿図39、第24・37図）

第Ⅲ地区中央部の南東側に傾斜が始まる部分で検出した。南側は用地外であるが、炉址は地権者の了承を得て拡張した。傾斜にかかるため西壁のみを把握しただけで、規模・平面形・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は確認部分で15～6㎝を測り、緩やかな壁面をなす。床面は柔らかく不良であり、東側では確認できなかった。主柱穴はP3で、P1・P2は用途不明である。炉址は中央に位置すると考えられ、110×92㎝楕円形を呈し、内部が凹んで焼土が認められた。上層に35～10㎝の石20個があり、住居址廃棄時に石を入れたものと考えられる。

出土遺物は少なく、縄文を地文として沈線が施される深鉢（24－8）・沈線が施文される破片（24－9～13）、石器横刃型石器（37－6）が出土したのみである。

出土遺物から縄文時代中期終末に位置づけられる。



挿図39　第Ⅲ地区　22号住居址

2）方形周溝墓

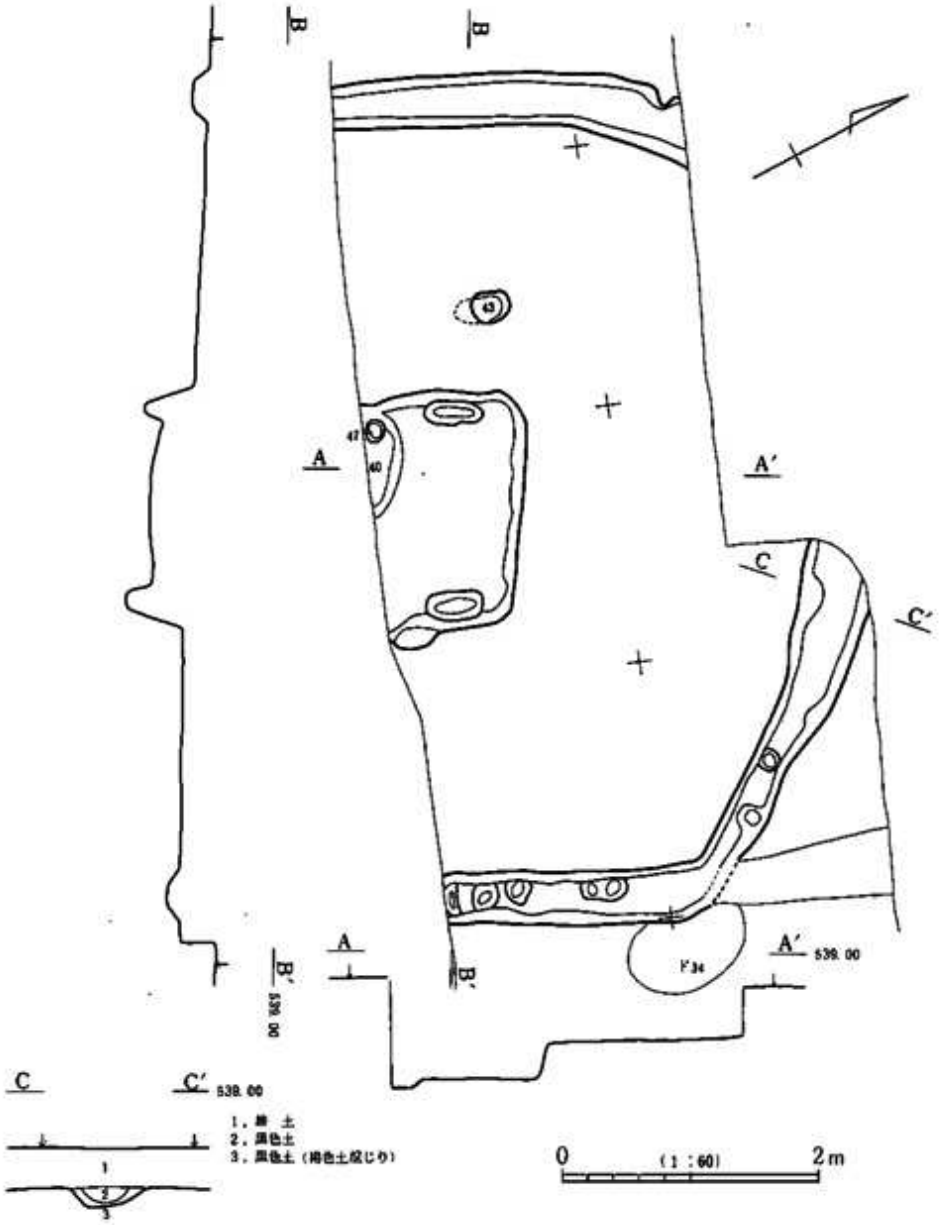
①　方形周溝墓1（挿図40、第37図）

第Ⅲ地区中央部で検出し、縄文時代の17号住居址を切る。全体の半分ほどを調査した。東西方向が6.5mを測る方形周溝墓で、主軸方向はN61°Wと推定される。周溝の形態は南側に未調査部が存在するため確定できないが、方形を呈すると考えられる。周溝は、幅55～32cm・深さ14～8cmを測り、全体として浅く幅が狭い。断面形は逆台形をなす。土橋部は確認できなかった。主体部は周溝内中央に位置すると考えられ、東西方向が186cmの長方形を呈し、断面形は逆台形をなす。東西の壁下に長さ45cmの小穴があり、小口痕と考えられる。底部は中央がわずかに凹む船

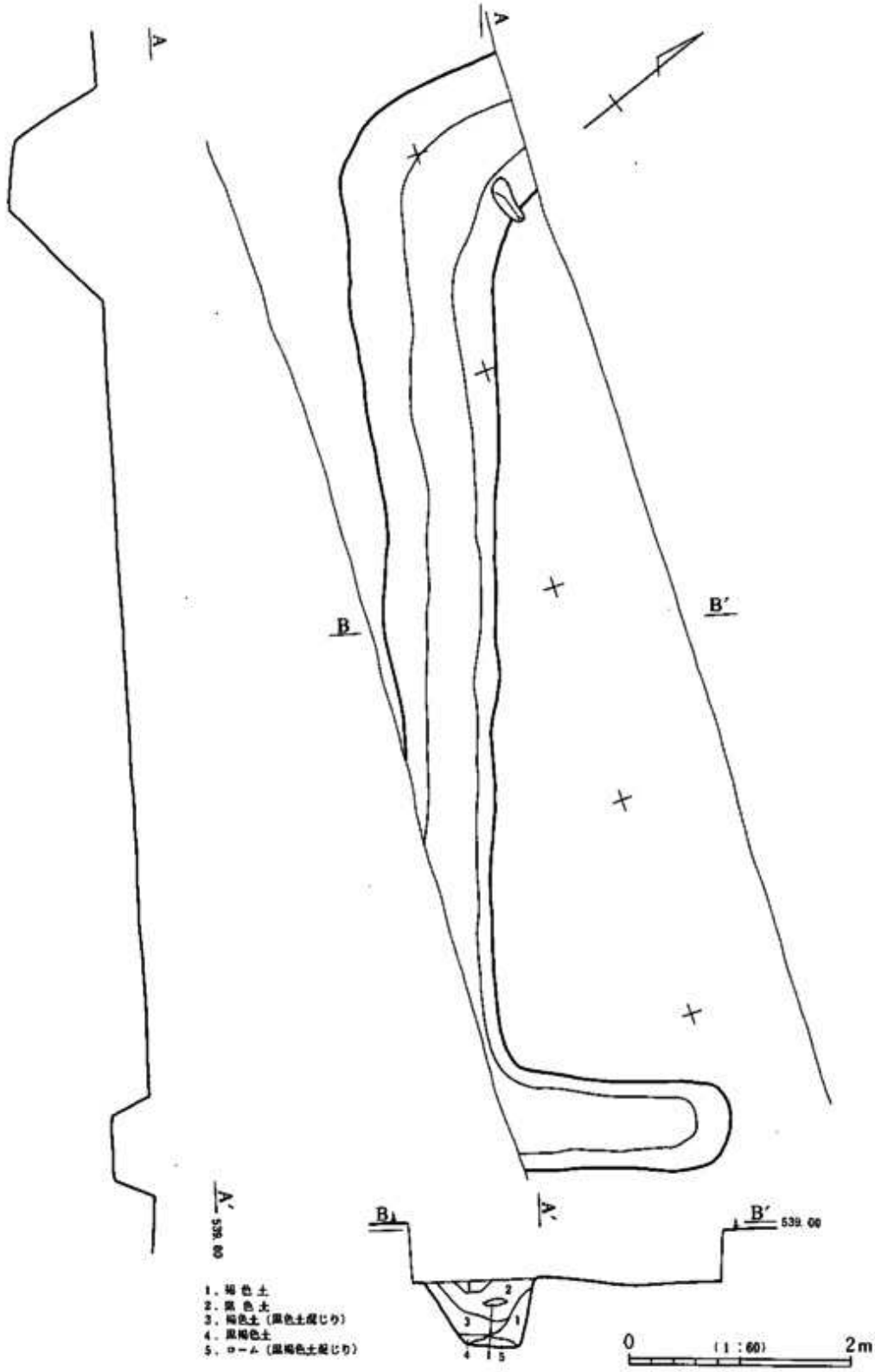
状をなす。これらにより、組合わせ式の箱型木棺が埋葬施設として使われたと判断できた。なお、主体部南西の穴は本址より古い時期の遺構である。

遺物は周溝内や主体部から縄文土器と石器が出土した。縄文土器は省略し、石器打製石斧（37－7）・横刃型石器（37－8）・打製石錘（37－9）を掲載したが、縄文時代からの紛込み遺物と推定される。

出土遺物から時期判断はできないが、遺構の状況から弥生時代後期に位置づくと考えられる。



挿図40　第Ⅲ地区　方形周溝墓1



挿図41　第Ⅲ地区　方形周溝墓２

② 方形周溝墓２（挿図41、第37図）

第Ⅲ地区西側で検出し、縄文時代の18号住居址、土坑29・49を切る。南側の周溝と南東・南西の隅を調査し、北側の大半が用地外にかかる。東西方向が9.8 mの方形周溝墓で、主軸方向はN 53° Wと推定される。覆土は黒色土を主体としており、容易に検出できた。周溝は幅155 ～58cm・深さ87～26cmを測り、断面形は逆台形を呈する。東側でとぎれる箇所があり、土橋部と考えられる。主体部は未調査の北側に存在すると推定される。

遺物は周溝内から縄文土器と石器が出土した。縄文土器は省略し、石器打製石斧（37－10～12）・横刃型石器（37－13）を掲載したが、縄文時代からの紛込み遺物と推定される。

遺構の状況から弥生時代後期に位置づけられる。

3）溝　址

① 溝址８（挿図42）

第Ⅲ地区西側の19号住居址東側で検出した。長さ2.7 mを調査し、両側に延長する。方向はN 42° Eを示す。幅は50～40cm・深さ15～11cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は暗褐色土を主体としており、砂などはなく、水が流れた形跡は認められなかった。

出土遺物は縄文土器片29点がある。

方形周溝墓周溝とは覆土に違いがあり、縄文時代に位置づく可能性が強いが、断定できない。

4）土　坑

① 土坑29（挿図43、第25・26・37図）

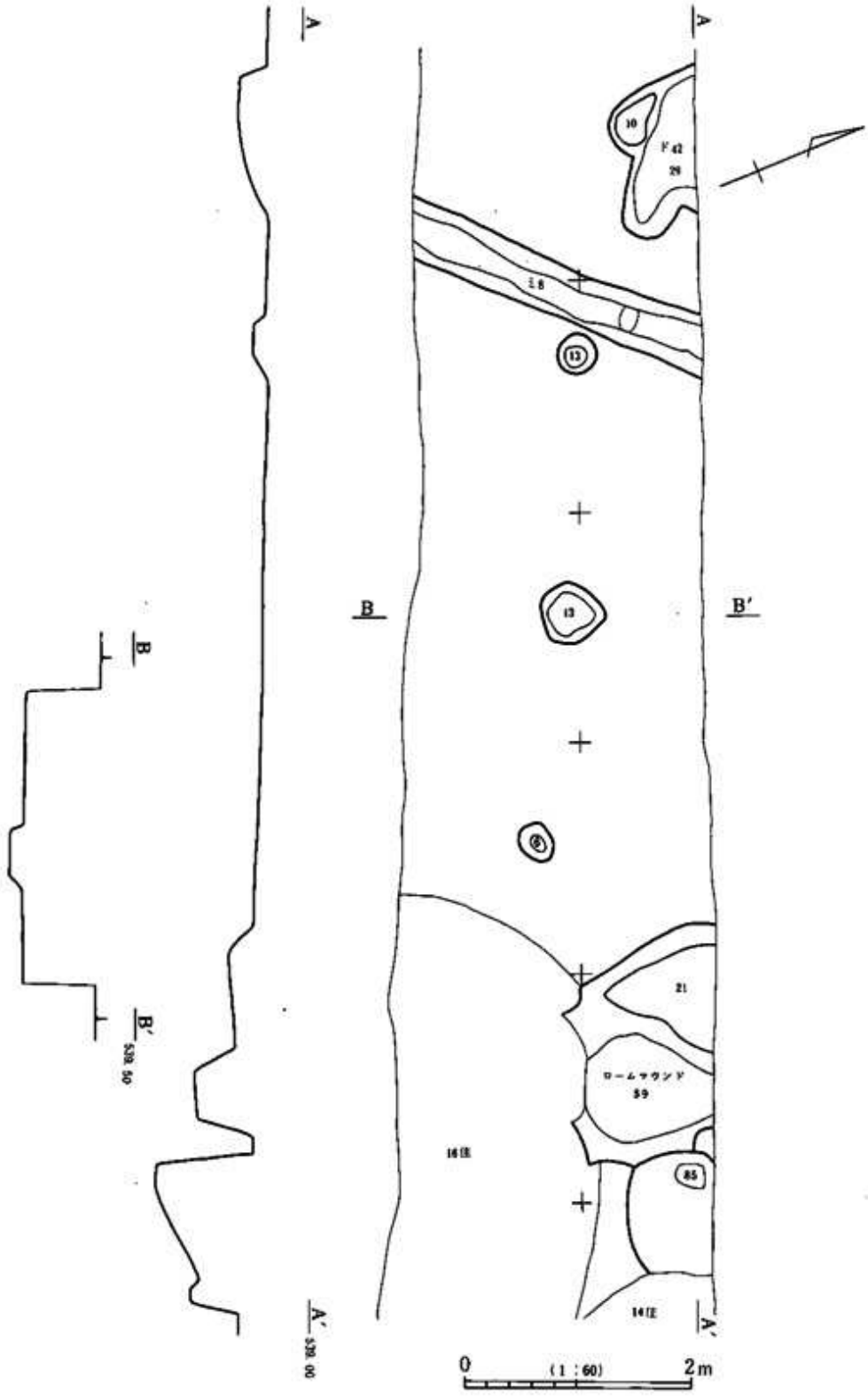
第Ⅲ地区西側で検出し、北側が未調査となる。弥生時代の方形周溝墓２に切られる。全体形は不明だが、東西方向の長さが210 cmで、深さは69cmを測る。断面形は箱状を呈し、東側で段をもつ。底部は平坦である。

出土遺物は多く、主に覆土中層に包含されていた。土器・石器があり、土器は結節縄文が施される深鉢で（25－１～14、26－１・２）、石器は打製石斧（37－14～16）・打製石錘（37－17）・敲打器（37－18）である。

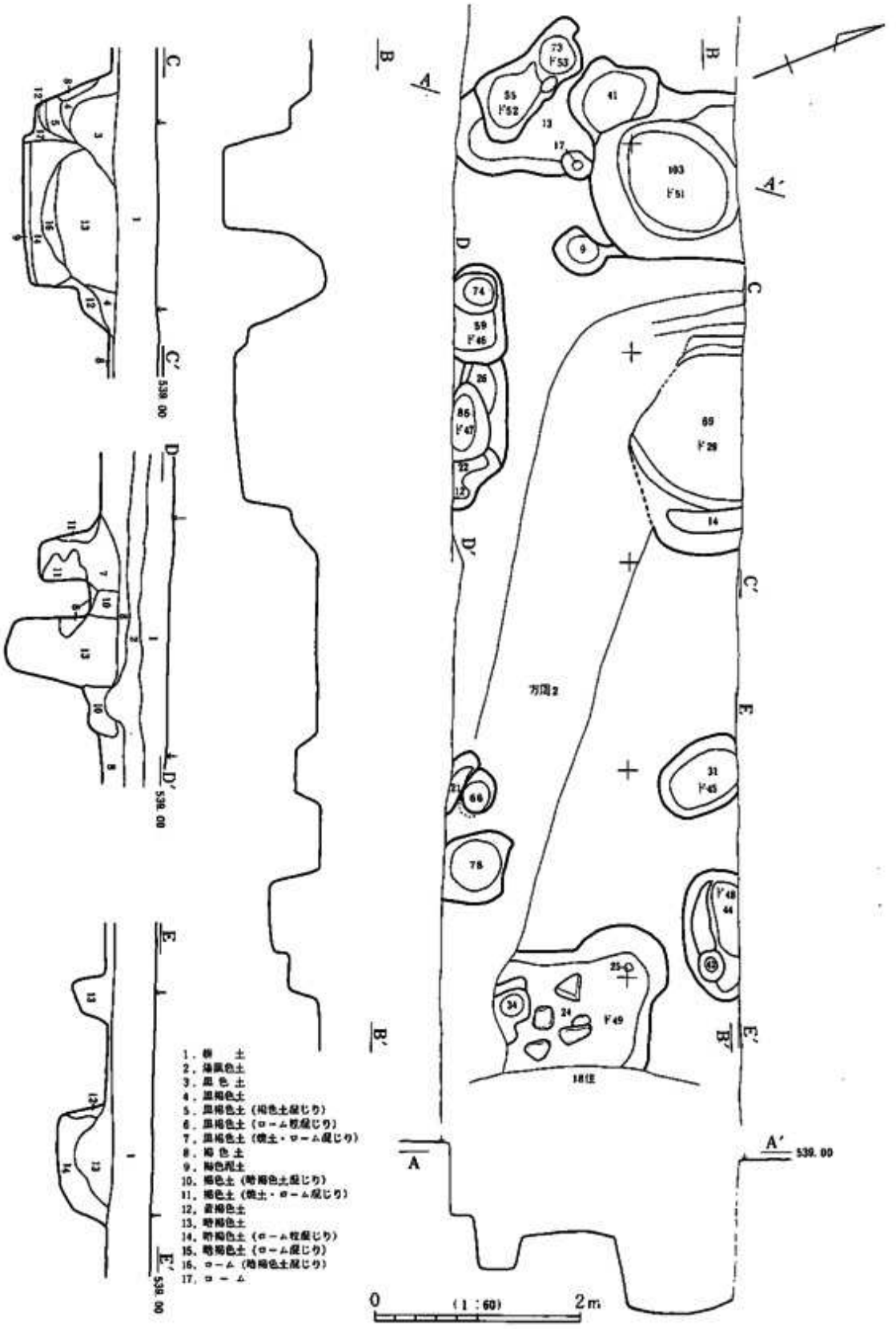
② 土坑30（挿図44、第26・37図）

第Ⅲ地区中央部で検出し、全体を調査した。直径94cmの円形を呈し、深さは49cmを測る。断面形は箱状を呈し、底部は平坦である。

出土遺物は土器・石器があり、土器は結節縄文が施される深鉢（26－３）のほか、無文の破片が６点出土した。石器は打製石斧（37－19）と礫が１点ずつある。



挿図42　第Ⅲ地区　溝址８、土坑42、ロームマウンド



挿図43　第Ⅲ地区　土坑29、45・46・47・48・49・51・52・53、ピット

③ 土坑31（挿図44、第26図）

第Ⅲ地区中央部で検出し、全体を調査した。74×74cmの丸みを帯びた三角形を呈し、深さは19cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片3点・無文の破片6点があり、前者1点（26－4）を拓影で示した。石器は打製石斧が1点ある。

④ 土坑32（挿図44、第26・37・54図）

第Ⅲ地区中央部で検出し、北側が用地外となる。形態は不明だが、東西方向が190 cmを測り、深さは32cmを測る。断面形は逆台形を呈し、南側に段をもつ。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期中葉の破片3点・同後半の破片20点・無文の破片44点があり、前2者4点（26－5～8）を拓影で示した。石器は、打製石斧1点・横刃型石器1点（37－20）・スクレイパー1点（54－8）がある。

⑤ 土坑33（挿図44、第26・38図）

第Ⅲ地区中央部で検出し、全体を調査した。204 ×160 cmの不定形を呈し、深さは21cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底部に6個の小穴をもつ。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片4点・無文の破片14点があり、前者1点（26－9）を拓影で示した。石器は、打製石斧1点（38－1）・打製石錘1点（38－2）がある。

⑥ 土坑34（挿図44、第26・37図）

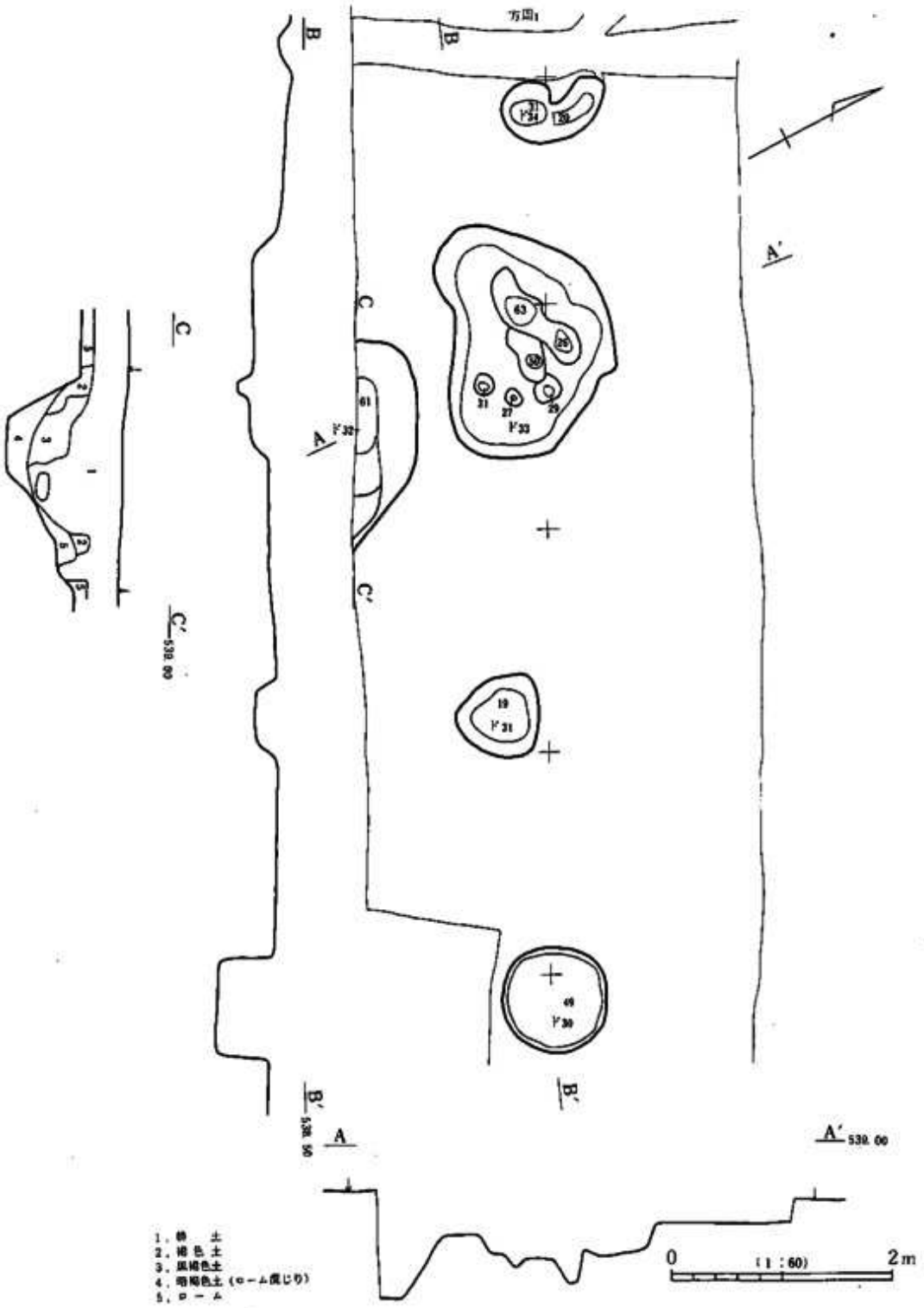
第Ⅲ地区中央部で検出し、全体を調査した。94×56cmの不定形を呈し、深さは34cmを測る。断面形は逆台形を呈する。北側に深さ20cmの箇所があり、2個の穴が重複していると考えられる。

出土遺物は縄文土器の無文の破片が6点ある。

⑦ 土坑35（挿図45、第26・38図）

第Ⅲ地区西側で検出し、全体を調査した。140 ×130 cmの楕円形を呈し、深さは126 cmを測る。南側で2個の穴と重複する。断面形は逆台形を呈し、底部の点線で示した箇所がたたき状に堅くなっていた。覆土の中層には焼土が顕著に認められた。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片9点・同終末の破片4点・無文の破片33点があり、前2者5点（26－10～14）を拓影で示した。石器は、打製石斧1点・横刃型石器1点（38－3）・礫がある。



挿図44　第Ⅲ地区　土坑30・31・32・33・34

⑧　土坑36（挿図45、第26・27・38図）

第Ⅲ地区西側で検出し、北側が未調査で全体形は不明である。東西方向が130 cmを呈し、深さは97cmを測る。断面形は柱状を呈し、底部の点線で示した箇所がたたき状に堅くなっていた。本址を取り囲むように土坑状の穴が7個認められた。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片13点・無文の破片31点があり、前者7点（26－15～20、27－1・2）を拓影で示した。石器は、打製石斧2点（38－4・5）・横刃型石器1点・石錘2点がある。

⑨　土坑37（挿図46、第27図）

第Ⅲ地区西側で検出し、全体を調査した。90×82cmの楕円形を呈し、深さは49cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底部のほぼ全面がたたき状に堅くなっていた。南東側で2個の穴と重複する。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片1点（27－3）・無文の破片4点、石器は黒曜石片6点である。

⑩　土坑38（挿図45、第27図）

第Ⅲ地区西側で検出し、全体を調査した。直径116 cmの円形を呈し、深さは110 cmを測る。断面形は柱状を呈し、底部は平坦である。東側で浅い土坑状の穴と重複する。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片6点・同終末の破片3点・無文の破片8点で、前2者6点（27－4～9）を拓影で示した。石器は剥片6点である。

⑪　土坑39（挿図46、第27図）

第Ⅲ地区西側で検出し、全体を調査した。74×66cmの楕円形を呈し、深さは31cmを測る。断面形は北側で段をもつ。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期初頭の破片1点（27－10）・同後半の破片1点（27－11）・無文の破片14点、石器は黒曜石剥片1点である。

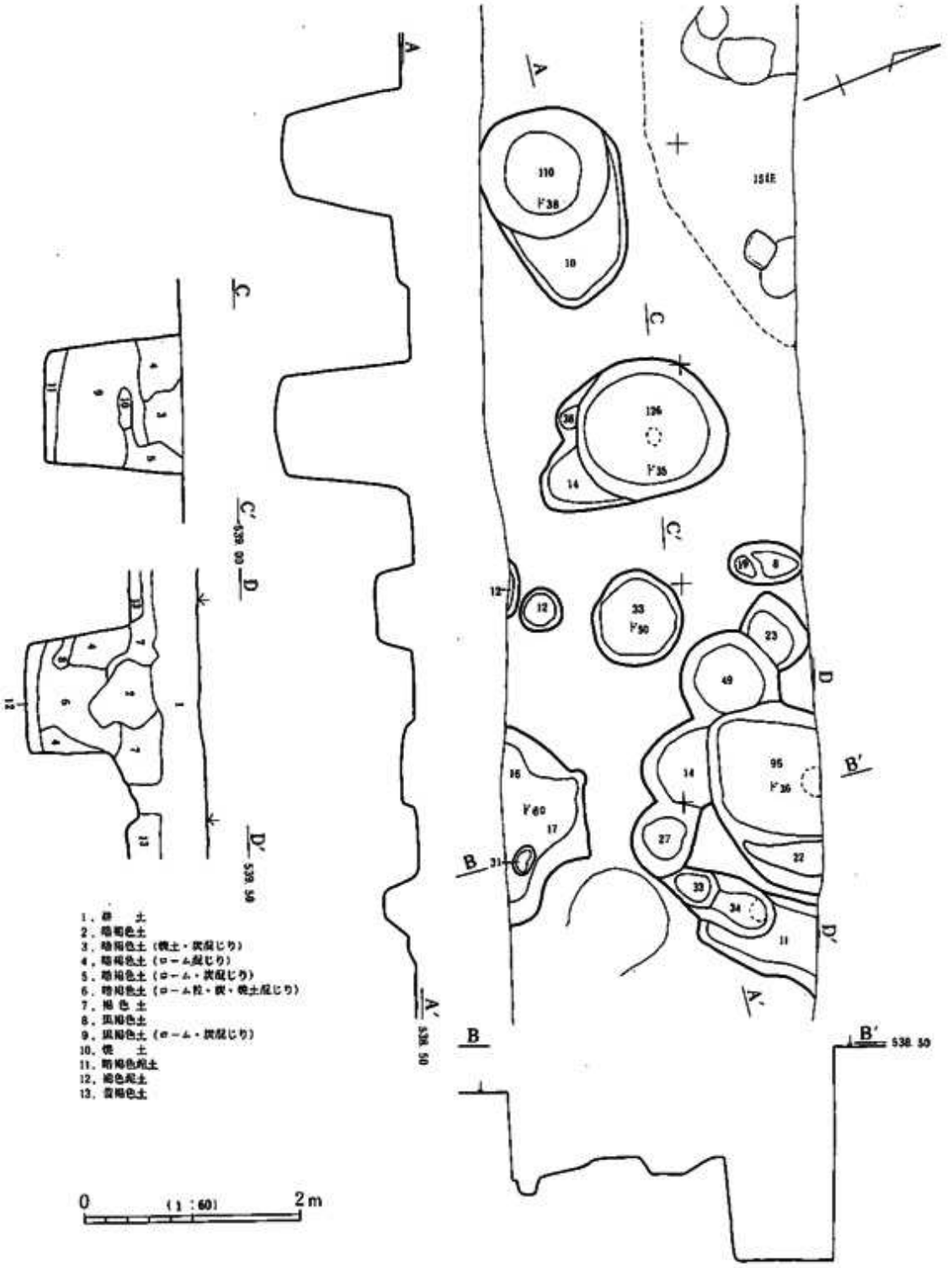
⑫　土坑40（挿図46、第27図）

第Ⅲ地区西側で検出し、全体を調査した。77×50cmの楕円形を呈し、深さは31cmを測る。断面形は逆台形を呈する。底部全体が堅く、特に点線で示した箇所がたたき状に認められた。

出土遺物は、縄文時代中期初頭の土器片1点（27－12）と黒曜石の破片1点である。

⑬　土坑41（挿図46、第27図）

第Ⅲ地区西側で検出し、全体を調査した。縄文時代の20号住居址と土坑57と重複する。140 × 140 cmの不定形を呈し、深さは27cmを測る。断面形は不定形で、底部に2個の穴がある。



挿図45　第Ⅲ地区　土坑35・36・38・50・60、ピット

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片５点・無文の破片11点で、前者３点（27－13～15）を拓影で示した。石器は打製石錘１点（38－６）・黒曜石剥片１点である。

⑭　土坑42（挿図42、第27・38図）

第Ⅲ地区西端で検出し、北側が未調査で全体形は不明である。東西方向が120 cmを呈し、深さは29cmを測る。断面形はナベ底状を呈する。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期中葉の破片１点（27－17）・同後半の破片４点（27－16・18・19）・無文の破片７点で、石器は横刃型石器１点（38－７）などである。

⑮　土坑43（挿図46、第27図）

第Ⅲ地区西側で検出し、全体を調査した。160 ×132 cmの楕円形を呈し、深さは61cmを測る。断面形は南側で段・北側で稜をもつ。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片12点・同終末の破片３点・無文の破片14点があり、前者５点（27－20～24）を拓影で示した。石器は剥片が２点ある。

⑯　土坑44（挿図42、第27・38図）

第Ⅲ地区西側で検出し、北側が未調査で全体形は不明である。東西方向が180 cmを呈し、深さは17cmを測る。断面形は皿状を呈し、底部に溝状の落ち込みが認められた。

出土遺物は、縄文時代中期後半の土器破片１点（27－25）・無文の破片７点がある。

⑰　土坑45（挿図43、第27・28図）

第Ⅲ地区西側で検出し、北側がわずか未調査となる。90×68cmの楕円形を呈し、深さは31cmを測る。断面形は逆台形を呈し、覆土は暗褐色土が主体をなす。

出土遺物は土器・石器があり、縄文時代中期の破片19点・無文の破片25点で、前者９点（27－26～33、28－１）を拓影で示した。石器は剥片が２点ある。

⑱　土坑46（挿図43、第28図）

第Ⅲ地区西側で検出し、南側が未調査で全体形は不明である。東西方向が97cmを呈し、深さは59cmを測る。西側が深さ74cmの穴になる。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半４点（28－２～５）・無文の破片６点、石器は剥片が１点ある。

⑲　土坑47（挿図43、第28図）

第Ⅲ地区西側で検出し、南側が未調査で全体形は不明である。東西方向が74cmを呈し、深さは

86cmを測る。土坑状の穴2個と重複する。

出土遺物は、縄文時代中期後半の土器破片（28－6～8）・無文の破片が10点出土した。

⑳ 土坑48（挿図43、第28・55図）

第Ⅲ地区西側で検出し、北側が未調査で全体形は不明である。東西方向が126 cmで、深さ44cmを測る。断面形は逆台形を呈し、南側に段をもつ。底部南東側に小穴がある。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期初頭の破片1点（28－9）・無文の破片10点、石器は使用痕のある剥片1点（55－2）である。

㉑ 土坑49（挿図43、第28・38図）

第Ⅲ地区西側で検出し、縄文時代の18号住居址と弥生時代の方形周溝墓2に切られる。全体形は不明であるが、130 ×110 cmの方形を呈し、深さは24cmを測る。断面形はⅢ状を呈し、底部南側に穴がある。中央部に30～18cmの石5個が認められた。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片2点（28－10・11）・無文の破片9点、石器は横刃型石器1点（38－8）である。

㉒ 土坑50（挿図45、第26・38図）

第Ⅲ地区西側で検出し、全体を調査した。直径85cmの円形を呈し、深さは50cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底部は平坦である。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半の破片2点（28－12・13）、石器は打製石斧1点・横刃形石器1点（38－9）・粗製石匙1点（38－10）である。

㉓ 土坑51（挿図43、第28・38図）

第Ⅲ地区中央部で検出し、北側が未調査で全体形は不明である。東西方向が160 cm・深さ103 cmを測り、断面形は柱状を呈し、上部で稜をもって緩やかに立ち上がる。底部は平坦で、中心部の広い範囲にたたき状の堅い部分が認められた。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期後半から終末の破片52点・無文の破片26点で、前者13点（28－14～26）と粗雑な調整の口縁部（28－27）を示した。石器は横刃形石器（38－11）・剥片などがある。

㉔ 土坑52・53（挿図43、第28・38図）

第Ⅲ地区西側で検出し、全体を調査した。重複するので一緒に記述する。138 ×50cmの不整形を呈し、深さは土坑52が55cm・土坑53が73cmを測る。断面形はいずれも柱状を呈する。

出土遺物は土器・石器があり、土坑52は、縄文土器の平出3Aの破片1点・同中期後半の破片

5点・無文の破片6点、土坑53は、縄文時代中期後半土器片5点・無文の破片8点がある。石器は、土坑52で礫1点・土坑53で打製石錘1点（38－12）がある。

㉕ 土坑54（挿図46、第29図）

第Ⅲ地区西側で検出し、北側で土坑55と重複する。110 ×90cmの丸みを帯びた方形を呈し、深さは40cmを測る。断面形は逆台形を呈し、東側で稜をもつ。底部中央にたたき状に堅い部分を認めた。

出土遺物は、縄文時代中期後半の土器破片2点（29－5・6）・無文の破片13点がある。

㉖ 土坑55（挿図46、第29図）

第Ⅲ地区西側で検出し、北側が未調査で全体形は不明である。土坑54と重複する。東西方向が148 cm・深さは101 cmを測る。断面形は柱状を呈し、稜をもって緩やかに立ち上がる。底部のほぼ全面がたたき状に堅くなっていた。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期初頭の破片1点（29－7）・同後半から終末の破片13点（29－8～12）・無文の破片34点、石器は打製石斧と剥片である。

㉗ 土坑56（挿図46、第29図）

第Ⅲ地区西側で検出し、土坑57と重複するが、ほぼ全体を調査した。直径110 cmの円形を呈し、深さは42cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は縄文時代中期後半の深鉢破片6点（29－15～17）・同無文の破片3点がある。

㉘ 土坑57（挿図46）

第Ⅲ地区西側で検出し、土坑56と重複するが、ほぼ全体を調査した。58×38cmの楕円形を呈し、深さは61cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は石器磨製石斧1点（38－13）がある。

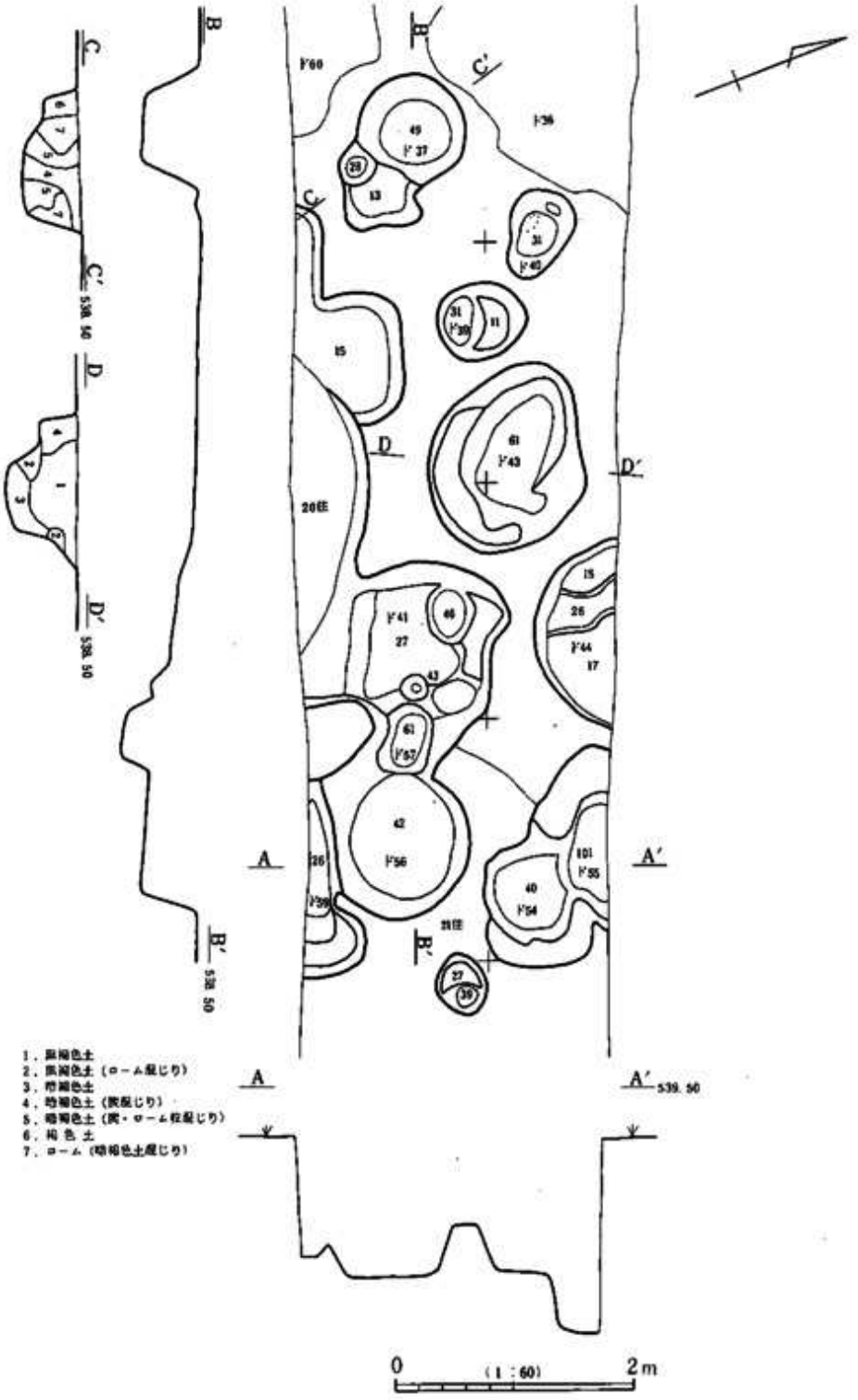
㉙ 土坑58

欠番とする。

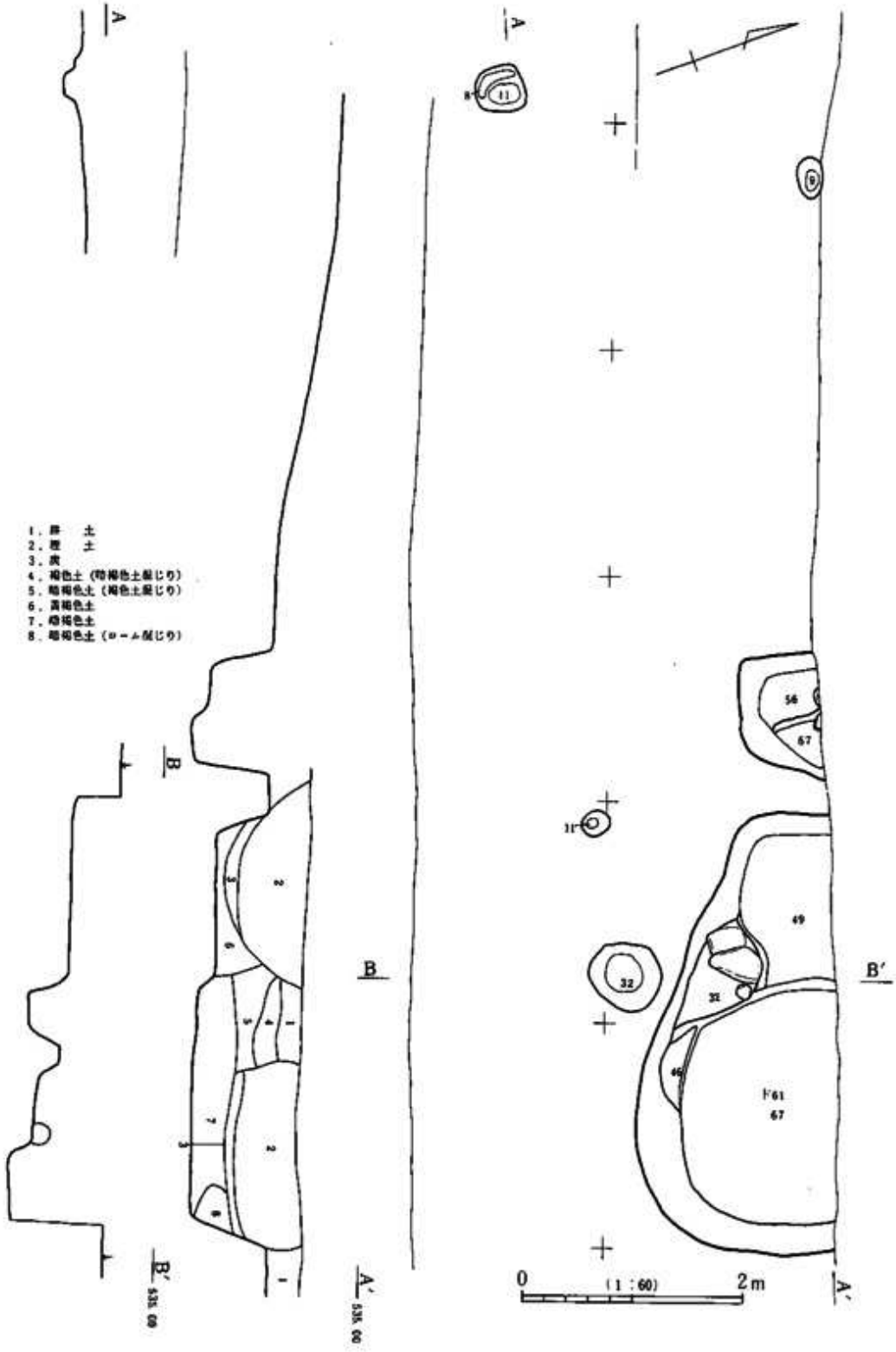
㉚ 土坑59（挿図46、第29図）

第Ⅲ地区西側で検出し、南側が未調査で、全体形は不明である。東西方向が160 cm・深さは26 cmを測る。断面形は不定形で、途中から稜をもって立ち上がる。

出土遺物は縄文時代中期後半から終末の土器破片4点（29－18～20）・無文の破片20点がある。



挿図46　第Ⅲ地区　土坑37・39・40・41・43・54・55・56・57・59、ピット



挿図47　第Ⅲ地区　土坑61、ピット

㉛ 土坑60（挿図45、第29・38図）

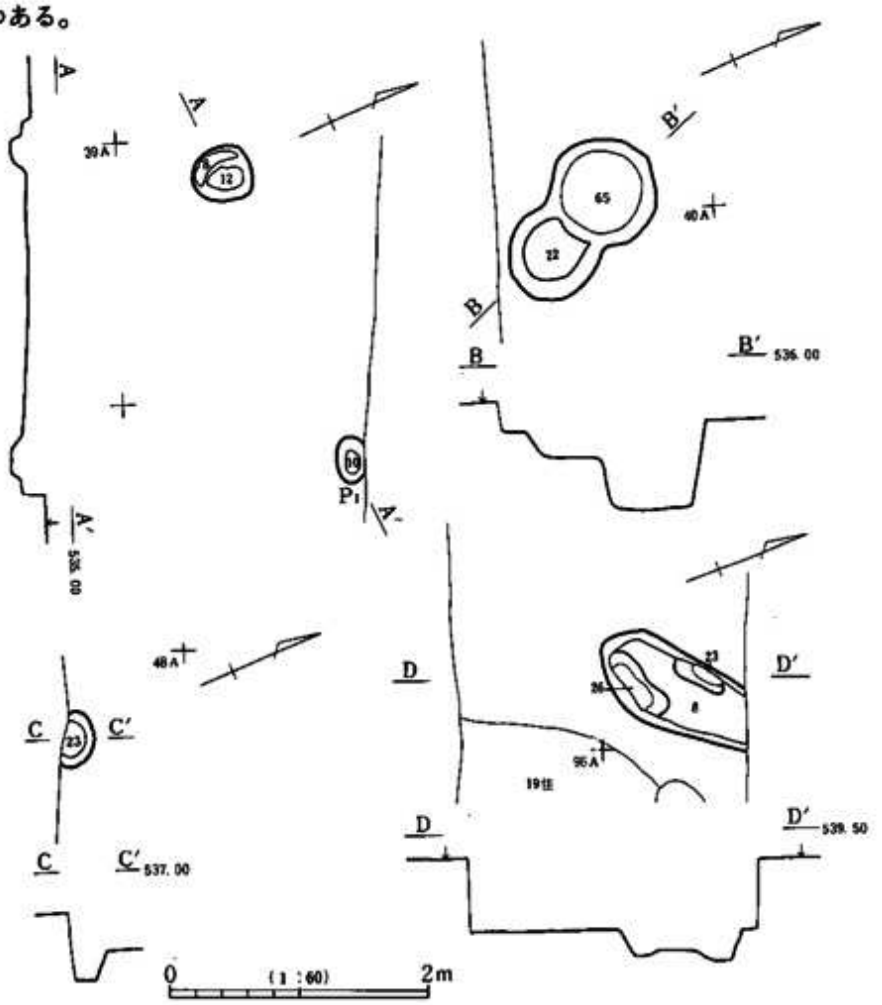
第Ⅲ地区西側で検出し、南側が未調査で全体形は不明である。東西方向が180 cm・深さは17cmを測る。断面形は皿状を呈し、底部東側に小穴がある。

出土遺物は、縄文時代中期後半の土器破片１点（29－21）・無文の破片２点、石器横刃形石器１点（38－14）がある。

㉜ 土坑61（挿図47、第29・38図）

第Ⅲ地区東側で検出し、北側が未調査で全体形は不明である。上面は耕作などの攪乱を受けている。東西方向が390 cmで、深さは東側で67cm・西側で49cmを測る。断面形は箱状をなし、南側に段をもつ。土層から２基の土坑の重複と考えられ、東側が切っていると判断できた。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期中葉の底部（29－22）・同後半の破片２点（29－23）・無文の破片19点で、石器は横刃型石器・磨製石斧（38－15）・打製石錘（38－16）・礫が１点ずつある。



挿図48　第Ⅲ地区　ピット

4．第Ⅳ地区

遺跡範囲南東部の南西側を東西方向に縦断する耕作道を対象とし、長さ約175 m・幅4.5 ～3 mで調査した。本調査区中央に緩やかな傾斜があり、遺構分布に差が認められた。遺構が密集するのは傾斜西側の部分であり、東側はわずかに認められたのみである。ほかに、中央部傾斜の途中から西側にかけて、幅120 ～40cmの溝が検出された。全体では一本であるが、2～3本みられる部分もある。箱状の断面形をなし、すべての遺構を切っており、近代以降の溝であると判断できた。地権者などにこうしたものを掘ったことがないかうかがったが、はっきりしなかった。全体図には細線で示しておいたが、遺構図では掲載しなかった。

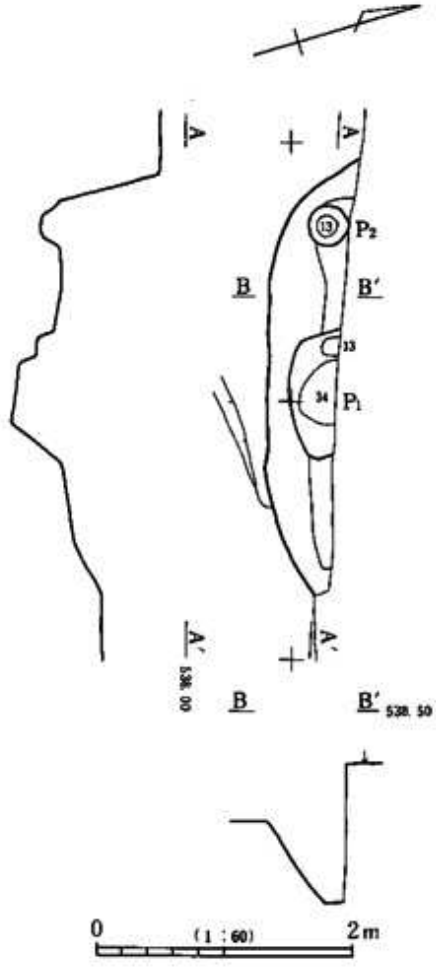
1）竪穴住居址

① 23号住居址（挿図49、第39・48・55図）

第Ⅳ地区西側の傾斜の肩の部分で検出し、北側が用地外で、南側の一部を調査したのみである。規模・平面形・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は80～22cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面はほんの一部しか確認できず、軟らかく不良である。主柱穴はP1 相当すると考えられるが、全体形が不明なので断定できない。

出土遺物は土器・石器があり、上層から多く出土した。土器は唐草文系が主体を占め（39－1～8）・沈線と櫛描条線文が施文される破片（39－9～13）などがある。石器は、打製石斧（48－1～9）・横刃型石器（48－11～15）・粗製石匙（48－10）・磨製石斧（48－16）・打製石錘（48－17）・使用痕のある剥片（55－3）がある。

出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。



挿図49 第Ⅳ地区 23号住居址

② 24号・28号住居址（挿図50、第39～45・48～51・55図）

第Ⅳ地区西側で検出し、南側が用地外で中央に溝の攪乱を受けており、全体の半分強を調査した。プラン検出時に2軒の遺構の重複と考えられ、溝の南側を24号住居址、北側を28号住居址として調査をした。調査終了時に検討したが、床面や全体形など1軒と考えられるが、周溝などで不整合な箇所がみられる点で2軒とも考えられる。よって、当初のように2軒として一緒に記述する。東西方向が4.5 mの竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は、南側で27～4 cm・北側で12～9 cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝は東・北壁下にあり、西側では炉址の方向に向かうものと壁下に位置するものとがある。幅40～10cm・深さ21～4 cmを測る。床面はたたき状に堅く、南と北で差は認められない。炉址は、中央南寄りに位置すると考えられる石組炉で、142 ×136 cmの方形を呈し、内部は深く堀込まれて焼土が認められた。炉石は抜かれて残っていないが、置かれた位置はほぼ特定できた。

出土遺物は土器・石器があり、南側中央を中心に上層から床面にかけて多量に出土した。

24号住居址では、土器は口縁部に太い沈線・胴部は沈線と縄文が施される深鉢が主体で（39－16～18、40－1～4、41－1～5）、沈線が施文されるもの（41－6）・隆帯と縄文が文様のもの（42－1）・沈線と櫛状工具によるもの（41－5）などがあり、唐草文系の台付甕（43－1）もある。石器は、打製石斧（49－1～10）・横刃型石器（49－11～16）・粗製石匙（49－17・18）・磨製石斧（49－19）・敲打器（49－20）・打製石錘（49－21・23・24）・切り目石錘（49－22）・擦痕のある礫（50－1）・砥石（50－2・3）・調整痕のある剥片（55－4・5）・石錐（55－6）・ピエス・エスキーユ（55－8）・使用痕のある剥片（55－9）がある。

28号住居址部分では極めて少なく、深鉢の底部（45－13）と横刃形石器（51－1）・敲打器・（51－2）・砥石（51－3）・剥離痕のある礫（51－4）・石皿（51－5）・使用痕のある剥片（55－11）がある。

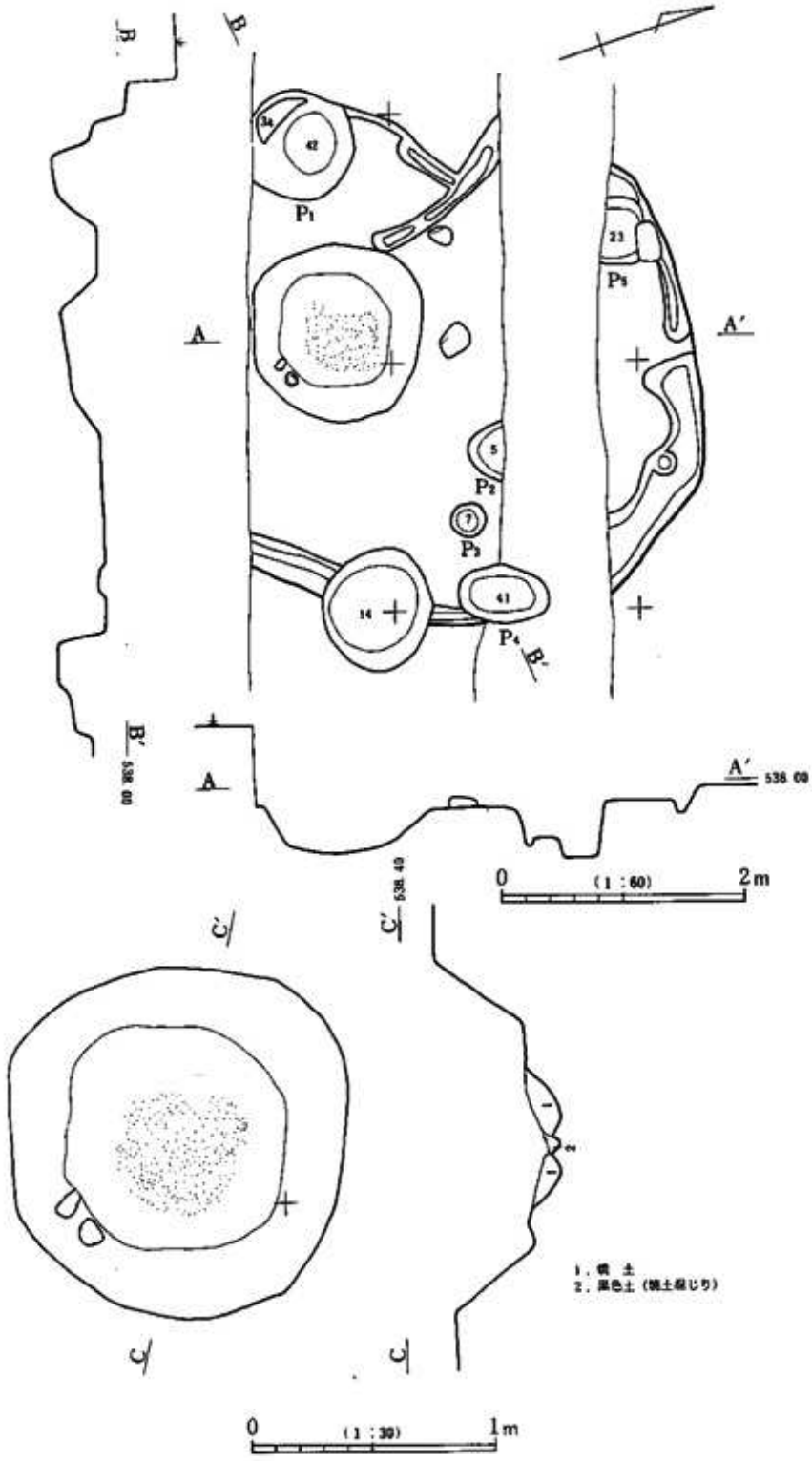
出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。

③ 25号住居址（挿図51、第45・50図）

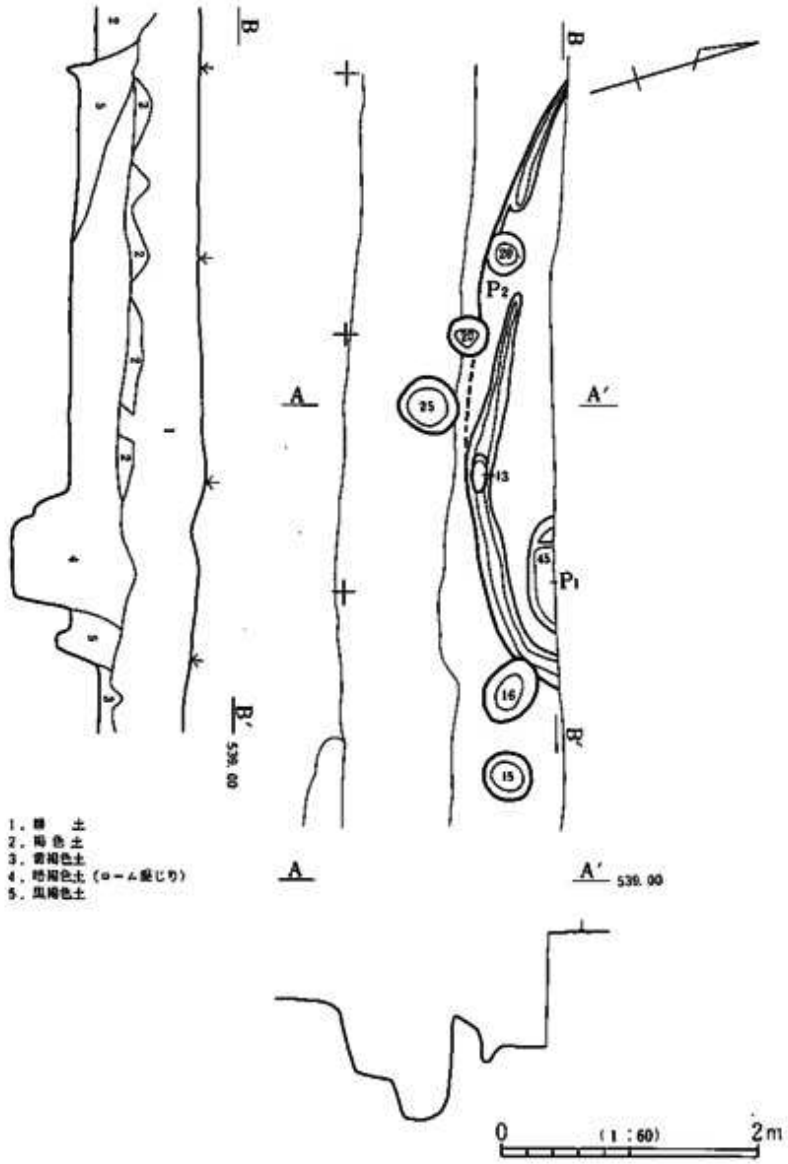
第Ⅳ地区西側で検出し、大部分が北側の用地外かかり、南側の一部の調査にとどまった。規模・平面形・主軸方向とも不明な竪穴住居址である。壁高は23～10cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が確認され、幅20～6 cm・深さ12～8 cmを測る。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1 である。

出土遺物は少なく、土器・石器がある。土器は沈線と縄文が施される深鉢（45－2）がP1 脇の床面上から出土し、ほかに石器打製石斧（50－4・5）・横刃型石器（50－6・7）・敲打器（50－8）・凹石（50－9）・打製石錘（50－10・11）がある。

出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。



挿図50　第Ⅳ地区　24号・28号住居址



挿図51　第Ⅳ地区　25号住居址

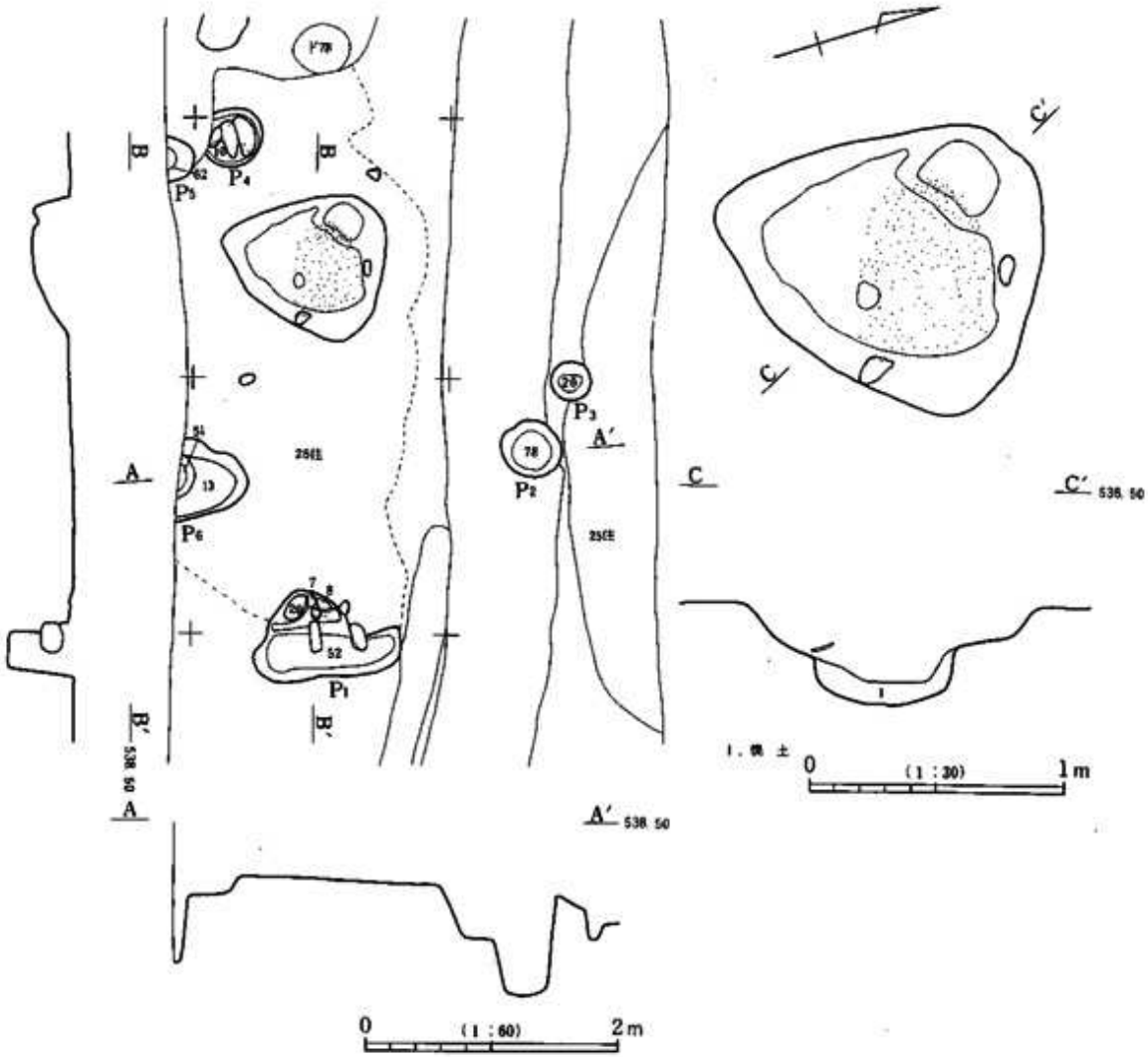
④　26号住居址（挿図52、第26・50・55図）

第Ⅳ地区西側でたたき状の床面を検出して住居址とした。南側は用地外で、北側で溝の攪乱を受けており、半分ほどを調査した。縄文時代の土坑76に切られる。点線で示した範囲に床面を認めたのみで、規模や平面形・主軸方向は把握できなかった。床面はたたき状に堅く極めて良好であるが、住居址範囲すべてには認められなかった。主柱穴は確定できないが、P1・P2・P5が相当すると考えられる。炉址は中央やや北よりに位置する石囲炉で、115×110 cmの変形に床

面が掘り凹められて、内部は深く焼土が認められた。炉石は抜かれて残ってないが、置かれた位置は特定できた。P1 に重複するように、20〜10cmの石５個を46×33cmコの字に並べ、周辺と内部にわずかに焼土が認められる施設がある。副炉址的な役割を果たしたのかもしれないが、P1との関連がはっきりつかめず、断定はできない。

出土遺物は少なく、土器・石器がある。土器は深鉢の破片のみで、結節縄文が施されるもの（26－８〜11）がある。石器は、打製石斧（50－12）・横刃型石器（50－13・14）・打製石錘（50－15）・使用痕のある剥片（55－10）である。

出土遺物が少なくはっきりしないが、縄文時代中期終末に位置づけられる。



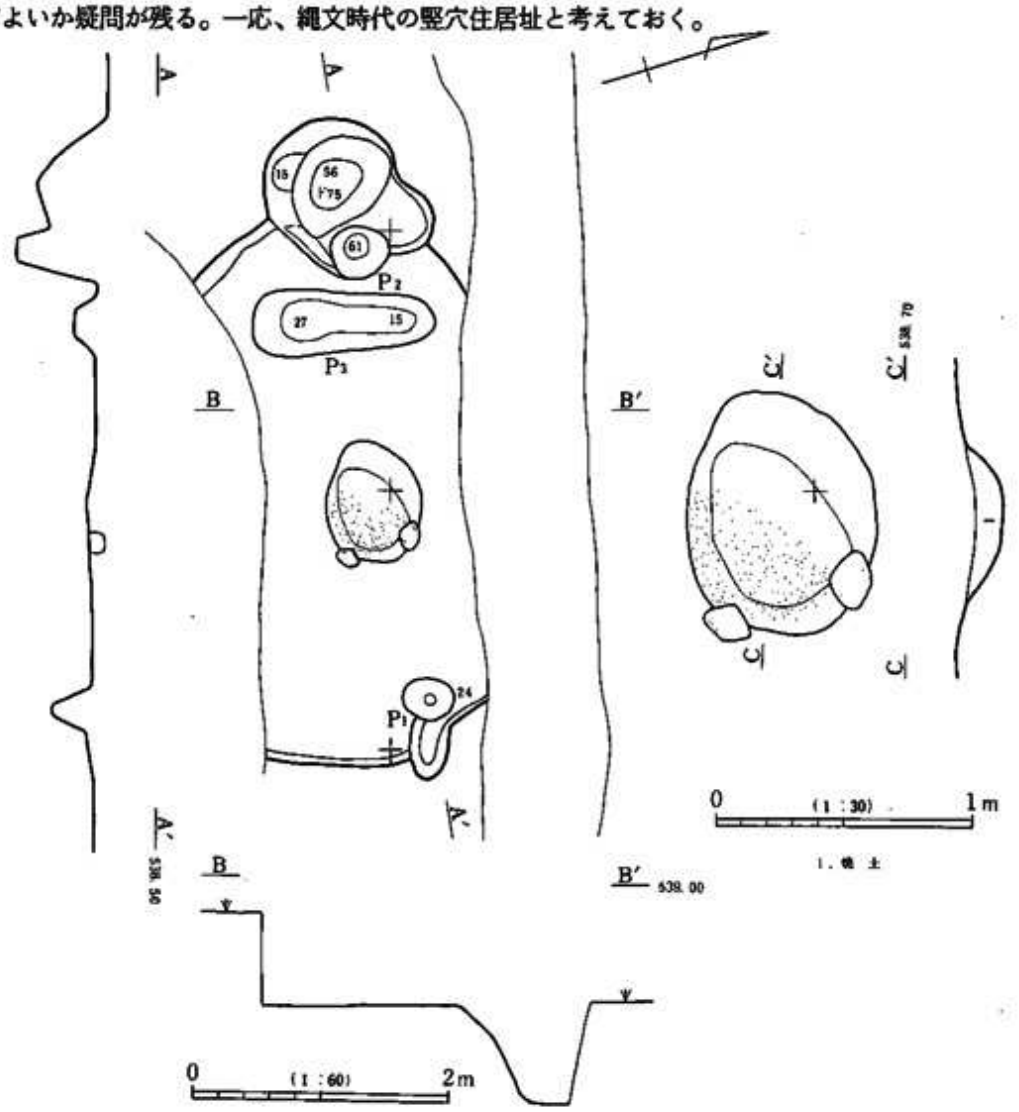
挿図52　第Ⅳ地区　26号住居址

⑤ 27号住居址（挿図53、第45・50図）

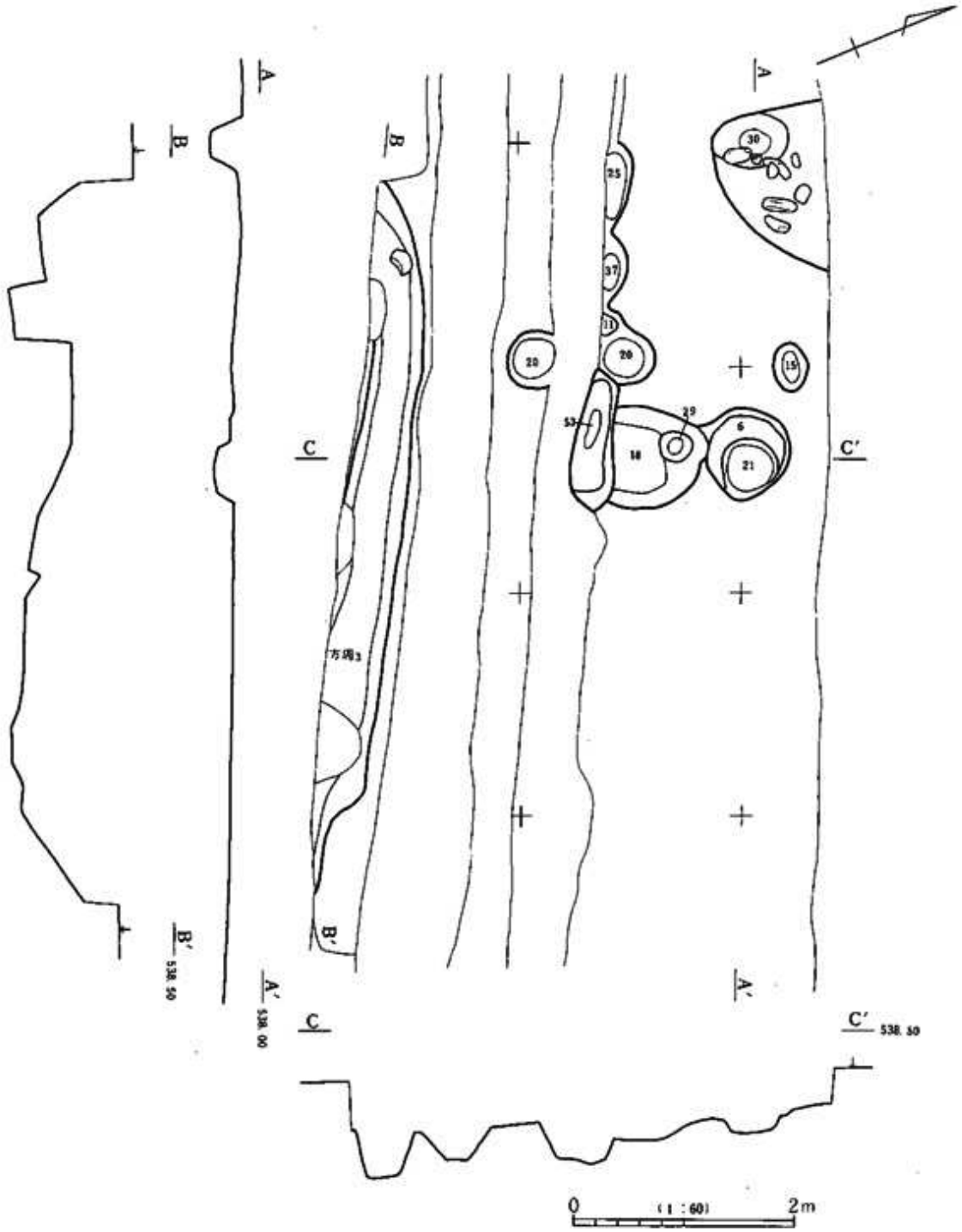
第Ⅳ地区西側で検出し、溝と縄文時代の土坑75に切られる。南側が用地外で、半分ほどを調査した。東西方向が4.0 mの竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は9～3 cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は柔らかく不良である。柱穴はP1 ～P3 まであるが、主柱穴の確定はできない。炉址は、中央に石2個と焼土が認められ、この箇所が相当すると考えられる。

出土遺物は極めて少なく、縄文を地文として格子状の沈線が施される深鉢の破片（45－12）と打製石斧（50－16）の2点のみである。

平面形もはっきりせず、床面や柱穴も同様である。遺物も2点しか出土せず、竪穴住居址としてよいか疑問が残る。一応、縄文時代の竪穴住居址と考えておく。



挿図53　第Ⅳ地区　27号住居址



挿図54　第Ⅳ地区　方形周溝墓３、ピット

2）方形周溝墓

① 方形周溝墓１（挿図54、第45図）

第Ⅳ地区西側で検出し、耕作の攪乱を受けている。北側の周溝を調査し、大半が南側の用地外にかかる。北側の周溝も全面が調査できなかったので規模は不明の方形周溝墓である。周溝は幅55～44cm・深さ39～20cmを測り、断面形は逆台形をなす。

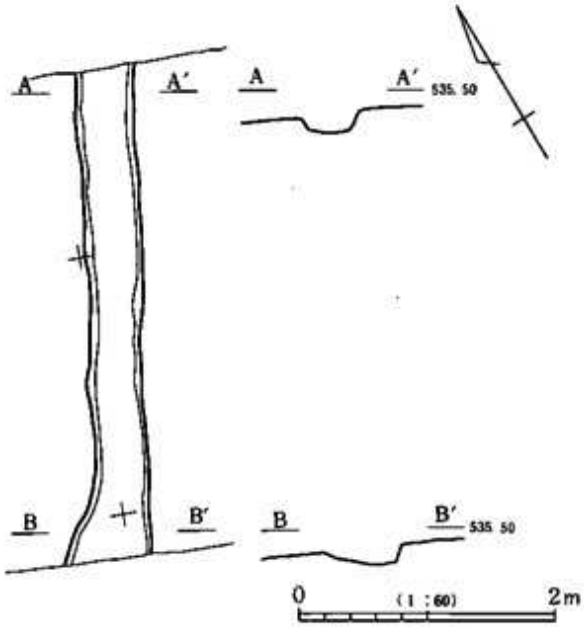
遺物は、周溝上部からほぼ完形の弥生時代後期後半の甕（45－14）が出土した。ほかに、縄文土器片（45－15～17、46－１）は紛れ込み遺物である。

3）溝址・溝状遺構

① 溝址９（挿図55）

第Ⅳ地区中央部で検出した。長さ3.8ｍを調査し、両側に延長する。方向はＮ30°Ｅを示す。幅62～40cm・深さ11～９cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は暗褐色土を主体としており、砂などはなく、水が流れた形跡は認められなかった。

出土遺物は、縄文土器の無文の破片２と黒曜石の破片１点があるのみである。



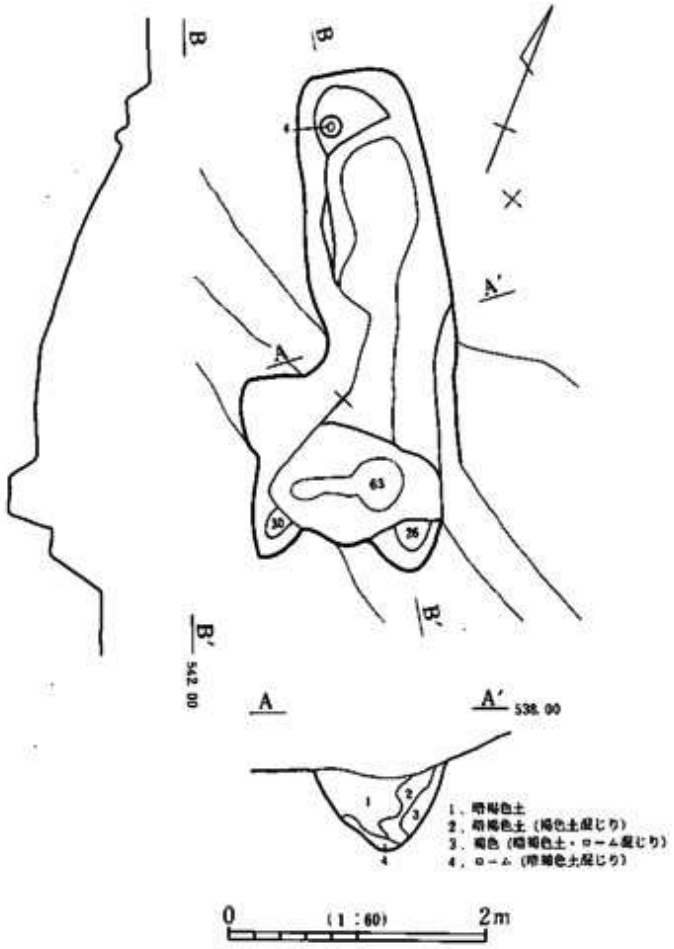
挿図55　第Ⅳ地区　溝址９

② 溝状遺構１（挿図56、第１図）

第Ⅳ地区西側で検出し、全体を調査した。長さ3.6ｍ・幅168～90cmを測る細長い溝状遺構で、形態は南側で広くなり、２個の小穴と重複する。長軸方向はＮ22°Ｗを示す。断面形は丸みを帯びたＶ字形を呈し、深さは65～49cmを測る。覆土は暗褐色土が主体をなす。

出土遺物は縄文時代中期土器の磨滅した破片がほとんどで、総数は96点ある。深鉢底部１点（１－１）・平出３Ａの破片３点（１－２～３）・中期後半の破片１点（１－４）を掲載した。

出土遺物から縄文時代中期に位置づけられるが、役割などは不明である。



挿図56　第Ⅳ地区　溝状遺構1

4）土　坑

①　土坑62（挿図57、第51図）

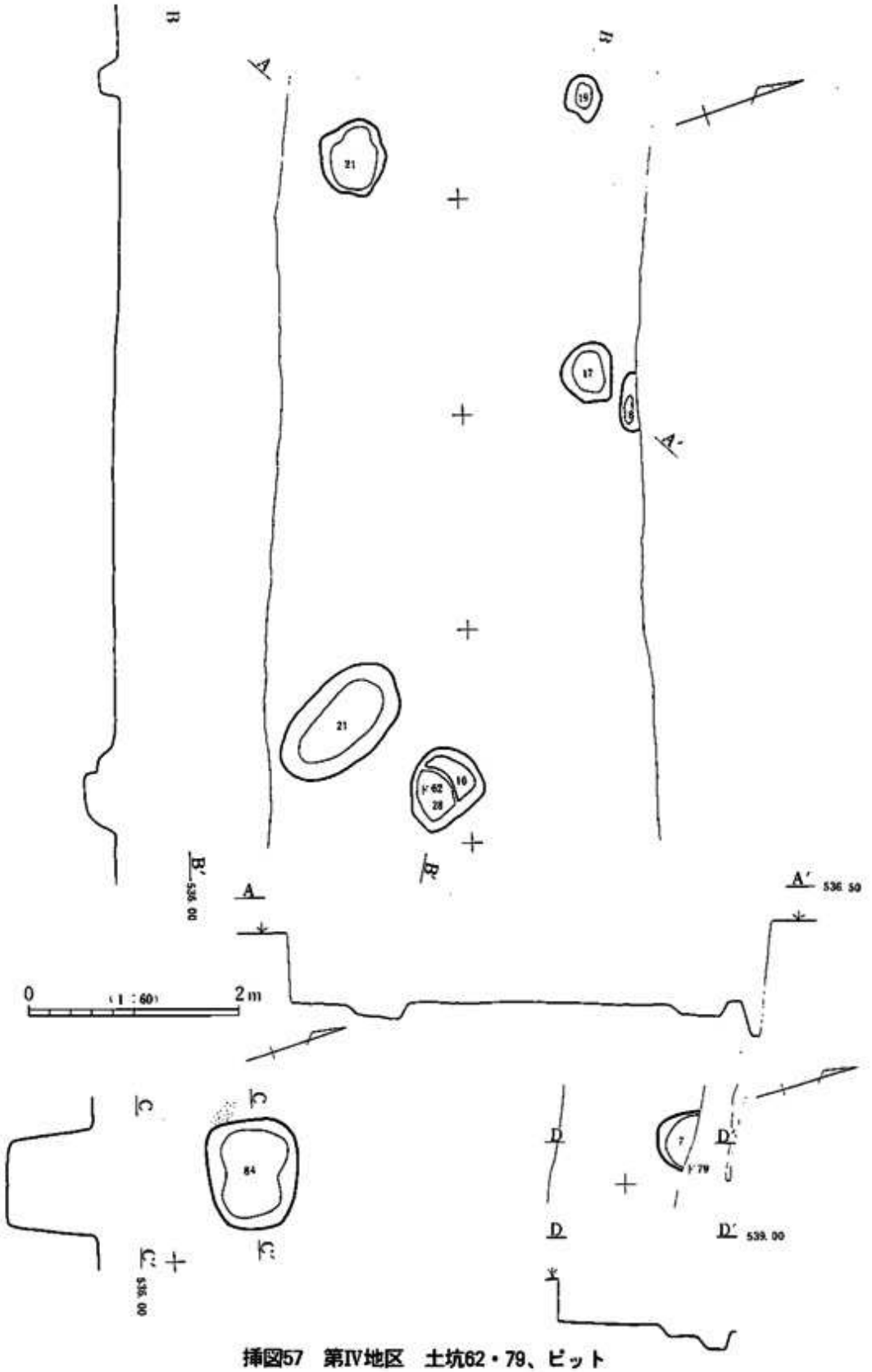
第Ⅳ地区中央部傾斜の途中で検出し、全体を調査した。72×66cmの不整楕円形を呈し、深さは28cmを測る。断面形は北側に段をもつ。

出土遺物は、石器の打製石錘1点（51－6）がある。

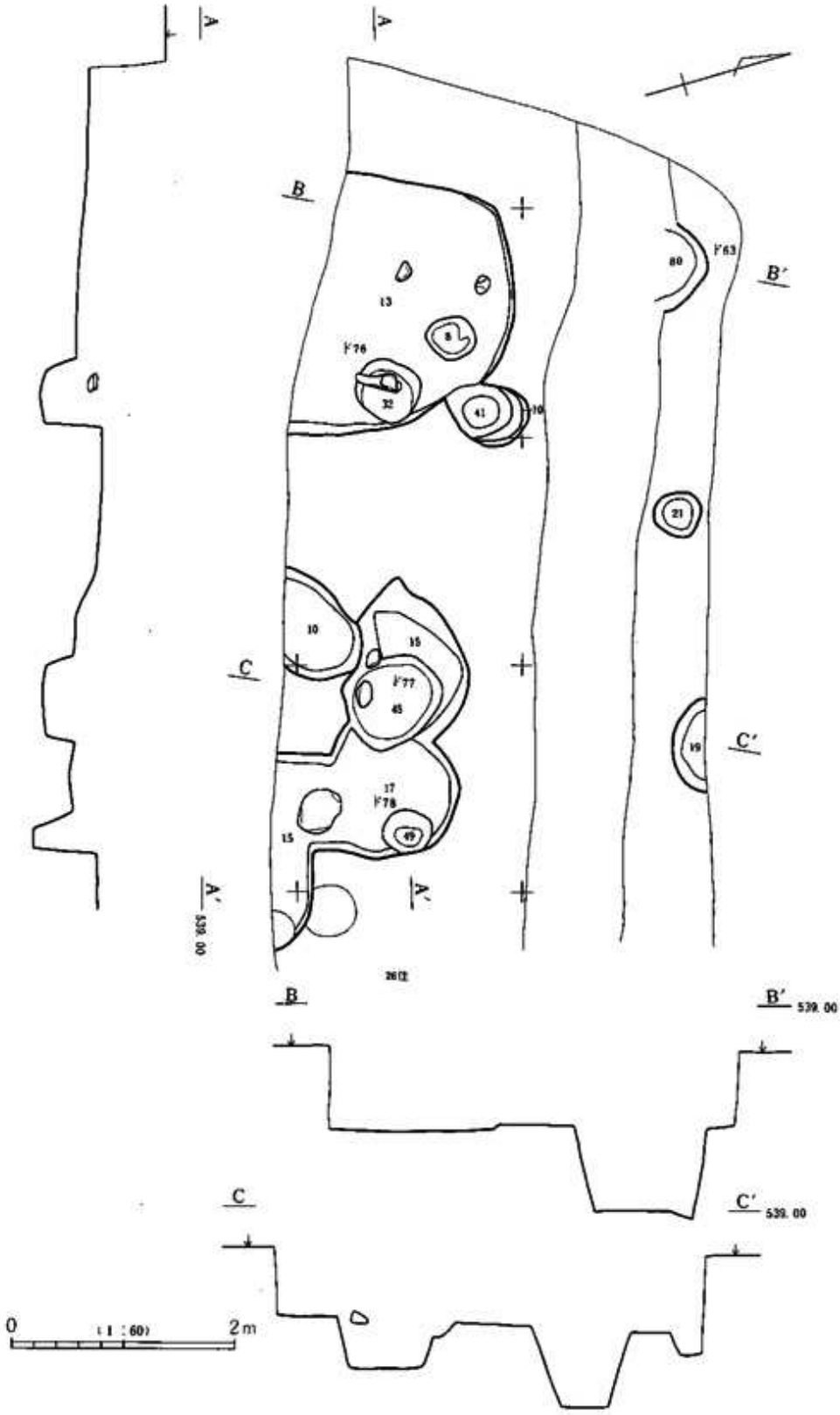
②　土坑63（挿図58、第46・51図）

第Ⅳ地区西側で検出し、溝に切られて半分ほどを調査した。直径が80cmくらいの円形を呈すると考えられ、深さは80cmを測る。断面形は柱状を呈し、底部は平坦である。

出土遺物は土器・石器があり、土器は結節縄文の深鉢片1点（46－2）と無文破片1点、石器は粗製石匙1点（51－7）である。



挿図57　第Ⅳ地区　土坑62・79、ピット



挿図58　第Ⅳ地区　土坑63・76・77・78、ピット

③ 土坑64（挿図59、第46・51図）

第Ⅳ地区西側で検出した。調査時に２基の土坑の番号が重複して遺物などの区別ができなくなったので、土坑64Ａ・Ｂとして一緒に記述する。土坑58が欠番で総数に変化はない。

土坑64Ａは、128 ×108 cmの楕円形を呈し、深さは44cmを測る。断面形は袋状を呈し、底部は平坦である。

土坑64Ｂは、溝に北側の一部を切られる。直径46cmの円形を呈し、深さは92cmを測る。断面形は柱状を呈し、規模が小さいのに深くなる。

出土遺物は土器・石器があり、縄文時代中期後半の土器片２点（46－３・４）と敲打器１点・（51－８）である。

④ 土坑65（挿図60、第46図）

第Ⅳ地区西側で検出し、北側が用地外で南側が溝に切られ、半分ほどを調査した。東西方向が110 cmで、深さは16cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、東側に段をもつ。

出土遺物は、縄文時代中期中葉の土器片１点（46－５）・時期不明土器片１点（46－６）・無文土器片５点がある。

⑤ 土坑66（挿図60）

第Ⅳ地区西側で検出し、北側が用地外で南側が溝に切られる。東西方向が60cmの楕円形で、深さは33cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は、縄文時代の無文土器片１点がある。

⑥ 土坑67（挿図60）

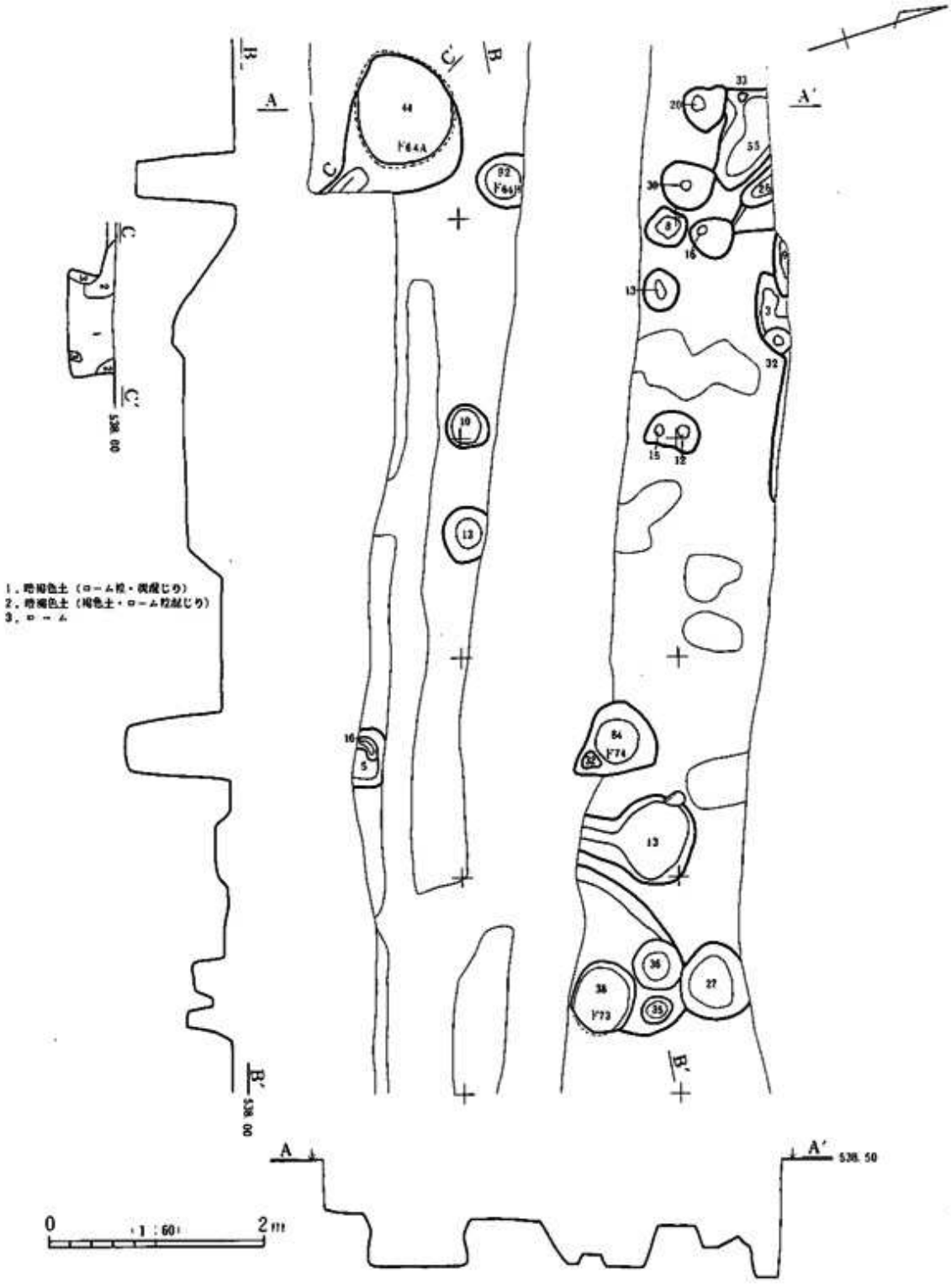
第Ⅳ地区西側で検出し、全体を調査した。直径50cm円形で、深さは14cmを測る。断面形はナベ底状を呈する。

出土遺物は、縄文時代の無文土器片１点と黒曜石の剥片１点がある。

⑦ 土坑68（挿図60、第46・53図）

第Ⅳ地区西側で検出し、北側が用地外で一部を調査したのみで、全体形は不明である。南東側で土坑状の落ち込みと重複する。東西方向が104 cmので、深さは31cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は土器・石器・土製品があり、土器は縄文時代中期中葉の破片（46－７）・無文の破片14点、石器は横刃型石器と黒曜石の剥片、土製品は土製円板（53－７）である。



挿図59　第Ⅳ地区　土坑64A・64B・73・74、ピット

⑧ 土坑69（挿図60、第46・51図）

第Ⅳ地区西端で検出し、西北側が用地外で一部を調査したのみで、全体形は不明である。調査幅は120 cmで、深さは31cmを測る。底部に小穴をもち、上層に2個の石がある。

出土遺物は土器・石器があり、土器は同一個体の平出3Aの破片3点（46－8～10）・無文の破片7点、石器は石皿（51－9）と黒曜石の剥片である。

⑨ 土坑70（挿図60、第46図）

第Ⅳ地区西端で検出し、全体を調査した。86×80cmの丸みを帯びた三角形で、深さは15cmを測る。断面形は皿状を呈し、南側に段をもち、底部に小穴がある。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期中葉の土器片（46－12・13）・無文土器片9点、石器は黒曜石の剥片1点である。

⑩ 土坑71（挿図60）

第Ⅳ地区西側で検出し、全体を調査した。縄文時代の土坑71と重複する。152 ×122 cmの楕円形で、深さは13cmを測る。断面形は皿状を呈し、底部北西側に72×32cmの細長い穴がある。

出土遺物はない。

⑪ 土坑72（挿図60）

第Ⅳ地区西側で検出し、全体を調査した。縄文時代の土坑72と重複する。150 ×110 cmの楕円形で、深さは11cmを測る。断面形は皿状を呈する。

出土遺物は縄文土器の無文破片9点と黒曜石の剥片1点である。

⑫ 土坑73（挿図59、第51図）

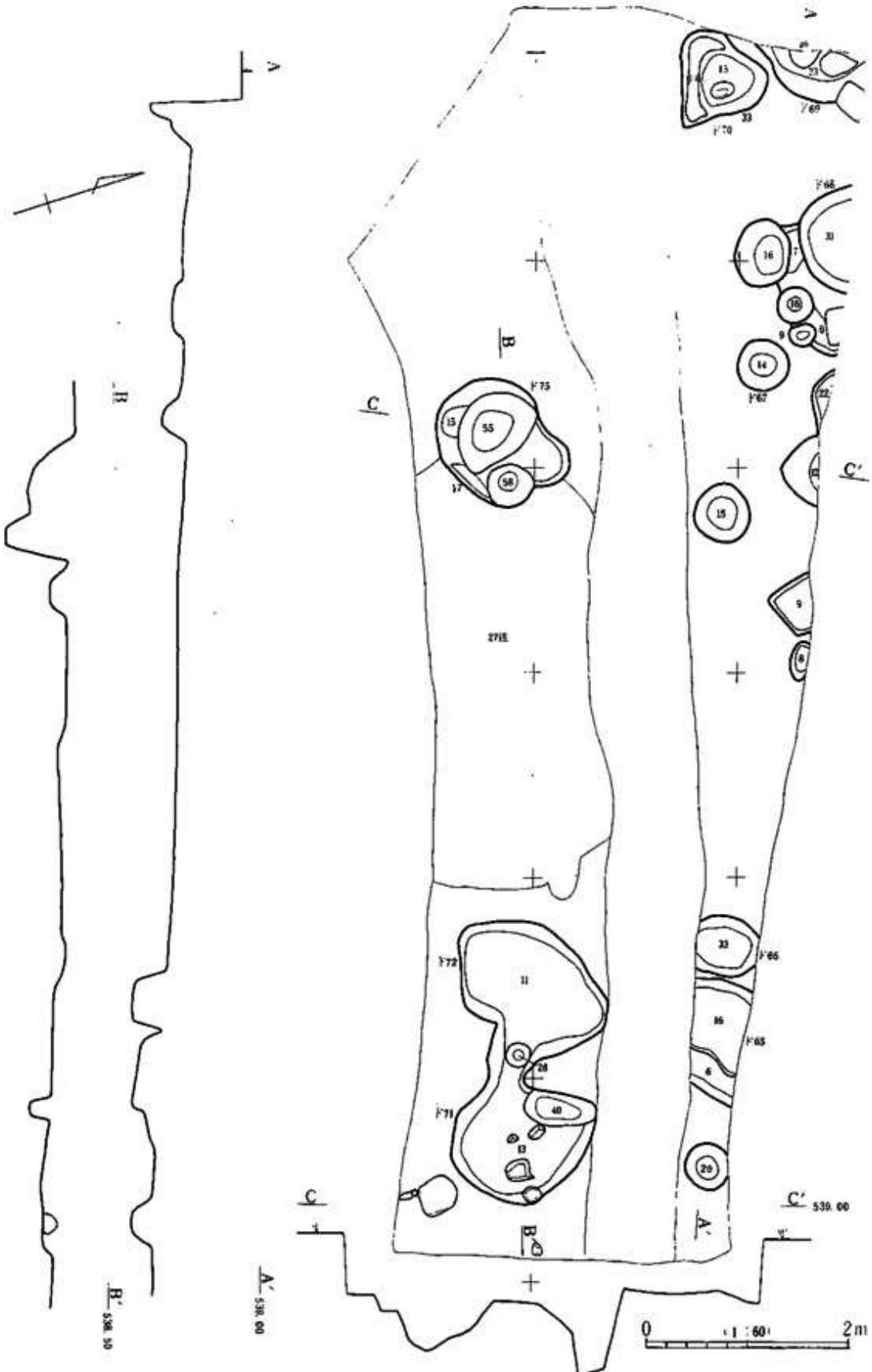
第Ⅳ地区西側で検出し、全体を調査した。68×60cmの楕円形で、深さは38cmを測る。断面形は南東側で袋状をなし、ほかは逆台形を呈する。

出土遺物は石器の横刃型石器1点（51－10）と黒曜石の剥片1点である。

⑬ 土坑74（挿図59）

第Ⅳ地区西側で検出し、全体を調査した。82×67cmの不整円形で、深さは84cmを測る。断面形は柱状を呈し、南側に段をもつ。

出土遺物は縄文時代中期終末の土器片1点がある。



挿図60　第Ⅳ地区　土坑65・66・67・68・69・70・71・72・75、ピット

⑭ 土坑75（挿図60）

第Ⅳ地区西側で検出し、全体を調査した。縄文時代の27号住居址と重複する。140 ×108 cmの不整楕円形で、深さは55cmを測る。断面形は不定形で、幾つかの穴と重複すると考えられる。

出土遺物は縄文時代の無文土器片４点がある。

⑮ 土坑76（挿図58、第46図）

第Ⅳ地区西側で検出し、南側が用地外で部分的に調査した。東西方向が2.2 mのやや大きな土坑で、深さは13cmを測る。断面形は不定形で、２個の穴と重複する。

出土遺物は縄文時代の無文土器片３点（46－14・15）と礫１点がある。

⑯ 土坑77（挿図58、第46・51図）

第Ⅳ地区西側で検出し、全体を調査した。縄文時代の土坑78と重複する。140 ×105 cmの不整楕円形で、深さは45cmを測る。断面形は逆台形で、北側に広い段をもつ。２個の土坑の重複の可能性が強い。

出土遺物は土器・石器があり、土器は縄文時代中期中葉の土器片（46－16～28）・無文土器片27点、石器は横刃型石器１点（51－11）・黒曜石の剥片３点である。

⑰ 土坑78（挿図58）

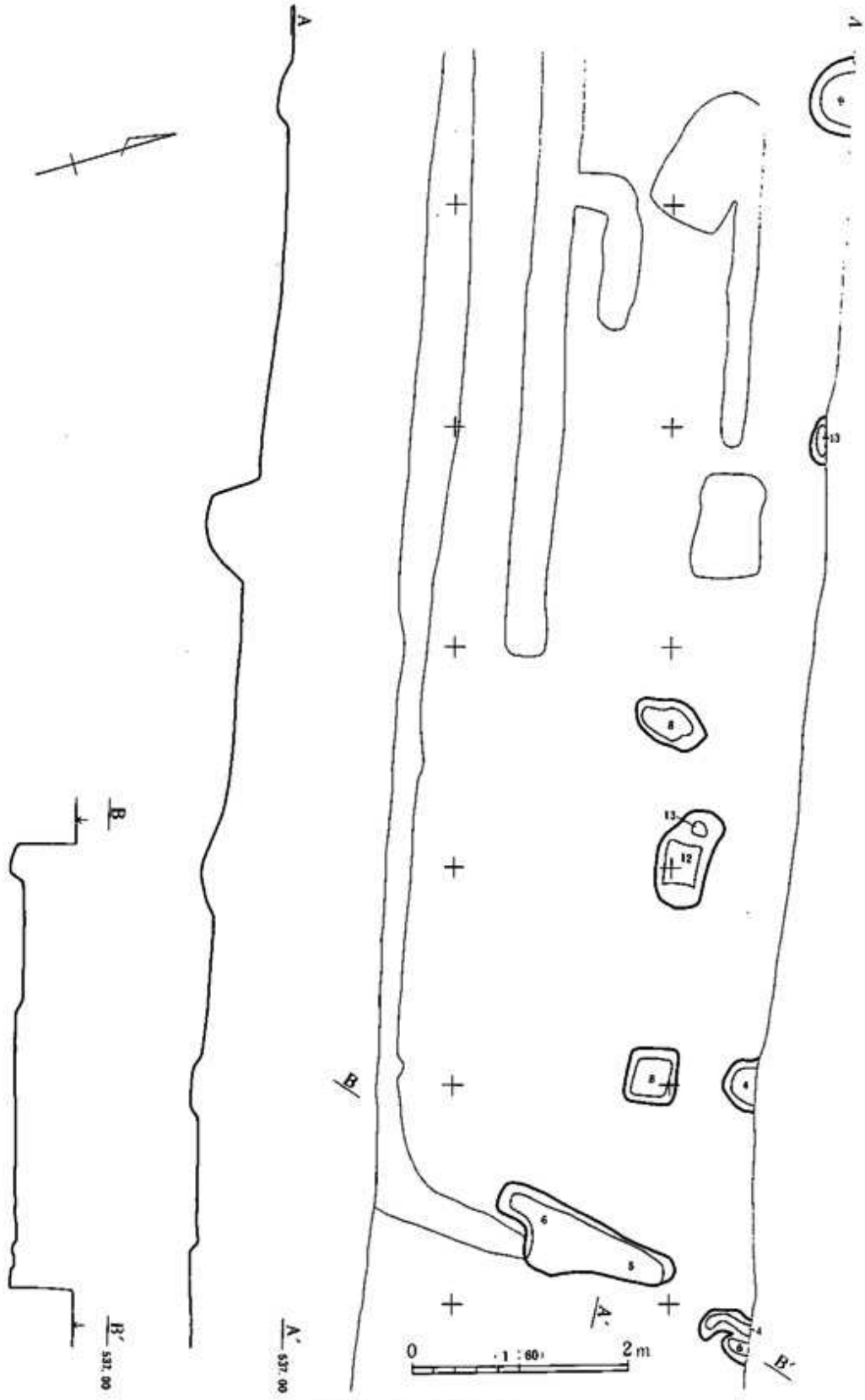
第Ⅳ地区西側で検出し、ほぼ全体を調査した。縄文時代の土坑77と重複する。直径116 cmの不整円形で、深さは17cmを測る。断面形はナベ底状を呈し、底部東側に穴がある。

出土遺物は縄文時代の無文土器片２点がある。

⑱ 土坑79（挿図57、第47図）

第Ⅳ地区西側で検出し、溝に北側を切られ、半分ほどを調査した。東西方向が60cmで、深さは７cmを測る。断面形は皿底状を呈し、底部に土器片が認められた。

出土遺物は、底部から出土した縄文時代中期初頭の大破片（47－１）と縄文土器の無文の破片13点がある。



挿図61　第Ⅳ地区　ピット

5．第Ⅴ地区

遺跡範囲の中心部北端を東西方向に縦断する耕作道西側を対象とし、長さ28.4m・幅80cmを調査した。本調査区の北側は土曽川で浸蝕された比高差45mを測る崖となっている。東側は傾斜をなして、北東側にある狭い平坦部へと続いている。

調査した結果、ローム面まで24～15cmと極めて浅く、遺構・遺物は検出されず、遺跡の周辺部に当たると考えられる。

6．第Ⅵ地区

遺跡範囲の南東部南西側を北西・南東方向に縦断する耕作道を対象とし、長さ67.5m・幅1.0mを調査した。本調査区南側は比高差約15mの急斜面となっており、本調査区も南東側に緩やかな傾斜をもっている。

土坑4基を検出した。ほかに遺構はなく、遺物も遺構外では近世陶磁器1点が出土したのみである。

1）土坑

① 土坑80（挿図62）

第Ⅵ地区南東側で検出し、両側が未調査で全体形は不明である。東西方向が170 cmで、深さは67cmを測る。断面形は逆台形を呈し、西側で稜をもつ。

出土遺物は、近代陶磁器片4点と鉄小片1点がある。

② 土坑81（挿図62、第52図）

第Ⅵ地区南東側で検出し、両側が未調査で全体形は不明である。東西方向が136 cmで、深さは30cmを測る。断面形は皿状を呈し、西側で段をもつ。

出土遺物は、石器打製石錘2点（52－6・7）と礫1点がある。

③ 土坑82（挿図62、第52図）

第Ⅵ地区中央部で検出し、北側が未調査で全体形は不明である。東西方向が3.2 mで、深さは13cmを測る。断面形は皿状を呈し、底部が南東側にわずか傾斜する。

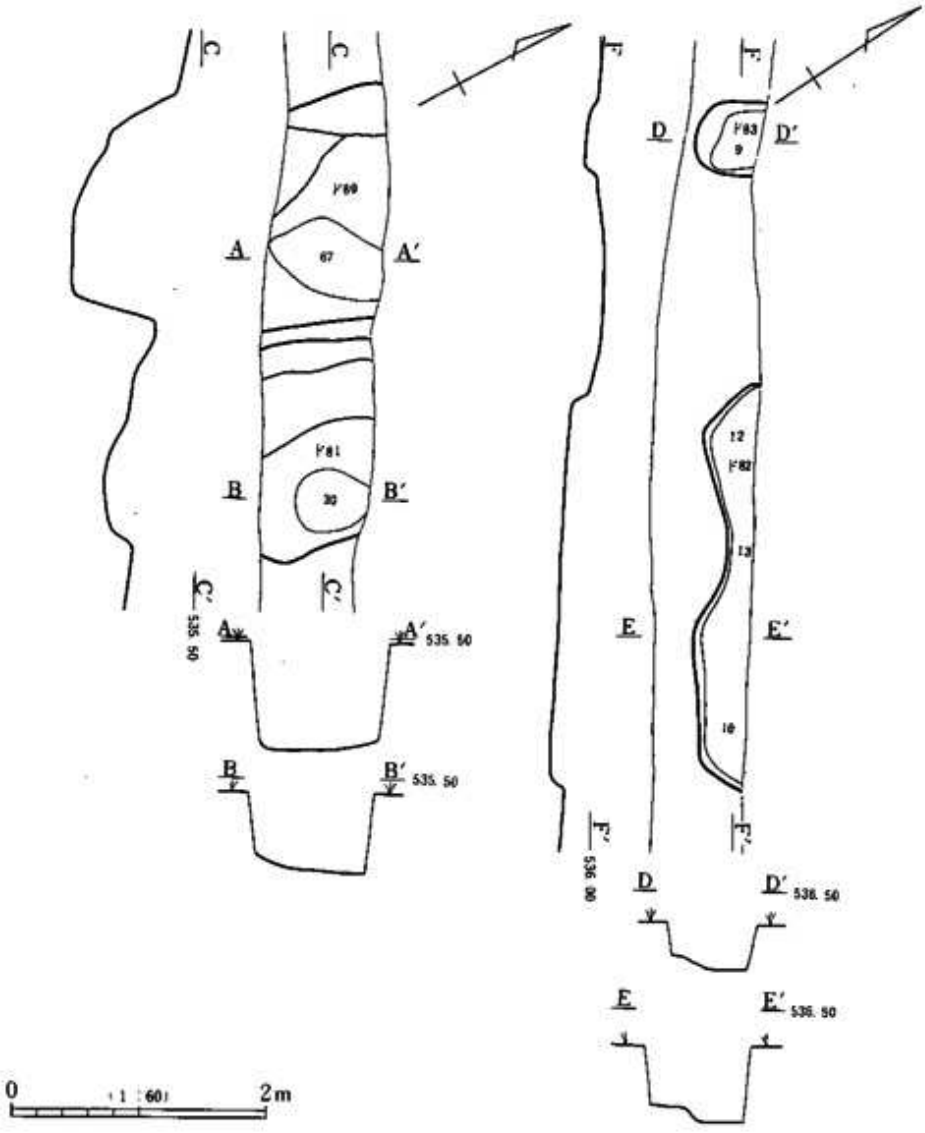
出土遺物は、石器打製石斧2点（52－8・9）がある。

④ 土坑83（挿図62）

第Ⅵ地区中央部で検出し、北側が未調査で全体形は不明である。東西方向が58cmで、深さは9cmを測る。断面形は皿状を呈し、底部が南東側にわずか傾斜する。

出土遺物は、近代磁器小片1点がある。

土坑80～83は土層が共通し、同時期と判断できた。土坑80・83から近代陶磁器が検出されており、該期以降に位置づけられる。



挿図62　第Ⅵ地区　土坑80・81・82・83

7．第Ⅶ地区

遺跡範囲の南東部北東側で台地を東北・南西方向に横断する耕作道を対象とし、長さ117 m・幅200 ～80cmを調査した。

小竪穴１基を検出した。ほかに遺構はなく、遺物は出土しなかった。

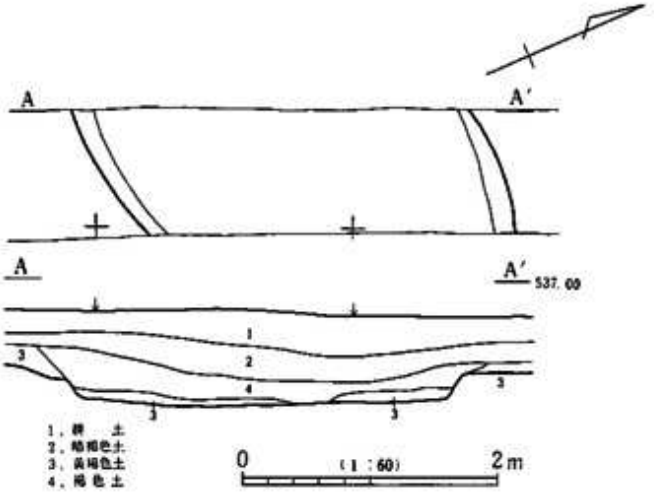
1）小竪穴

① 小竪穴１（挿図63）

第Ⅶ地区中央部で検出し、両側が未調査で、全体形は不明である。南北方向が2.9 mの規模を呈し、検出された南・北壁の高さは23～15cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。底部は中央部が凹み、なにも認められなかった。

出土遺物はない。

黄褐色土層から掘り込まれており、古い感じを受けるが、遺物が出土せず、時期は不明である。遺構の全体形も把握できず、小竪穴という名称も適切なものかも判断できない。



挿図63　第Ⅶ地区　小竪穴１

8．第Ⅷ地区

遺跡範囲の南東端部南東側を東西方向に縦断する耕作道を対象とし、長さ55.6m・幅1.0 mを調査した。本調査区南側は比高差約17mの急斜面となっており、本調査区傾斜の肩の部分に設定したことになる。

調査した結果、ローム面まで47～28cmと浅く、遺構・遺物は検出されず、遺跡の周辺部に当たると考えられる。

9．第Ⅸ地区

遺跡範囲の南東部中央で台地を東北・南西方向に横断する耕作道を対象とし、長さ92.5m・幅220 ～150 cmを調査した。

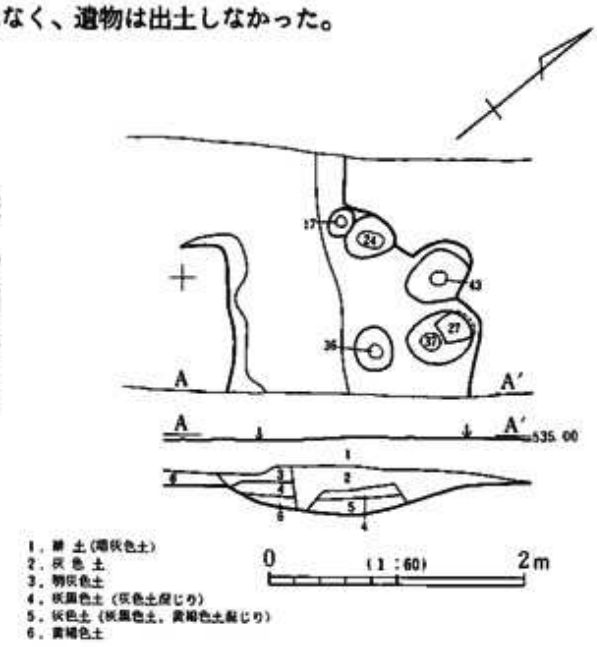
溝址１本とピットを検出した。ほかに遺構はなく、遺物は出土しなかった。

1）溝址

① 溝址10（挿図64）

第Ⅸ地区中央部で検出した。長さ84cmを調査し、両側に延長する。方向はN43° Wを示す。幅は190 ～100 cm・深さ17～14cmを測り、断面形はナベ底状を呈する。南西壁の一部は確認できなかった。北西壁には５個のピットが認められた。

出土遺物はなく、時期は不明である。



挿図64 第Ⅸ地区 溝址10

１０．第Ｘ地区

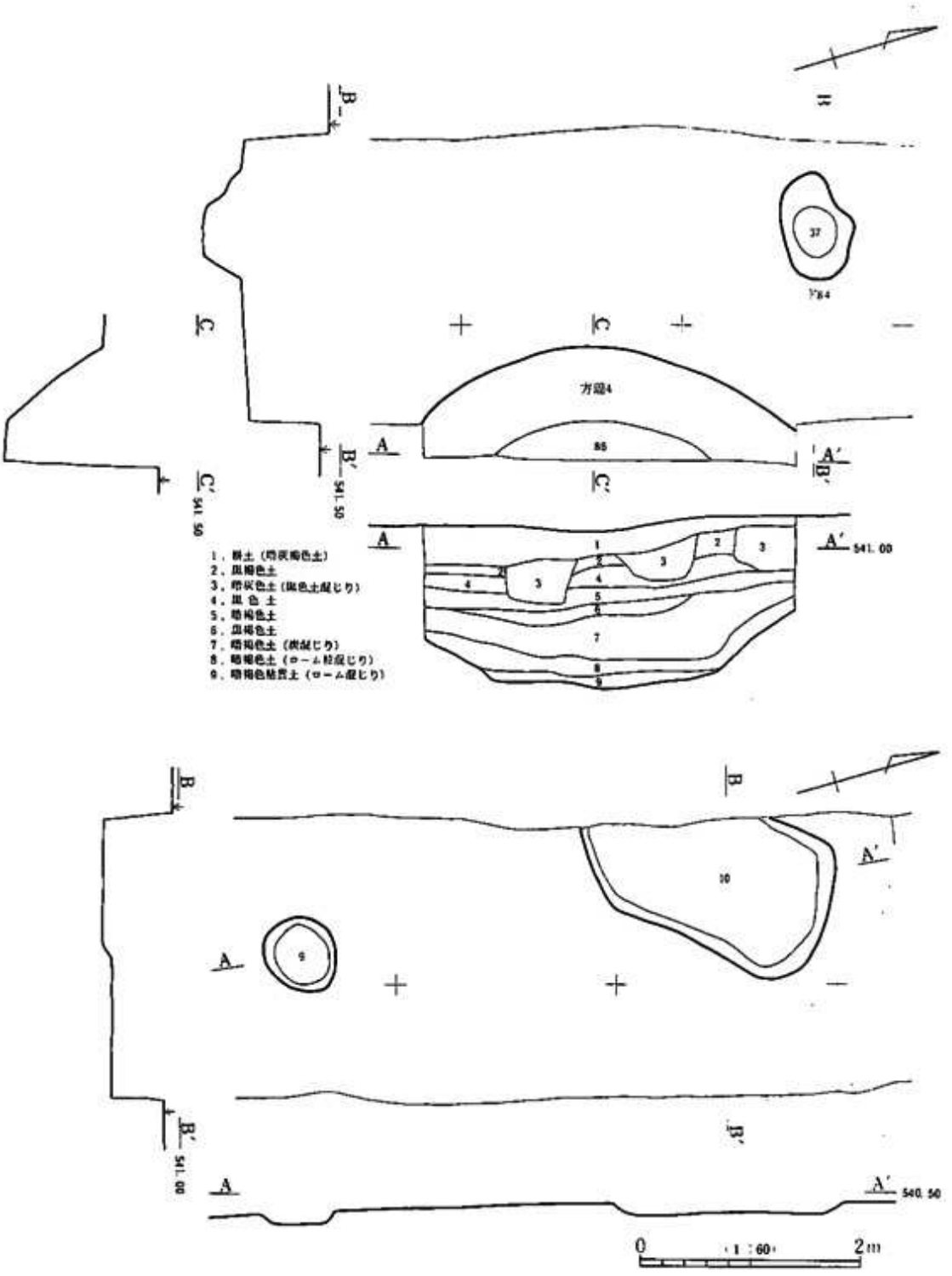
遺跡範囲の中央部南側で、台地肩から中央へ南北方向に延びる耕作道を対象とし、長さ72.6m・幅2.8 ～1.5 mを調査した。

方形周溝墓１基・土坑１基・ピットを検出した。

1）方形周溝墓

① 方形周溝墓４（挿図65、第52図）

第Ｘ地区北東端部で検出し、周溝北側隅の周溝底と壁の立ち上がりを確認したのみで、大部分は用地外となる。形態・規模・主軸方向は不明で、周溝の幅も確認できない。周溝の壁は緩やかな立ち上がりをなし、深さは86cmを測る。覆土は黒色土を主体として、順序だった堆積をなしており、検出も容易だった。



挿図65　第X地区　方形周溝墓４、土坑84、ピット

出土遺物は、弥生時代後期の甕底部（52－11）・台付甕脚台部（52－12・13）・甕破片（52－14）などがある。

出土遺物から弥生時代後期前半に位置づけられる。

一部の調査にとどまり全体形が明確でないので、方形周溝墓とすることは問題が多いといえる。しかし、こうした形態を示す該期の遺構で最も可能性が高いのは方形周溝墓と考え本址とした。

2）土坑

① 土坑84（挿図65、第52図）

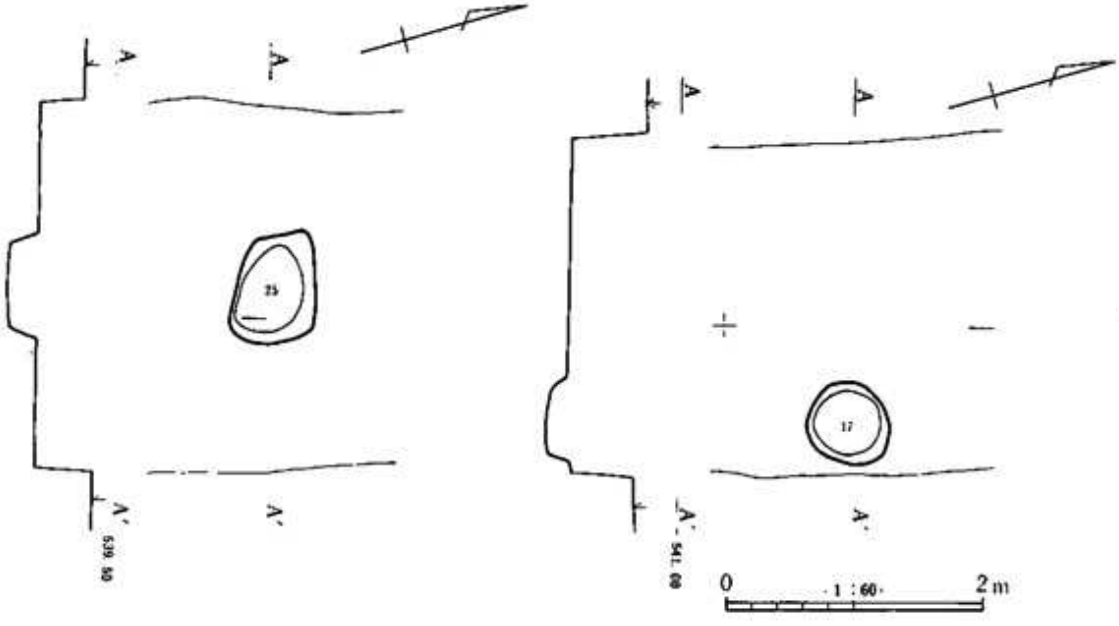
第X地区北東端部で検出し、全体を調査した。95×64cmの不整楕円形で、深さは37cmを測る。断面形は逆台形を示す。

出土遺物は、縄文時代中期中葉の深鉢片（52－16）がある。

そのほかに、土坑状の落ち込みやピットが4箇所で確認された。

3）遺構外出土遺物

遺構外からわずかに遺物が出土した。土器・石器があり、土器は縄文時代の深鉢の小片4点・近代陶磁器片2点・近代磁器の鉢（52－17）、石器は打製石斧（52－18）・粗製石匙（52－19）である。



挿図66　第X地区　ピット

１１．第XI地区

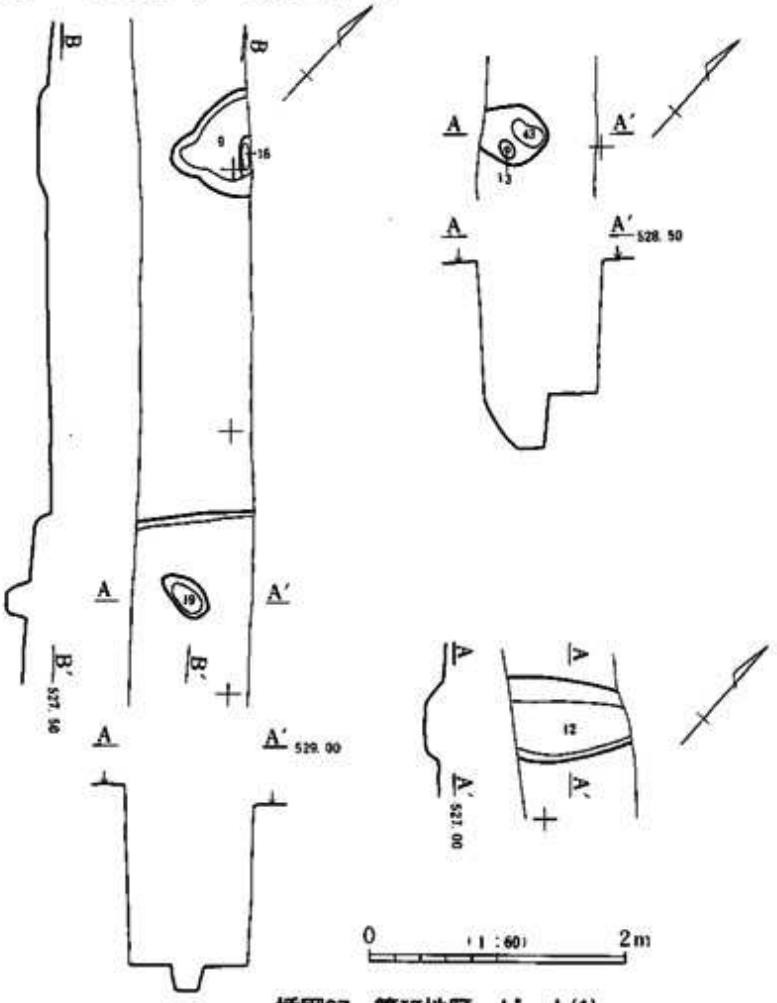
台地南東部北側で一段低い位置に狭い平坦面がある。遺跡範囲からはずれるが、その南西側を北西・南東方向に縦断する耕作道を対象とし、長さ85.5m・幅80cmを調査した。

ピットを検出した。遺構外出土遺物も極めて少なく、縄文土器の小片４点と弥生土器の甕片１点、石器の打製石斧１点（52－20）だけである。

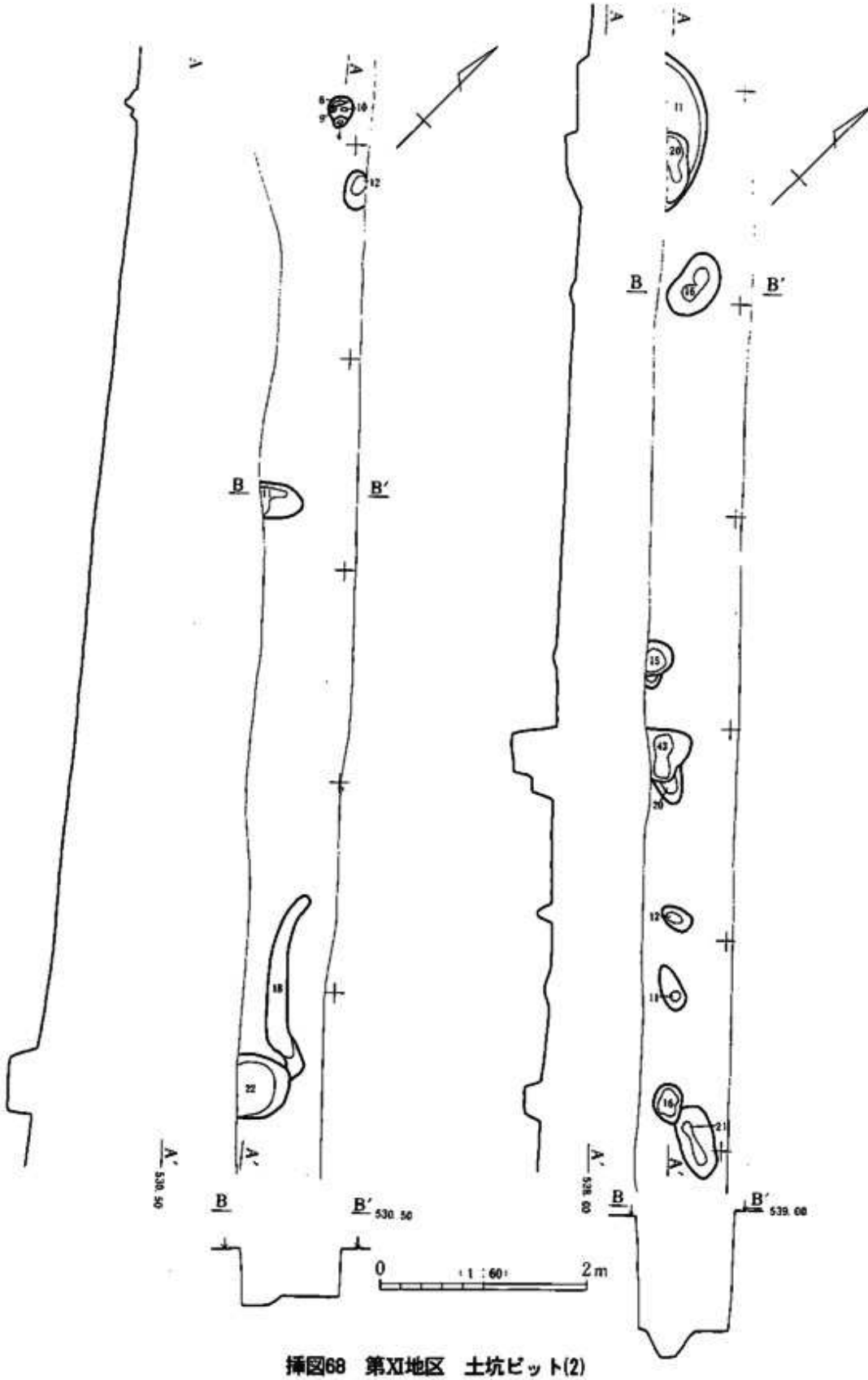
１）ピット

第XI地区全体で検出した（挿図67・68）。特定の集中箇所は認められず、規則性もない。規模は150 ～20cmであるが、30cm前後のものが多い。形態も様々である。

出土遺物はなく、人為的な可能性は薄い。



挿図67　第XI地区　ピット(1)



挿図68　第XI地区　土坑ピット(2)

１２．第XII地区

遺跡範囲の南東側北東端部を北西・南東方向に縦断する耕作道を対象とし、長さ58m・幅1.7mを調査した。本調査区の北側は土曽川で浸蝕された比高差65mを測る崖となっている。

調査した結果、ローム面まで43～15cmと極めて浅く、遺構・遺物は検出しなかった。

１３．第XIII地区

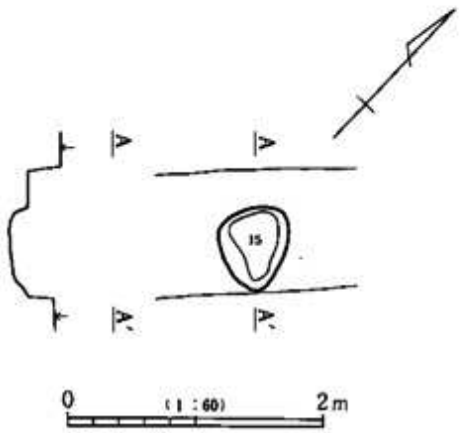
遺跡範囲の南東側南東端部を北東・南西方向に縦断する耕作道を対象とし、長さ62m・幅80cmmを調査した。本調査区の東側は上段と下段を画する比高差80mを測る大段丘となっている。

調査した結果、ローム面まで31～14cmと極めて浅く、ピット１個が検出されたのみで、遺物は何も出土しなかった。

１）ピット

ピット１個（挿図69）を第XIII地区北東側で検出し、全体を調査した。64×50cmの楕円形で、深さは15cmを測る。断面形はナベ底状を呈する。

出土遺物はない。



挿図69　第XIII地区　ピット

１４．第XIV地区

遺跡範囲の南東側北端を北西・南北方向に曲がって縦断する耕作道を対象とし、北西側長さ62ｍ・幅2.4 ～1.4 ｍ、南東側長さ18.5ｍ・幅1.6 ｍの２箇所を調査した。本調査区の北側は土曽川で浸蝕された比高差60ｍを測る崖となっている。

遺構・遺物は検出されず、遺跡の周辺部に当たると考えられる。

１５．第XV地区

昭和61年度の第Ｉ地区調査中に、すでに工事完成済みの遺跡範囲北西側の北東部の耕作道が、再工事を実施していることが判明した。未調査箇所だったので、一部にトレンチを設定して、状況を確認することにした。工事をしている道路の両端を長さ14.6ｍ・幅80cm前後調査した。当初は名称を付さなかったが、整理の都合上第XV地区として報告する。

土坑状の穴とピットが検出された。

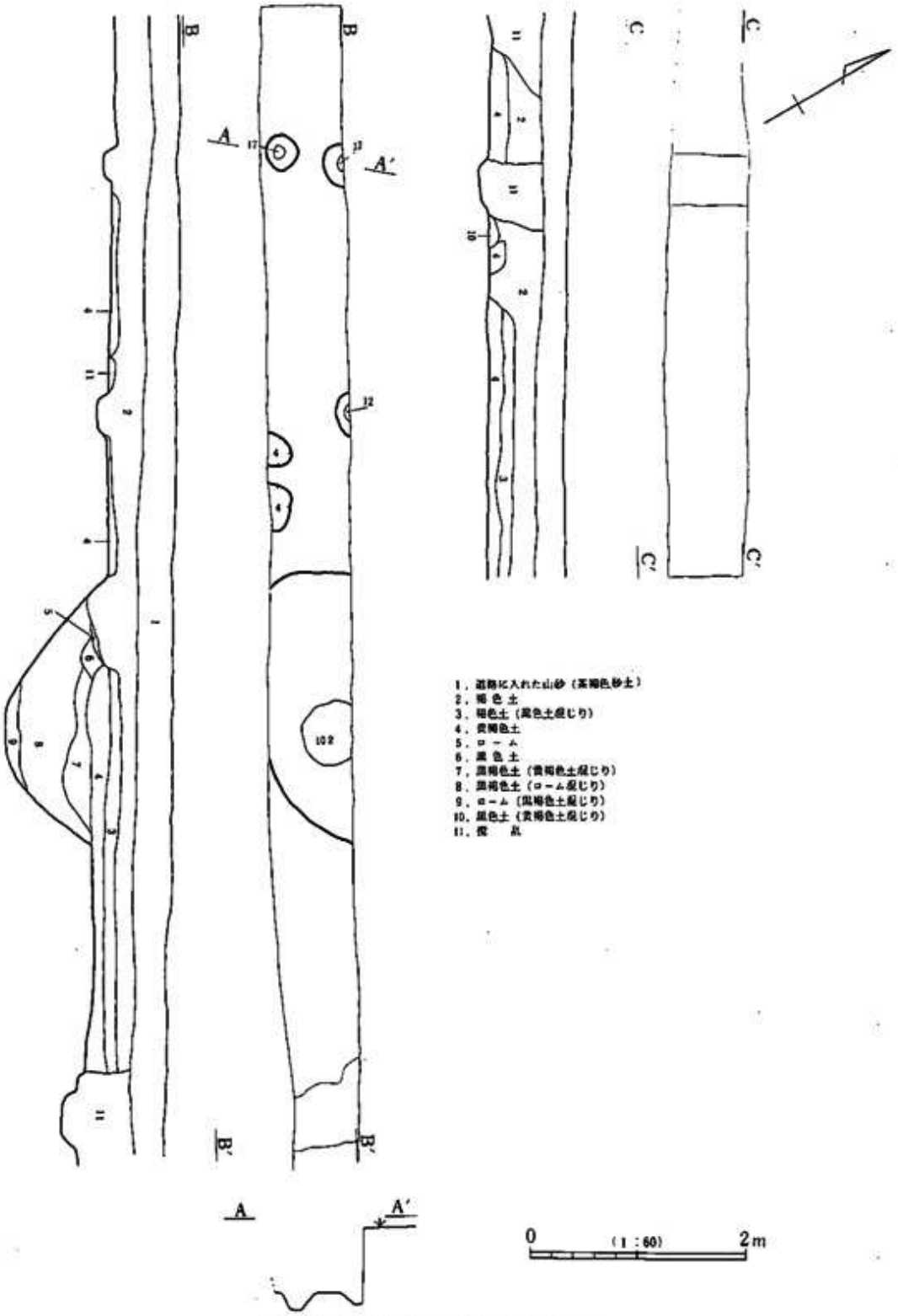
１）遺構

北西側に設定したトレンチ（挿図70）からは、北西・南東方向が2.5 ｍを測る土坑状の穴を検出した。深さは102 cmを測り、壁は緩やかな立ち上がりをなす。遺物は出土しなかった。

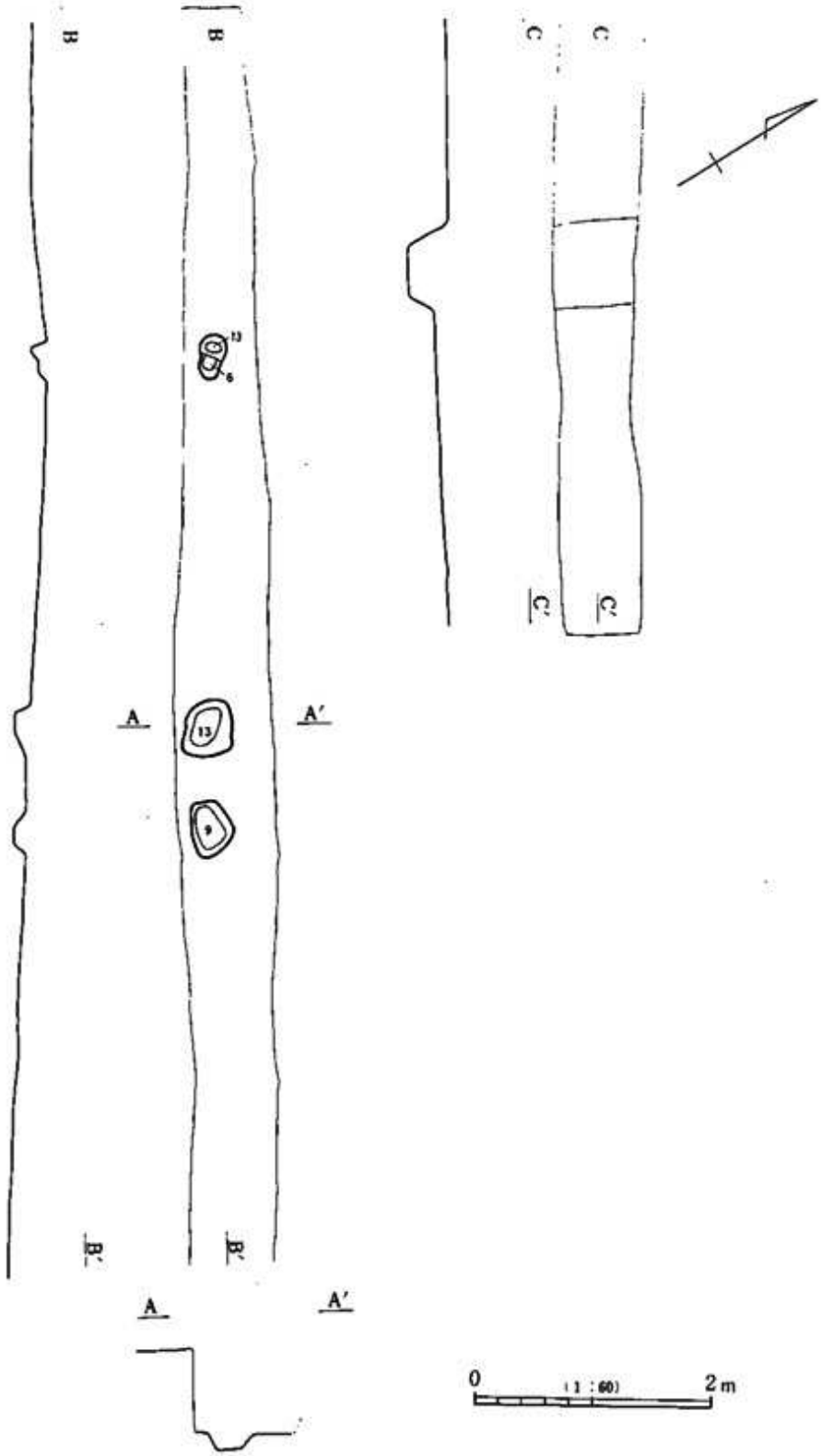
ほかに、直径40～30cmのピット５個がある。いずれからも遺物は出土しなかった。

南東側に設定したトレンチ（挿図71）からは、直径50～20cmのピット３個が検出された。遺物の出土はない。

限定された調査のため、遺構や調査箇所の状況を十分把握するまでには至らなかった。遺物の出土もなかったが、遺跡の範囲内として十分にとらえられる箇所であることだけは確実である。



挿図70　第XV地区　北東側トレンチ



挿図71　第XV地区　南西側トレンチ

Ⅳ　町道上中線新設工事

1．経　過

1）調査の経過

昭和62年度において、上郷町役場建設課が実施する町道58号線（通称上中線）の新設が計画された。その北東側は大明神原遺跡の北西部に当たるため、建設課と上郷町教育委員会の担当職員による保護協議を実施した。その結果、遺跡の一部が破壊されることが余儀なくなったために、発掘調査を実施して記録保存を図ることとした。

発掘調査は、昭和62年６月22日から24日までの３日間で実施した。

当初から、重機を導入して最大限に調査区を拡張し、ほかの発掘も目白押しだったので、効率的な調査を心掛けた。調査区北東側では遺構はなく、南西側で１軒の竪穴住居址を検出したのみだったので、一部の測量を残して短期間で終了することができた。

整理作業は平成元年度に実施し、９月に原稿を執筆して本報告書刊行となった。

2）調査組織

① 調査団

調査担当者	山下　誠一					
調査補助員	米山　義盛	伊藤　泉				
作業協力員	井坪　芳一	大坪　安江	片桐　正二	小西　広司	菅沼　庄三	
	中原　友江	原　祐三	樋口　勇造	細田　重	松田　照江	
	宮脇　直人	麦島　孝男	山岸　章	渡辺　栄子		

② 事務局

吉川　昭文（教育委員会教育長）
菅沼　富雄（　同　上　事務局長　～1．3）
林　慶一（　　同　上　　1．4～）
吉川　勝一（　同　上　局長補佐）
吉川　金利（　同　上　社会教育係　1．4～）
篠田　公平（建設課長）
井坪　憲俊（同上工務係）
山下　誠一（教育委員会社会教育係）
今村　美和（　　同　上　　）

2．調査結果

1）調査の概要

調査地点は、遺跡範囲の北西部で南西側に広がる凹地に向けて緩やかに傾斜する箇所に当たる。現地目は果樹園であったが、過去に水田として利用されており、2段に造成を受けていた。土層の観察でも、水田耕土や床土が確認された。

調査区は長さ約50m・幅8mで設定し、竪穴住居址を1軒検出した。

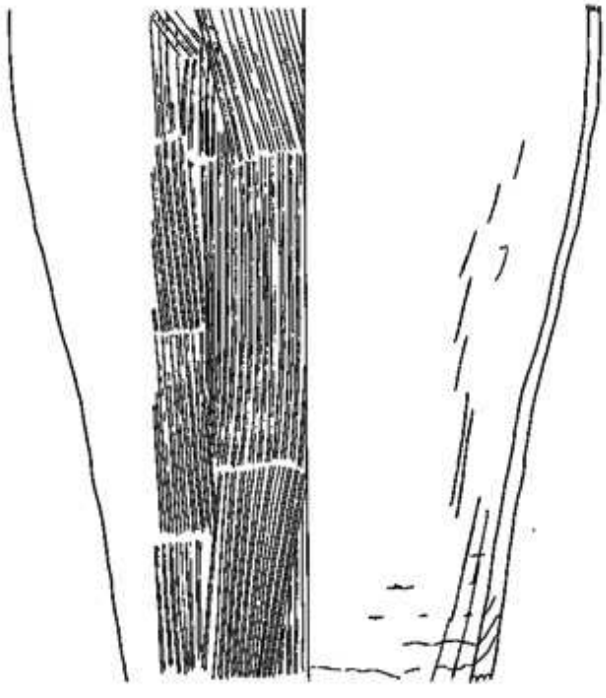
2）遺構と遺物

① 11号住居址（挿図72・73）

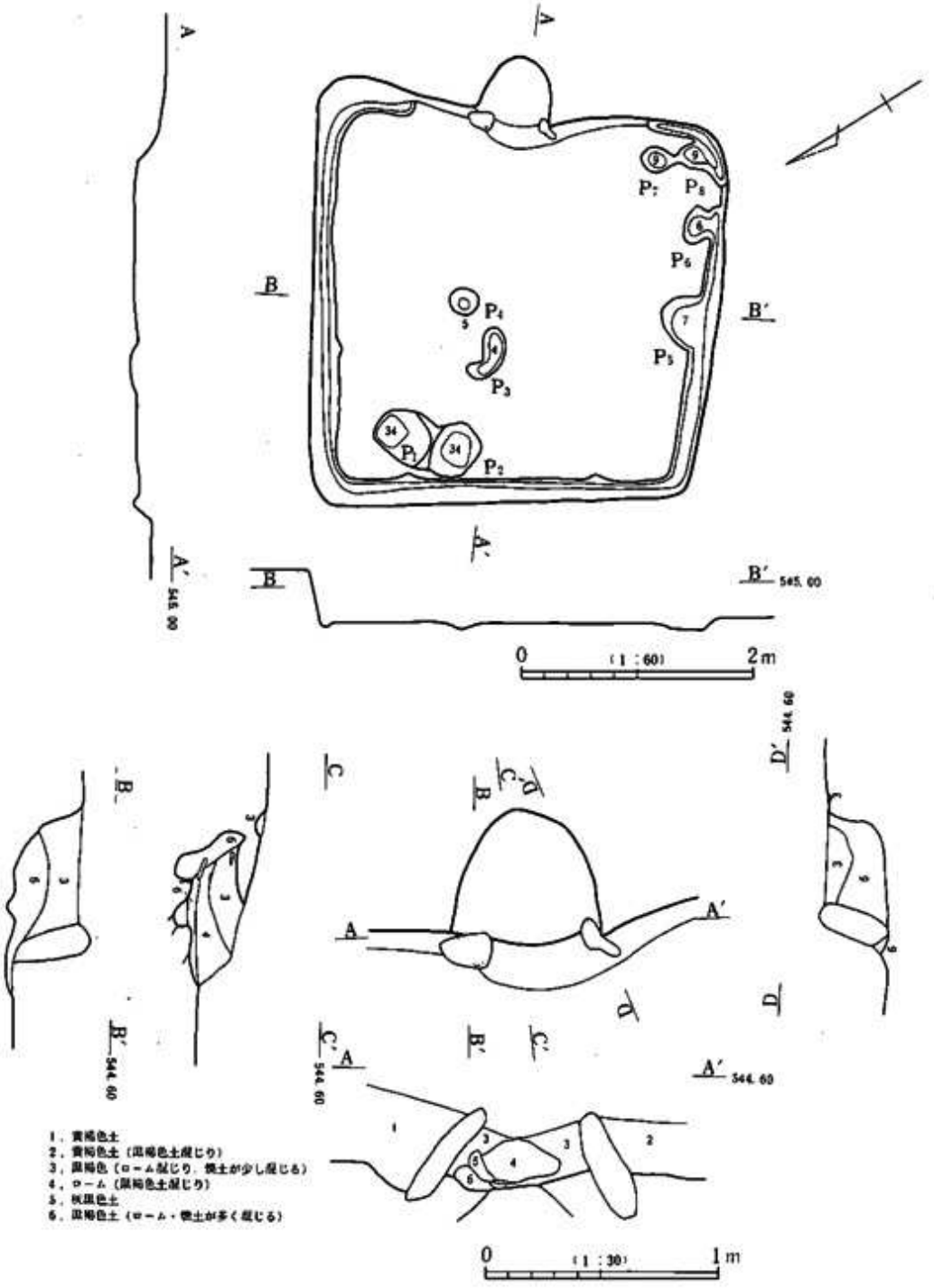
調査区南西側で凹地の湿地帯縁辺部から検出した。3.2 ×3.5 mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN124°Eを示す。壁高は50～3㎝を測り、やや緩やかな壁面をなす。南東側は水田の造成で削平を受けている。カマドが設置される南東壁を除いて壁下全面に周溝が確認され、幅20～10㎝・深さ9～4㎝を測る。床面はたたき状に堅く極めて良好であるが、北側の壁際が若干軟らかい。柱穴はP1～P8があるが、北西壁下北隅よりに位置するP1・P2を除き浅く、主柱穴は確認できない。カマドは南東壁中央に位置する石芯粘土カマドで、煙道部が壁外に突出する。壁の位置が焚口部となり、2個の石を内傾させて組み袖石としている。焼土はあまり認められなかった。

出土遺物は極めて少なく、カマドの焚口部に落ち込んでいた土師器甕（挿図72）のみが図化できた。外面がハケ調整され、胴部が長くなる状態を呈する。ほかに、ハケ調整の土師器甕破片2点・ロクロ調整の土師器甕破片1点・無文の破片1点・須恵器坏破片1点が出土した。

出土遺物から平安時代に位置づけられる。



挿図72　11号住居址出土土器



挿図73　町道上中線調査区　11号住居址

② 遺構外出土遺物

遺構外から、縄文土器中期の深鉢片がわずかに出土した。磨滅が著しく、流れ込みによる遺物である。

ほかに遺構・遺物はなく、当遺跡の主体をなす縄文時代の集落の中心地域からははずれる箇所と判断できた。

V まとめ

昭和59年度の第Ⅰ次調査から開始された土地改良総合整備事業大明神地区工事に伴う大明神原遺跡の発掘調査は、本報告書に収録した第Ⅲ～Ⅴ次調査をもって終了した。発掘調査6年、整理作業1年の合計7年間の長い年月にわたる調査の結果、不十分ではあるが遺跡全域にトレンチによる調査のメスが入ったことになる。古くから著名であった本遺跡の状況が明らかになったといえ、ここでは調査によって得られた問題点を指摘してまとめとしたい。

最初に、大明神原遺跡で検出された主な遺構をまとめてみる。なお、遺構番号の前に付したローマ数字のⅠ・Ⅱは、第Ⅰ・Ⅱ次調査で検出された遺構であることを表している。調査が改良・新設される耕作道に限られたため、規模の小さな土坑を除けば遺構の全体を明らかにできたものは少ない。

竪穴住居址

縄文時代……Ⅰ－2号住居址・Ⅰ－3号住居址・Ⅰ－6号住居址・Ⅰ－7号住居址・Ⅱ－3号住居址・12号住居址・13号住居址・14号住居址・15号住居址・16号住居址・17号住居址・18号住居址・19号住居址・20号住居址・21号住居址・22号住居址23号住居址・24号住居址・25号住居址・26号住居址・27号住居址・28号住居址29号住居址

弥生時代……Ⅰ－1号住居址・Ⅰ－5号住居址

平安時代……11号住居址

時期不明……Ⅱ－1号住居址・Ⅱ－2号住居址

方形周溝墓

方形周溝墓1・方形周溝墓2・方形周溝墓3・方形周溝墓4、溝址2・6、溝址3

溝址4・5

溝址・溝状遺構

溝址1・7・8・9・10、溝状遺構1

土坑

土坑Ⅰ－1～5・土坑Ⅱ－1・土坑7～84

① 集落構成について

ほぼ全域にトレンチが入れられたことになり、遺跡全体の様相が少し明らかになった。ただし、遺跡北西側の調査が不十分であり、かつ広い範囲を拡張する調査でないため、おおよその傾向がつかめるにすぎない。まず、集落構成について時期毎に考えてみよう。

縄文時代　台地全体に遺構が分布するのでなく、集中する箇所が認められる。台地上の微地形や環境に適した規制が働いていると考えられ、比較的広い台地上における居住域や墓域・食料確保の場所を知る上での資料になると考えられる。遺構では竪穴住居址が23軒あり、土坑の大部分も該期のものといえる。集落の変遷について十分なデータはないのであるが、詳細な位置づけが不可能なものを除く時期毎に竪穴住居址をみると次のようである。

前期終末もしくは中期初頭……Ⅱ－3号住居址

中期中葉前半……Ⅰ－7号・13号住居址

中期後半初頭……12号・16号・17号・19住居址

中期後半前半……14号・15号・23号住居址

中期後半後半……16号・18号・24号・25号住居址

中期終末……Ⅰ－3号・22号・26号住居址

前期終末以前の遺構は確実なものはないが、早期終末の押型文土器やセンイを含む条痕文土器が出土しており、該期から生活域として利用されたものと推定される。さらに、もっと古い時期の遺構・遺物が検出される可能性は十分に考えられる。

安定した居住域となるのが中期からといえる。台地南東側に位置する第Ⅲ次調査第Ⅲ・Ⅳ地区の西側から中期後半から終末まで継続する遺構を集中して検出した。ここから南東側の先端部にある平坦面に続くわずかな傾斜があり、地形を画している。その傾斜の肩の部分から西側に集落が展開している。南北方向の範囲は確定できないが、表採遺物の分布状況から勘案すれば、台地幅いっぱいのに展開していたと考えられる。この箇所をはずれると遺構は散在しており、本遺跡の縄文時代の集落の中心がここにあったことは確実である。150 ×150 mほどの範囲を想定できる。南側の斜面の下には水が求められ、当時も極めて安定した台地であったと考えられる。

中期中葉以前になると、中葉前半の竪穴住居址が中期後半の集落域北端に2軒あり、それ遺構に空白の時期がある。当地方では該期の遺構検出は多くないのであるが、本遺跡でも同様であった。調査範囲が少ないため、該期の遺構はなかったとは断定できず、この集落の確定は今後に残された課題といえる。

土坑も集落域を中心にして検出された。当然、住居址と密接な関連を持って存在するのであろうし、これを抜きにしては縄文時代の集落を語れないと考えられる。しかし、分布などをみるには調査範囲の制約が大きく、明確な姿を提出はできない。その中で、第Ⅲ地区の西側では、大きな平面形を呈して深い堀方を持つものが並ぶように検出された。底部にはたたき状の箇所が認められることなどが共通しており、何等かの関連が想定できる。最近になって調査例が増加しているいわゆる『方形配列土坑』である可能性があることを指摘しておく。

集落中心地のほかにも住居址などが検出されている。ややはっきりしないが遺跡北東側で検出されたⅡ－3号住居址が前期終末もしくは中期初頭とすれば、中期後半と地域を異にしており、時期別の集落立地を考える資料になり得よう。

弥生時代　予想外であった遺構に方形周溝墓がある。縄文時代の集落域とほぼ同じ範囲の台地南東側で、方形周溝墓の可能性が高い溝址を含めれば７基が検出されており、弥生時代の墓域としての姿が明らかになったと考えている。該期の竪穴住居址はこの北端にＩ－１号・Ｉ－５号住居址があるが、周辺には何もなく、方形周溝墓を７基も構築する集落がこの箇所に展開していたとは考えにくい。

当地方の最近の調査によって、方形周溝墓などの墓域と集落の関係を把握できる例が増加している。町内の垣外遺跡では（山下1989）、竪穴住居址23軒・方形周溝墓11基が調査され、付近のツルサシ・ミカドの両遺跡とともに、150 mくらいを隔てて墓域と集落域を区別していることが判明した。同様な例は、喬木村の帰牛原遺跡群でも確認されており（佐藤1982）、台地先端部に方形周溝墓を主体とする墓域を設け、400 mほど離れた台地の内部を集落としている。大明神原遺跡でも同様に墓域と集落域が区別されたものと考えられるが、前述したように、集落域の検出はできなかった。台地崖下南側の低湿地を挟んだ位置にある桜畑・梶垣外遺跡などに集落域を想定するよりも、遺跡内のいずれかにあったと考えるほうが、前述の例からも見られるように、無理のない解釈といえる。そうすれば、やや不十分な調査に終わった北西側が一番の候補地になるかもしれない。しかし、あくまでも推定の域をでないので、付近の遺跡の調査を含めた今後の課題である。

そのほか　昭和62年町道上中線調査地において、平安時代前半と考えられる竪穴住居址が単独で調査された。南西側凹地の湿地帯に面する場所に位置しており、未調査部が多いとはいえ大規模集落を構成するとは考えられず、小規模もしくは単独で存在する可能性が高い。同様な例は、垣外遺跡・ツルサシ遺跡などで確認されており（山下1989）、いずれも上段地帯に存在する。該期の大規模集落は、町内では矢崎遺跡（今村1988）、ほかに恒川遺跡群（小林ほか1986）・清水遺跡（佐藤1976）など下段地帯に多く検出されており、主に生産に関する遺跡立地からくる違いを表していると考えられる。

② 遺構・遺物について

全貌を把握した遺構が限られるので、遺構・遺物個々に考察できるものは少ない。その中で、２本の耕作道の接点で検出できたために全体の調査ができた13号住居址は、縄文時代中期前半という当地方では調査例が極めて限られる時期だけに、良好な資料になるといえる。そこで、13号住居址の遺構・遺物について簡単に触れてみたい。

遺構　平面形は小判形を呈し、極めて緩やかな壁面をなすのが特徴となる。炉址は土器埋設炉となり、周辺に顕著に焼土が認められた。これよりやや先行する中期初頭の増田遺跡14号住居址（山下1989）と比べると、平面形のが円形から小判形に変わり、土器埋設炉や住居址の規模がやや大きくなるほかは、あまり違いが認められない。中期中葉から一般化する石組炉や垂直に近い壁面などとの違いは鮮明である。もう少し前後する時期からの変遷を追うことによって、住居址

築造技術の変化を知ることができるといえる。

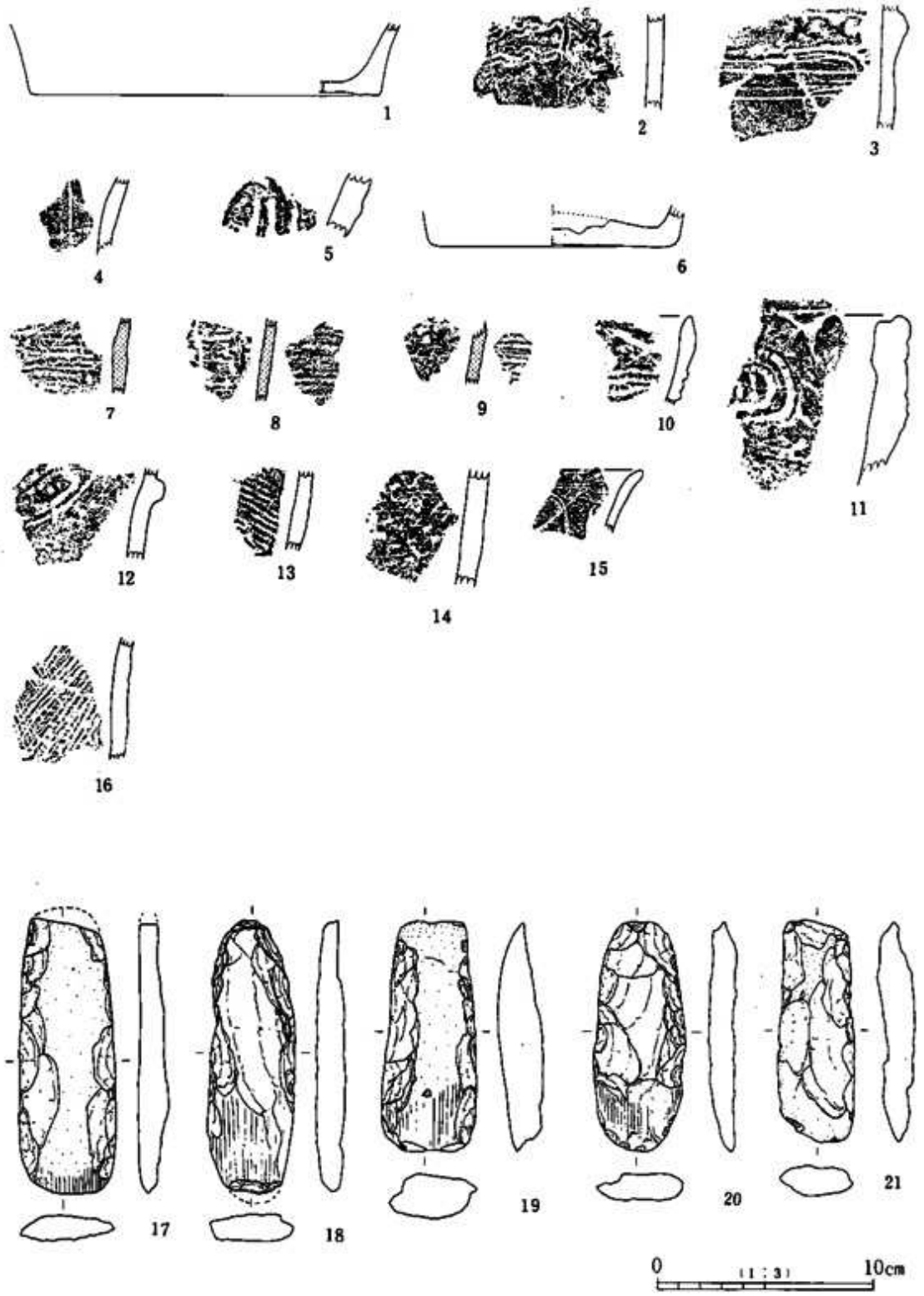
遺物　十分ではないが当地方の該期土器組成を知る上での好資料と考えられる。主体をなすものは竹管文が施される平出３Ａで、これが当地方の特徴を示す土器であろう。ほかに、爪形文や押引文が施文される八ケ岳山麓からの影響を受けた土器があり、いわゆる井戸尻編年との対比を考える資料になろう。また、ほぼ器形・文様構成を知ることができる炉址の埋設土器は、あまり変化せずにかなり長期間にわたって存在することが確かめられている平出３Ａの形式変化を追及する上での好資料になると考えられる。

大明神原遺跡の発掘調査から得られた問題点・課題について記してきたが、十分に整理できたものでなく思いつくまま述べたにすぎない。今後に残された課題の方が多いことに気付いて、呆然としているのが現実である。幸に、大明神原遺跡の大半は現状のままで保存できている。とくに、縄文時代の集落域と弥生時代の墓域の南東側は、遺構検出面が比較的深い場所ということもあり、良好に依存している。今後の保存に十分注意すべきである。

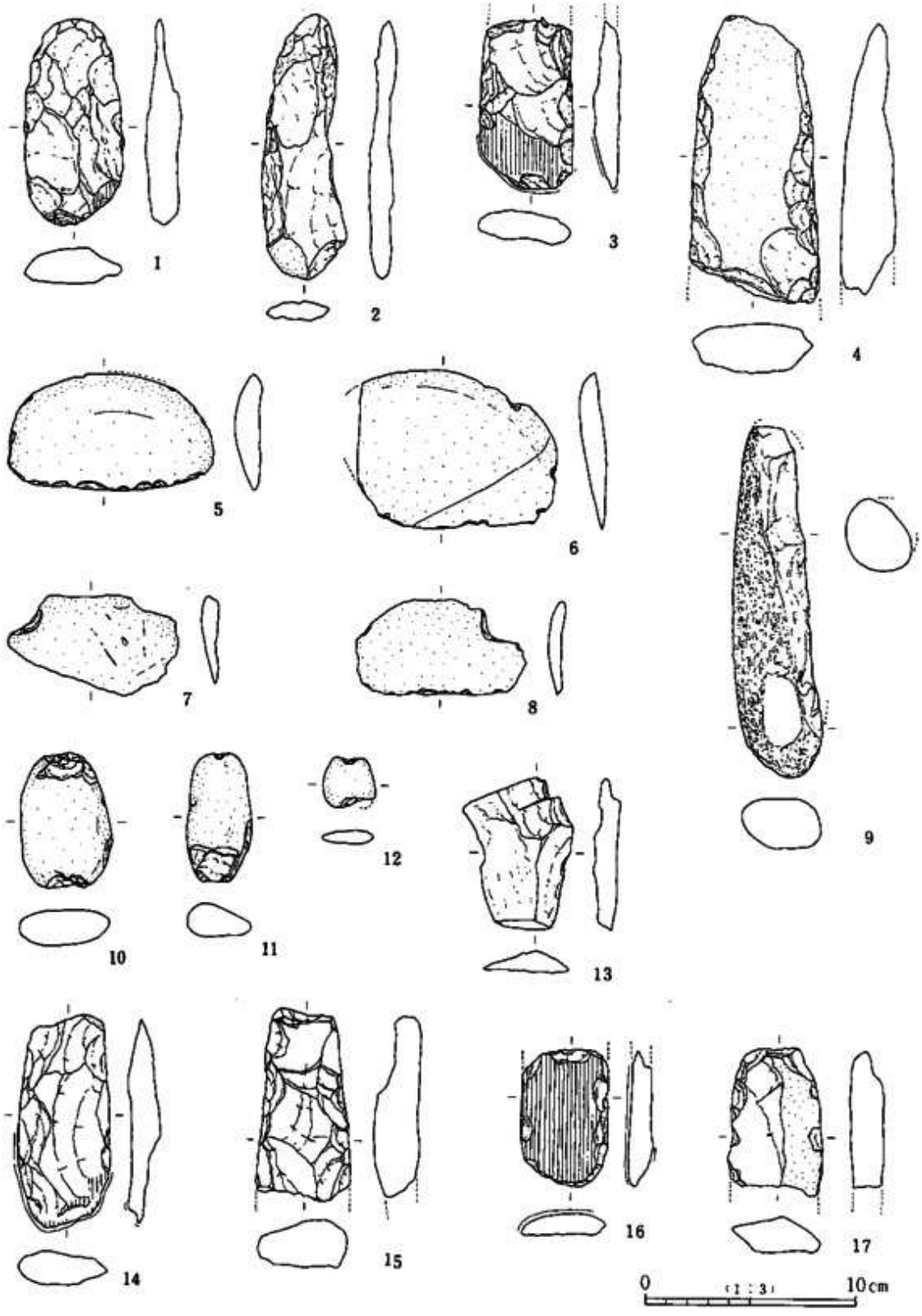
終りに、第Ⅰ・Ⅱ次調査を担当された佐藤甦信氏、第Ⅲ・Ⅳ次調査団長今村善興氏、第Ⅲ次調査の推進役となっていただいた米山義盛・伊藤泉両氏、調査にご理解いただいた地権者の方々など様々な人達に支えられて本書ができたことを明記し、お礼を申し上げる。

［引用・参考文献］

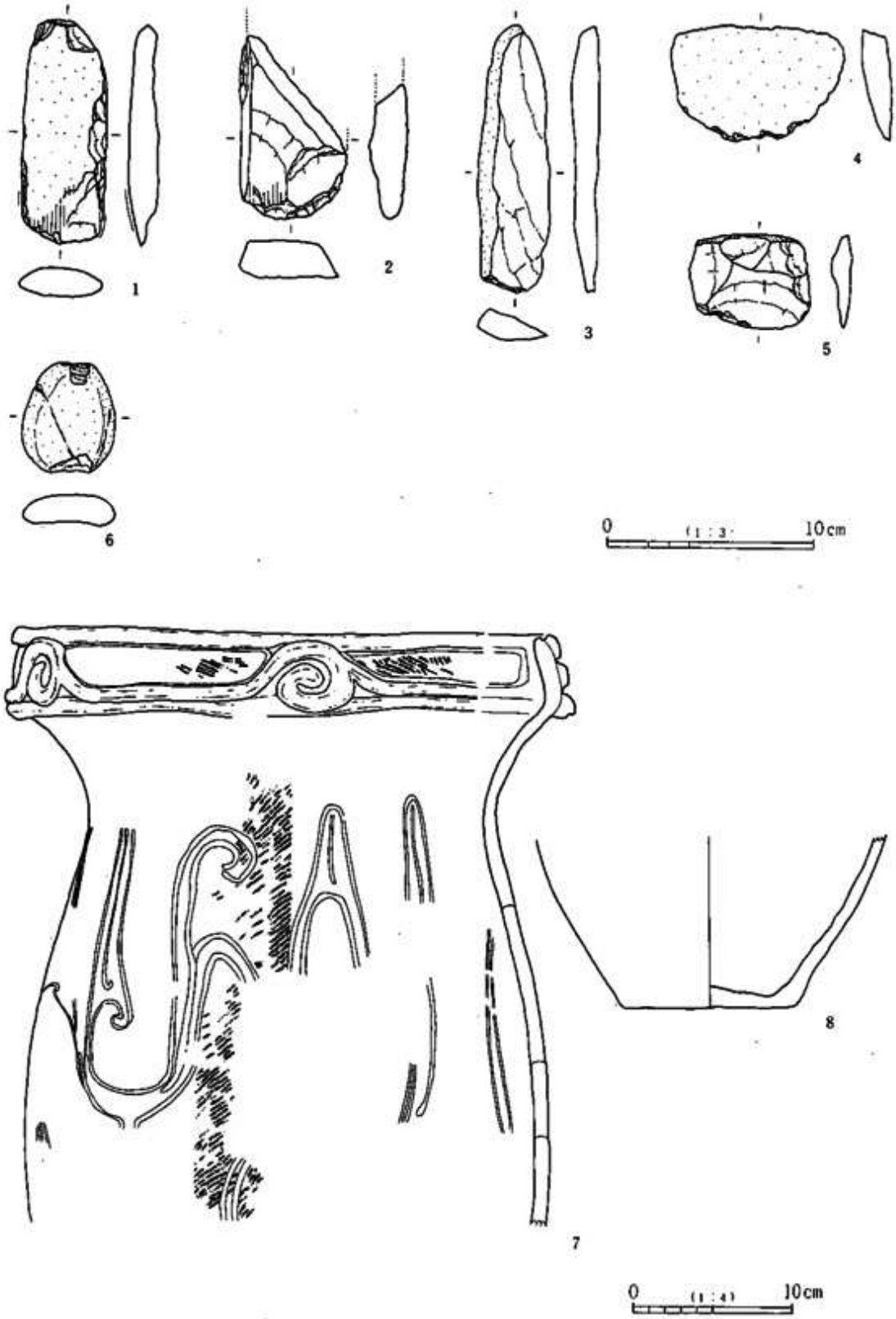
今村善興　1987　『南条棚田遺跡Ⅱ』　上郷町教育委員会
今村善興　1988　『矢崎遺跡』　上郷町教育委員会
今村善興　1989　『中島・矢崎遺跡』　上郷町教育委員会
飯田高等学校　1977　『高松原』
小林正春ほか　1986　『恒川遺跡群』　飯田市教育委員会
佐藤甦信　1976　『清水遺跡』　上郷町教育委員会
佐藤甦信　1982　『帰牛原遺跡群』　喬木村教育委員会
佐藤甦信　1983　『高松原Ⅱ』　上郷町教育委員会
佐藤甦信　1985　『黒田大明神原遺跡』　上郷町教育委員会
佐藤甦信　1986　『黒田大明神原遺跡Ⅱ』　上郷町教育委員会
山下誠一　1989　『ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡』　上郷町教育委員会



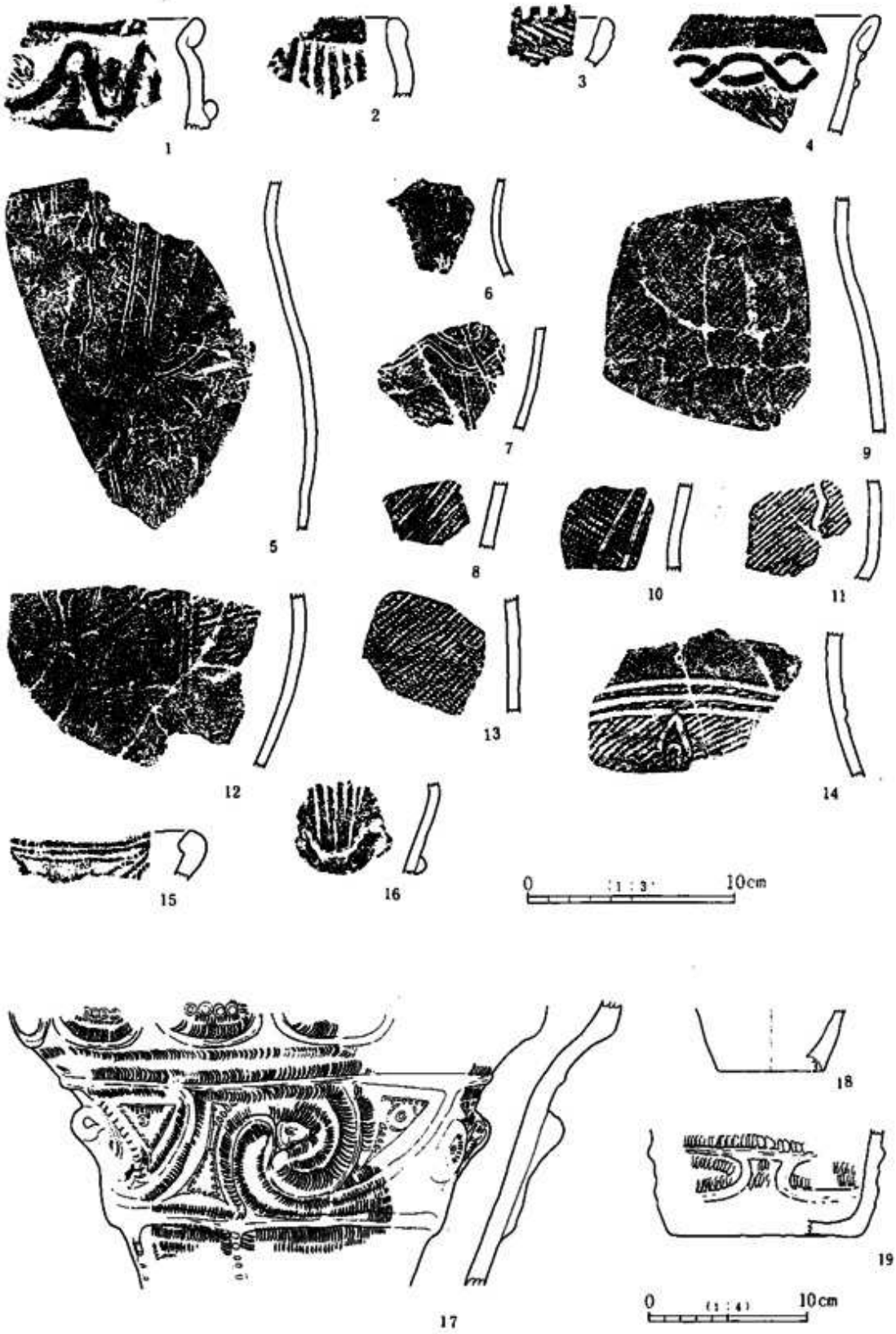
第1図　第Ⅳ地区　溝状遺構1（1～5），第Ⅰ地区　土坑7（6），溝址1（17～21），
遺構外（7～16）出土遺物



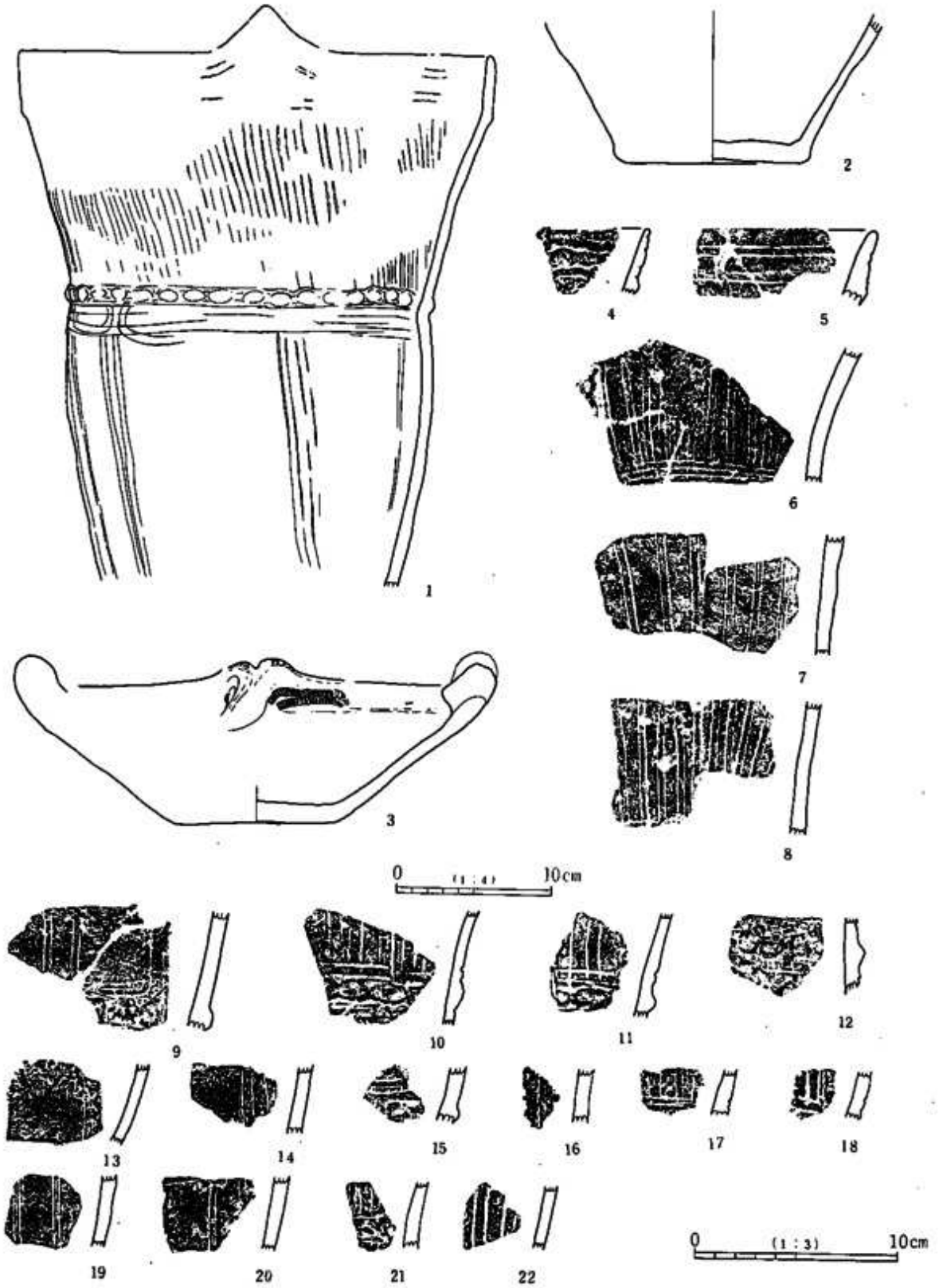
第2図　第Ⅰ地区　溝址1（1～12），土坑9（13），遺構外（14～17）出土石器



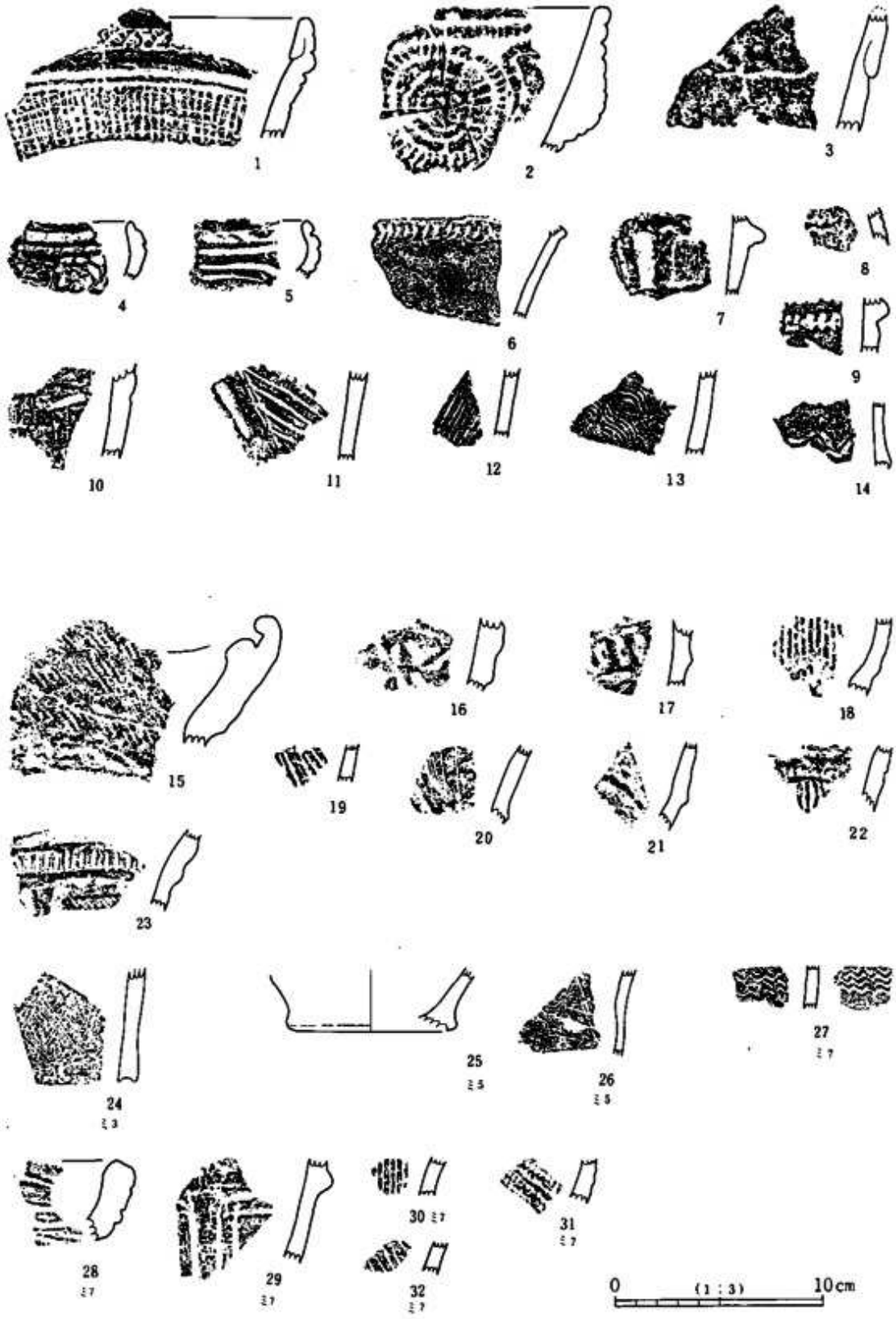
第3図　第Ⅰ地区　遺構外(1～6)，第Ⅱ地区　12号住居址出土遺物



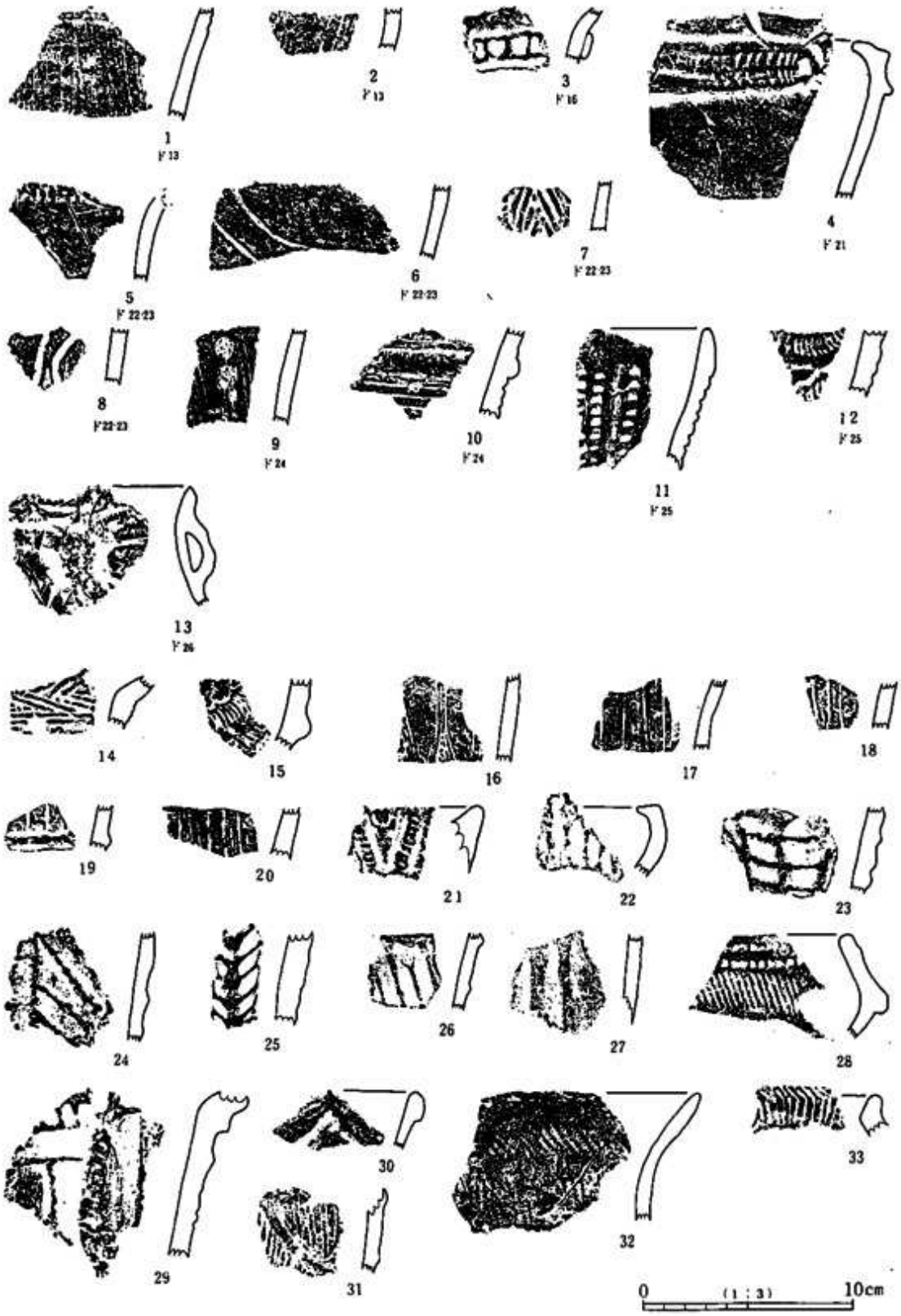
第4図　第Ⅱ地区　12号住居址(1～16)，13号住居址(17～19)出土土器



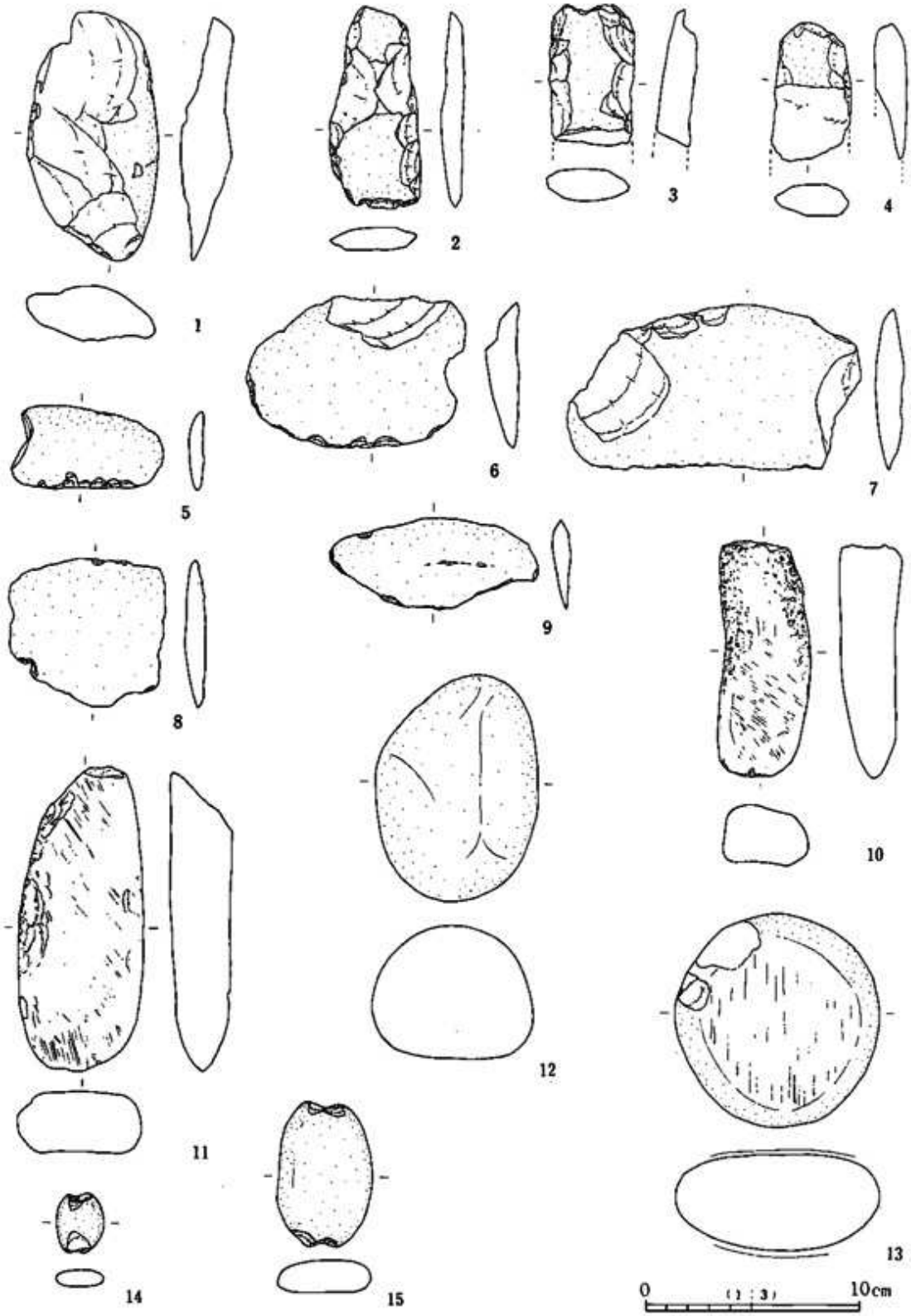
第5図　第Ⅱ地区　13号住居址出土土器



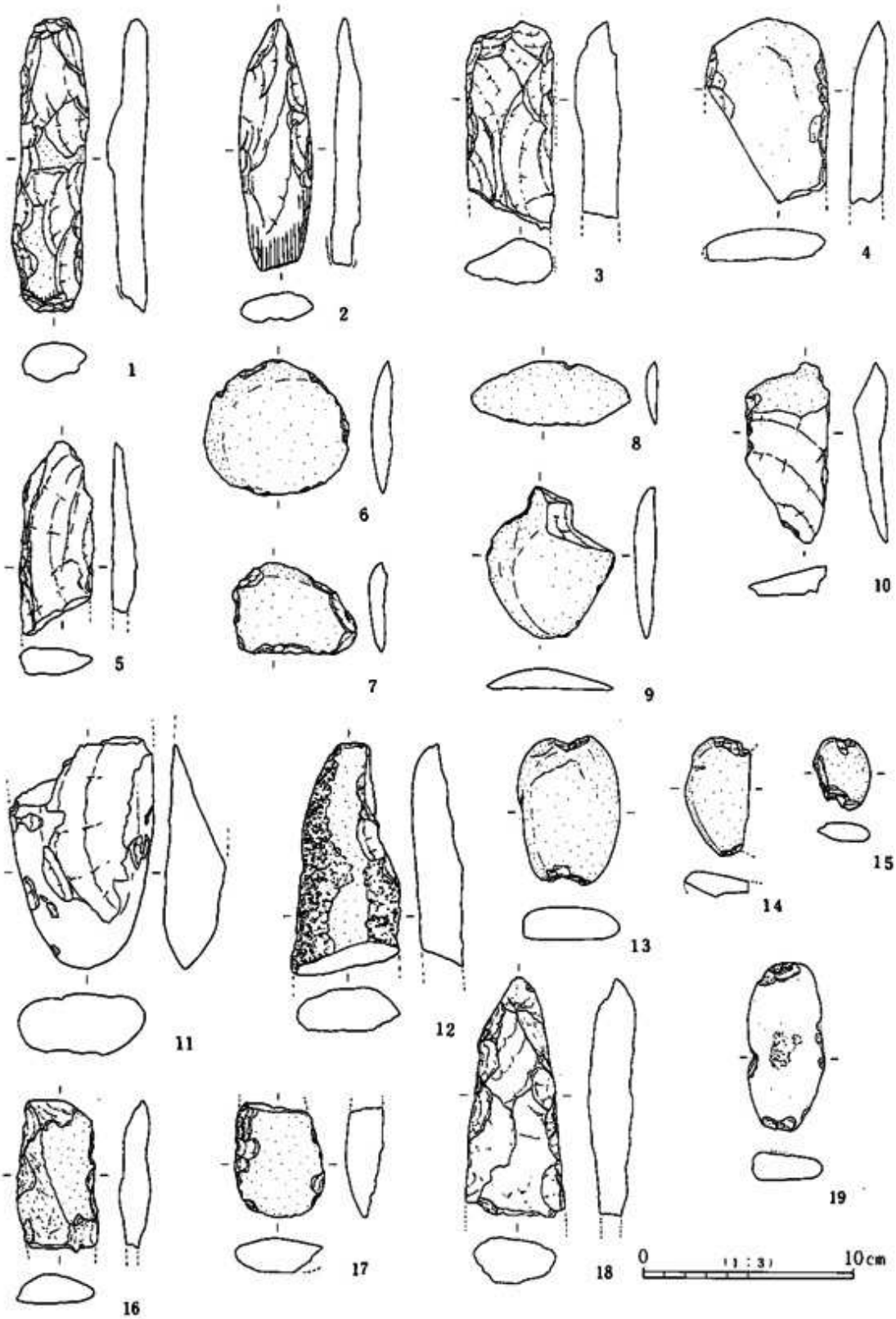
第6図　第Ⅱ地区　13号住居址（1～14），29号住居址（15～23），溝址（24～32）出土土器



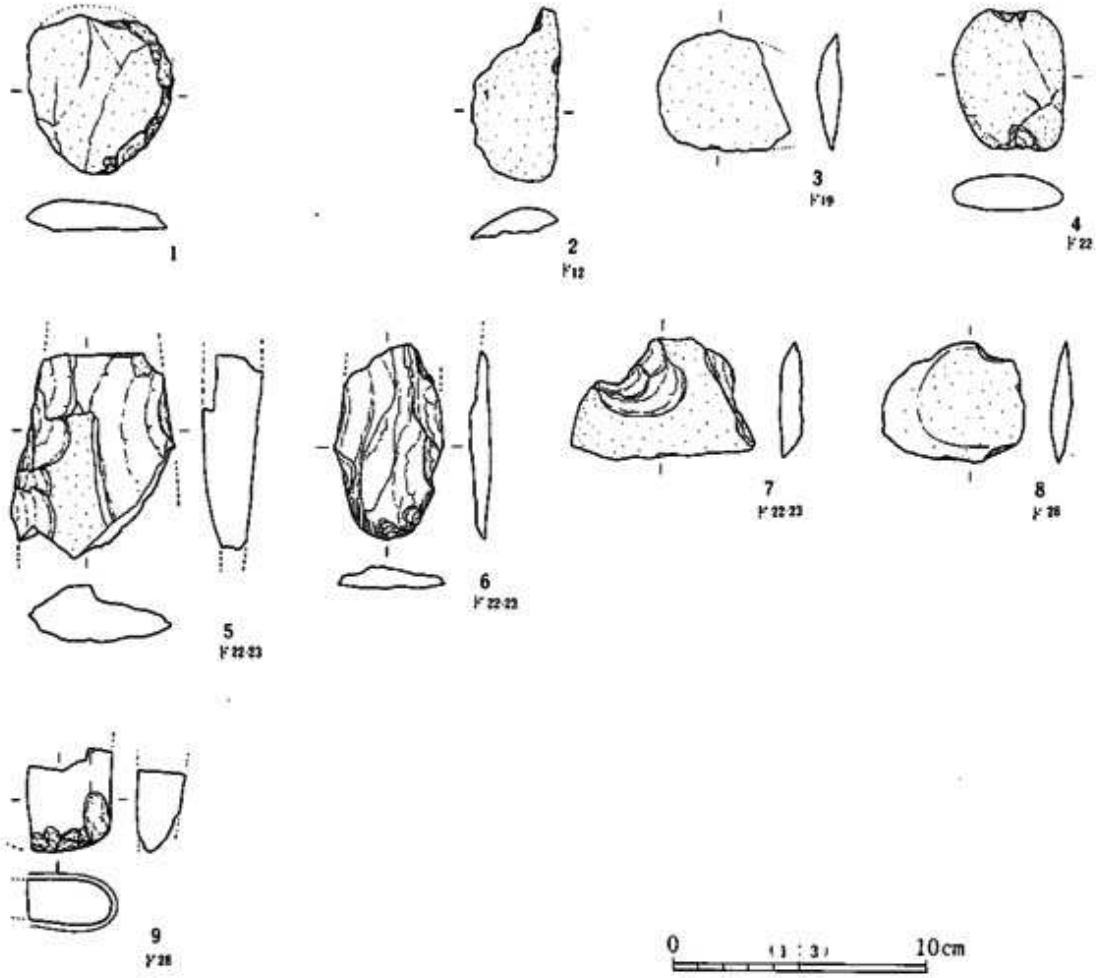
第7図　第Ⅱ地区　土坑(1～13)，遺構外(14～33)出土土器

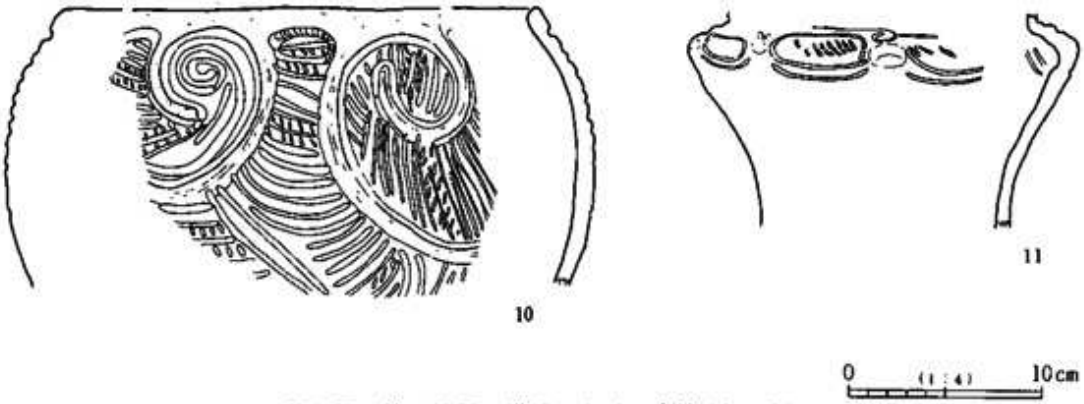


第8図　第Ⅱ地区　12号住居址出土石器

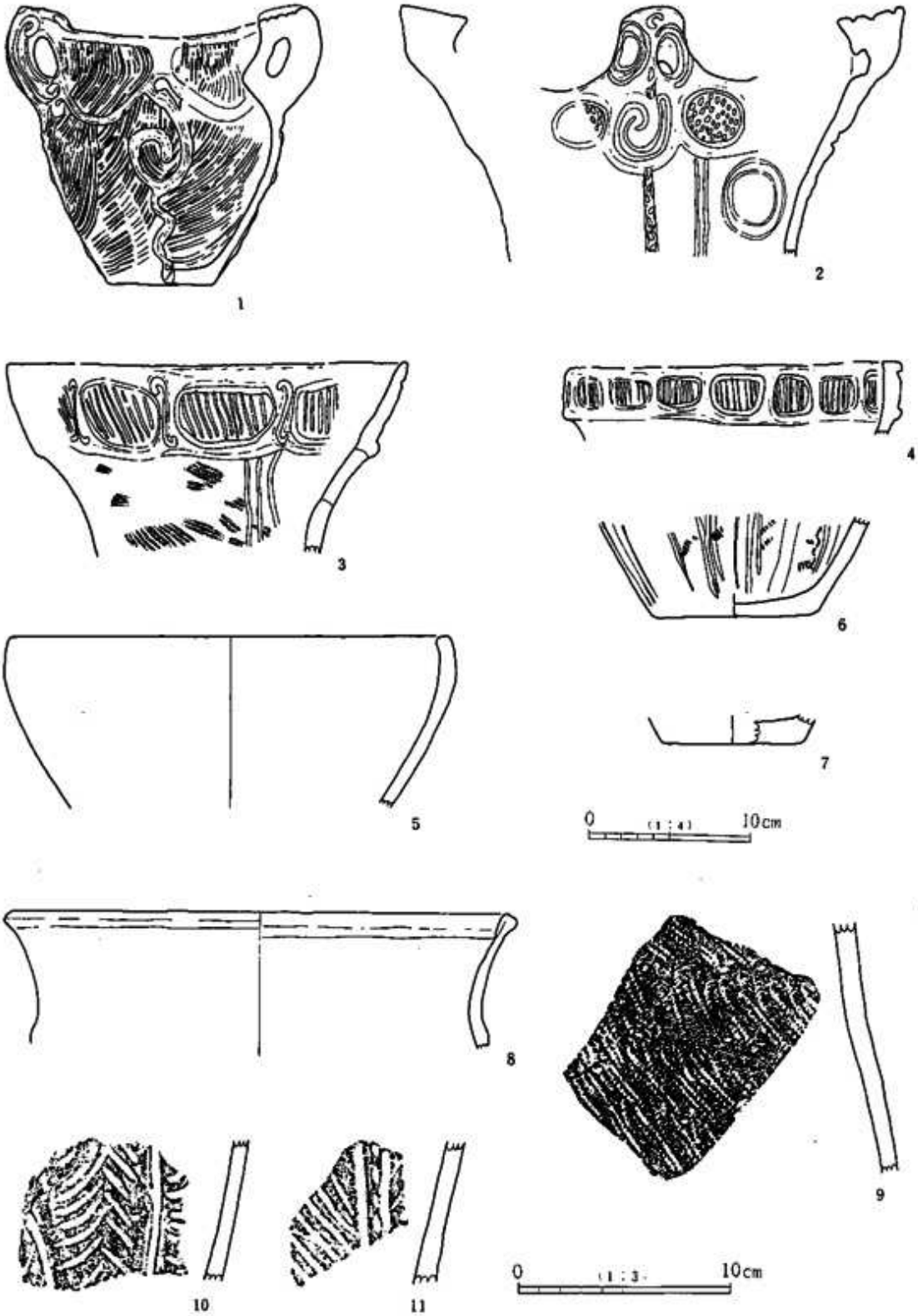


第9図　第Ⅱ地区　13号住居址（1～15），溝址2（16～18），溝址3（19）出土石器

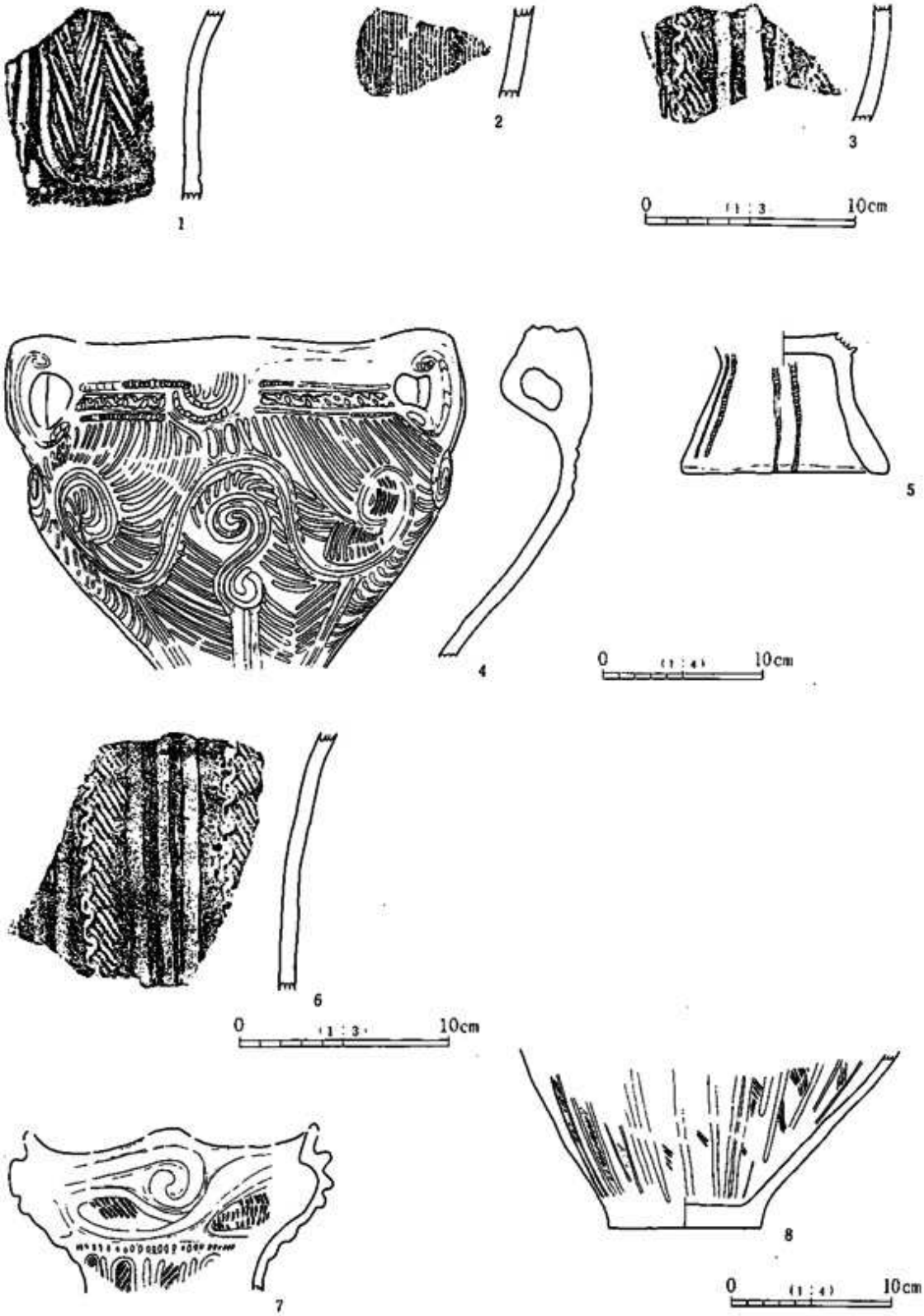




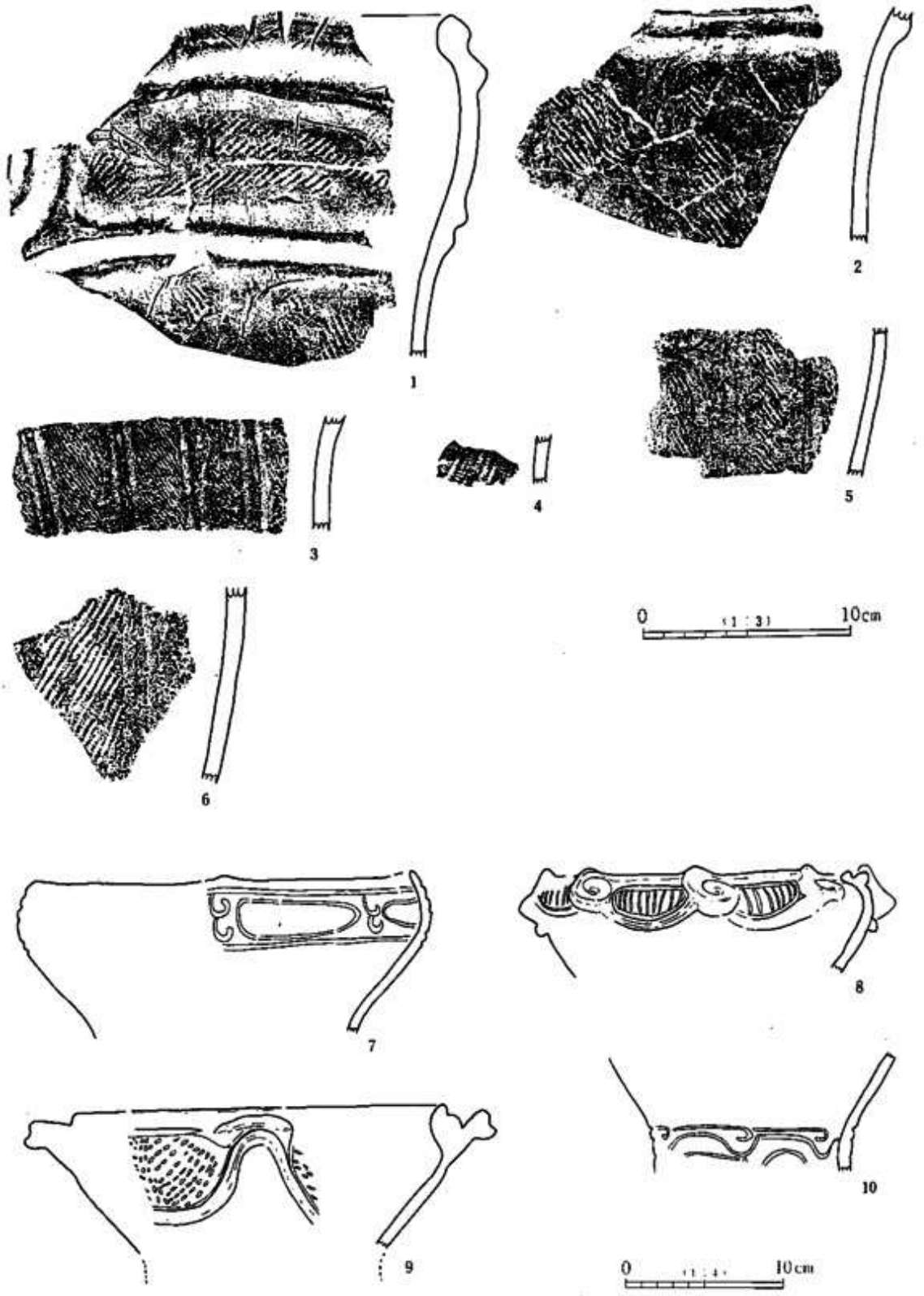
第10図　第Ⅱ地区　溝址5（1），土坑（2～9），
第Ⅲ地区　14号住居址（10・11）出土遺物



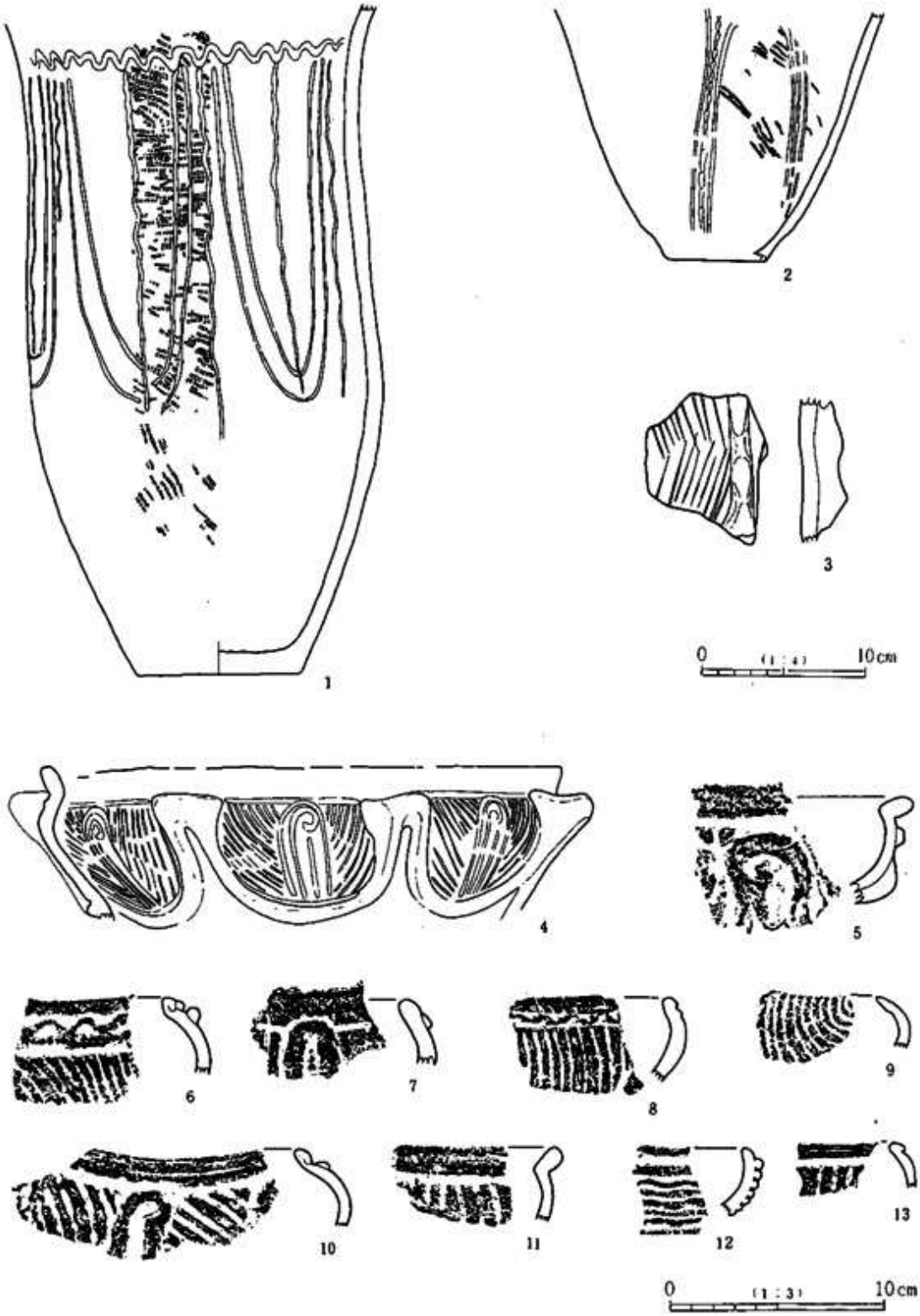
第11図　第Ⅲ地区　14号住居址出土土器



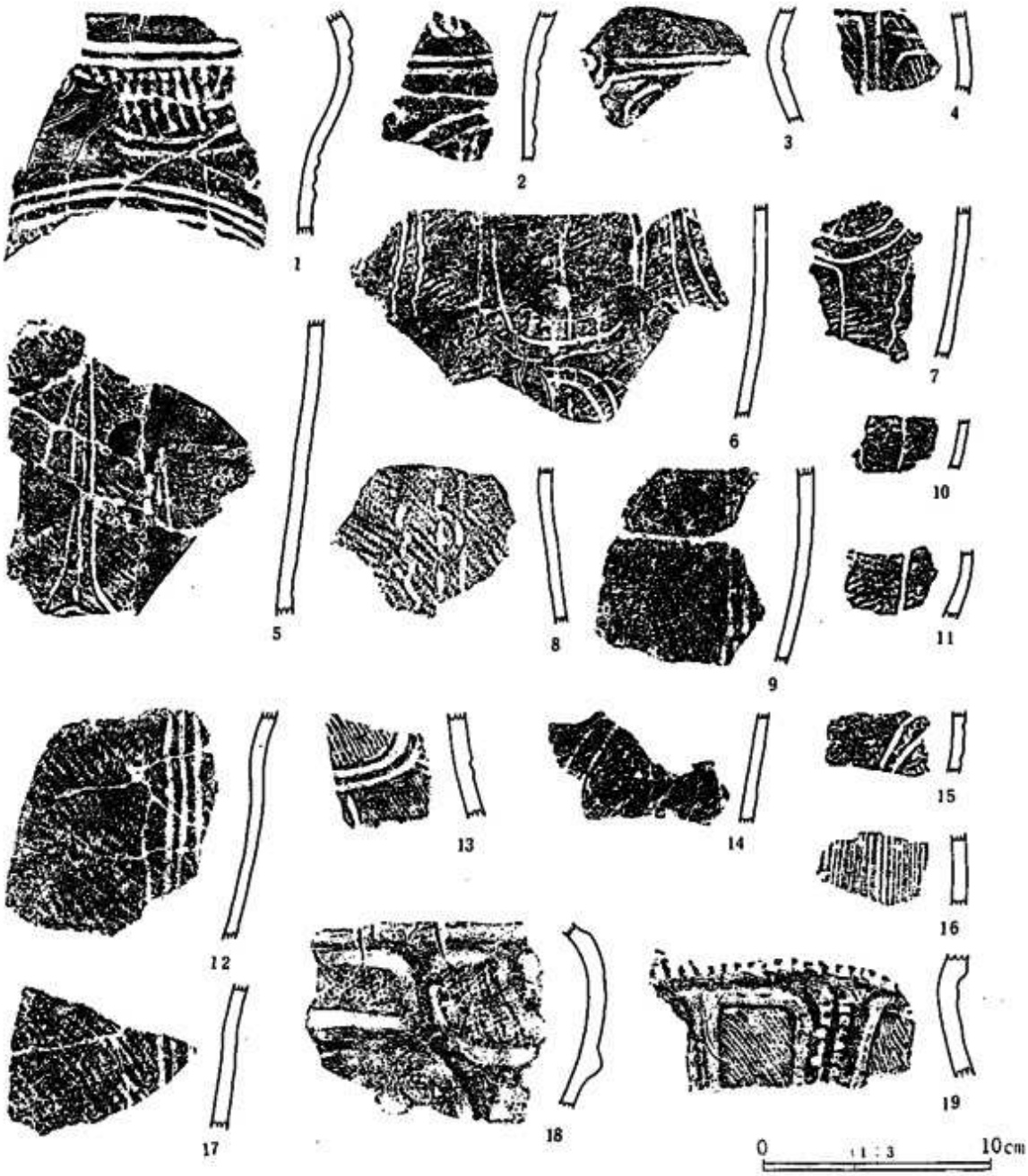
第12図　第Ⅲ地区　14号住居址（1～3），15号住居址（4～6），16号住居址（7・8）出土土器



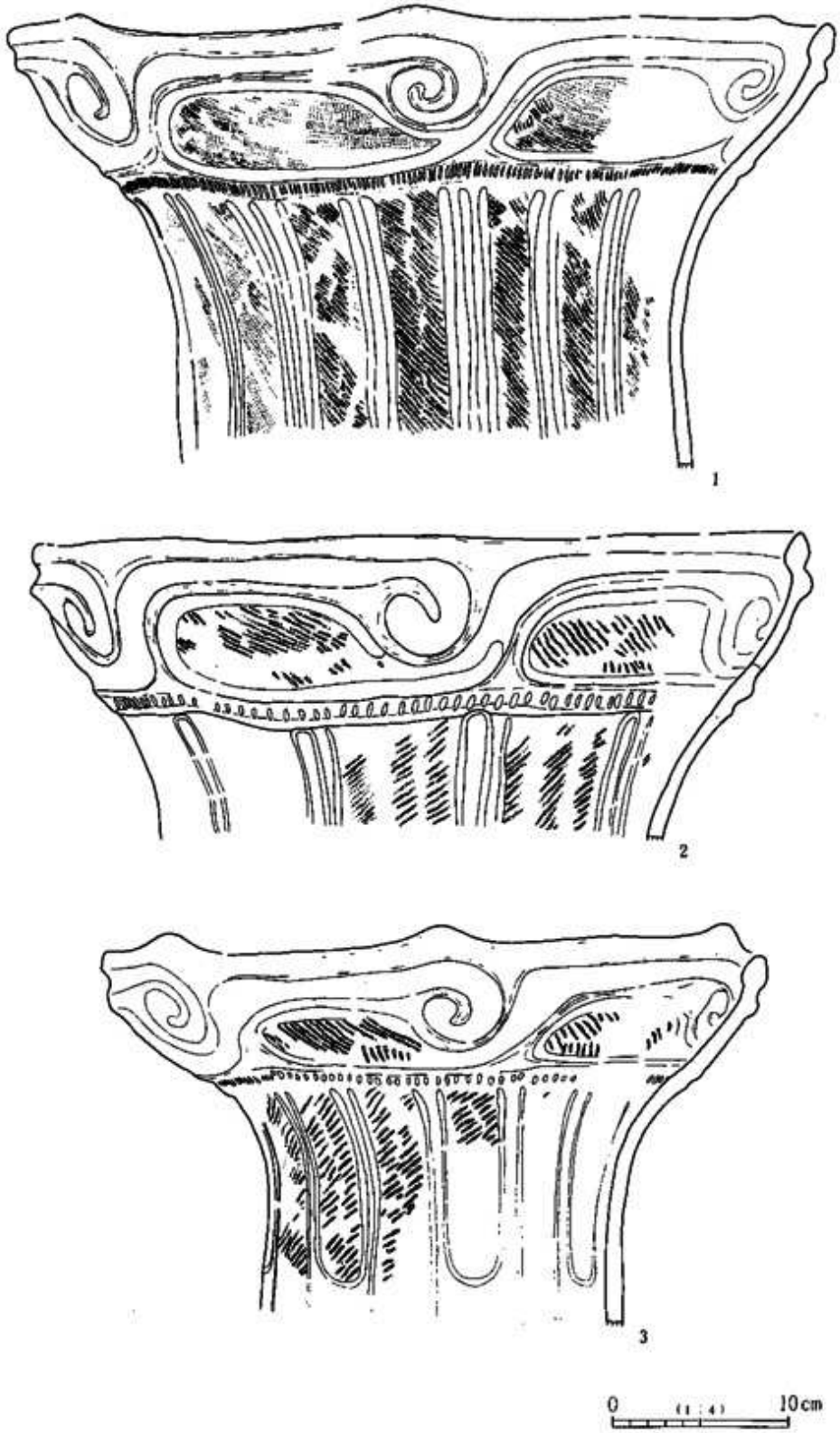
第13図　第Ⅲ地区　16号住居址（1～6），17号住居址（7～10）出土土器



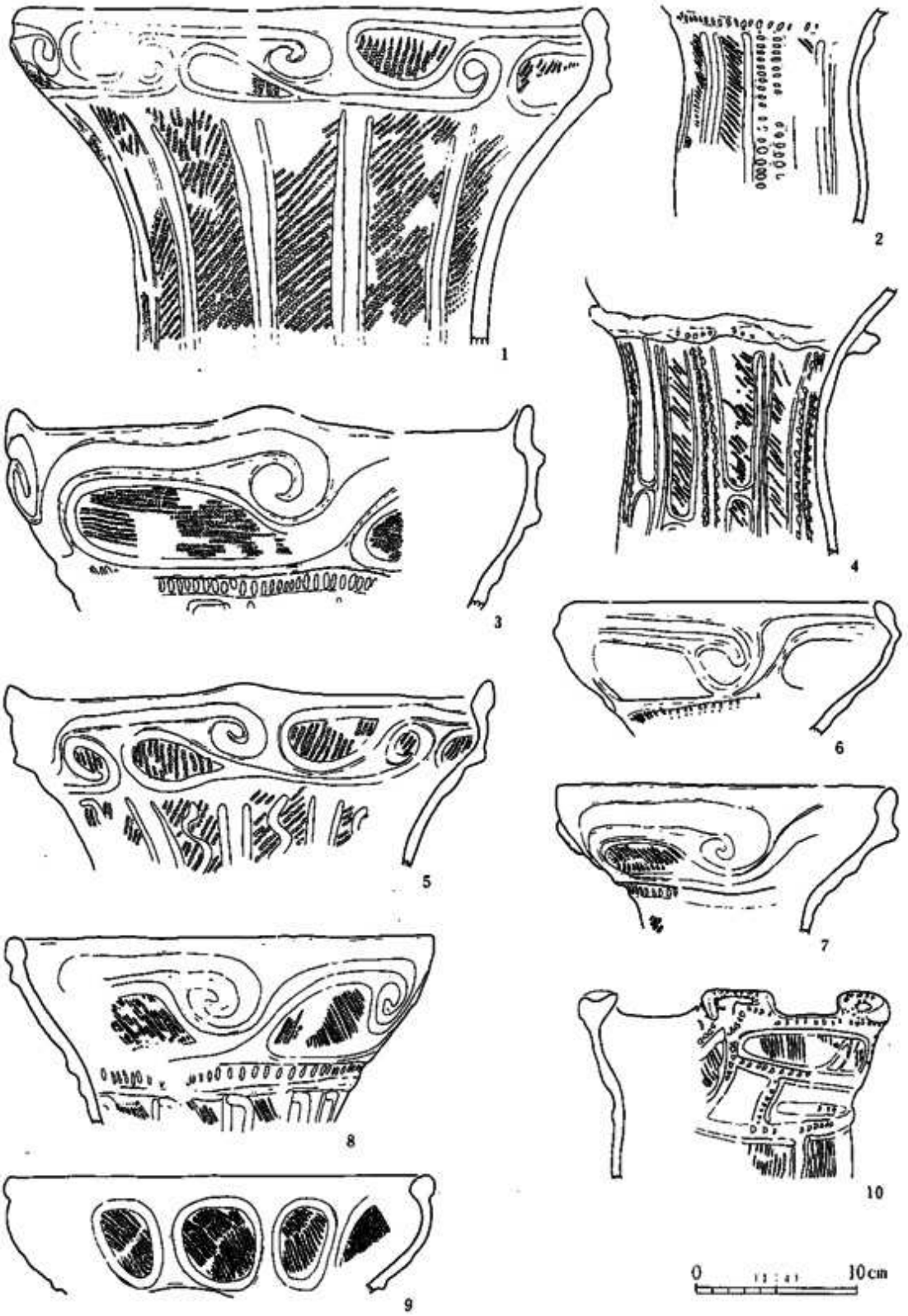
第14図　第Ⅲ地区　17号住居址出土土器（1）



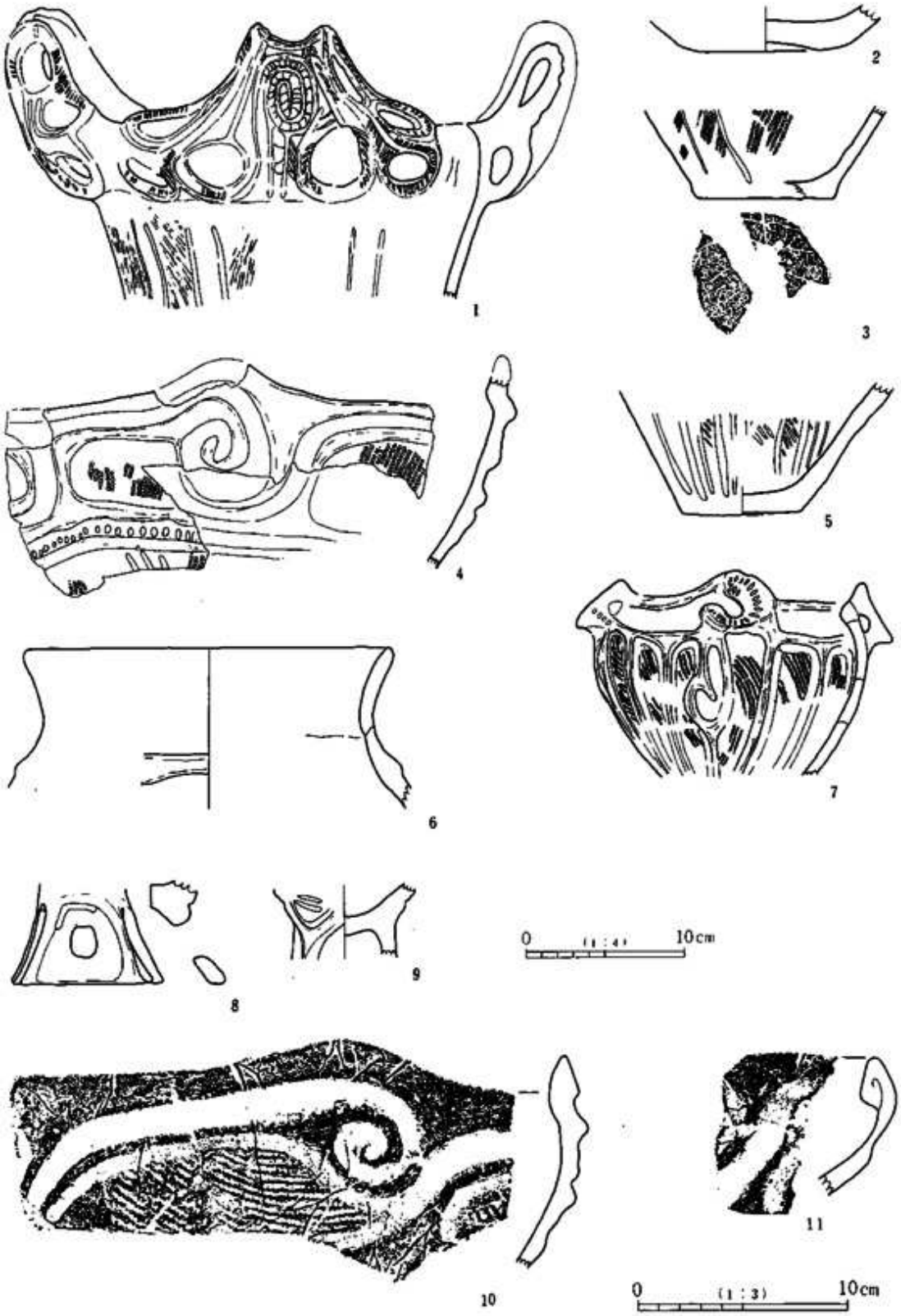
第15図　第Ⅲ地区　I7号住居址出土土器（2）



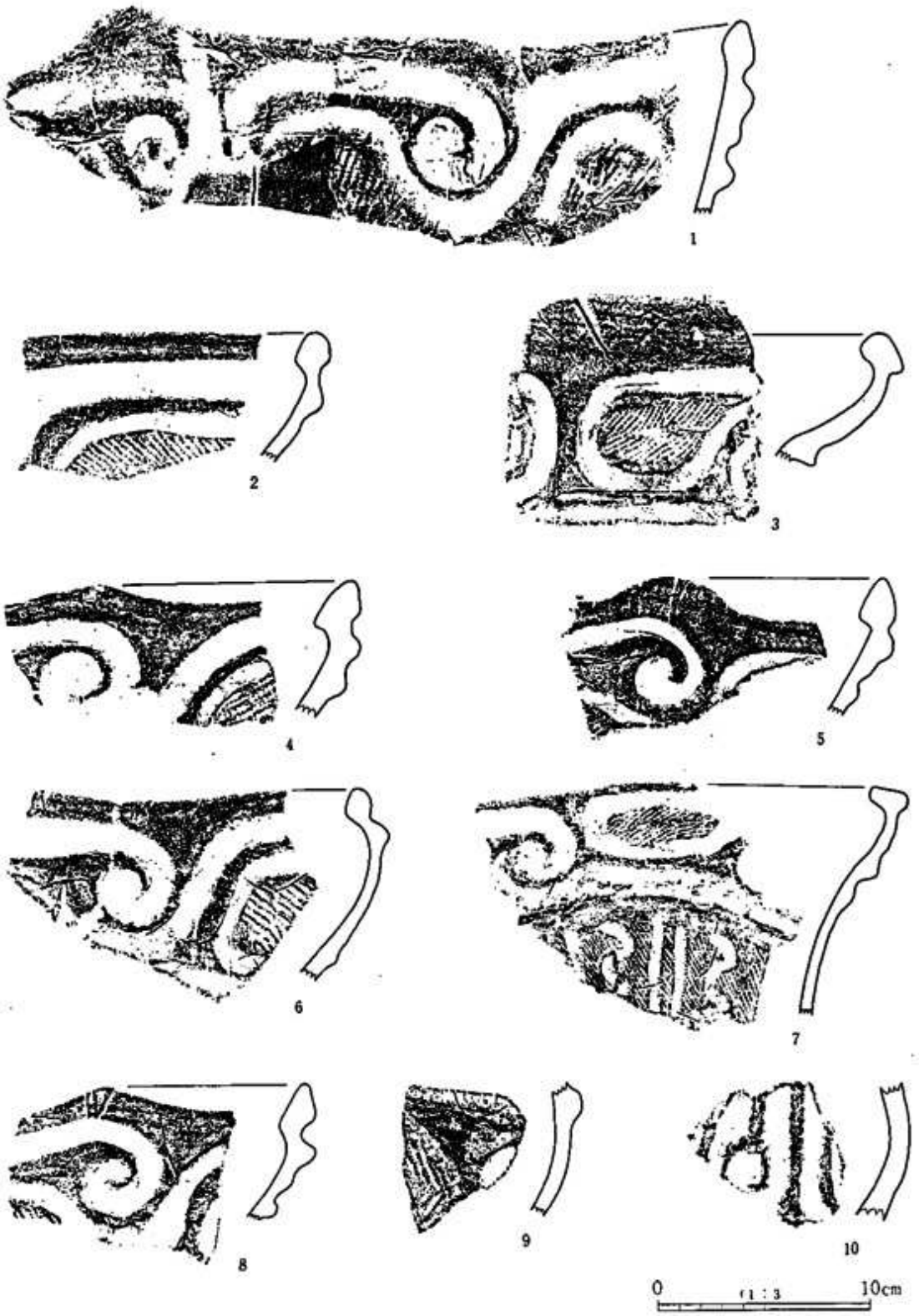
第16図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器（1）



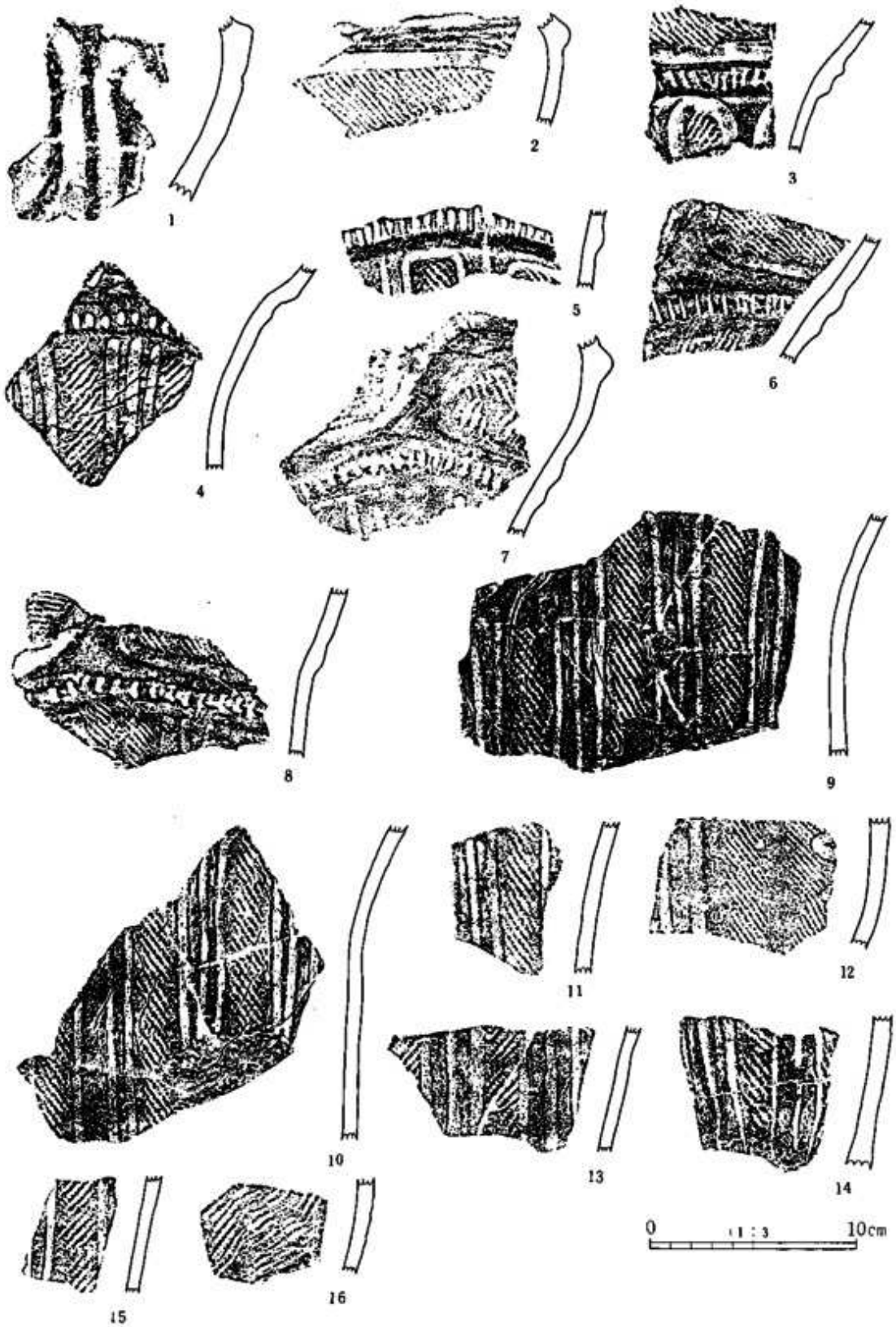
第17図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器（2）



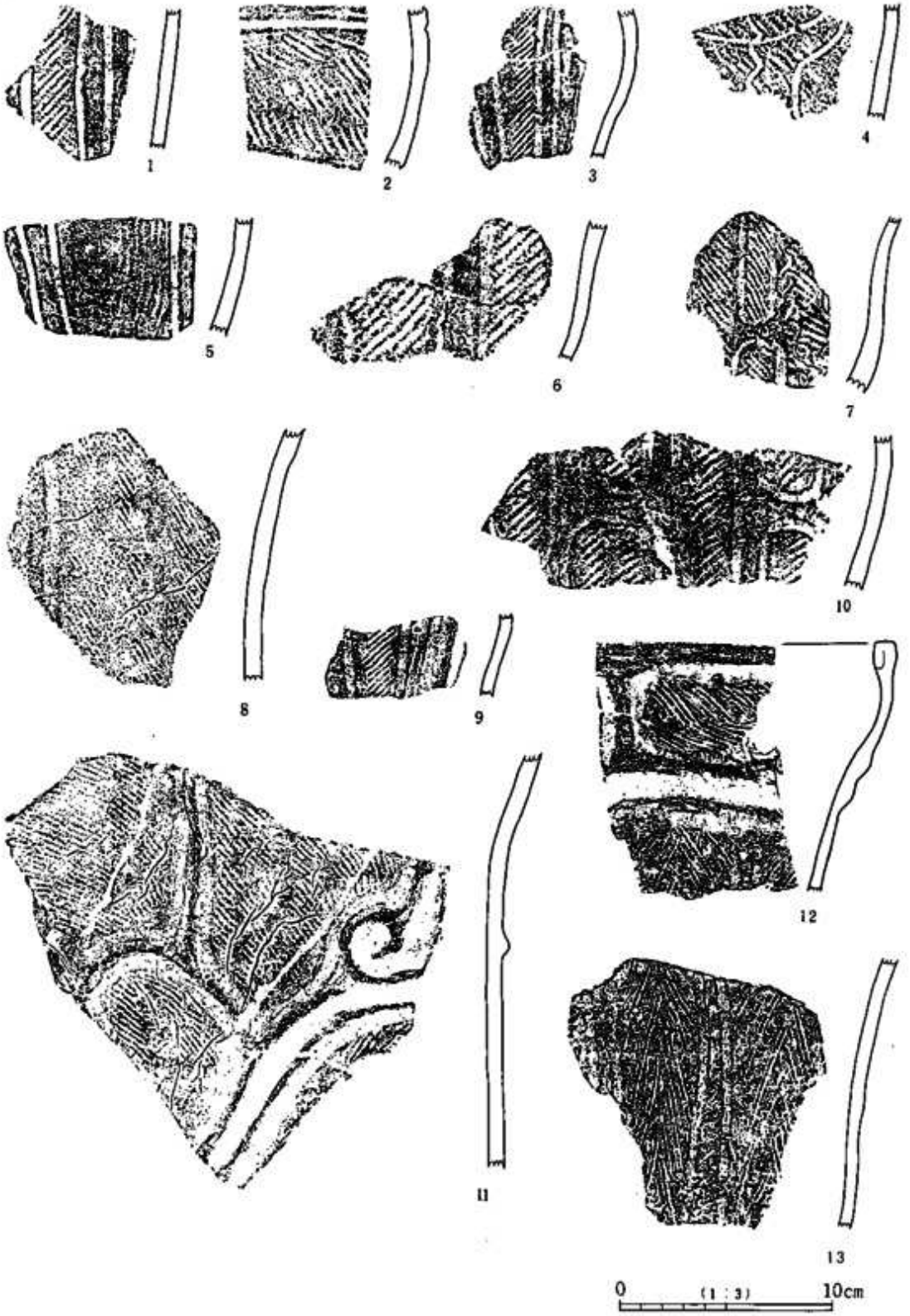
第18図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器（3）



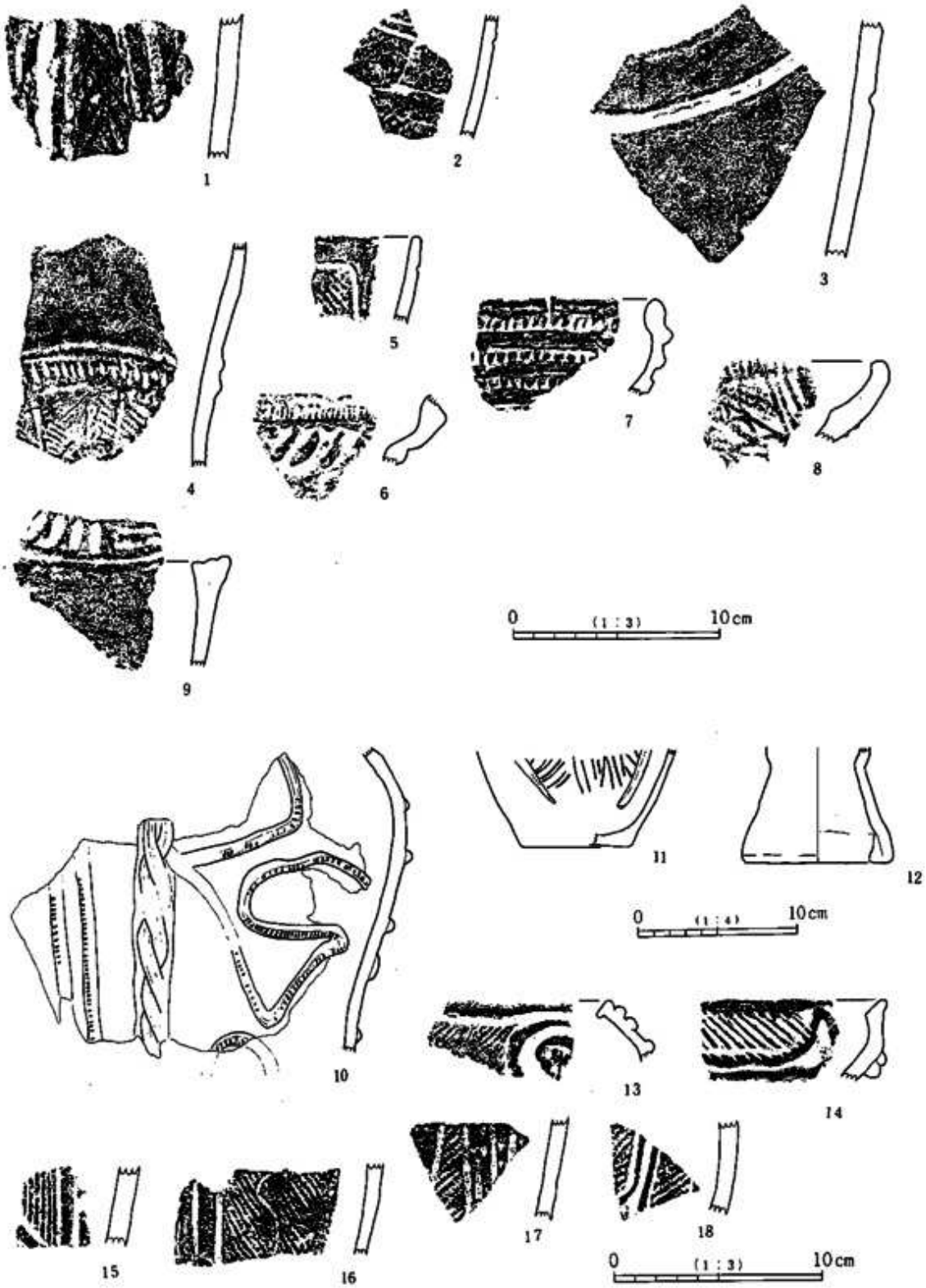
第19図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器（4）



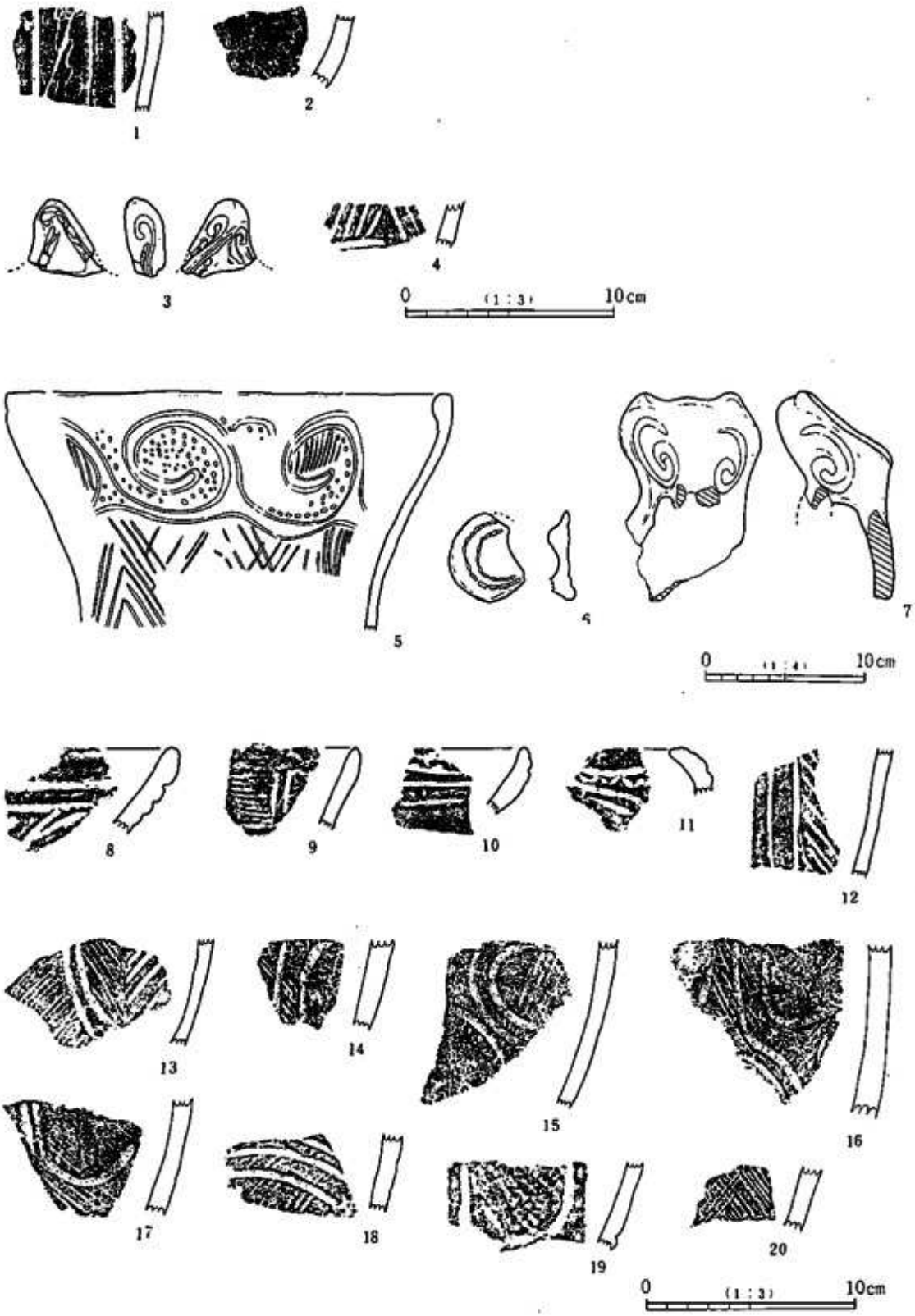
第20図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器（5）



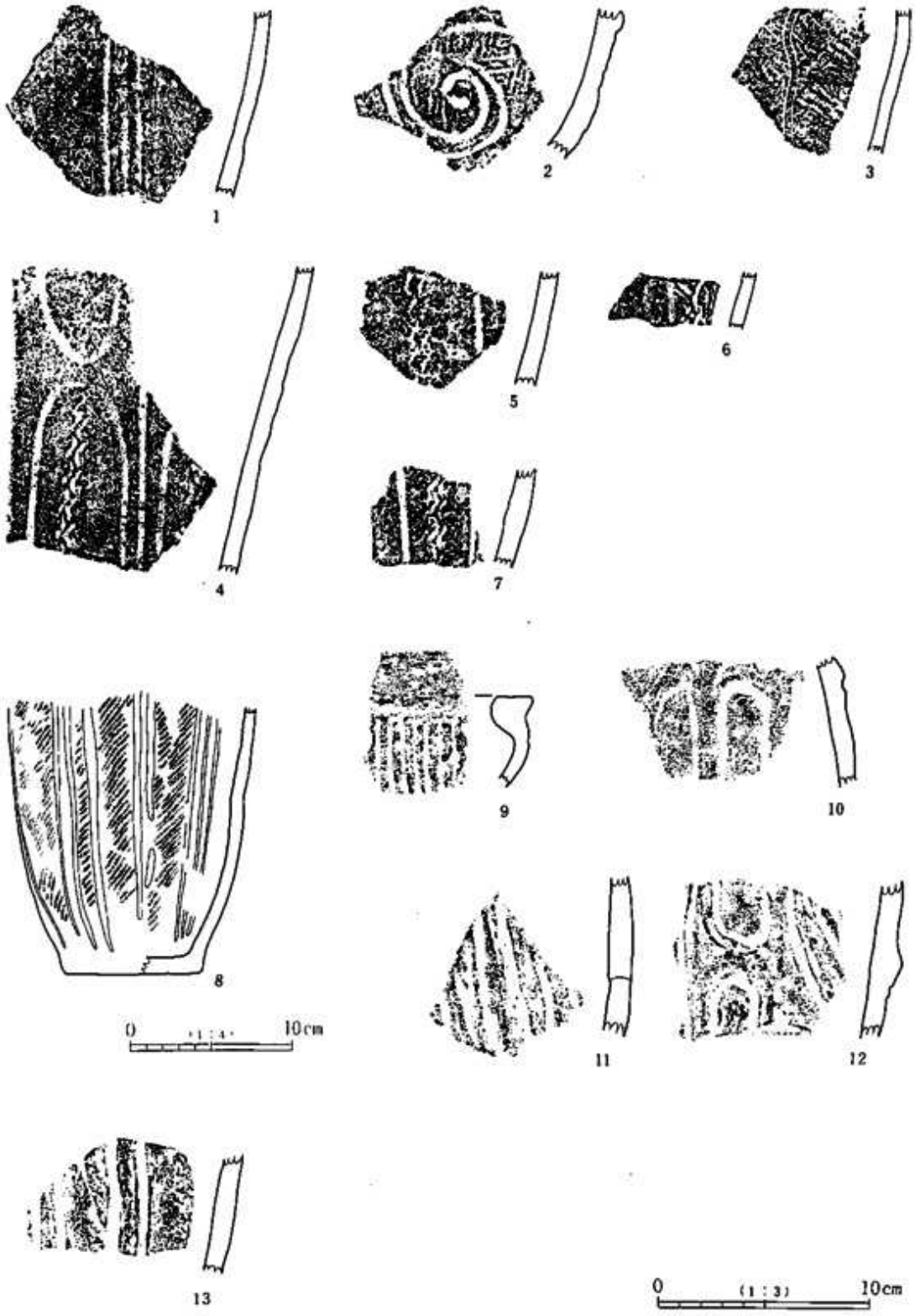
第21図　第Ⅲ地区　18号住居址出土土器（6）



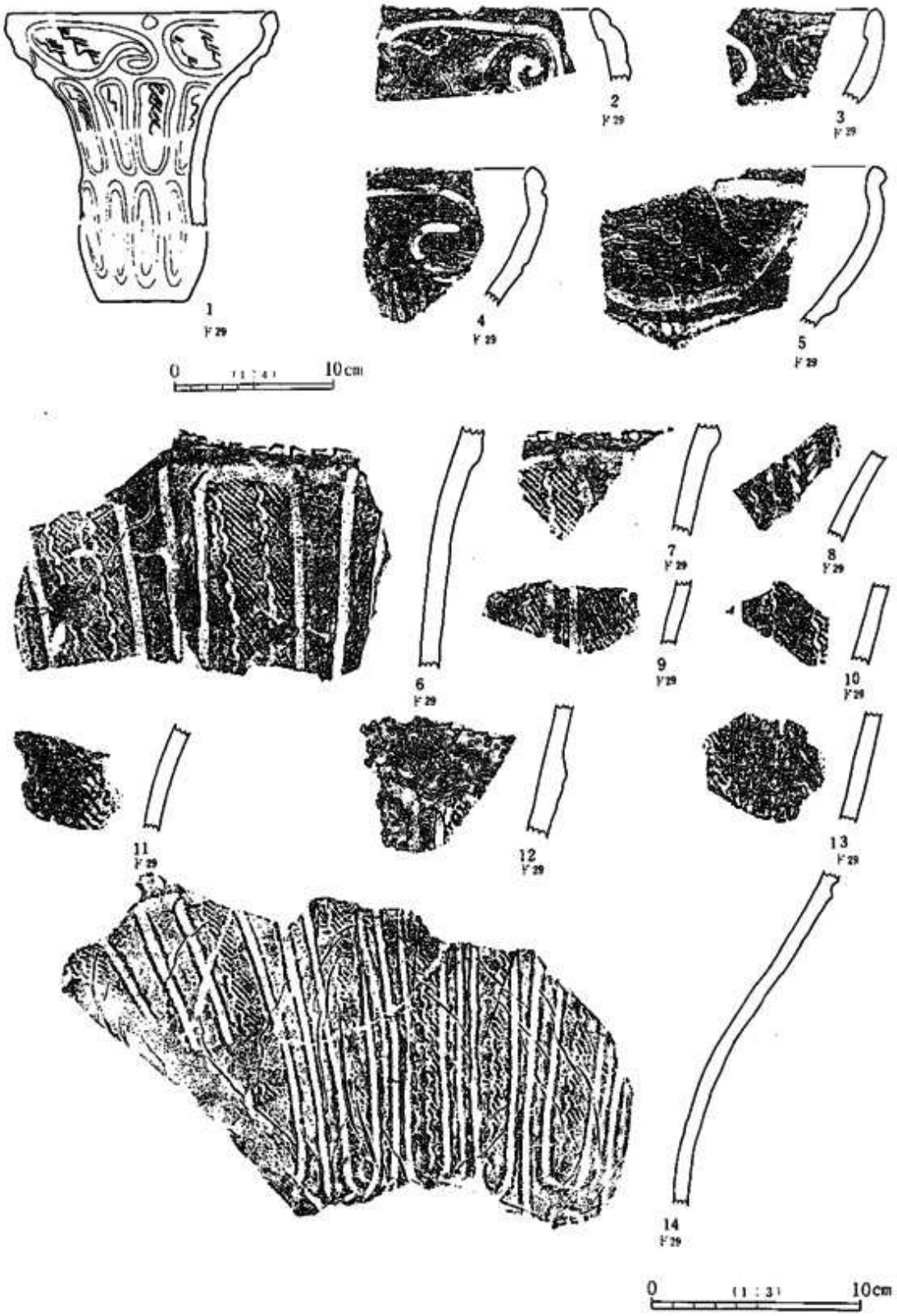
第22図　第Ⅲ地区　18号住居址（1～9），19号住居址（10～18）出土土器



第23図　第Ⅲ地区　19号住居址（1・2），20号住居址（3・4），
21号住居址（5～20）出土土器

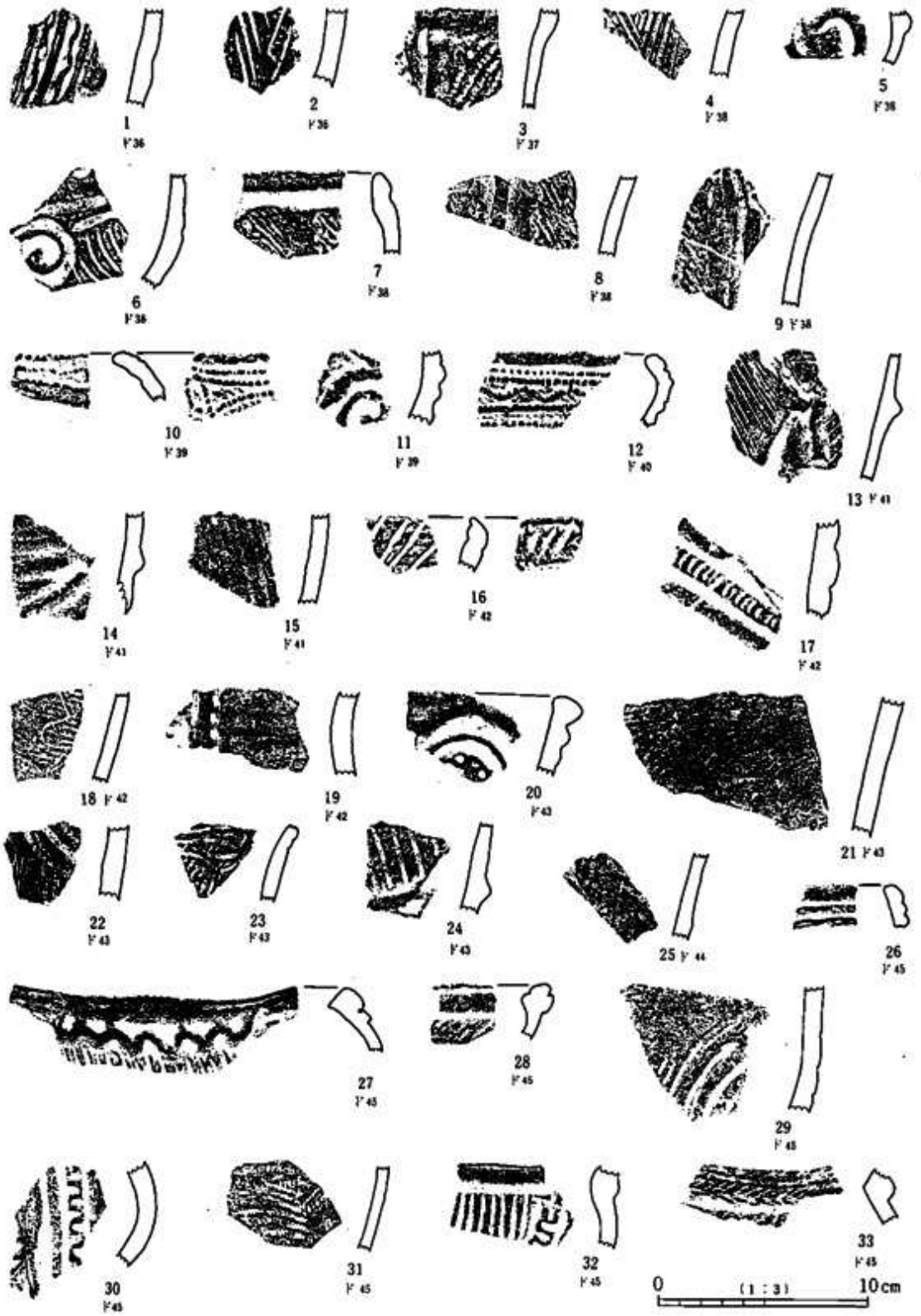


第24図　第Ⅲ地区　21号住居址（1～7），22号住居址（8～13）出土土器



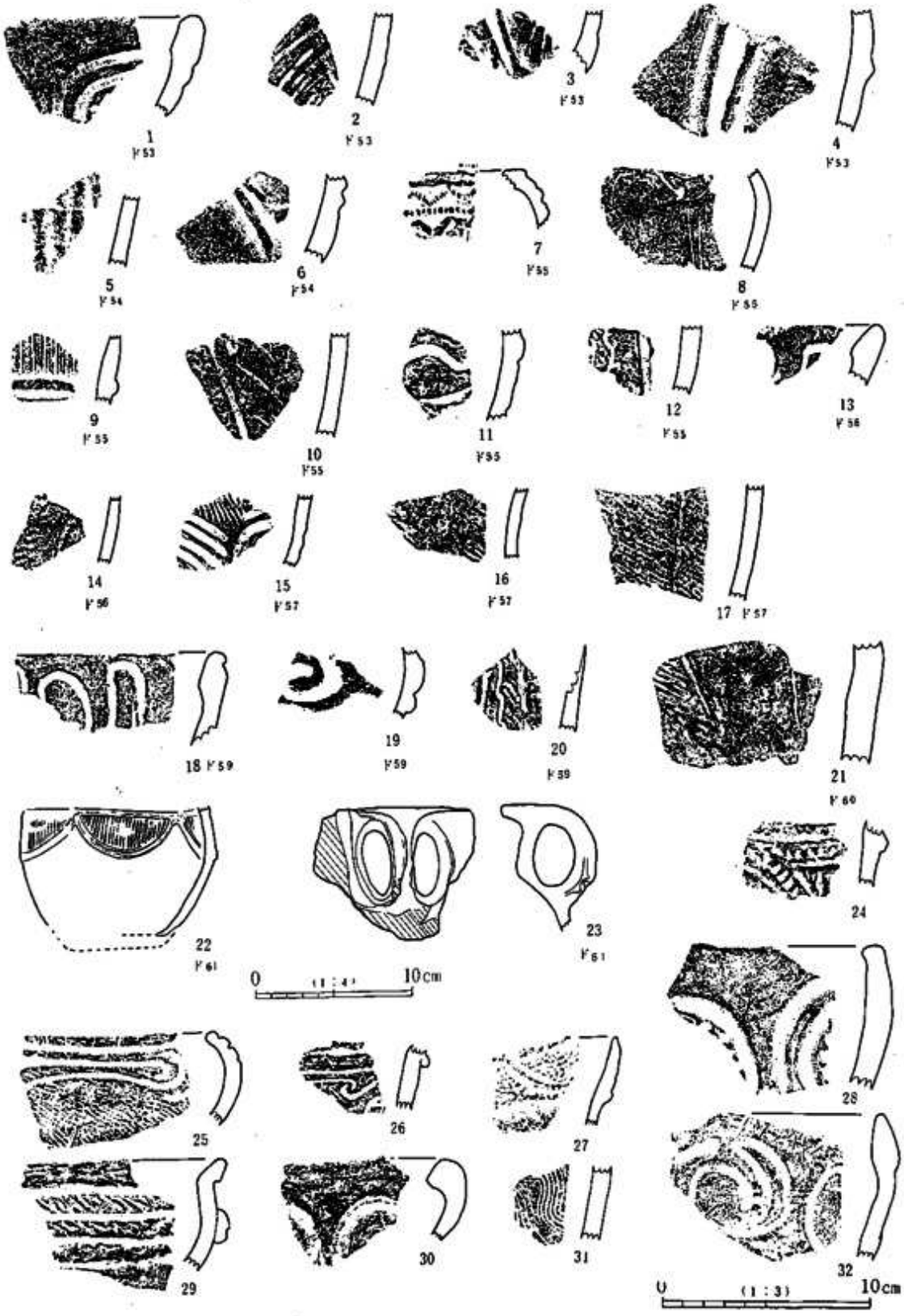
第25図　第Ⅲ地区　土坑出土土器（1）

第26図　第Ⅲ地区　土坑出土土器（2）

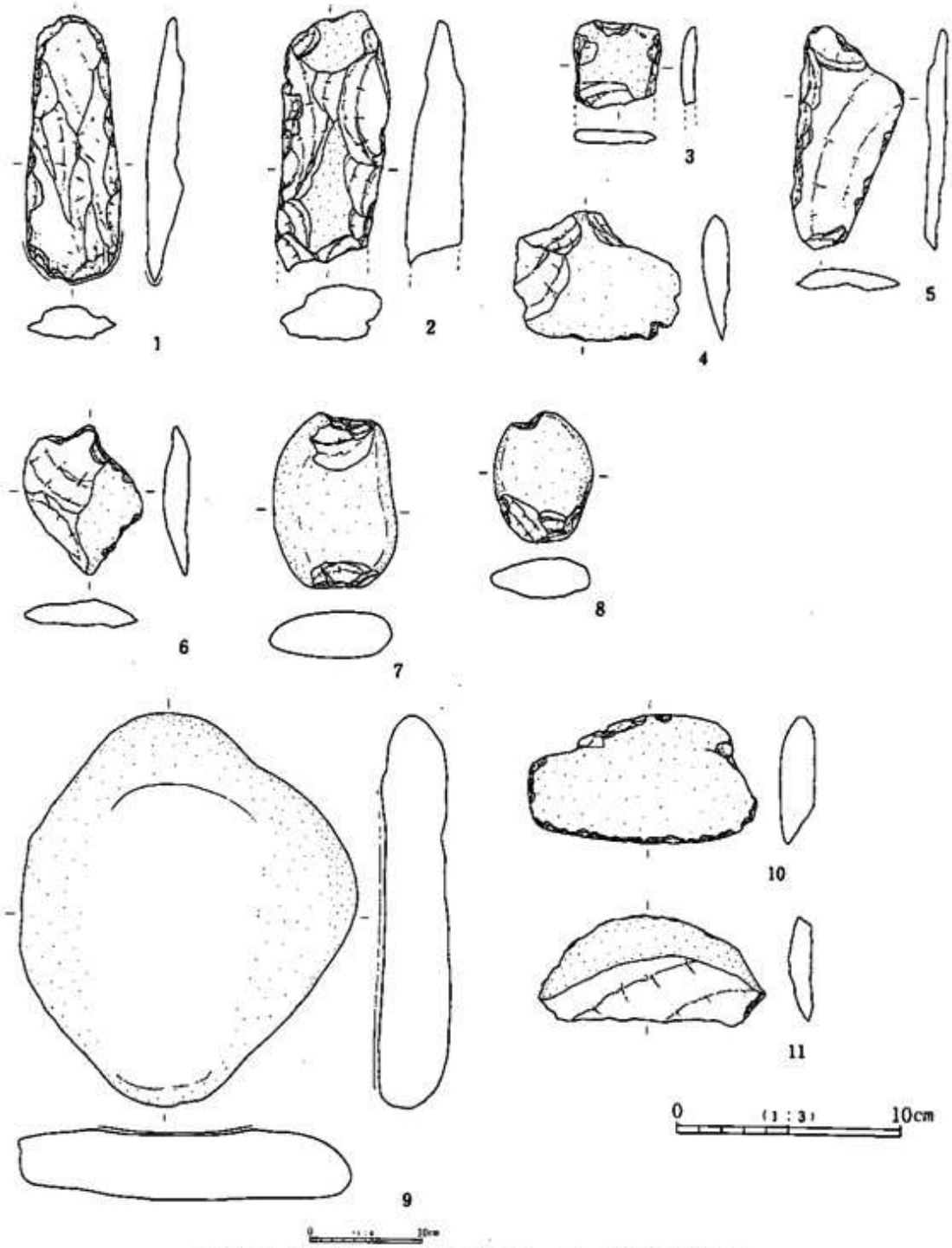


第27図　第Ⅲ地区　土坑出土土器（3）

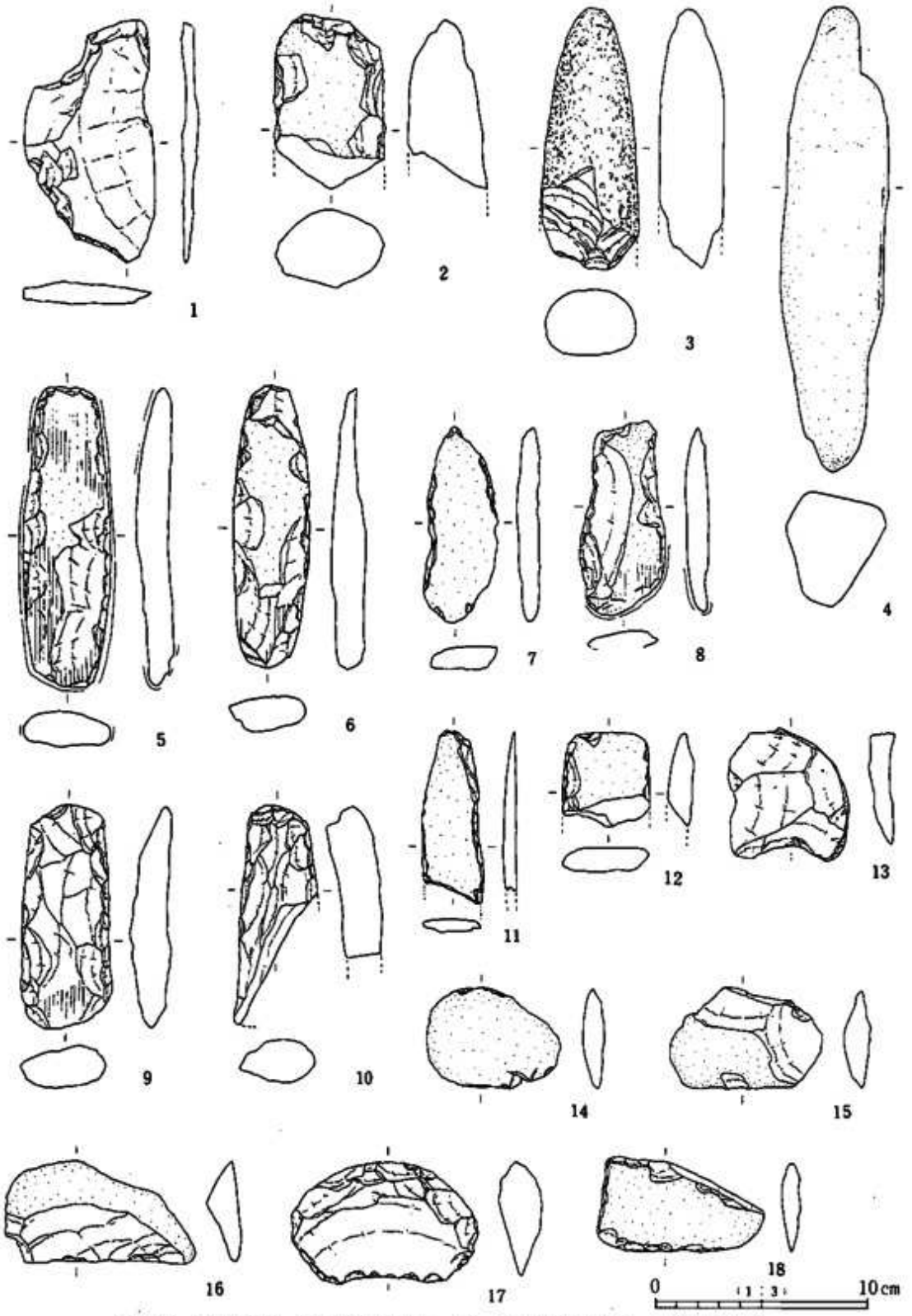
第28図　第Ⅲ地区　土坑出土土器（4）



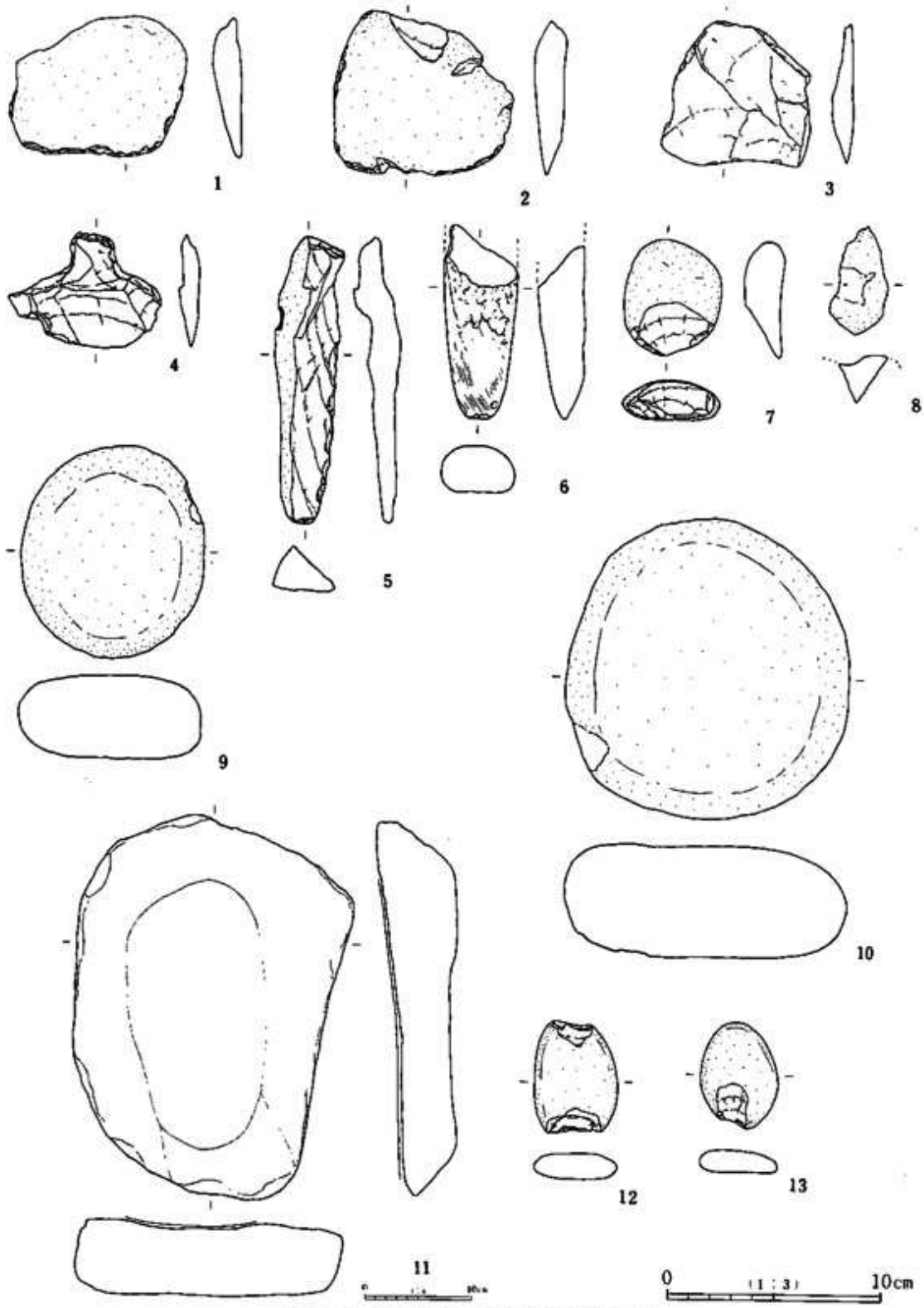
第29図　第Ⅲ地区　土坑(1～23)，遺構外(24～32)出土土器



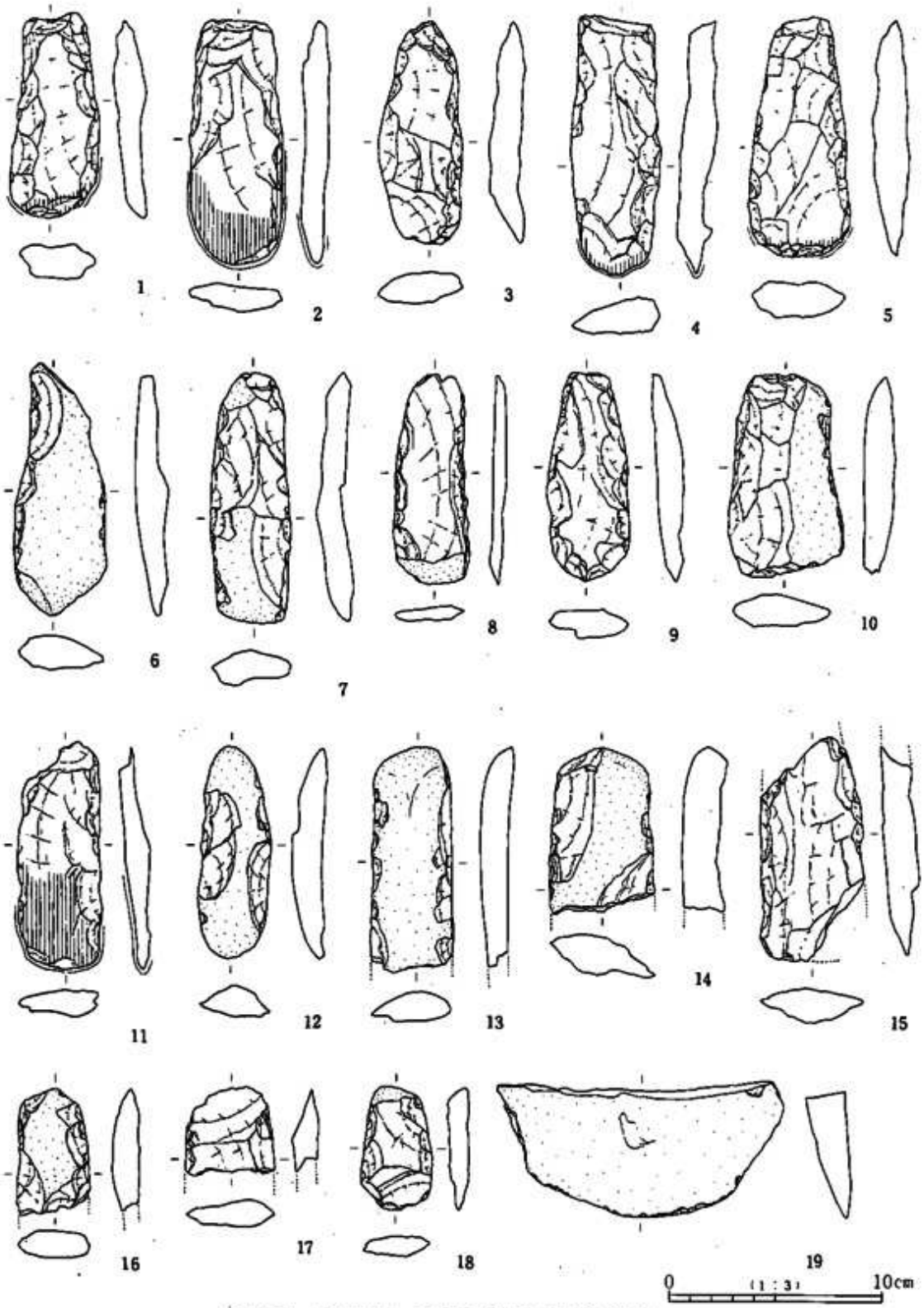
第30図　第Ⅲ地区　14号住居址（1～8），15号住居址（9），
16号住居址（10・11）出土石器



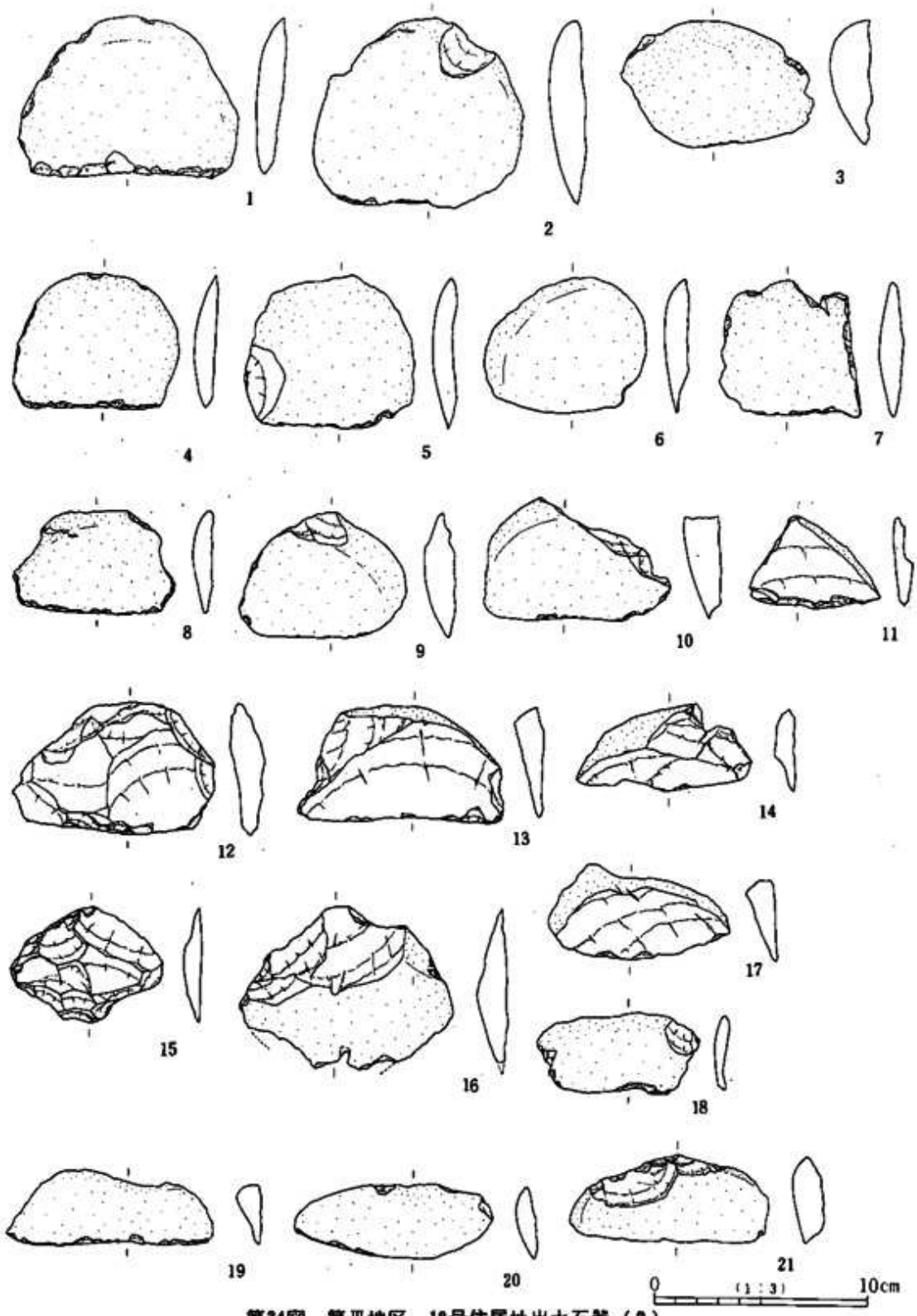
第31図　第Ⅲ地区　16号住居址（1～4），17号住居址（5～18）出土石器



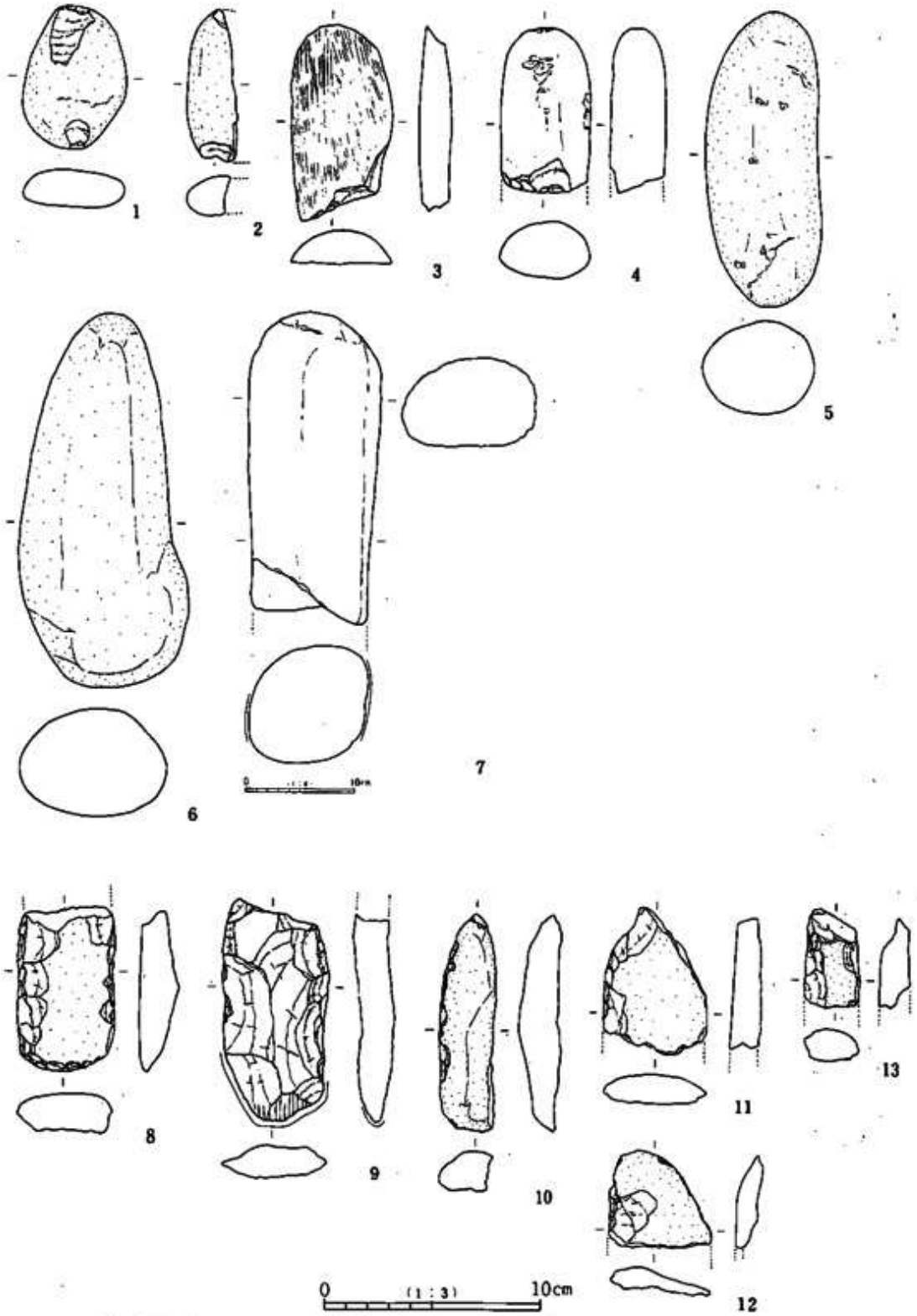
第32図　第Ⅲ地区　17号住居址出土石器



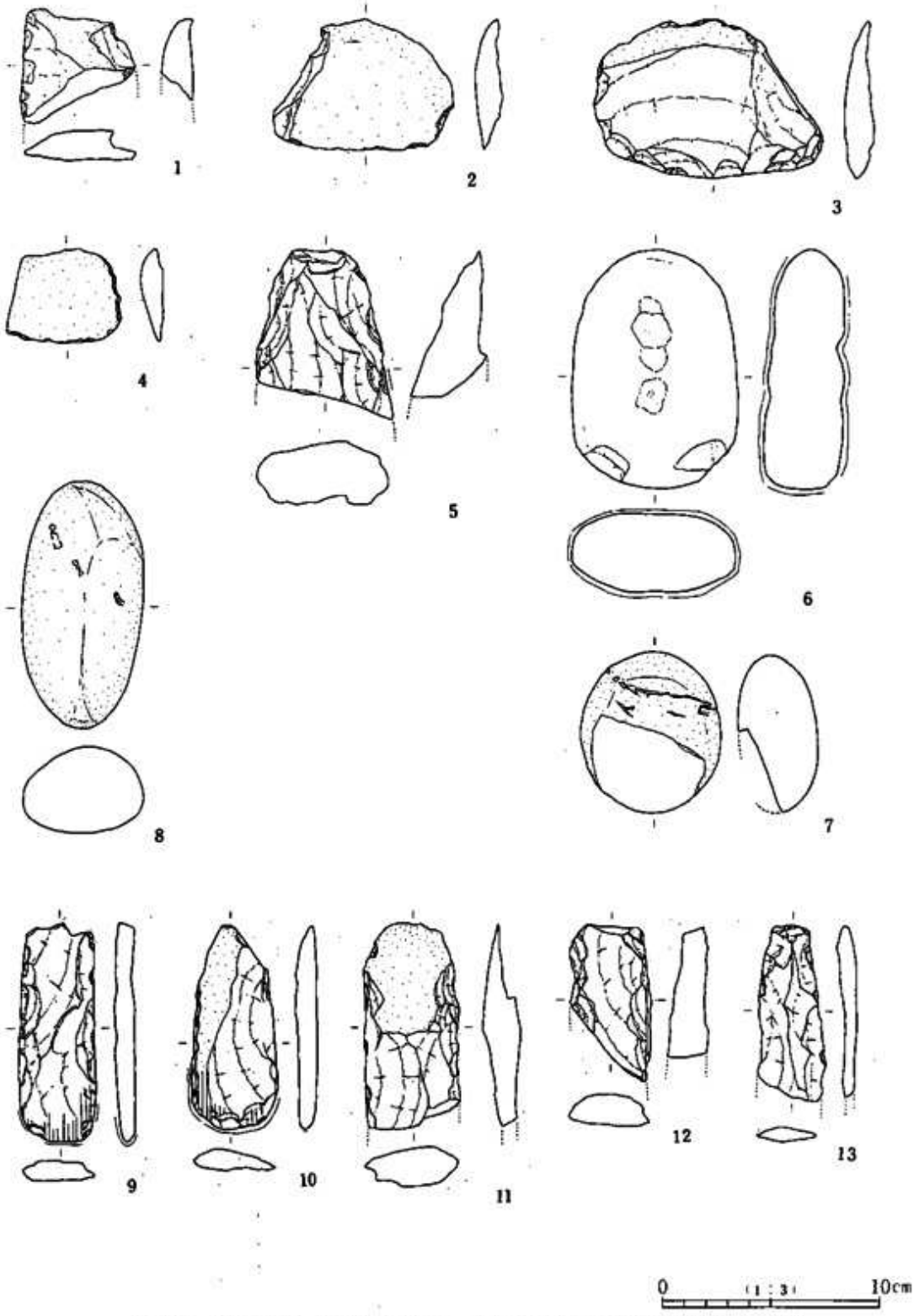
第33図　第Ⅲ地区　18号住居址出土石器（1）



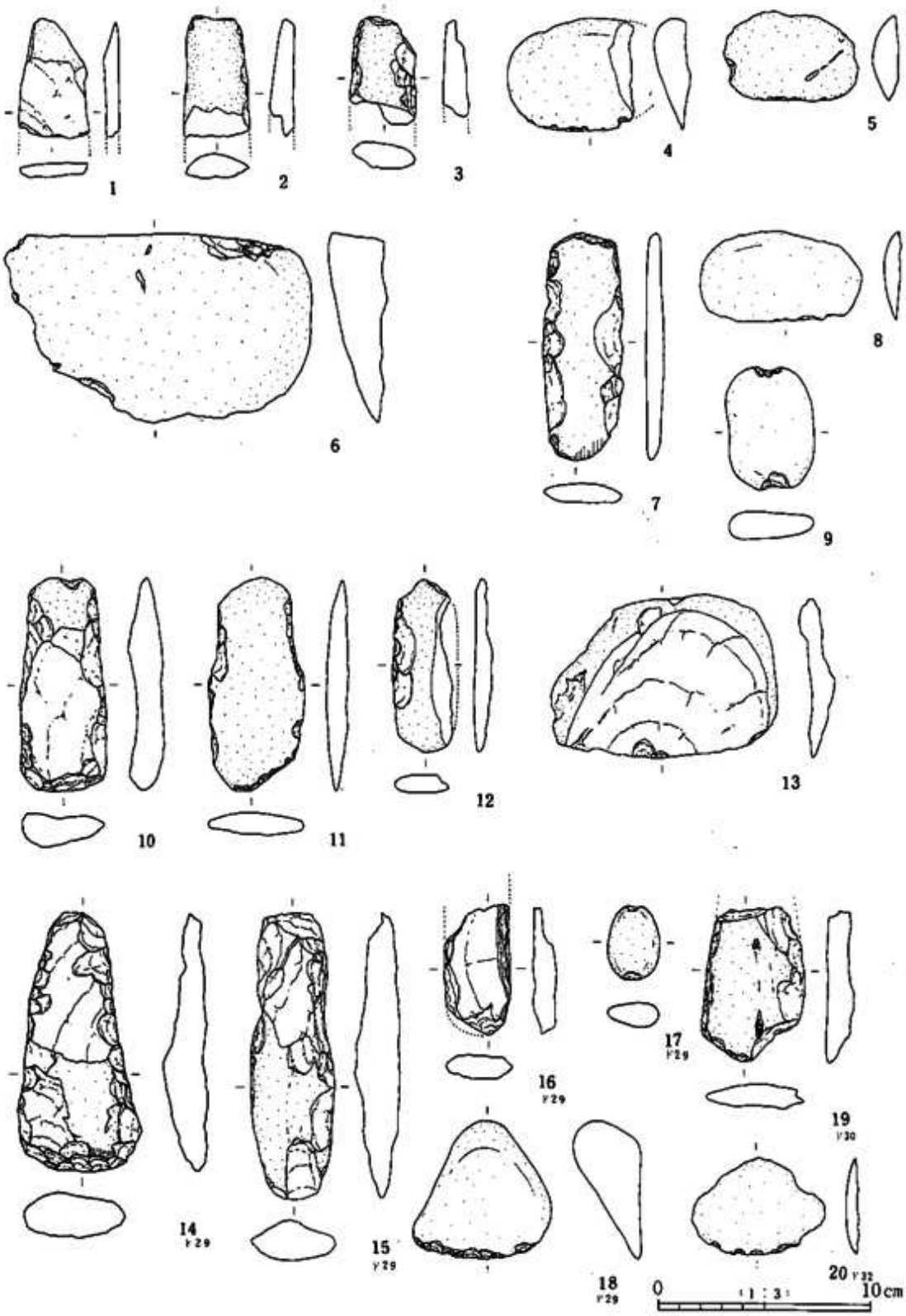
第34図　第Ⅲ地区　18号住居址出土石器（2）



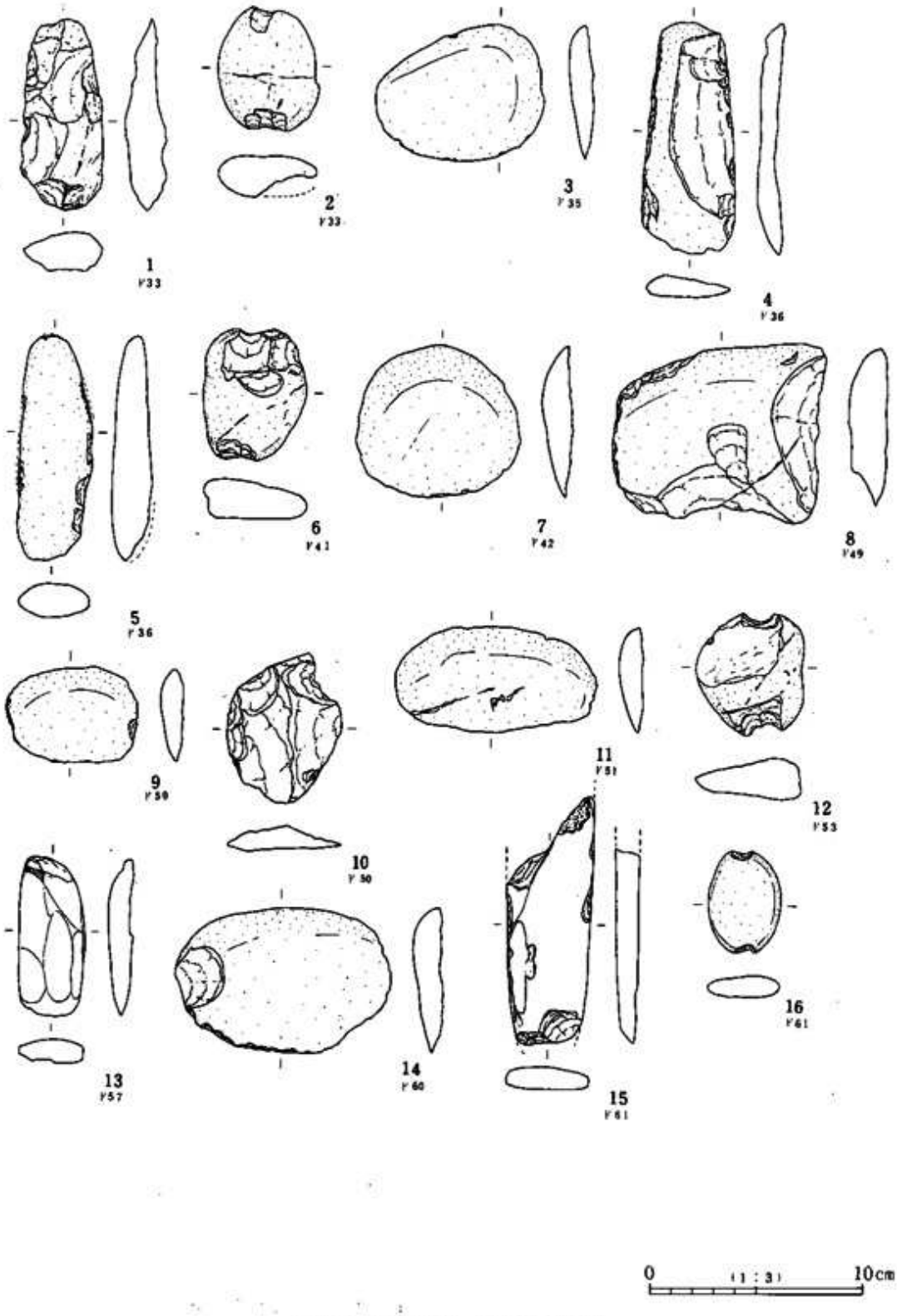
第35図　第Ⅲ地区　18号住居址（1～7），19号住居址（8～13）出土石器



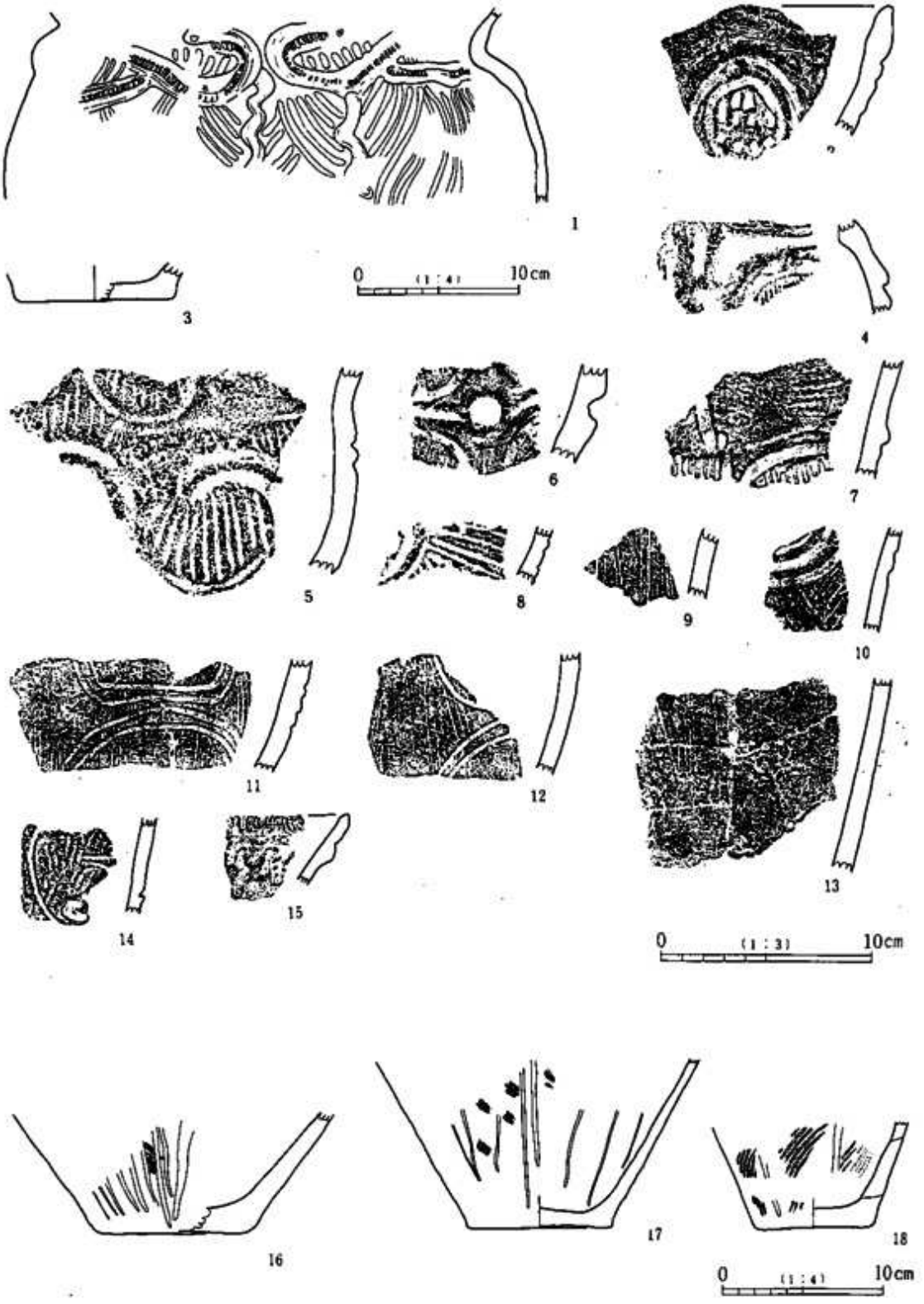
第36図　第Ⅲ地区　19号住居址（1～8），21号住居址（9～13）出土石器



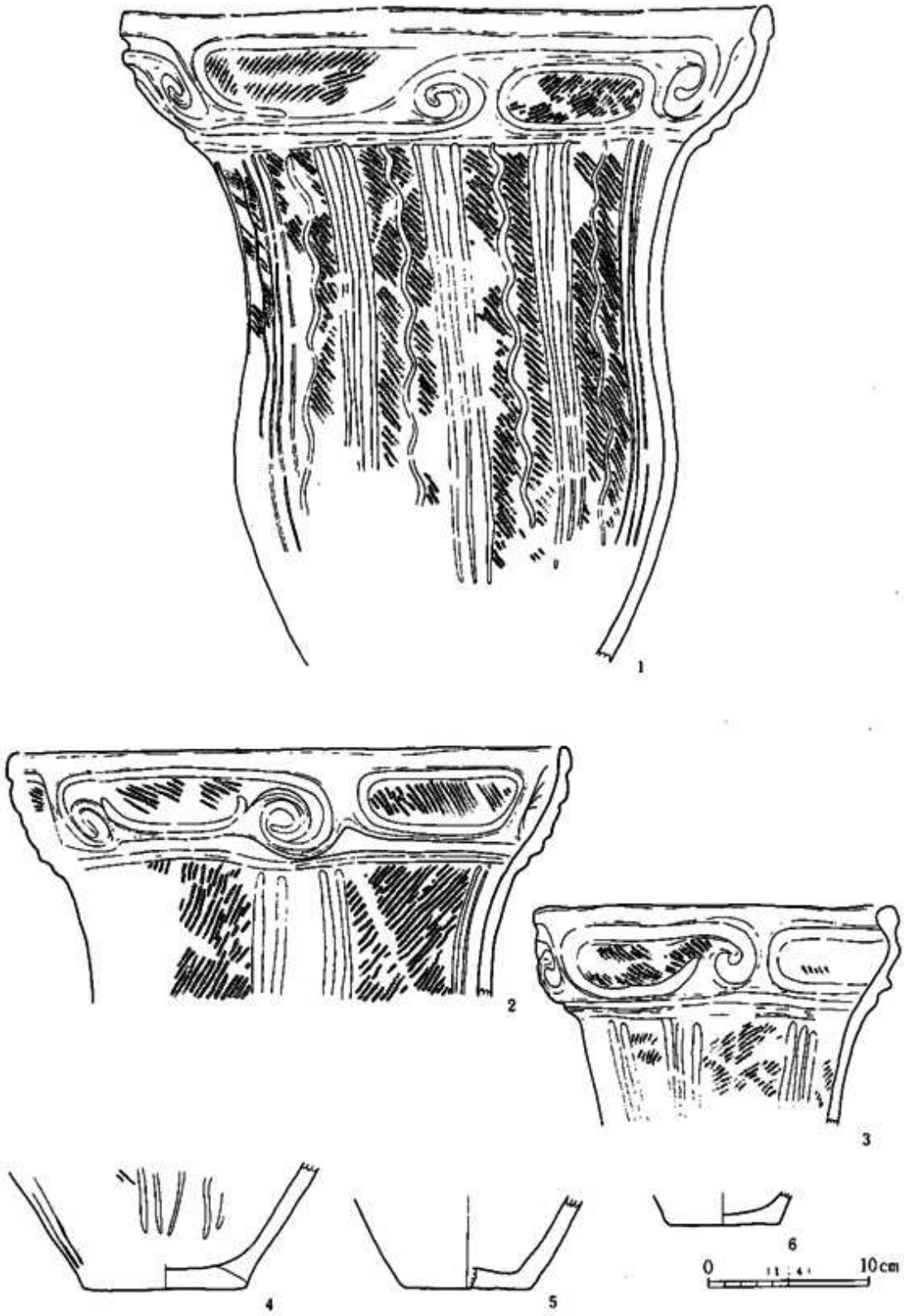
第37図　第Ⅲ地区　21号住居址（1～5），29号住居址（6），方形周溝墓1（7～9）
方形周溝墓2（10～13），土坑（14～20）出土石器



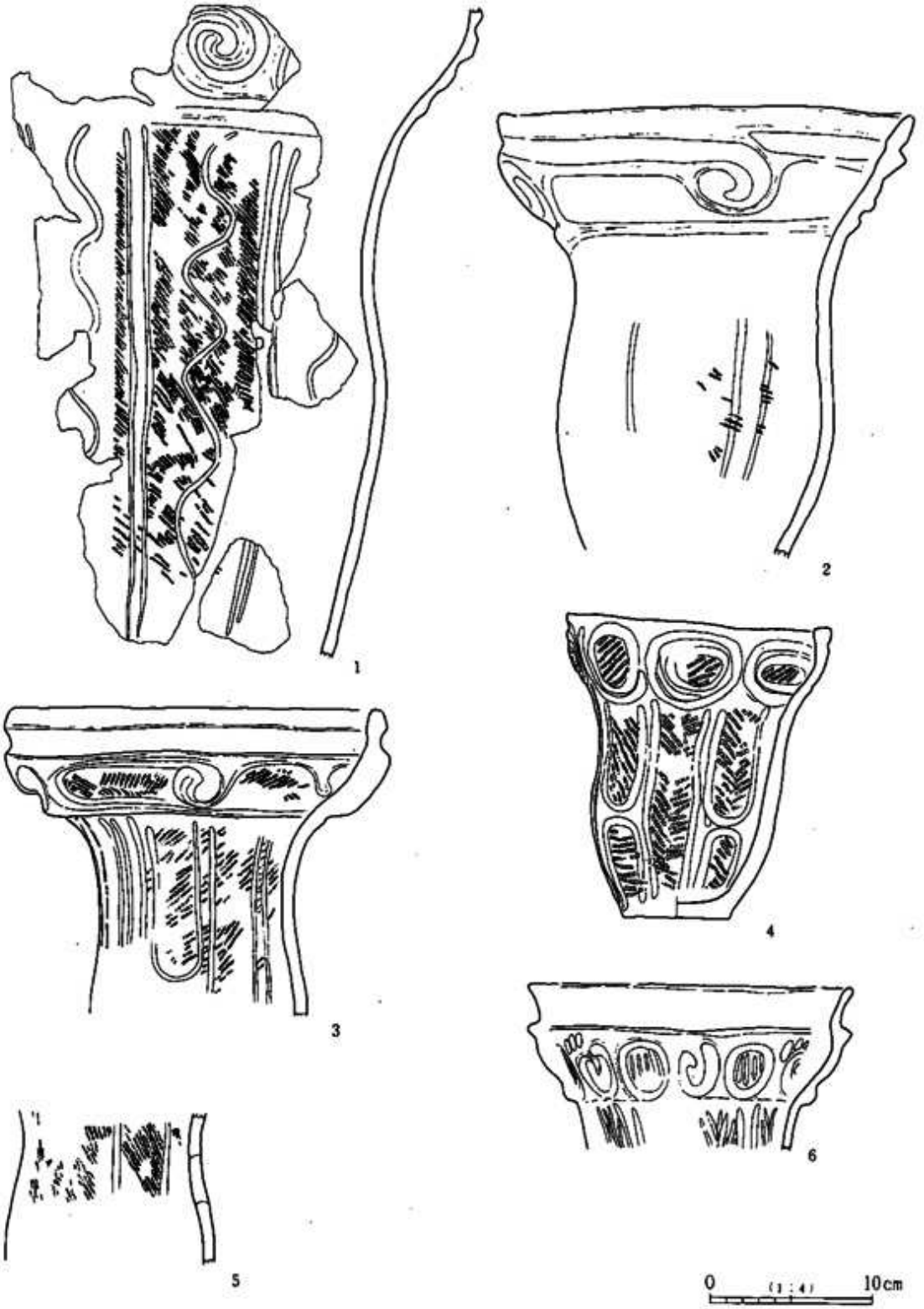
第38図 第Ⅲ地区　土坑出土石器



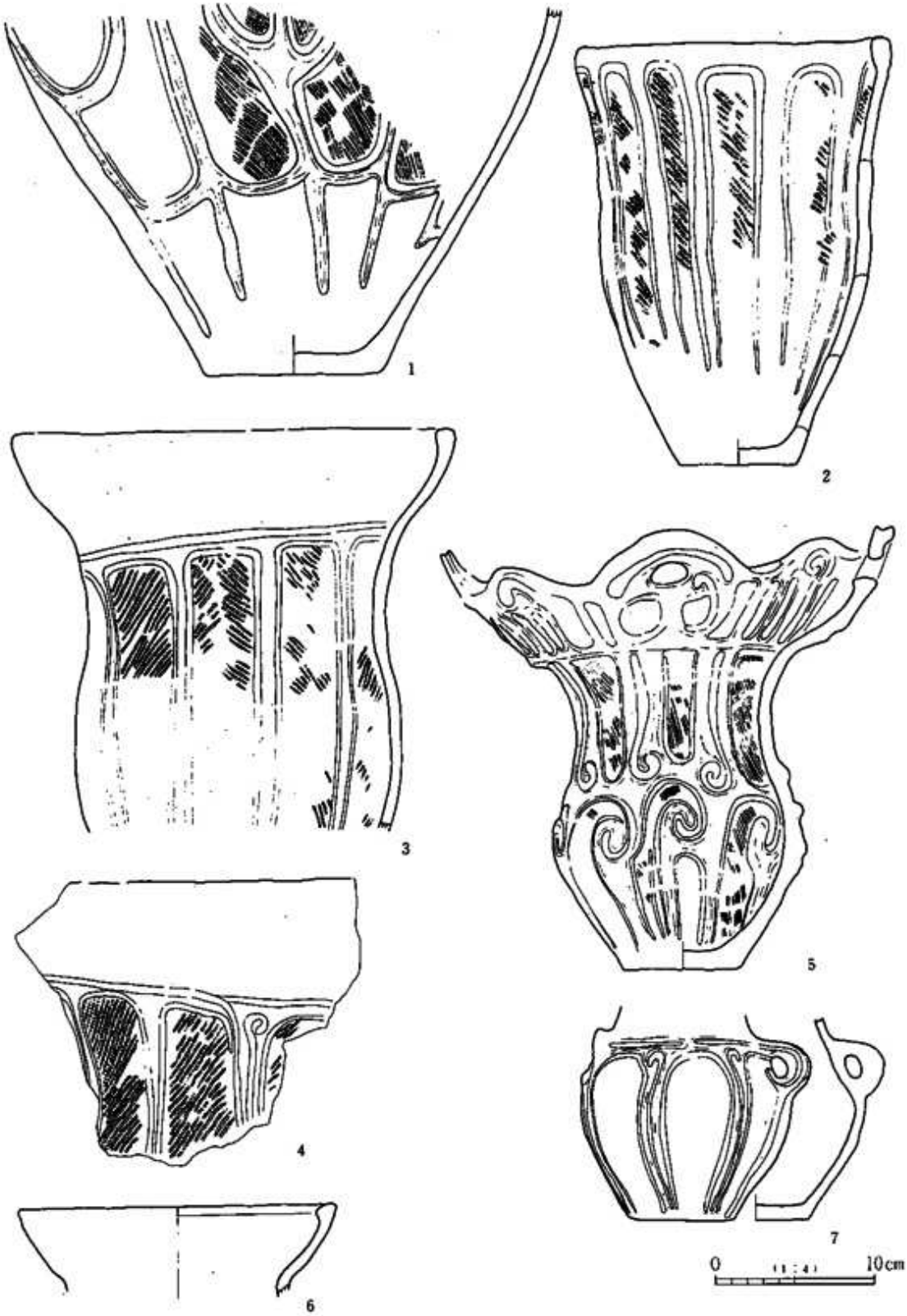
第39図　第Ⅳ地区　23号住居址（1～13），24号住居址（14～18）出土土器



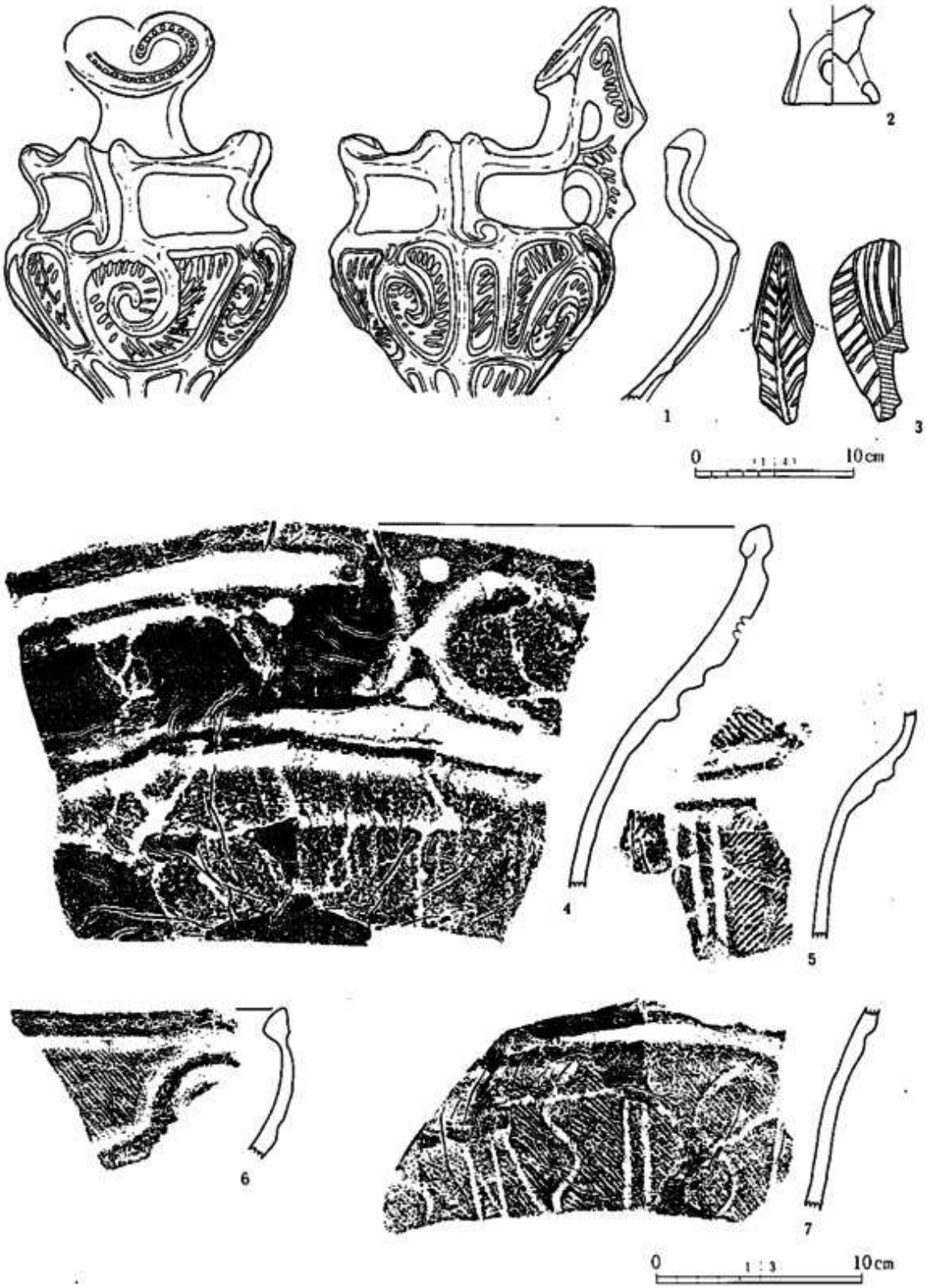
第40図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器（1）



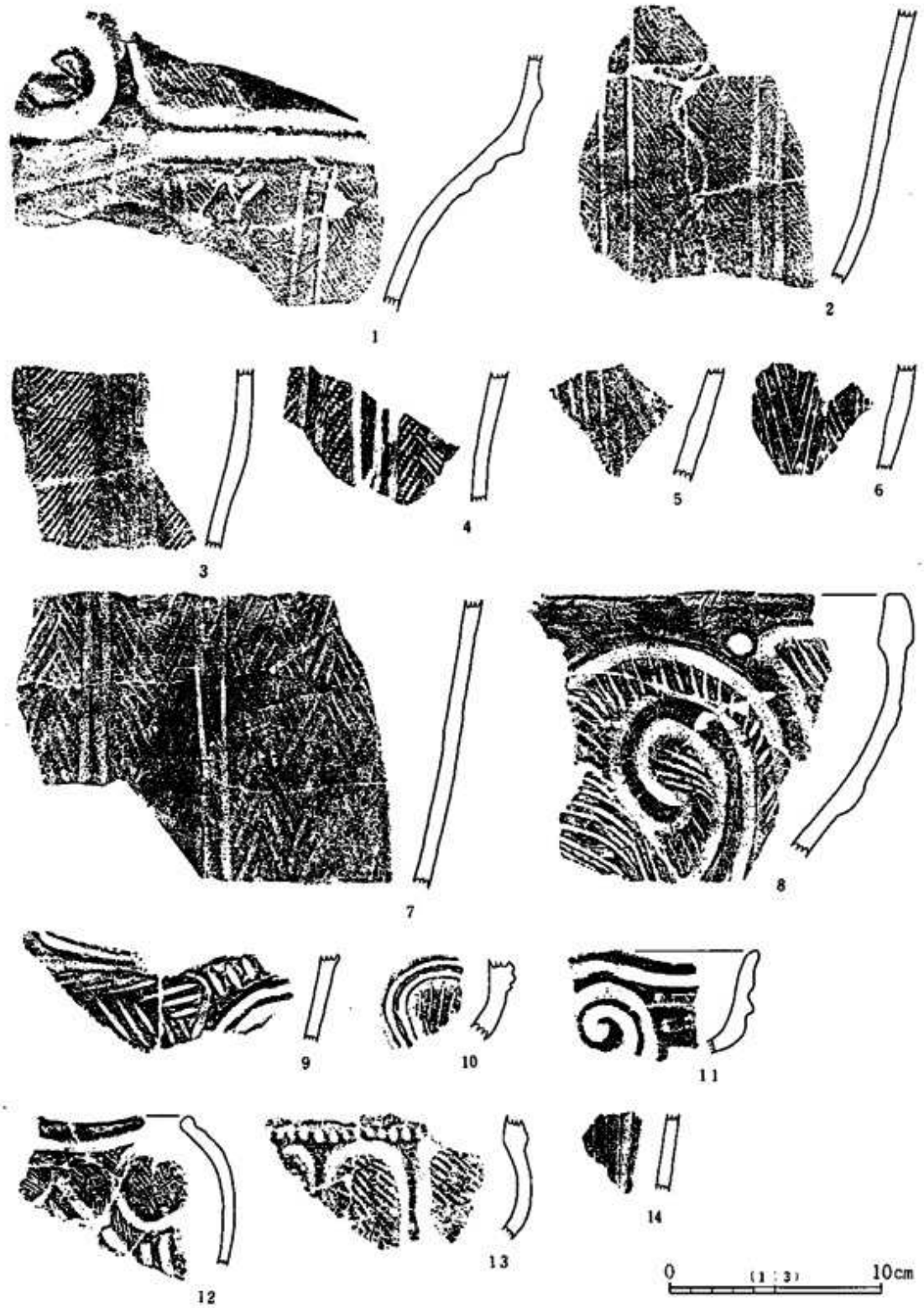
第41図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器（2）



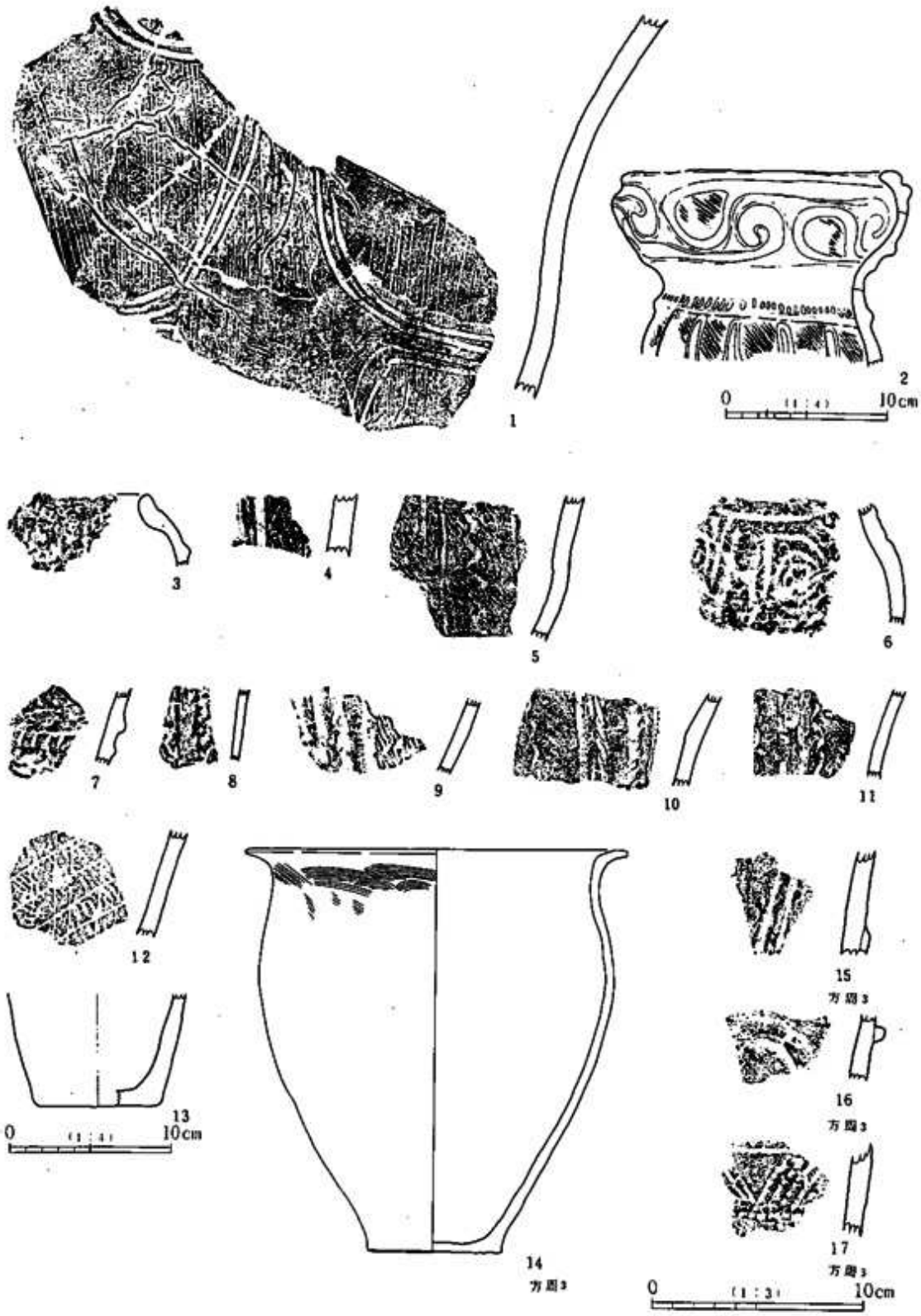
第42図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器（3）



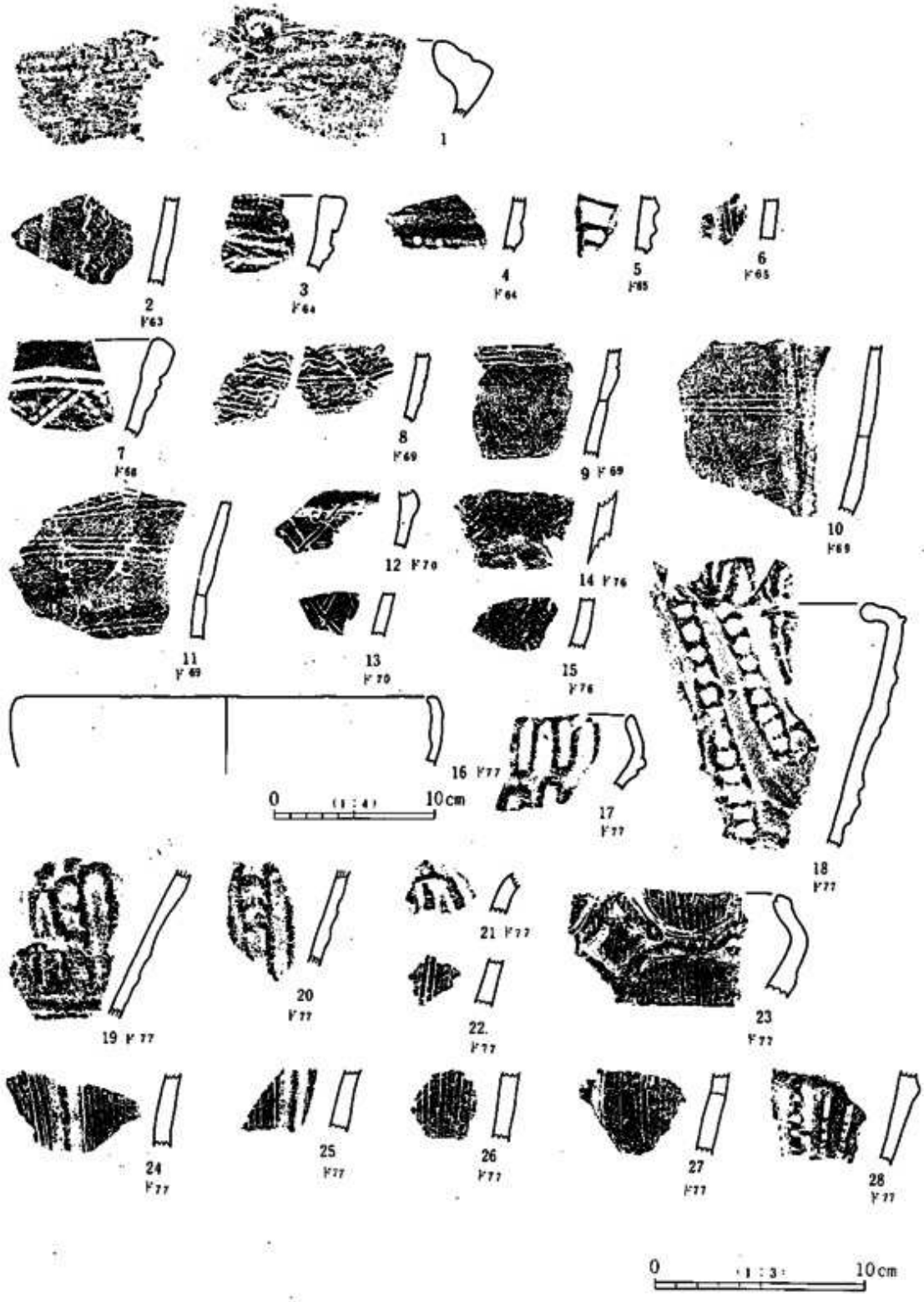
第43図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器（4）



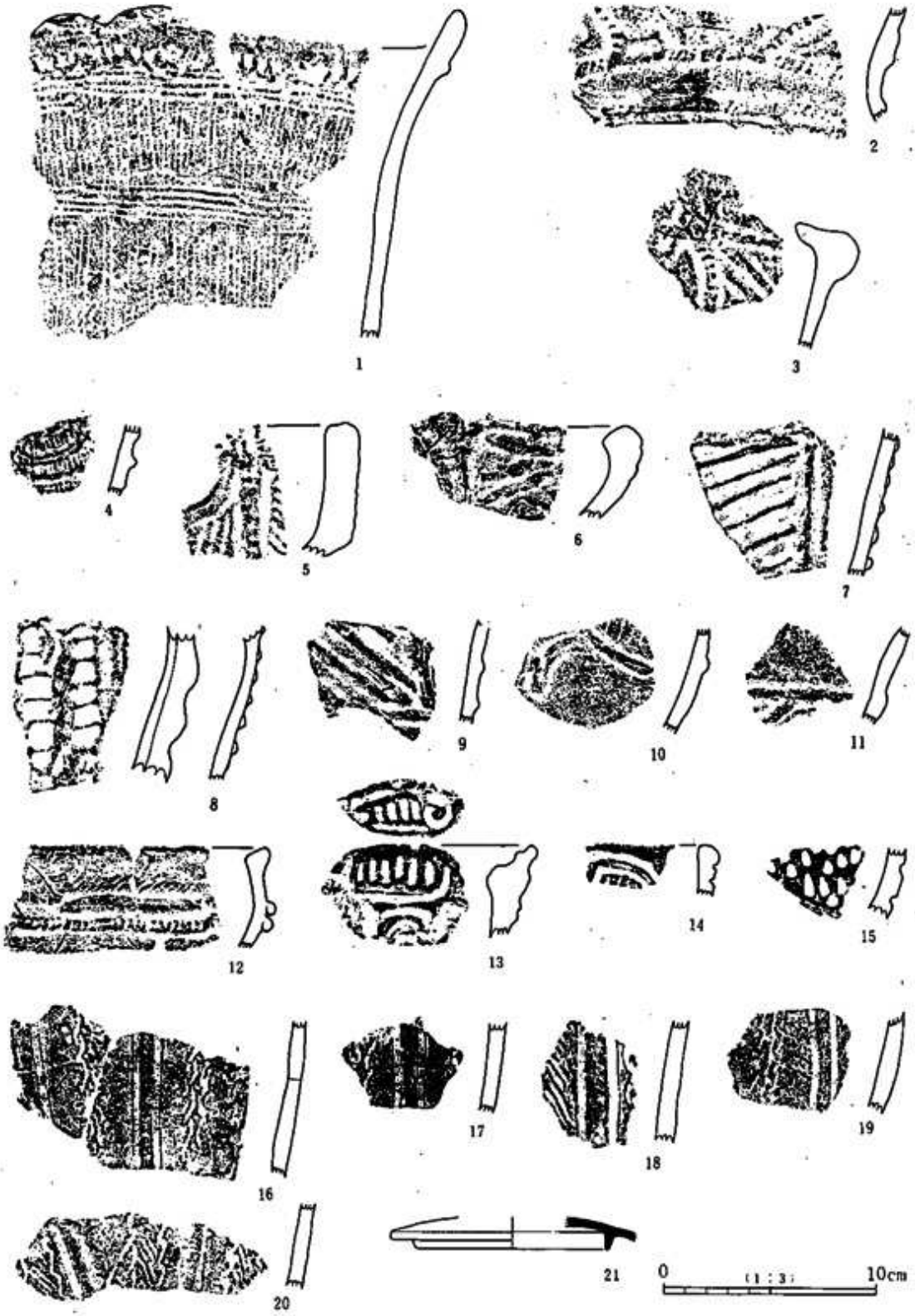
第44図　第Ⅳ地区　24号住居址出土土器（5）



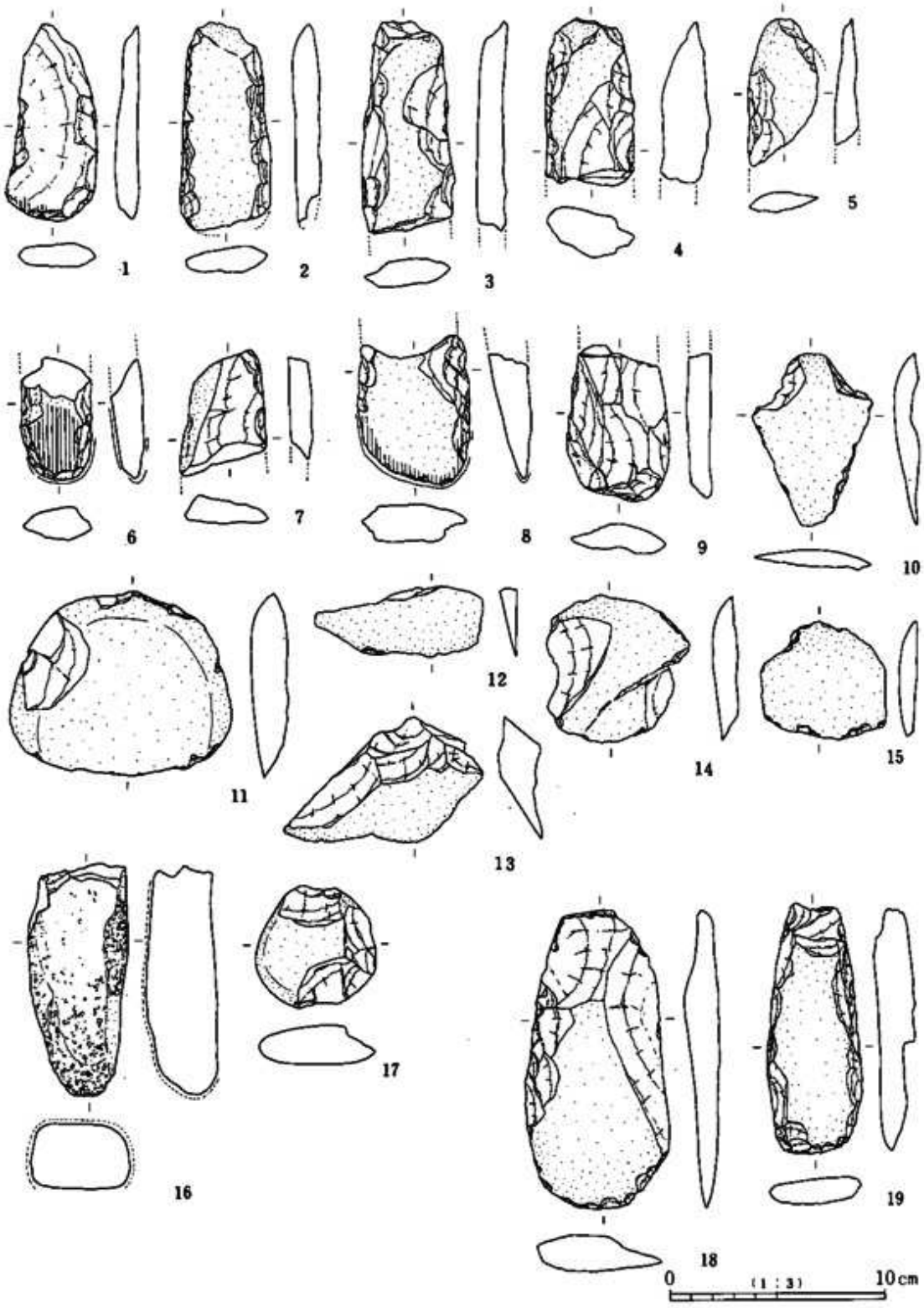
第45図　第Ⅳ地区　24号住居址（1），25号住居址（2～5），26号住居址（6～11），27号住居址（12），28号住居址（13），方形周溝墓3（14～17）出土土器



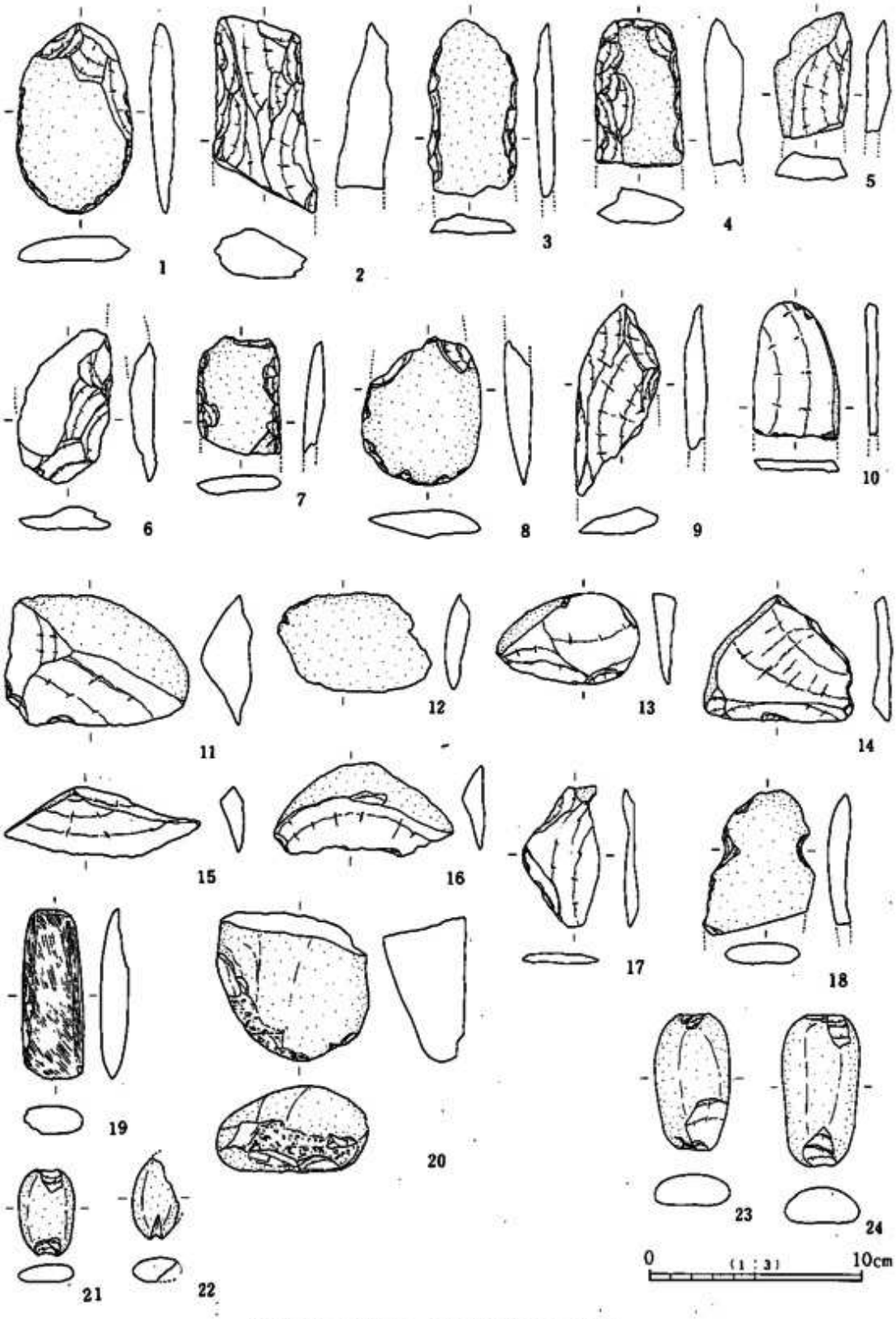
第46図　第Ⅳ地区　方形周溝墓3（1），土坑（2～28）出土土器



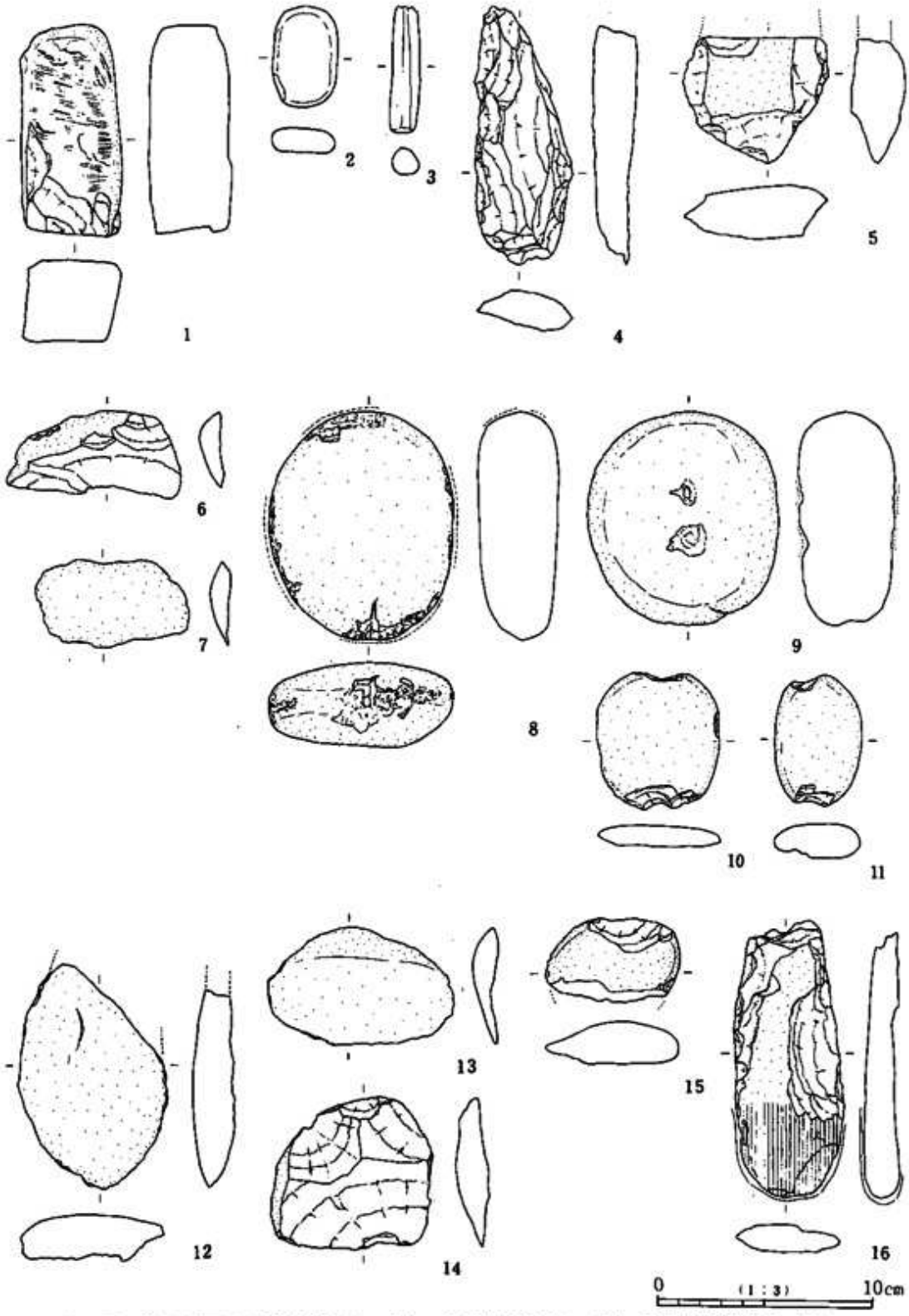
第47図　第Ⅳ地区　土坑79（1），遺構外出土土器



第48図　第Ⅳ地区　23号住居址（1～17），24号住居址（18・19）出土石器

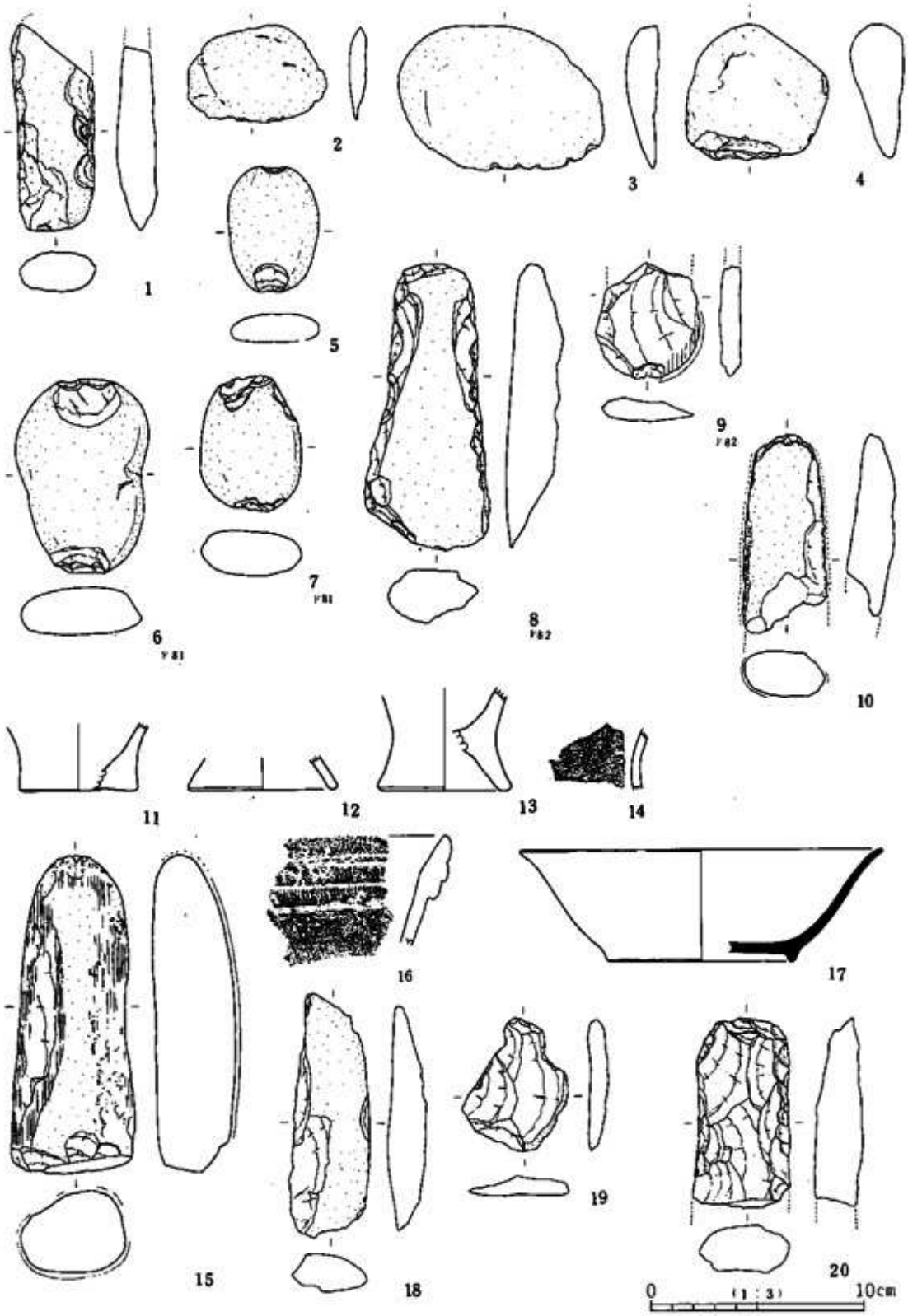


第49図　第Ⅳ地区　24号住居址出土石器

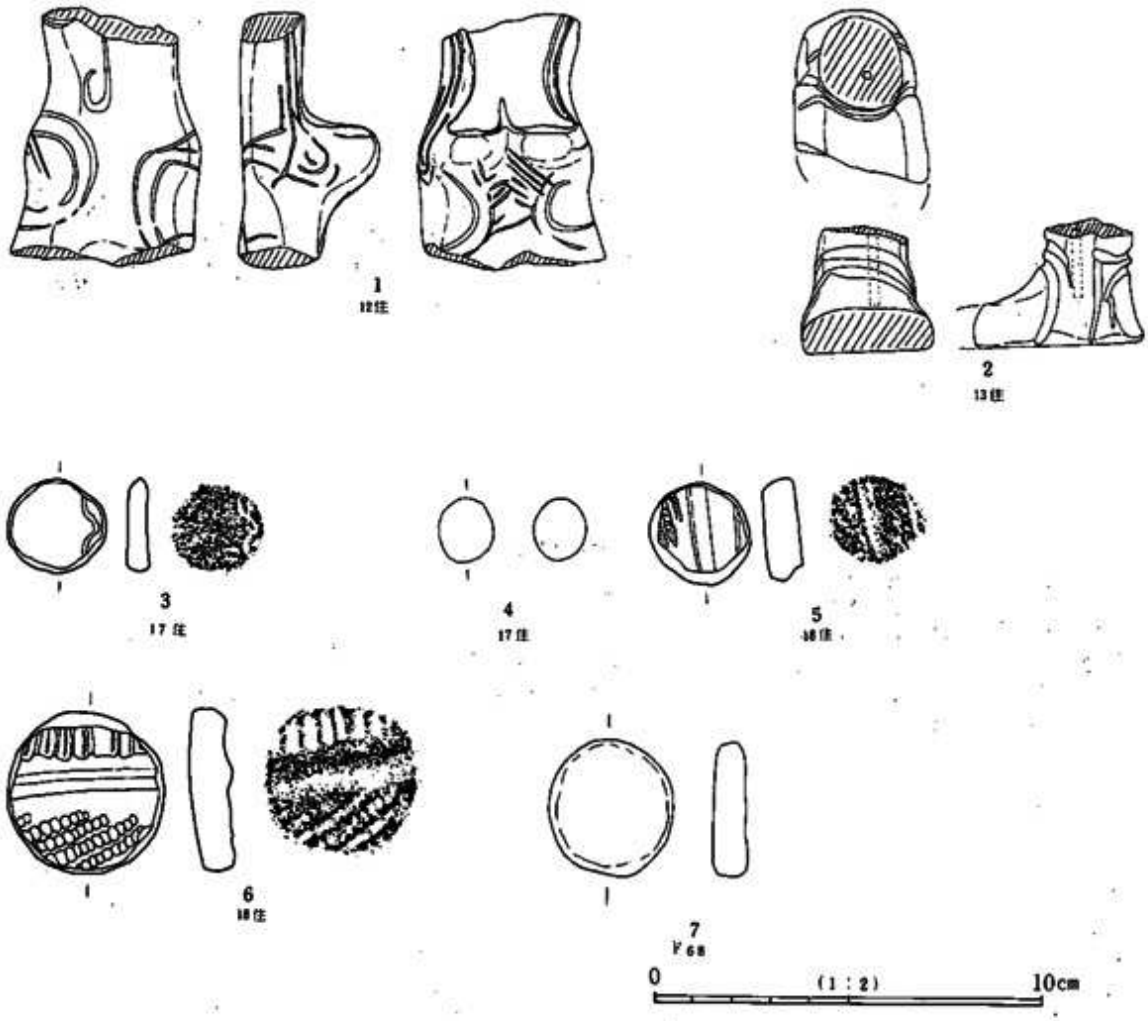


第50図　第Ⅳ地区　24号住居址（1～3），25号住居址（4～11），26号住居址（12～15），27号住居址（16）出土石器

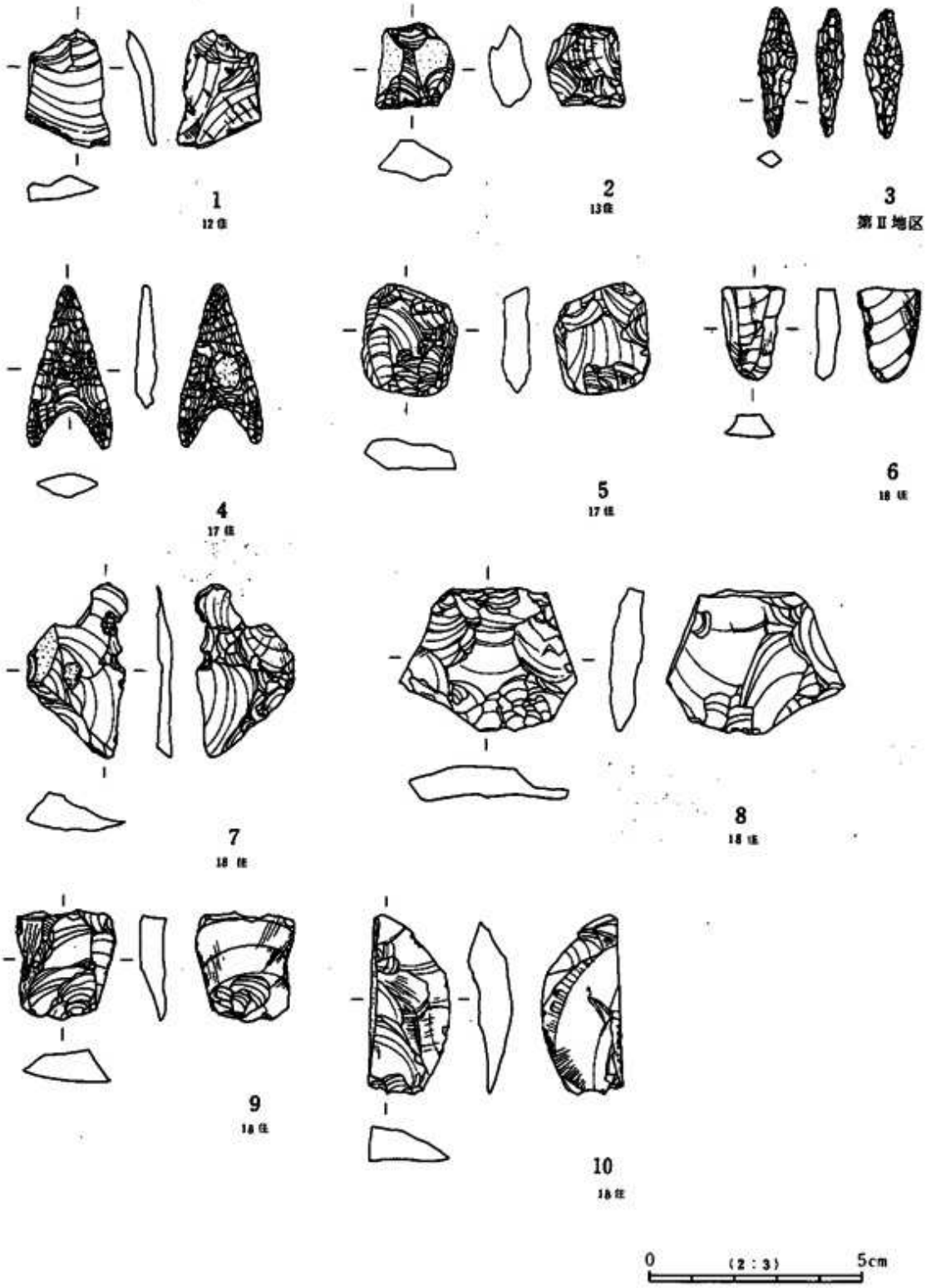
第51図　第Ⅳ地区　28号住居址（1～5），土坑（6～9）出土石器



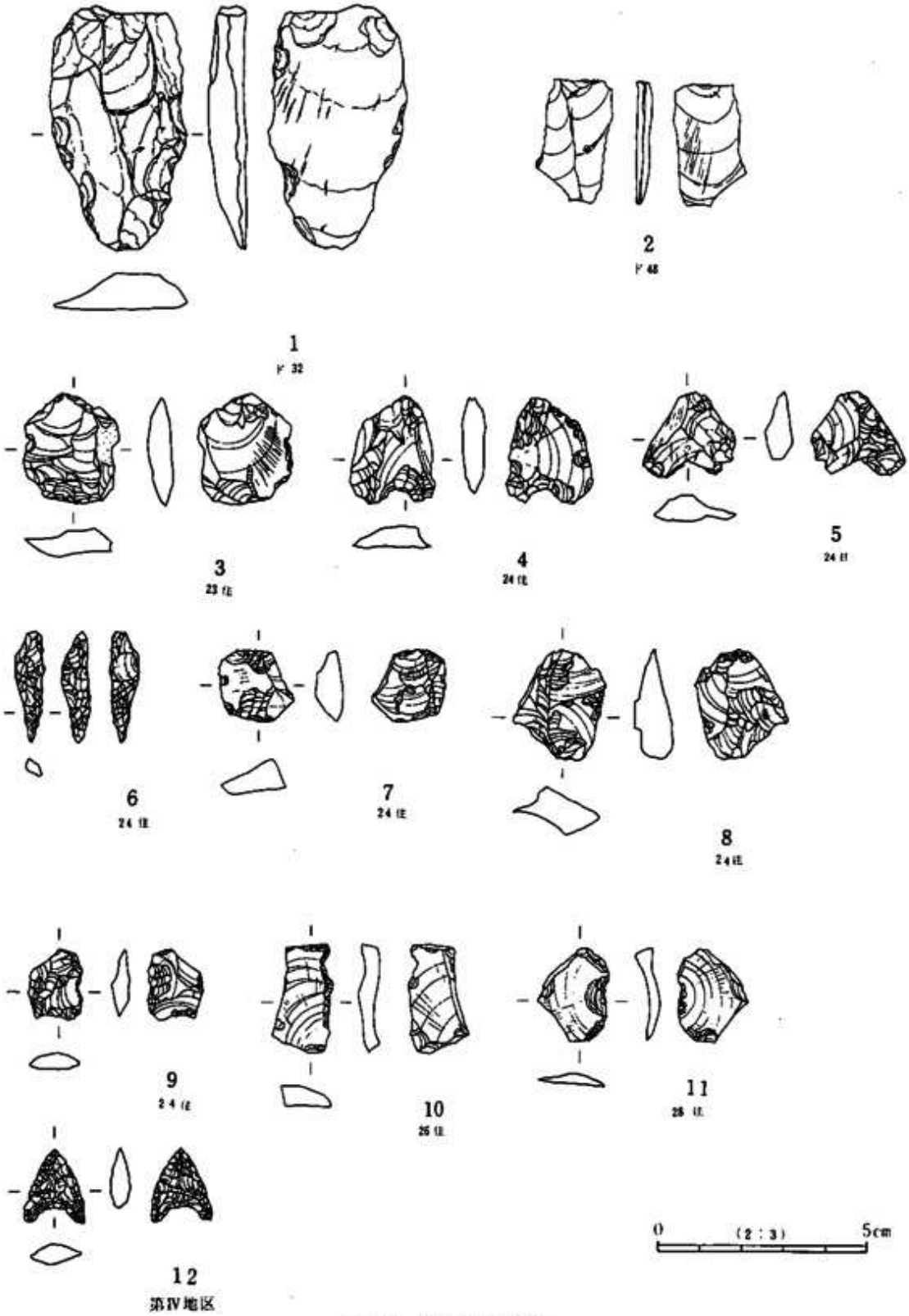
第52図　第Ⅳ地区　方形周溝墓3（1～5），土坑（6～9）　遺構外（10），
第Ⅸ地区　土坑（6～9），遺構外（10）　第Ⅹ地区　方形周溝墓4（11～15），
土坑84（16），遺構外（17～19）　第Ⅺ地区　遺構外（20）出土遺物



第53図 土　製　品

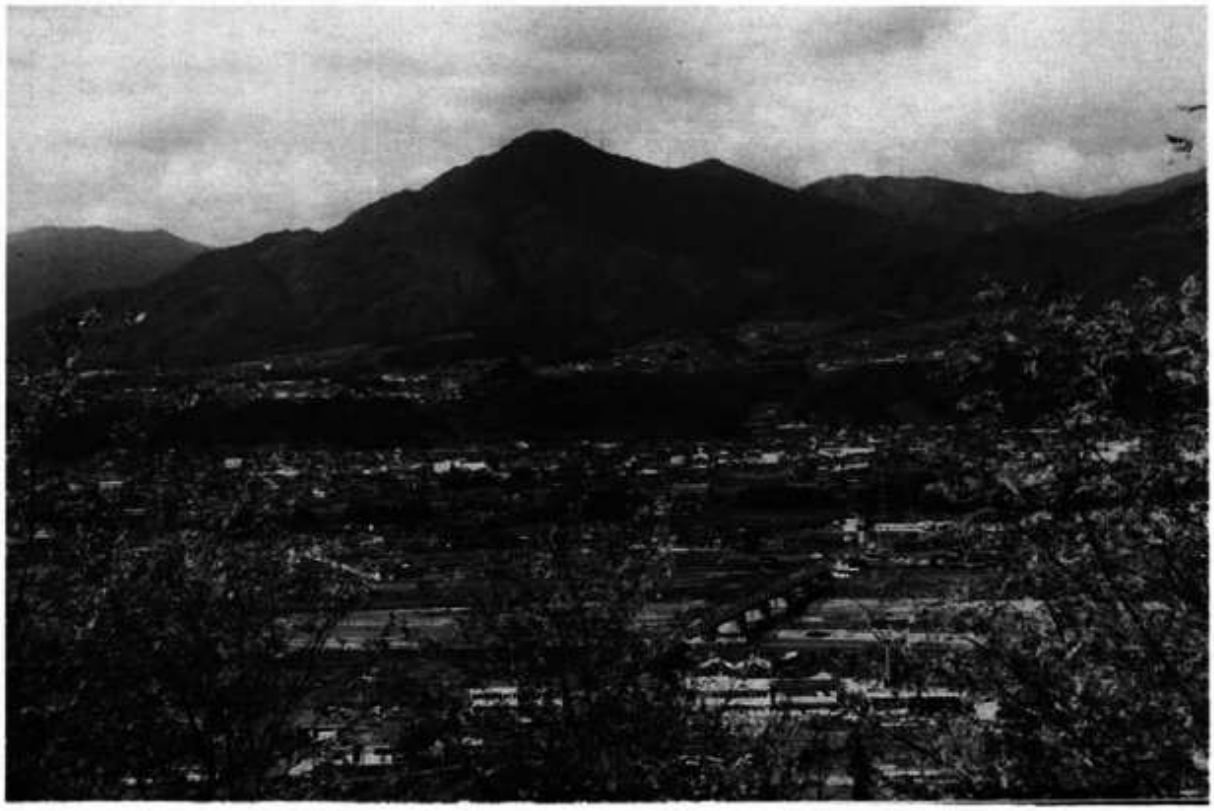


第54図　小型石器（1）



第55図　小型石器（2）

大明神原遺跡遠景（北西から望む）



大明神原遺跡遠景（南東から望む）

図版２

第Ⅰ地区近景（南から）

溝址１（南から）

溝址１（北から）

第Ⅰ地区全景（南から）

第Ⅰ地区全景（北から）

図版4

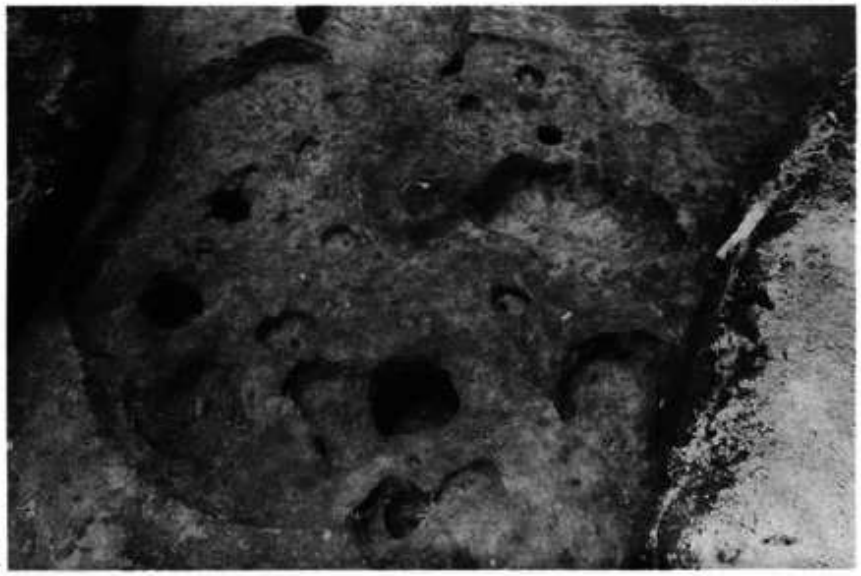
12号住居址（南東から）

12号住居址（南西から）

12号住居址　炉址

12号住居址　深鉢出土状態

12号住居址　土偶出土状態



13号住居址

13号住居址　炉址

13号住居址　炉址たち割り

図版6

溝址2・6

溝址3

溝址4・5

溝址 4

溝址 5

溝址 7

図版8

第Ⅱ地区南東側全景（南東から）

第Ⅱ地区南東側全景（北西から）

第Ⅱ地区北西側全景（南東から）

第Ⅱ地区北西側全景（北西から）

図版 10

第Ⅲ地区近景（西から）

第Ⅲ地区近景（東から）

14号住居址（東から）

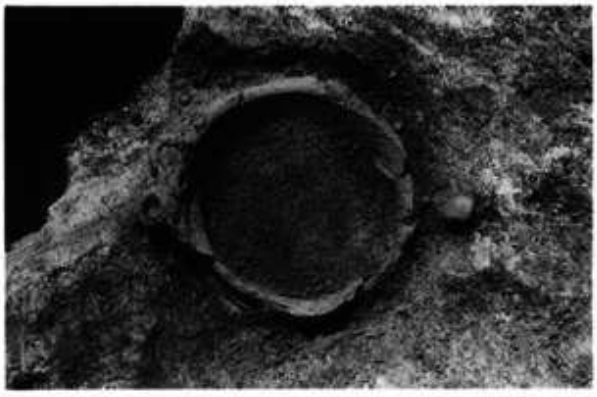
14号住居址（北から）

14号住居址遺物出土状態

図版 12

15号住居址

15号住居址　埋甕　石蓋



15号住居址　埋甕

15号住居址　埋甕　たち割り

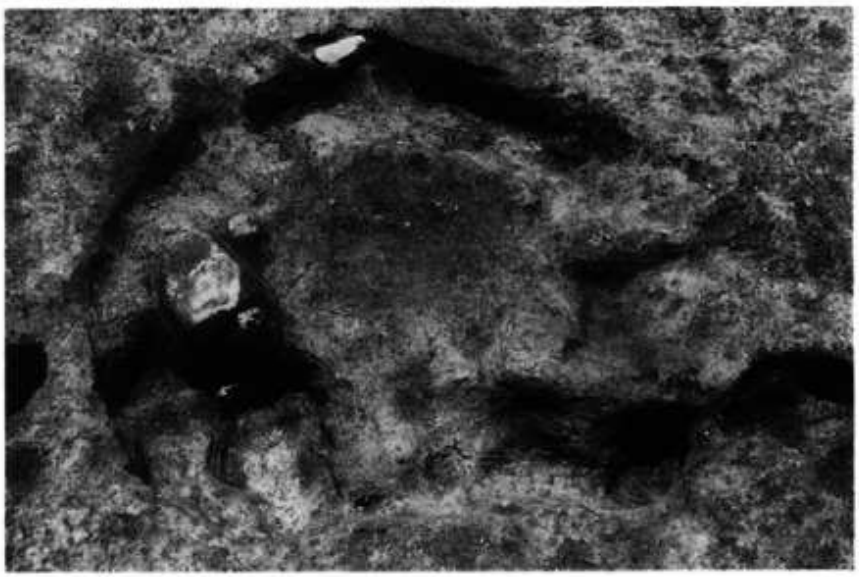
14号・15号・16号住居址

16号住居址

14号・16号住居址

図版 14

17号住居址



17号住居址　炉址

17号住居址　遺物出土状態

18号住居址（北から）

18号住居址（西から）

18号住居址　炉址

18号住居址　遺物出土状態（全景）

18号住居址　遺物出土状態（部分）

図版 16

19号住居址

20号住居址

21号住居址・土坑

21号住居址　炉址

図版 18

22号住居址

22号住居址　炉址上層礫

22号住居址　炉址

方形周溝墓 1（東から）

方形周溝墓 1（西から）

方形周溝墓 2（東から）

方形周溝墓 2（西から）

方形周溝墓 2　主体部

溝址 8

第 III 地区西側土坑群

第Ⅲ地区西側全景（西から）

第Ⅲ地区西側全景（東から）

第Ⅲ地区東側全景（西から）

第Ⅲ地区東側全景（東から）

23号住居址

24号・28号住居址

24号住居址　炉址

24号住居址　遺物出土状態（全体）

24号住居址　遺物出土状態（部分）

24号住居址　遺物出土状態（部分）

24号住居址　台付甕出土状態

25号住居址

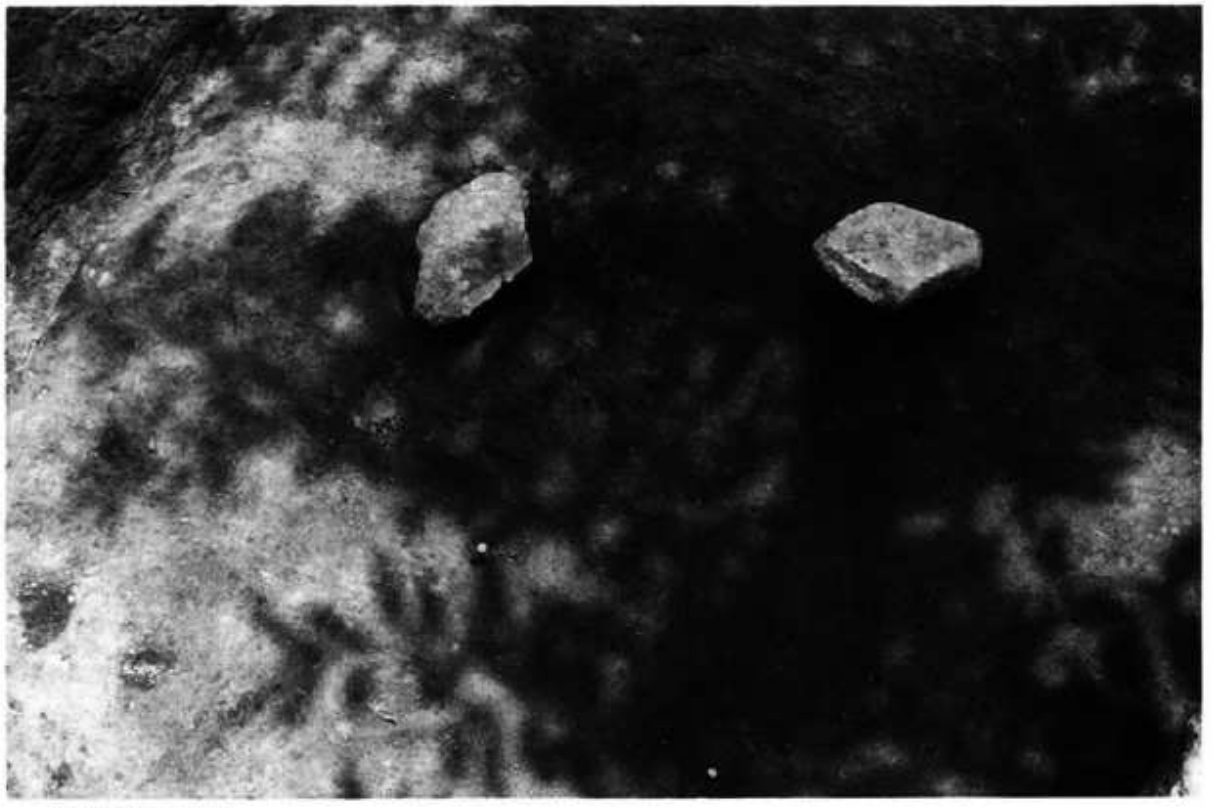
25号住居址　深鉢出土状態

26号住居址

26号住居址　炉址

26号住居址　副炉址？

27号住居址



27号住居址　炉址

方形周溝墓3

方形周溝墓3　甕出土状態

図版 30

溝址 9

溝状遺構 1

第Ⅳ地区東側全景（東から）

第Ⅳ地区東側全景（西から）

第Ⅳ地区中央部全景（東から）

第Ⅳ地区中央部全景（西から）

第Ⅳ地区西側全景（東から）

第Ⅳ地区西側全景（西から）

図版 34

第Ⅴ地区近景（西から）

第Ⅴ地区全景（西から）

第VI地区近景
（北西から）

土坑 82・83

図版 36

土坑80・81

第VI地区全景（北西から）

第VI地区全景（南東から）

第Ⅶ地区近景（南西から）

小竪穴１

第Ⅶ地区全景（南西から）

第Ⅶ地区全景（北東から）

第Ⅷ地区近景（北西から）

第Ⅷ地区全景（北西から）

第Ⅷ地区全景（南東から）